

紀 要

第45卷

2012

鈴鹿工業高等専門学校

鈴鹿工業高等専門学校紀要

第45巻

目 次

「パンセ」断片793について……………	奥 貞二 ……	1
アミロースヨウ素を用いた擬固体型色素増感太陽電池の高効率化……………	幸後 健 …… 早瀬 修二 海宝 龍夫 田口 充	9
文人・松村勝行の研究（上） ー弁論と戯曲・シナリオ・小説・エッセイなどー…	久留原 昌宏 ……	28 (123)
毛沢東の政治理想と対の思想 ー李志綏『毛沢東の私生活』の分析を手掛かりにして（二）ー……………	小倉 正昭 ……	50 (101)
毛沢東の人格と対の思想 ー李志綏『毛沢東の私生活』の分析を手掛かりにして（一）ー……………	小倉 正昭 ……	72 (79)
対の思想と孟子の理想国家論 ー対の思想（両面思考）から見た儒家思想の国家権力構造についてー……………	小倉 正昭 ……	94 (57)
対の思想の政治思想的意義 ー対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（終章）ー……………	小倉 正昭 ……	116 (35)
対の思想と中庸思想の歴史的展開 ー対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（五）ー……………	小倉 正昭 ……	138 (13)
対の思想と中庸思想 ー対の思想（両面思考）の生まれてきた歴史的背景について（四）ー……………	小倉 正昭 ……	150 (1)
<hr/>		
教職員の研究活動記録……………		151

CONTENTS

On fragment 793 in Pascal's "Pensées"·····	Teiji Oku ······	1
Proposal of high efficiency Quasi-solid dye sensitized solar cell with Amylose-iodine·····	T.KOGO ······ S.HAYASE T.KAIHO M.TAGUCHI	9
A Study of Matsumura Katsuyuki,a Person of Culture(I) - About His Speechmaking,Drama,Scenario,Novel,Essay etc. ······	Masahiro KURUHARA ······	28 (123)
Mao Zedong's Political Ideals and "the Thought of <i>Dui</i> " -Using the analysis of the <i>Private Life of Chairman Mao</i> by Li Zhisui as a clue (2)·····	Masaaki OGURA ······	50 (101)
Mao Zedong's Personality and "the Thought of <i>Dui</i> " -Using the analysis of the <i>Private Life of Chairman Mao</i> by Li Zhisui as a clue (1)·····	Masaaki OGURA ······	72 (79)
"The Thought of <i>Dui</i> " and Mencius's Theory of the Ideal State -State power structure in Confucian thought from a standpoint of the thought of <i>Dui</i> (dualist thought)·····	Masaaki OGURA ······	94 (57)
3-Political Ideological Significance of the Thought of <i>Dui</i> -Historical background from which the thought of <i>Dui</i> (dualist thought) arose(Epilogue)- ······	Masaaki OGURA ······	116 (35)
Historical Development of the thought of <i>Dui</i> and the Doctrine of the Mean -Historical background from which the thought of <i>Dui</i> (dualist thought) arose (5)·····	Masaaki OGURA ······	138 (13)
The thought of <i>Dui</i> and the Doctrine of the Mean -Historical background from which the thought of <i>Dui</i> (dualist thought) arose (4)·····	Masaaki OGURA ······	150 (1)
<hr/>		
Research Activities of the Faculty Members ······		151

「パンセ」断片 793¹について

奥 貞二^{1*}

1:教養教育科

別紙において、断片 110（人間の本性を的確に捉えた話）について纏めた²のであるが、実はそれ以上に驚かされた断片のことを話さなければならない。それは、「三つの秩序」と呼ばれる断片 793 である。これについては、既に多くの人々が取り上げていて、もはや議論の余地が残されていない感がある。中でも三木清³、森有正⁴らの研究は周知の通りである。中でも三木の「パスカルにおける人間の研究」は、広く人々の知るところであろう。研究の多くは、「パンセ」全体の一部として言及されているが、1つの断片だけを取り上げた論文は見当たらない。しかし、ここでは、断片 793 のみをピックアップし、その分析、語句の意味、パスカル思想の特徴を読み取るうとする基礎的研究である。

1. 秩序 (ordre) という言葉について
2. 無限 (infini) という言葉について
3. 愛 (charité) という言葉について
4. イエスキリストの愛について

Key Words : 秩序, 無限, 愛, イエスキリスト

(受付日 2011 年 8 月 26 日 ; 受理日 2011 年 12 月 21 日)

序

「パンセ」の中で、断片 793 は、取分け重要な断片である。この論文を分りやすくするため、少々長いのではあるが、日本語訳を引用する。

身体から精神への無限⁵の距離は、精神から愛⁶への無限の距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。

この世の偉大のあらゆる光輝は、精神の探求に携わる人々には光彩を失う。

精神的な人々に偉大は、王や富者や将軍や全て肉において偉大な人々には見えない。

神から来るのでなければ無に等しい知恵の偉大は、肉的人な人々にも精神的な人々にも見えない。これらは類を異にする 3つの秩序⁷である。

偉大な天才たちは、彼らの威力、彼らの光輝、彼らの偉大、彼らの勝利、彼らの光彩を持ち、肉的な偉大を少しも必要としない。彼らの偉大は、肉的な偉大と何の関係もない。彼らは目では見えないが、精神で見える。それで十分なのだ。

聖徒たちは、彼らの威力、彼らの光輝、彼らの偉大、彼らの勝利、彼らの光彩を持ち、肉的または精神的偉大と何の関係もない。後者は前者に加えも引きもしないからである。生徒たちは神と天使からは見えるが、身体と好奇的精神とからは見えない。彼らは神だけで十分なのだ。

アルキメデスは、この世の光輝はなくても、同じように尊敬されたであろう。彼は目に見える戦争はしなかった。だが、全ての精神的な人々に、彼の発明を提供した。ああ、彼は精神的な人々に対していかに光輝を放ったことか。

イエス・キリストは、財産もなく、学問の外的な業績もなく、その清浄な秩序の中におられる。彼は発明も授けず、支配もしなかった。だが、謙虚で忍耐強く清浄で、神に対しては清く、彼はいかに偉大な壮麗と素晴らしい豪華とを持って来臨されたことであろう。

アルキメデスにとっては、その幾何学の書物の中で王公のように振舞うことは、よし彼が王公であったにしても、無用であったろう。

我々主イエス・キリストにとっても、その清浄な世界

において光り輝くため、王として来臨することは無用であったろう。だが、彼は彼の秩序にふさわしい光輝を持って、そこに来られたのだ。

イエス・キリストの卑賤を、彼が来臨して表そうとされた偉大と同じ秩序のものであるかのように考えて、それにつまずくのは、笑うべきことである。

この偉大を、彼の生涯、彼の苦難、彼の微賤、彼の死、弟子たちの選定、彼らからの置き去り、彼のひそかな復活などのうちに見るがよい。人はそれがいかに偉大であるかを知り、そこにありもしない卑賤をつまずきの種にするようなことはあるまい。

しかし、世には肉的な偉大のみに感心して、精神的な偉大などはないかのように思っている人々があり、また精神的な偉大のみに感心して、知恵のうちにさら無限に高いものはないかのように、思っている人々がある。

あらゆる物体、すなわち大空、星、大地、その王国などは、精神の最も小さいものにも及ばない。なぜなら、精神はそれらのすべてと自身とを認識するが、物体は何も認識しないからである。

あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらすべての業績も、愛のもっとも小さい動作にも及ばない。これは無限に高い秩序に属するものである。

あらゆる物体の総和からも、小さな思考を発生させることは出来ない。それは不可能であり、他の秩序に属するものである。あらゆる物体と精神とから、人は真の愛の一動作をも引き出すことは出来ない。それは不可能であり、他の超自然的な秩序⁸に属するものである。

これらの引用の中で、無限、愛、秩序、イエスキリストの4つのキーワードを巡って、以下の検討がなされる。秩序、無限、愛、イエスキリストの順に見てみよう。

1. 秩序 (ordre) という言葉について

「パンセ」断片793の内容を要約すると、人間世界には、次の3つの領域がある。即ち、身体、精神、愛であり、それぞれは、まったく違った**秩序**で成り立っている。お互いには、理解し合うことも、想像することもままならない**無限**の距離がある。身体の例を挙げると、金持ち、王様、將軍等。精神の方は、アルキメデス。**愛**については、イエスキリストが代表例で挙げられている。

ところで、この断片の中には、<秩序>と<無限>と<愛>という3つのキーワードが出てくる。これらの言葉に注目すると、「パンセ」作品全体の理解にも繋がる意外な

側面が見えてくるのである。この章では<秩序>という言葉について見てみよう。仏語 ordre という言葉は、「パンセ」断片793の中では7回<秩序>という意味で登場する⁹。その7個の用例は、①「これらは類を異にする三つの秩序である」②「清浄な秩序の中におられる」③「彼は彼の秩序に相応しい光輝を持って、そこに来られたのだ」④「彼が来臨して現そうとされた偉大と同じ秩序のものであるかのように考えて」⑤「無限に高い秩序に属する」⑥「他の秩序に属する」⑦「超自然的な秩序に属する」である。7個の内訳は、一つ目の①は、三つの秩序があると述べ、後1つ⑥は、残り二つ身体と精神は、別の秩序に属すと述べている。それ以外の5個②③④⑤⑦は、イエスキリストの秩序に言及している。清浄で、超自然的秩序であると述べている。

しかし、その他の断片で、ordre という言葉がどの様に使われているかを調べてみると、非常に際立った特長が目につく。それは、原文は ordre であるが、日本語訳としては、「順序」「次元」「秩序」という訳語で使われている。まず、「順序」の訳語では、断片21, 61, 146, 187, 227, 241, 246, 247の8箇所である。さらに、「秩序」という訳語の方は、1, 2¹⁰, 283, 373, 403, 449, 460, 477, 576, 582, 793の11箇所の断片である。それ以外に、断片72「人間の不釣り合い」の中で「次元」という訳語で登場する。そしてこの意味の違いが、何か重要なことを暗示しているのではないか。つまり、パスカルの「パンセ」という作品の各々の断片を繋いでいく骨のような役割を果たしているのではなかろうか¹¹。それを具体的に見てみよう。ordre の用例は、「パンセ」の中の19個の断片に現れる。その中で、断片247までの用例は、<順序>という日本語訳で用いられ、断片283からは、<秩序>という日本語訳が充てられている。もしパスカルの意図を汲んで訳語を考えるなら、順序と秩序と次元とに共通し、しかもパスカルの意図に相応しい訳語を求めるとすると、新しい日本語の訳語を考えるべきである。そうでなければ、<オールドゥル>というカタカナを当てるしかないであろう。あるいはこうも考えられる。1658年に何人かの親しい人の前で、その時構想している著作、『キリスト教弁証論』について2時間ほども熱弁を振るった。けれども結局、病苦のために、未完成のまま4年後39歳で息を引き取った。それで、その構想は断片のままに、幾つかの束に纏められ、姉の家の片隅に置かれていた。その未完成原稿、断片の寄せ集めが、我々が目にする「パンセ」という本になったのであるが、もちろんこれはパスカルが考えた題ではなく、パスカル没後最初に出たポールロワイヤル版において「死後遺稿のうちに見出された、宗教その他若干の問題についてのパスカル氏の思想」¹²として出版された。そして、その長い題の最後の文字の<思想>、これが「パンセ」の訳語であり、後

の時代に広く世界中に行き渡ることとなった作品名である。その講演の際に構想したもの、その際のキーワード、ないしは核の1つとなると考えられたものが、<ordre>ではないかと思われる。私が考えるには、キリスト教を信じていない人、無関心な人を、信仰へと導くためには順序が必要である。先ず人間性の理解、人間の生の空しさと悲惨さ、そこから抜け出すための気晴らしと賭けに明け暮れる。そういう状態から脱して、本当の幸福・永遠の生を得るには、神との出会い、神と共にあることが求められる。それを聖書から学ぶ。旧約における預言、新約における淡々と語られるイエス・キリストの客観的事実を認知してもらい、そこからキリスト教を擁護し、無神論者を信仰へと向けさせる。その構想において、神を知ることから、神を信じることのあまりに遠い距離がある。それは、3つの夫々には、夫々3つの秩序という言葉で表した。そして、この三つの秩序という考えに至るには、無限についての理解が不可欠であった。そこで、次の章では無限という言葉についてみてみよう。

2. 無限 (infini) という言葉について

秩序と並んで、「パンセ」を書こうと思い立ったと考えられる決定的に重要な言葉として考えられるのが、無限 (infini) という言葉である。断片 793 の冒頭は、「身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。」この文章から、愛がキーワードであることは一目瞭然であるが、それを想起させさせる表徴 (figure) も、その愛を想起する上で重要語であることが分る。しかし、それ以上に身体から精神へ、精神から愛へは、それぞれ無限の距離があると語られ、無限という言葉の理解が欠かせない。そこでこの章では、無限について取り上げる。

断片 793 では、①「無限の距離がある」という用例が2箇所、②「無限に高い秩序」「超自然的秩序」と言い換えられる用例が3個である。この二例はそのまま「パンセ」作品の全内容を予告させるものがある。前者①の、「身体から精神へ、精神から愛へは、それぞれ無限の距離がある」というものである。それは、人間にとっては、数と空間という2つの無限がある。数も空間も、さらにその次の数を、さらにその向こうの空間を考えることができるし、実際にも存在し、終りなく無限である。これと同様な使い方、他の「パンセ」に現れる用例は、断片 183、282、430、559である。それらの箇所は、空間の無限を自覚するにつけパスカルは、恐れ慄きを感じる。他の箇所では、断片 72、205、206。また別の箇所では、人間は無限と虚無の2つの無限の中間に位置し、何れの無限にも近づくことも捉えることもできないものであるとされる。現代の我々が、空を見ても美しいなと思っても、恐れに繋がらないのは、無限についての認識不足なのか、とんでもな

い鈍感であるのだろうか。

次に後者②の超自然的無限、無限に高い秩序とされる方は、人間の能力をも、自然法則をも超える秩序、言い換えれば、神の秩序であり、神を表現する形容詞としての無限である。他の箇所では、断片 425 である。これら、二種類の用例は、そのまま、2部構成を計画した「パンセ」と対応する。前者、無限の距離があり、空間の無限の前で恐れを感じる方は、第1部 神なき人間の惨めさ と対応する。そして、後者、超自然的秩序の方は、第2部 神とともにある人間の至福 の内容と重なるものである。

ところでこのパスカルの三つの秩序の発見、その前提となる無限の考え方には、パスカルの生涯そのものの理解を必要としている。そこで、次のパスカルの二つの著書とそこでの発見が、この三つの秩序の考え方に大きく寄与していることは指摘できる。一つは、1657年に書かれた「幾何学的精神について」¹³この本は、新しい真理の発見には、幾何学が最適であること、中でもその論証方法を説明しているが、そこで見出されたのは二つの無限の発見である。空間についても、数についても、どれだけ大きな空間や数を想定しても、それより更に大きい空間、大きな数を考えることができ、止まる所を知らない。数や空間の上での無限を想定できる。また逆に、空間の分割についても、今あるものの更にその半分を幾らでも考えることができいく式に、無限小というか、無限に小さいものを考えることができる。感覚的理解を超える無限が存在するということ、そして人間は、そのどちらでもない中間者であるという確認、その二つの無限を直視すれば、恐れおののくしかない。

もう一つは、すでに三木清も「パスカルにおける人間の研究」の中で指摘しているが、パスカルが、1654年31歳のとき書いたとされる「数冪の和 Potestatum numericarum summa」¹⁴と題する論文である。低い次元の量は、一層高い次元の量の前では、切り捨てても変わらないし、無視できる。面積を持たない線を何処まで伸ばしても、面には何の関係も影響もなく無視できる。面を何処まで広げても、立体の体積には何の影響も持たず無視できる。線も面も立体も存在しているが、お互い領域をことにし、お互い同志からは、無限を隔たりを持っている。

パスカルが三つの秩序という考えに至ったのは、単なる宗教的傾向から出たとか、1646年の1回目の回心以後、人間の研究へと向ったところから出てきた事は申すまでもないことですが、それ以上に、科学者であり数学者でもあるパスカルが、研究を推し進めてきた結果、この宇宙には、人間には関わりえない無限が存在するということや、どれだけ数を寄せ集めても、別の次元では何の意味も持たず無視できる量であるということの決定的確信を掴んだ。パスカルは、ここから三つの秩序という思想に辿りついた。

3. 愛 (charité) という言葉について

断片793で語られている身体、精神に続く、3番目の愛の秩序とはどういうものであるのだろうか。その愛は、身体と高貴な精神とからは、この愛を見ることができない。他の二つ、身体、精神とは、次元が違うのである。見ることができるのは神のみであると語られる。

ところで私はギリシア哲学を研究してきたのだが、この3つの秩序、3つ目の秩序が愛であるという考えに出会ったときには、天と地がひっくり返るほどに驚いた。ギリシアにあっては<個々の美しき事柄・美しき事例>と<美のアイデア>、<目に見えるもの>と<目に見えないもの>、<質料>と<形相>、<規定されるもの>と<規定するもの>、<個物>と<その本質>、と言うように二元的対立で捉えられた。<観念論>と<唯物論>、巨人戦争、普遍論争等、これらは二元対立を巡って争われてきた事柄であった。その対立それ自身がどのようなものであるかの理解に神経が集中して、それ以外に他の捉え方があるのかどうかを想像することも考えることも難しく不可能であった。しかし、パスカルによれば、身体の世界、精神の世界、その次に愛の世界があるというのではないか。夫々には夫々の秩序があつて、超えるどころか、見ることも考えることも出来ない。富者や、王や、将軍には、量子力学者が格闘しているものは見えないし、理解できない。その量子力学者には、あのイエスの卑賤、見すばらしさ、苦難、数々の奇跡、十字架上の死刑と復活、何れも無関係の事柄でしかない。イエスの愛というものは、富者や物理学者が見ているものと、方向性も次元も全く異なる超自然的なものであり、彼らの理解を超えている。

パスカルは、第3番目の秩序、イエスキリストの愛に触れるということは、西洋思想のこれまでの歩みを全部引き受け、更に一步歩みだそうとしているかにも見える。このような考えにどうして至ったのだろうか。ところで3つ目の秩序の考え方は何処から生まれたのか。無限と超えられない世界については上で述べたが、直接イエスキリストに繋がる考え方は何処から生じたのか。直接的には2度の回心によるし、間接的には、パリ郊外のポール・ロワイアル修道院でのド・サン氏との対話が強く影響していると考えられる。

先ず回心についてであるが、税務官である父エティエンヌの仕事の関係で、ルアン在住の時に、父が1646年1月、腿の骨を脱臼し動けなくなった。父は、治療と療養を自宅で過ごすことになった。その際治療に来ていた医者で、ポール・ロワイアル派のギルベール氏から、キリスト教の手ほどきを受けた。今まで触れたことのない世界に入ったように、信仰に一步踏み出す。これが1回目の回心と呼ばれる。以後、これまでの科学者数学者技術者の側面に加えて、キリスト教信仰が加わる。しかし決定的には、1654年11月23日夜、火に導かれた決定的回心と呼ばれるものである。そのときの状況は、「メモリアル(覚書)」として残さ

れている。他のいかなる神でもなくイエスキリストへの信仰であることが明確に記されている。

間接的には、1655年妹ジャックリーヌがいる修道院ポールロワイヤルで、ド・サン氏と対談した¹⁵。ここでの、サン氏の指摘が大きな影響を与えていると思われる。今まで最も親しんできて、自分に近い存在と考えていたエピクテートスとモンテーニュの二人の限界を、自覚するようになる。エピクテートスの方は、人間の義務についてはよく弁えているが、全て全能の神に従えば解決するという傲慢さを指摘された。モンテーニュについては、懐疑論の立場であらゆるものに寄りかからない自由を獲得したが、最初の尊厳を見失った怠慢を指摘され、残されたイエスキリストへの接近を自覚する。

1651年父エティエンヌの死によって、科学研究から人間研究へと、ハッキリと舵を切った。「幾何学的精神と繊細な精神」(パンセ断片1)の中で纏められているように、サロンに出入りし、人間の空しさ悲惨さを自覚し、そこで、気晴らしと賭けに時間を費やしても癒されず、信仰への道しかないことを自覚して、いよいよ1658年「キリスト教護教論」を構想し、友人の前で講演した。

詳しく検討する前に「パンセ」で表れる愛という言葉について調べてみよう。断片283では二種類の愛が語られている¹⁶。「心情には心情の秩序、精神には精神の秩序があり、人間は愛の諸原因を秩序立てて説明できない、イエスキリストや聖パウロには愛の秩序がある。」

人間のレベルの愛には、amourという言葉が充てられ、イエスの愛には、charitéという言葉が充てられる¹⁷。そして、amourという言葉には、:恋愛、自愛、愛と言う日本語が充てられている。もう一方のchariteは、イエスの愛、神の愛、超自然的な愛という日本語が充てられる。

それでは、イエスキリストの愛それ自身については、次章で検討することにしよう。

4. イエスキリストの愛について

断片793で表現されているイエスキリストの姿は、如何なるものであるのか¹⁸。

イエスは、卑賤で、何の学歴もなければ学問も身につけていない。しかし、謙虚で清浄で忍耐強く、如何なる罪も犯していない。そして、パウロと並んで愛の秩序を持っている。それは精神によって教えようとしたのではなく、心情によってでもなく、愛によって熱を与えようとしたのである。その愛は、身体の秩序からも、精神の秩序からも見ることも触れることもできない。何故なら、その愛は超自然的であるのだから。

イエスの生涯は、マホメットのような人間的成功の道ではなく、十字架に掛けられて死ぬまで遡った破滅の道であった¹⁹。イエスを決定的に特徴付けるものは、旧約聖書の預言が実現したこと²⁰。自ら弟子たちに、十字架に掛けら

れた後に復活すると予言したこと。紛れもなくメシア(救世主)であったこと。そして、数々の奇跡を行ったことである。盲人の視力を回復させたり、病者を癒したり、結婚式で、水を葡萄酒に変えたり等々。しかし、十字架にかけられるまで、人々から受ける誤解と迫害で、苦難の連続であった。十字架に望む際には、弟子たちからも見放され²¹、しかも、ユダヤ人と異邦人によって裁かれた²²。

しかし、すべては人間であると同時に神でもあったイエスキリスト²³を通じ、聖書に描かれたイエスキリストを通じ、我々は、人間の本性と、神を知ることが出来る。エピクテートスのごとく、自分の悲惨さを知らずに神を知るとは傲慢を生み、神を知らずに自分の悲惨さを知るものは絶望を生むことになる。イエスキリスト、改めてその生き様、生涯を理解するにつけ、それに対する自分はどのような人間なのか、自覚し理解する糸口を与えてくれる道である²⁴。

5. 結論

パスカルは、『キリスト教弁証論』を書き上げ、パスカル流の信仰への道、信仰に導く道を示そうとした。その営みを象徴していると考えられるのが、断片793である。そこで、我々は、断片793を、秩序 *ordre*、無限 *infini*、愛 *charité* の3語から分析した。これら3語は、パスカルの思想発展、思想の核心を理解するのに不可欠なものである。

1. *ordre* という言葉は、大きく、<順序>と<秩序>という2つの意味を持つ。先ず<順序>は、キリスト教信仰に至り、キリスト教へと導くには順序がある。それ故この意味での用い方は、第1部、神なき人間の惨めさと考えられていた断片で多く見られる用法である。他方<秩序>は、3種類、3世界(身体、精神、愛)の秩序がある。この言明こそが、パスカルが述べようとした思想とキリスト教の核心の1つと考えられる。3番目の秩序こそが、キリストの愛であり、他の2つとは無限の距離があり、第2部の、神と共にある人間の至福を理解する鍵でもある。
2. *infini* という言葉は、1. を受けて、3つの各々の秩序との間には無限の距離があるというコンテクストで使われているが、この無限には、2つのニュアンスがある。一方で、パスカルの天才的数学の考察(数冪の和: 無限にどんな数を加えても、無限には影響ない)から導かれた。他方、数、時間、空間においては、無限が存在し、人間はそれらの前では、無に等しい程の小さな惨めな存在である。
3. *charité* という言葉は、2. を受けて、そのような惨めな存在である人間に開かれているのが、キリスト教信仰を持つものに許されるキリストの愛である。イエスキリストは、学歴も学問もないが、謙虚で清浄で忍耐強く超自然的愛を示すものである。しかし、またイエスキリ

ストを聖書を通じて知ることと、キリスト教を信じること、そして神と共に在ることへの道程には、紆余曲折と無限に近い隔りがあることをパスカル自身が教えている。

¹断片番号は、全てブランシュヴィク版による。

² 「パスカル「パンセ」の魅力」奥 貞二 火涼 63 p13-21 2011.3

³ 「パスカルにおける人間の研究」三木清著 岩波書店 1968 は、第4章 三つの秩序 p108—110 のところで、身体の秩序（富者、王様）と、精神の秩序（アルキメデス）と、慈悲の秩序の3つの秩序（キリスト）があり、お互い同士は無限の距離があり乗り越えることが出来ないとしている。身体と精神という二元的な捉え方のギリシア思想に対して、愛という第3の秩序を登場させたことは大きい。

⁴ 「デカルトとパスカル」森有正著 筑摩書房 1971

⁵ この無限については、この論文の第2章で詳しく検討される。

⁶ この愛については、この論文の第3章で詳しく検討される。

⁷ この秩序については、この論文の第1章、すぐ続いて詳しく検討される。

⁸ この超自然的な秩序については、この論文の第4章、イエス・キリストのところでも詳しく検討される。

⁹ 「パンセ I」パスカル著 前田陽一、由木康訳 中公文庫 断片 460 p295-296 参照 そこでは、事物には3つの秩序があるとして、肉体、精神、意志が挙げられている。肉体と精神は共通しているが、3番目の意志(*la volonté*)は、断片 937 では、愛であった。意志については、賢者たちは、正義を対象とし、その知恵の事柄は誇りの支配に属していると語られている。断片 793 とは様子が違う説明である。

¹⁰ 例外的に断片 1 と 2 では、<秩序>という訳語が当てられる用法が見られる。それを除いて、断片 247 までは<順序>、断片 283 以降の用例は<秩序>となる。しかも、ブランシュビク版は、第1部 神なき人間の惨めさ、から 第2部 神とともにある人間の至福 への、道行き順に並べ、整理したもので、順序 (*ordre*) はキーワードであり、出発点である。

¹¹ 森は、上掲書注 4 「デカルトとパスカル」の第二部パスカル 三「秩序」の問題、方法の基礎としての「精神」と「心情」と「イエス・キリスト」 p339 の中で、秩序 *ordre* の問題を取り上げ、*ordre* という言葉は、<順序、配列の仕方、数学上の時限、方法、種類、存在のあり方>等を意味するが、1つの共通の事柄を表現している。つまり、<主体と客体（大賞）との実質的な直感的相関関係そのものを示す言葉であり、様々な意味は、この相関関係を構成している要素である>と述べ、幾つかの訳語にならざるを得ないことを説明している。

¹² 初版のポールロワイヤル版の題は、「*Pensées de Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets qui ont été trouvées après sa mort* 死後遺稿のうちに見出された、宗教とその他の若干の主題についてのパスカル氏の思想」日本語訳の最後の言葉<思想>、原文は先頭の<*Pensées*>この言葉が構成の作品題となる。全てパスカルの与り知らないところである。

¹³ 「幾何学の精神について」は、1657—8年頃に、ポールロワイヤルの「小さな学校」で使うための「幾何学原理」という教科書の序文として書かれたものとされる。

¹⁴ 「数冪の和 *Potestatum numericarum summa*」という作品は、1654年決定的回心にパスカルが遭遇する同じ年に書き上げている。

¹⁵ 「パスカル パンセ II」中公クラシックス p304-328「ド・サシ氏との対話」参照断片 60 で、確認している。

¹⁶ 「パンセ I」パスカル著 前田陽一、由木康訳 中公文庫 断片 283 p189-190 参照

¹⁷ “*Pascal pensées*” Flammarion 2008 p116 断片 283 参照

¹⁸ 「パンセ I」パスカル著 前田陽一、由木康訳 中公文庫 断片 793 p524-527 参照

¹⁹ 同上 断片 599 p375-376 参照

²⁰ 同上 断片 710 p455 参照

²¹ 同上 断片 553 p338-345 参照

²² 同上 断片 744 p500-501 参照

²³ 同上 断片 862 p577-580 参照

²⁴ 同上 断片 432,527,548 p274,327,335—336 参照

(Original Article)

On fragment 793 in Pascal's "Pensées"

Teiji Oku^{1*}

1: Dept. of General Education

Many investigators treat with the fragment 793 in Pascal's "Pensées".. We pick up this fragment from another view point. We attention to three words < ordre > , < infini > , < charité > . < ordre > shows Pensées's whole structure. < infini > urges human being to recognize human nature. We distinguishes < Charité > (Jesus's love) from amour (human's love). Next we pick up Jesus Christus.

Key Words : order , infinte , charity , Jesus Christus , fragment793

アミロースヨウ素を用いた擬固体型色素増感太陽電池の高効率化

幸後 健¹⁾, 早瀬 修二²⁾, 海宝 龍夫³⁾, 田口 充³⁾

1:材料工学科

2:九州工業大学大学院 生命体工学研究科

3: 関東天然瓦斯開発株式会社

擬固体型色素増感太陽電池(Quasi-solid dye-sensitized solar cells : Q-DSSCs)の高効率化を目的として、ヨウ素と包接化合物を作るアミロースに着目した。直線状ナノポアを有するアルミナフィルムにアミロースを修飾して擬固体電解質層を作製した。この擬固体電解質層を電解液部分に挿入することで、固体化率 50%の Q-DSSC を作製した。アミロースを修飾した擬固体電解質層を用いた場合は未修飾の場合に比べて短絡電流密度(J_{SC})が上昇した。最適な修飾条件では、固体化率 50 %でも固体化率 0 %の場合とほぼ同等の太陽電池性能を有していた。アミロース修飾濃度と I_3^- 拡散定数の関係について調べた結果、 J_{SC} の性能と一致した。また、擬固体電解質中でのヨウ素濃縮が確認されたことから、擬固体電解質中で Grotthuss 機構のような I_3^- の電荷輸送パスができたことで性能が向上したと考えられた。

Key Words:DSSC, 擬固体化, アミロース, ヨウ素イオンパス, Grotthuss 機構

(受付日 2011 年 8 月 24 日 ; 受理日 2011 年 12 月 21 日)

1. 緒言

色素増感太陽電池(Dye Sensitized Solar Cell: DSSC)は低コストかつ高効率な次世代型太陽電池として注目されてきた^[1]。1993年に Grätzelらによって提案された構造の DSSC が光電変換効率 10 %を達成し^[2]、近年では約 12 %程度とアモルファスシリコンの性能に肉薄している^[3-4]。実用化に向けてさらなる高効率化の研究が進む一方で、耐久性の向上についても研究が行われている。一般に、高効率を達成した DSSC では電解液に揮発性の高い有機溶媒を使用している報告が多い。液漏れや揮発による性能低下が懸念されることから、電解液層の固体化、擬固体化が望まれる。固体化については p 型の有機・無機半導体を電解質層に用いた例が報告されている^[5-10]。一方で、擬固体化については不揮発性のイオン性液体電解液をベースに^[11-18]、ナノ粒子やポリマーを添加してゲル化した電解質を用いた例が報告されている^[19-25]。しかしながら、これらの報告の殆どが固体化率(固体化材/電解液の比) 10 %程度に留まっている。固体化率の増加は電荷移動を担うヨウ素の拡散性低下を招くため、太陽電池性能が低下する。

我々は、擬固体電解質層内部にヨウ素のイオンパスを構築すること提案してきた^[26]。直線状ナノポアを有するアルミナフィルムに長鎖イミダゾリウム塩を修飾し、電解液を含ませ擬固体電解質として用いた。擬固体電解質中にヨウ素イオンのパスを構築することで、固体化率 50 %でも光電変換効率約 7 %を達成した。

Fig. 1 に示すように擬固体電解質層部分でイミダゾリウム塩によってヨウ素が濃縮され、高濃度ヨウ素領域で Grotthuss 機構のよう

な物理的な拡散以外による移動機構が発現し、ヨウ素のイオンパスが出来たと考えられる^[20,26]。また、光電変換層付近のヨウ素濃度を低くすることで、逆電子移動が抑制された。Q-DSSC の高効率化の手法の一つとして、Fig. 1 の構造が有効であるといえる。一方で、イミダゾリウム塩がアルミナナノポア内壁にエステル結合で修飾されているため、空気中の水分などで加水分解を起こしイオンパスが崩壊する可能性があった。そこで、新たなイオンパス構築材料としてヨウ素と包接化合物を形成するアミロースに着目した。アミロースに取り込まれたヨウ素はポリヨウ素として存在することが報告されており^[27-29]、Fig. 1 に示すような高濃度ヨウ素領域が擬固体電解質内部に形成されることが期待できる。本研究ではアミロースを用いて Fig. 1 の構造を有する Q-DSSC の作製を試みた。

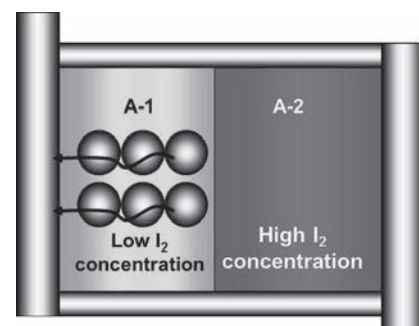


Fig.1 高効率化に向けた Q-DSSCs 構造.

A-1 : 逆電子移動抑制を狙った低濃度ヨウ素領域

A-2 : 電荷輸送効率向上を狙った高濃度ヨウ素領域

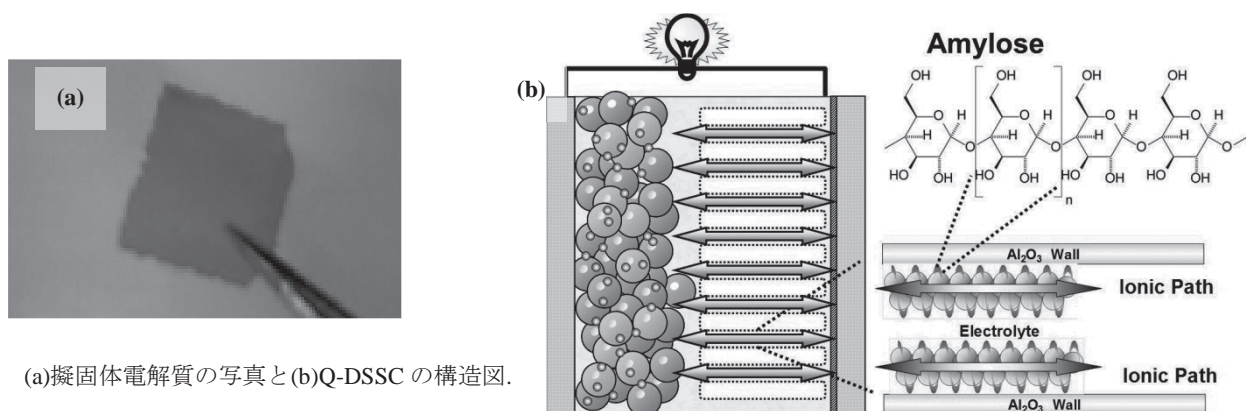


Fig.2 (a)擬固体電解質の写真と(b)Q-DSSCの構造図.

2. 実験方法

2.1 電極の作製

作用電極は次の手順で作製した。透明導電膜基板(フッ素ドーピングした酸化スズ層付きガラス基板:FTO, LowE ガラス, 日本板硝子株式会社)を適当な大きさに切り、界面活性剤, 純水, アセトン, イソプロピルアルコールを用いて超音波洗浄機中(Branson Ultrasonic Cleaner 1510-DTH, Branson)で30分ずつ超音波照射を施した。さらに、UV-O₃洗浄機中(LASER TECHNO)でUV-O₃照射を施した。この基板表面に酸化チタンペースト(Ti-Nanoxide D casual size, Solaronix)を塗布し常温にて乾燥後、電気炉(F0300, YAMATO)中で焼成した。焼成条件は、空気雰囲気中で室温から500℃まで15℃/minで昇温し、500℃30分間保持した後に放冷した。塗布と焼成を繰り返し、約12μmのポーラスな酸化チタン膜を基板上に形成した。この基板をt-ブチルアルコールとアセトニトリルを体積比1:1で混合したN719色素溶液3×10⁻⁴M (Ruthenizer 535-bisTBA, Solaronix)に一昼夜浸漬させ、酸化チタンに色素を吸着させることで作用電極とした。対向電極は、透明導電膜基板上にPtをスパッタリング法によって堆積させたものを用いた。スパッタリングはSH-250(ULVAC)を用いArガス圧6.6×10⁻¹Paの圧力下にて200W, 30分の条件で実施した。電解液は1-methyl-3-propyl-imidazolium iodideと3-ethyl-1-methyl-imidazolium tricyanomethanideをモル比3:7で混合した溶液中にI₂:300mM, LiI:500mM, t-Bupy:580mMを溶解させ調製した。

2.2 擬固体電解質層の作製

擬固体電解質は次の手順で作製した。ポーラスアルミナフィルム(ポアサイズ200nm, 空隙率50%, Whatman)を所定の大きさに切りだした後に、純水, アセトン, イソプロピルアルコールで洗浄し、UV-O₃照射を実施した。このフィルムを、電気炉中で焼成することで前処理とした。焼成条件は、空气中で室温から450℃まで15℃/minで昇温し、450℃, 30分間保持した後に放冷した。アミロースサスペンション溶液(Mw:200K, 11.2wt%/Vol, 江崎グリコ社製)は、90℃の熱水を用いて攪拌しながら希釈し、0.05, 0.1, 0.5, 1.0wt%のアミロース水溶液を調製した。前処理したアルミナフィルムを紙濾紙(No.4, KIRIYAMA)の上に固定し、アス

ピレーターで吸引させながら各濃度のアミロース水溶液を流すことで、ナノポアの内壁にアミロースを配向させるように修飾した。その後、室温で一昼夜真空乾燥させ調製した電解液を注入することでFig.2(a)に示す擬固体電解質層とした。

2.3 セルの作製

作製した作用電極の光電変換層と擬固体電解質層を所定の大きさに加工し、カプトンテープ(Permacell, 日東電工)をスペーサーとして光電変換層の周辺に設置した。作用電極と対向電極とを擬固体電解質層を介して接着させ、エポキシ樹脂を用いて封止することでFig.2(b)に示す構造の太陽電池を作製した。

2.4 評価方法

太陽電池特性は擬似太陽光照射下(AM1.5, 100mW/cm²)で測定した。測定にはキセノンランプ(XLS-150A)を搭載したKHP-1(分光計器株式会社)を用いて実施した。ヨウ素濃度の測定はV-530(JASCO)を用いて紫外-可視光領域の吸収強度の変化を測定することで実施した。I₃拡散定数は限界電流より算出した。ヨウ素へ酸化-還元作用を持つPtを両極に用い、電極面積が0.25cm²になるようにカプトンテープでマスキングした。この部分に擬固体電解質層を挿入し、0Vから-1Vまで電圧を印加した。IよりもI₃の拡散が遅いため拡散が律速になり、電流値が飽和する。この時の電流値を限界電流値と呼び、次式よりI₃拡散定数を算出した^[13,16]。

$$D = \frac{dI_{limit}}{2nFC_0}$$

ここでDは拡散定数、I_{limit}は限界電流値、dは電極間のギャップ、nは電子数、Fはファラデー定数、C₀はヨウ素の初期濃度である。限界電流値は、印可電圧0.5Vの電流値を用いた。

3. 結果と考察

Table 1に各々の太陽電池の各パラメーターとアミロース修飾濃度とをまとめた。結果より、アミロースを修飾したことで電流特性が変化していることがわかる。アミロース修飾濃度と共に電流が上昇し、修飾濃度0.5wt%で最大となった。また、1.0wt%では太陽電池特性が低下し、適切なI-V曲線が得られなかった。原

Table 1 アミロース処理濃度と各太陽電池性能のまとめ.

	η (%)	J_{SC} (mA/cm ²)	V_{OC} (V)	FF (-)
Liquid	4.29	9.59	0.658	0.680
0wt%	3.87	8.43	0.663	0.693
0.05wt%	3.71	8.17	0.660	0.688
0.1wt%	4.27	9.47	0.651	0.692
0.5wt%	4.32	9.51	0.657	0.691
1.0wt%	3.65	7.54	0.650	0.745

Liquid:擬固体電解質を含まないDSSC(固体化率 0%)

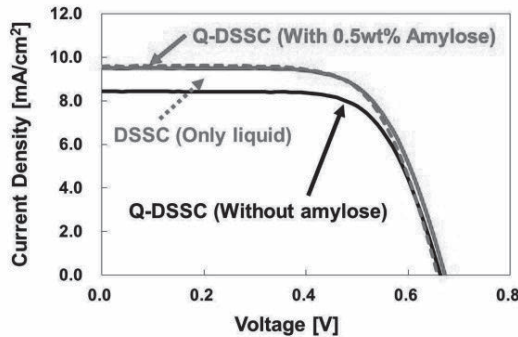


Fig.3 アミロース処理した Q-DSSC の太陽電池特性結果.

因としてアミロースがナノポアを閉塞したために I^-/I_3^- がスムーズに拡散しなかったのではないかと推測される。Fig. 3 に最も J_{SC} が高いアミロース溶液 0.5 wt% で修飾した場合、未修飾の場合、及び固体化率 0 % の場合の太陽電池特性結果を示す。アミロース修飾によって電流値が増加し、固体化率 50 % でも固体化率 0 % と同等の太陽電池性能を有することに成功した。Fig. 4 に I_3^- 拡散定数と短絡電流との関係を示す。結果より、アミロース修飾の濃度に対する I_3^- 拡散定数の変化と電流値の変化の傾向がよく一致している。この結果より、 I_3^- 拡散定数が上昇したことで J_{SC} も上昇し、太陽電池性能が向上したといえる。続いて、擬固体電解質層内部のヨウ素濃度について調べた。0.5 wt% のアミロースを修飾させたアルミナフィルムを I_2 :3 mM, LiI:5 mM のアセトニトリル溶液に一晩浸した。Fig. 5 は溶液のフィルムの浸漬前後で比較した UV-VIS 測定結果である。アミロースを修飾したアルミナを浸漬した場合、吸収強度が減少していることがわかる。これはヨウ素がアミロースに包接され、溶液中のヨウ素濃度が減少したためと考えられる。擬固体電解質中のヨウ素濃度を算出すると、電解液中よりも体積単位で約 130 mM も高いことがわかった。従って、擬固体電解質中でヨウ素が濃縮されたことで、Grotthus 機構のようなヨウ素の移動機構が発現し I_3^- 拡散定数が上昇したと考えられる。

4. 結論

Q-DSSC の高効率化を目的として、アミロースを用いたヨウ素イオンパスの構築を試みた。アミロース修飾によって J_{SC} が増加し、最適な修飾条件では固体化率 50 % でも、固体化率 0 % と同等の性能を有することに成功した。性能向上の理由として、ヨウ素の拡散が向上したことが要因であるとわかった。また、擬固体電解質

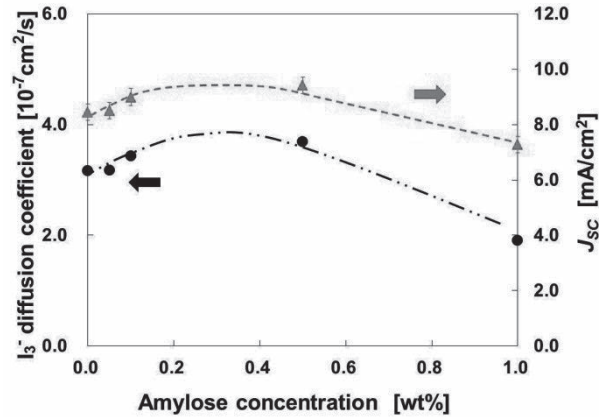


Fig.4 アミロース処理濃度と J_{SC} 及び I_3^- 拡散定数の関係.

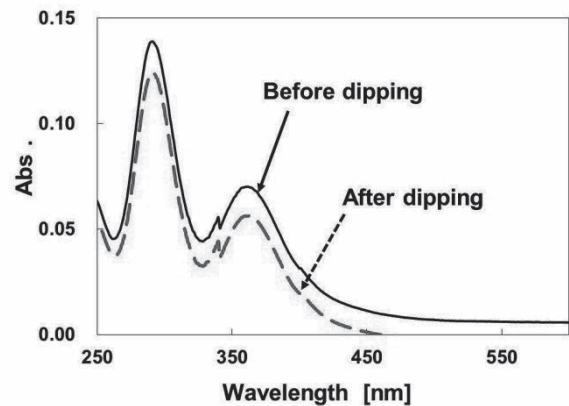


Fig.5 UV-VIS 測定結果.

中でのヨウ素濃縮が確認されたことから、Grotthus 機構の電荷移動が発現したと考えられる。アミロースを用いることでも Fig. 1 に示す Q-DSSC の効果が立証された。

付記

本研究は、九州工業大学大学院 生命体工学研究科 早瀬研究室で実施した。また、この成果は下記雑誌にて掲載している。

T. Kogo, S. Hayase, T. Kaiho, and M. Taguchi, *Journal of Electrochemical Society*, **155**, 9, K166 (2008).

5. 謝辞

本論文は、九州工業大学大学院 生命体工学研究科 早瀬修二 教授のご厚意によって執筆することができました。厚く御礼を申し上げます。また本研究を遂行するにあたり、御指導やサンプルの御提供などのご協力を頂いた、関東天然瓦斯開発株式会社 海宝龍夫氏、田口充氏 並びに、江崎グリコ株式会社生物化学研究所 細谷佳代氏、鷹羽武史氏 に厚く御礼を申し上げます。

6. 参考文献

- [1] B. O'Regan and M. Grätzel, *Nature*, **353**, 737 (1991).
- [2] M. K. Nazeeruddin, A. Kay, I. Rodicio, R. Humphry-Baker, E. Mueller, P. Liska, N. Vlachopoulos, and M. Grätzel, *J. Am. Chem. Soc.*, **115**, 6382 (1993).
- [3] Y. Chiba, A. Islam, Y. Watanabe, R. Komiya, N. Koide, and L. Han, *Jpn. J. Appl. Phys.*, **45**, L638 (2006).
- [4] M. Grätzel, *International Symposium on Innovative Solar Cells 2009*, Tokyo, Japan (2009).
- [5] L. Schmidt-Mende, S. M. Zakeeruddin and M. Grätzel, *Appl. Phys. Lett.*, **86**, 013504 (2005).
- [6] N. Fukuri, N. Masaki, T. Kitamura, Y. Wada and S. Yanagida, *J. Phys. Chem. B*, **110**, 25251 (2006).
- [7] J. Xia, N. Masaki, M. Lira-Cantu, Y. Kim, K. Jiang, and S. Yanagida, *J. Am. Chem. Soc.*, **130**, 1258 (2008).
- [8] N. Ikeda and T. Miyasaka, *Chem. Commun.*, 1886 (2005).
- [9] Q. -B. Meng, K. Takahashi, X. -T. Zhang, I. Sutanto, T. N. Rao, O. Sato and A. Fujishima, *Langmuir*, **19**, 3572 (2003).
- [10] G. R. A. Kumara, A. Konno, K. Shiratsuchi, J. Tsukahara and K. Tennakone, *Chem. Mater.*, **14**, 954 (2002).
- [11] N. Yamanaka, R. Kawano, W. Kubo, T. Kitamura, Y. Wada, M. Watanabe and S. Yanagida, *Chem. Commun.*, 740 (2005).
- [12] F. Mazille, Z. Fei, D. Kuang, D. Zhao, S. M. Zakeeruddin, M. Grätzel and P. J. Dyson, *Inorg. Chem.*, **45**, 1585 (2006).
- [13] D. Kuang, P. Wang, S. Ito, S. M. Zakeeruddin and M. Grätzel, *J. Am. Chem. Soc.*, **128**, 7732 (2006).
- [14] R. Kawano and M. Watanabe, *Chem. Commun.*, 2107 (2005).
- [15] J. G. Chen, H. Y. Wei, and K. C. Ho, *Sol. Mater. Sol. Cells*, **91**, 1472 (2007).
- [16] P. Wang, S. M. Zakeeruddin, R. H. Baker and M. Grätzel, *Chem. Mater.*, **16**, 2694 (2004).
- [17] P. Wang, S. M. Zakeeruddin, J. E. Moser and M. Grätzel, *J. Phys. Chem. B*, **107**, 13280 (2003).
- [18] R. Kawano, H. Matsui, C. Matsuyama, A. Sato, M. A. B. H. Susan, N. Tanabe and M. Watanabe, *J. Photochem. Photobiol. A Chem.*, **164**, 87 (2004).
- [19] N. Mohmeyer, D. Kuang, P. Wang, H. W. Schmidt, S. M. Zakeeruddin and M. Grätzel, *J. Mater. Chem.*, **16**, 2978 (2006).
- [20] W. Kubo, S. Kambe, S. Nakade, T. Kitamura, K. Hanabusa, Y. Wada, and S. Yanagida, *J. Phys. Chem. B*, **107**, 4374 (2003).
- [21] J. H. Kim, M. S. Kang, Y. J. Kim, J. Won, N. G. Park and Y. Kang, *Chem. Commun.*, 1662 (2004).
- [22] P. Wang, S. M. Zakeeruddin, I. Exnar and M. Grätzel, *Chem. Commun.*, 2972 (2002).
- [23] P. Wang, S. M. Zakeeruddin, P. Liska, and M. Grätzel, *Chem. Mater.*, **15**, 1825 (2003).
- [24] R. Kumar, A. K. Sharma, V. S. Parmar, A. C. Watterson, K. G. Chittibabu, J. Kumar and L. A. Samuelson, *Chem. Mater.*, **16**, 4841 (2004).
- [25] P. Wang, S. M. Zakeeruddin, P. Comte, I. Exnar and M. Grätzel, *J. Am. Chem. Soc.*, **125**, 1166 (2003).
- [26] T. Kato and S. Hayase, *J. Electrochem. Soc.*, **154**, B117, (2007).
- [27] I. A. Jideani, Y. Takeda and S. Hizukuri, *Cereal Chem.*, **73** (6), 677 (1996).
- [28] M. Hirai, T. Hirai and T. Ueki, *Polymer*, **35**, 10, 2222 (1994).
- [29] X. Yu, C. Houtman and R. H. Atalla, *Carbohydr. Res.*, **292**, 129 (1996)

(Original Article)

Proposal of high efficiency Quasi-solid dye sensitized solar cell with Amylose-iodine

T. KOGO¹⁾, S. HAYASE²⁾, T. KAIHO³⁾, and M. TAGUCHI³⁾

1: Department of Material Science and Engineering

2: Graduate School of Life Science and Systems Engineering, Kyusyu Institute of Technology

3: Kanto natural Gas Development Company

We suggested high efficiency Quasi-solid dye-sensitized solar cells (Q-DSSC) with Amylose-iodine complex. The surface of nanopores in the Al_2O_3 film was modified with Amylose, and these nanopores were filled with the electrolyte. Then it was set in the electrolyte layer, and 50% solidificated Q-DSSC was assembled. The photocurrent density of Q-DSSC modified with Amylose increased, and it was almost the same as that in 100% liquid electrolyte. As for the relationship between Amylose modified concentration and I_3^- diffusion coefficient, the tendency was almost the same with that between Amylose modified concentration and photocurrent density, and it also confirmed that iodine was concentrated in Al_2O_3 film with Amylose. All of these results suggested that I_3^- path was formed in quasi-solid electrolyte as Grotthuss mechanism.

[Key words]: DSSC, Quasi-solid, Amylose, I_3^- path, Grotthuss mechanism.

(Original Article)

A Study of Matsumura Katsuyuki, a Person of Culture (I)— **About His Speechmaking, Drama, Scenario, Novel, Essay etc.** —**Masahiro KURUHARA***

Matsumura Katsuyuki, the author's uncle-in-law, who passed away in 2009, worked for colleges of technologies and universities as an office clerk. He was at the same time a great person of culture and devoted his life to cultural activities such as writing literary works, speechmaking and the study of local history.

After giving a brief introduction on Matsumura's life and his speechmaking, the author refers to his literary works to which little attention has been paid. Matsumura was typically interested in writing dramas and scenarios. In this paper, the author mainly takes up his drama and scenarios as well as his other literary works, introduces their contents and makes a critical study on his works.

Key words: speechmaking, scenario, novel, essay, local history study

* Department of General Education (Japanese Language and Literature)

波大学公開講座「古文書解説」(講師は同大学副学長芳賀登氏)の受講者が、元桜村教育長市村芳男氏の提唱のもとに集まり、芳賀登氏をはじめ桜村古文書調査員栗田暹治氏、霞ヶ浦高等学校教諭栗原亮氏などを指導者として勉強会を始める。」とあり、五十七年六月、桜村古文書研究会として発足し、平成四年四月に松村勝行が第三代の代表者となった。月二回の活動を行っていたようである。

一方の「歴史を読んでみる会」は、その「古文書研究会」の入門コースとして平成八年八月に発足する。「常陽リビング」平成二十年九月十三日付によれば、会員が高齢化する中で、間口を広げ、地域の歴史に興味のある市民が気楽に参加できる場を作るために発足した、とのことである。活動は月一回の古文書解説例会がメインで、つくばや東京の史跡を訪ねる小さな旅がロコミで評判を呼び、年々参加者が増加していった模様である。例えば、平成十九年には、その「史跡等参観研修会」は、「つくばの歴史に親しむ」が六月と十二月に、「大江戸を歩く」が二月と八月に、併せて年四回開催されている。また平成十九年から三年連続で六月に「時の記念日にちなむ集い」と題して、つくば市の一部をなす谷田部藩が生んだ、和時計などの発明家・飯塚伊賀七(からくり伊賀七)の業績をたどる歴史散歩も行っていった。

二つの古文書の会の現在の活動状況は未詳だが、その「史跡等参観研修会」に松村が最後に参加したのは、「つくばの歴史に親しむ」が第二十六回「小野川用水・土浦用水」(平成二十一年五月三十一日実施)であり、「第三回時の記念日にちなむ集い・改めて飯塚伊賀七」(六月七日実施)を挟んで、「大江戸を歩く」は第二十四回「日野市の昔を訪ねてみよう。甲州街道日野宿・新撰組のふるさと・高幡不動尊」(平成二十一年八月二十三日実施)である。「大江戸を歩く」の方は、実に死去の三日前である。その前日(二十二日)の夕刻には、松村は「NPO法人スマイル・ステーション」主催の「楽楽大学講座」にて「中世つくば地域における館の主達」と題する地方史を講ずる演壇に立っている。

多分、こうした史跡踏歩に際しては、松村はその性格から、経路の策定・参考資料の作成から会計報告まで全て一人でやり遂げたのであろう。おそらくこのような無理が、もともと健康に不安がある松村の七十路の肉体に次第に重くのしかかり、八月の二日連続の無理が直接の引き金となって、急な最期につながったのではない

か、とも考えられる。

だが、彼はそれらの責務を悠々と楽しみながらこなしていたのであろう。叔母・富士子の談として、松村は「つくばに昔から住んでいる人たち(旧住民)は、自己より学歴や社会的地位の高い人にも遠慮なく対等に話が出る人が多く、その自分を飾らないおおらかな気質が好きだ」とかねがね言っていたという。そうした茨城の県民性に魅力を感じていたからこそ、つくばの歴史研究に情熱を注ぐことが出来たのだらうと、筆者も思う。他県出身者にも隔てなく接する人柄の良さが、引退後も三重県に帰らなくてもいいと思った、住み易さに繋がったのだと思う。

つくば市の松村の自宅には、現在も「東京」「三重県」「筑波大学」「俳句」「つくば市北条」といった様々な地名やジャンルごとに新聞の切り抜きや参考書のコピーなどを集めて整理された紙ファイルが、ざっと数えただけで五〇〇冊以上、本棚に所狭しと並んでいる。また、新聞の切抜き等を貼付した自前の百科事典のようなルーズリーフの書束も見つかっている。そうした「整理の鬼」とも称すべき几帳面さと共に、過去の業績にこだわることなく、絶えず新しいものを学ぼうとして前へ進み続けた義理の叔父・松村勝行の人生は、文人・文化に関わる者としての一つの理想型を我々に呈示してくれたものであったと思う。(二〇一一年八月三〇日 稿了)

後記

本稿を執筆するきっかけは、平成二十一年八月二十六日に松村勝行の訃報に接したことにあるが、叔父の業績を論考にまとめようとした直接の契機は、亀山市の郷土歴史研究家・八木淳夫氏の主宰する亀山市芸術文化協会文学部門文化研究部会編の、「文化研究」第九号(平成二十二年十月発行)に掲載するための「評伝」・「文芸著作目録」・「略年譜」の執筆を依頼されたことにある。八木氏と、その折、追悼文をお互い連絡し合いながら執筆した、実弟・松村勝順氏には、ここに記してお礼の言葉を申し上げる。

(受付日二〇一一年 八月三〇日)

(受理日二〇一一年十二月二日)

このように並々ならぬ強い執筆への決意と矜持を示す、「小説『生徒会長』の資料」と題するノートであったが、結局この後ほとんど書き継がれることなく、その執筆は頓挫したようだ。その後、昭和四十八年九月と十二月にも、「生徒会長資料」と題するメモが見つかった（登場させる学校を亀山高等学校にちなみ「陰涼寺山高校」と名付けること等が書いてある）が、結局長編小説という形で実現することとはなかったようだ。生涯の代表作となり得たであろうことを思うと悔やまれる。

他に、昭和三十一年頃の様々なエッセイ・自叙伝・演説の原稿・詩などを集めた、原稿用紙一六〇枚にもなる「露出症」と題された雑文集が残っており、当時好意を持っていた女性のことなどが綴られていて興味深い。

その後の小説作品としては、まとまったものは数少なく、年代は分からない（おそらく昭和四十～五十年代）に、戯曲のプロットとして書かれた「陰涼寺山」を舞台とした「表札」という八十三枚からなる作品がある。そして、「[創作] 短篇集」と名付けられたファイイルに「富士山に見える病室」十枚（昭和五十三年九月）、「病人（やにん）」四十七枚（五十五年七月）の二編を見ることが出来る。いずれも心筋梗塞で入院した経験を元に書かれていると思われる。

次に、エッセイの分野に目を移してみると、数多くの作品が書かれていることが分かる。前述した「露出症」の諸編や、膨大な量の日記の文章も広い意味ではエッセイと呼べるし、様々なメディアに発表した文章は数え切れないほどであろう。

ここでは、まず教職員の文芸誌「文芸広場」に発表された「芸者」（昭和六十年九月）を取り上げよう。原稿用紙五枚程度の小品である。小さい頃、伯母が芸者の置屋をやっていた関係で、母に連れられてよく遊びに行き、特に三人の芸者さんによく遊んでもらったという思い出である。後年その中の一人ひでちゃんを紹介して後に妻となる娘さん（つまり筆者の叔母）に出会ったという話である。こうした他愛も無いような小話・旅先のエピソードなどを他にも十篇ほど「文芸広場」に投稿しているが、すべて入選せず、本文を読むことが出来ないのは残念である。

最後に「文芸亀山」第四号（平成十年十一月）に発表された「亀山の風、つくばの風」を取り上げよう。これも見開き二ページの小品である。現在住む「つくば市」を含む茨城県西部と、青少年期を過ごした亀山との気候風土の違いや共通点などに

ついて様々に語った後、『つくば人』となってしまった私。だが、亀山の、あの風、空、山の色は忘れられない。」と語る。そして最後近く次のように語る。

つくばへ来て間もなく、九死に一生の大手術を受けた。麻酔が覚めるもうろうとした意識の中で、亀山の菩提寺の大銀杏が風にそよぐのが見え、その葉擦れの音が聞こえた。

寺には父母、兄弟とともに私の二人の子が眠っている。母体を助けるため断念した子と生を享けずに産まれた子と――。

そして彼自身も今は、同じ亀山市南野町の臨濟宗英寺に眠っている。

六 古文書研究と史跡踏歩

本稿の最後に、平成五年の退職以降の少なくとも十六年間に、松村の文化活動の中心となっていた古文書研究と史跡踏歩について触れておきたいと思う。

まず彼の古文書や歴史への関心というものは、これまでの様々な活動と関わり無く突発的に生まれたものではない。そのことについて、「常陽新聞」平成十三年五月二十九日の「ひと十字路」の記事がよく物語っているので、次に一部を引用する。

…話し言葉に対しての興味が、二転三転して古文書につながった。

「高校時代から、言語効果を科学的に研究したくてサークルを作ったことも。でも、基礎学問や分析機械が必要でお金も時間もかかり、対象物が大き過ぎて無理でした。あきらめて、言葉が重要な役割を持つシナリオを書くようになりました」。それに関連して、時代劇の言葉を調べているうちに、話し言葉と書く言葉の違いはあるが、古文書を理解しておかなくてはと、筑波大の公開講座を受講。講座修了後、同（筆者注：つくば市桜）古文書研究会に入会し、さまざまな史料を解読してきた。…

つまり、弁論（話学）→シナリオ→古文書は一つの線で繋がって来ると言うことだろう。「ことば」というものにあくまで執り続けた生涯であったと言える。

「古文書研究会」の沿革を記すプリント（平成五年度 つくば市文化祭桜会場古文書研究会 三廳秘録 第一部）の会務記録を見ると、「昭和五十五年、筑

を踏まえている可能性が大きい。そして若い頃の演説がかった口調は消えて、松村の戯曲の中では最も読みやすい、熟練した台詞まわしになっている。肩の力を抜き、自然な親心を表現したところにこの作品の成功した理由があると思う。

五 小説・エッセイ

本章では、松村の数々ある文学的業績のうち、小説とエッセイのジャンルにはどのようなものがあるかを紹介する。紙幅の関係で内容に深く触れることは出来ないが、どのような足跡を残しているかをまとめておきたいと思う。

まず最も早い時期に活字になった作品として、旧制津中学校文芸部誌「六稜」第三号(昭和二十三年三月)に発表された小説「我輩は兎である」(二段組六ページ)がある。タイトルが示すように夏目漱石のパロディであることは明らかであるが、内容・文体共に完全にオリジナルなものである。兎の視点から人間社会を風刺するという作意は似ているが、兎の食べ物について・闇屋の横行する世情・昭和二十二年の松村自身の母の死の体験などが踏まえられ、非常に読みやすい巧い文章になっている。兎を主人公にしたのは、実は松村が中学生当時、兎の飼育に非常に熱心に取り組んでいたことが背景にあり、「兎島日誌」(昭和二十一年八月〜二十二年十二月)と題した事務用紙の裏を使った小冊子を編んでいることからそれが分かる。その他に中学時代の作品集としては「なつかしき」と題した作文集を第一〜六巻、昭和二十二〜三年に編んでいることが分かっている。その他に毛筆でタイトルを大書した「未完成楽団」二七ページ(昭和二十三年十月)、同じ頃の作と思われる「たかい」(内題・貧乏士族)三十四枚、などが残っている。

高校生になると、まず「十九の春」(原稿用紙と縦罫紙合わせて五十四枚)が昭和二十四年六月〜二十五年九月に書かれている。また亀山高等学校の文芸部誌である「断層」が活躍の舞台となり、「ゆき」(「断層」第四号・昭和二十六年一月)、「漱石のガラス戸の中より 月夜」(「断層」第五号・昭和二十六年六月)などが発表されている。しかし前述のように高校時代から彼の創作の中心は戯曲に移ってきており、これ以降小説作品として公表されたものはほとんど無いと言ってよい。しかし

注目すべき事実として、「生徒会長」と題された小説の構想が高校時代から何度か企てられているということがある。

まず、亀山高校二年時に執筆された「生徒会長」と題する未完の小説が原稿用紙七十枚分残っている。このときの主人公の生徒会長の名前は吉川修である。また、執筆年代不明・タイトル不明ながら、生徒会長若宮某を主人公にした小説の原稿が、なんと五二一枚、つくばの松村宅から発見された。とにかく生徒会長経験者の松村の実体験に基づく大河小説のような作品が書き続けられていたことになる。

この小説「生徒会長」については、次のようなメモが残っている。

この小説は、私が高校時代から、構想をねり、卒業して、三重大学の事務局につとめた頃から書きはじめたものである。

毎週土曜日の午後になると、大学の図書館に入って、原稿を書き、序論ともいべき第一部を完了した。

第二部はどう〜一行も書かないまゝ十五年近くたった。

今第一部を読みかえしてみると、そのきわめてまずい構想、文章にがっかりする。こんなまずい文章のため、青春の全精力をつぎこんでいたのかと思うと、自分の文才というものに、見切りをつけるべきであるとしみじみ考える。

しかしながら、今日のこの教育界の混乱をみると、戦後の教育というもの、そしてその中に育った人間というものを、私はやはり書きのこしておかなければならないと痛感する。

これを書くことのできるのは私しかないのではないか、それくらいに考える。

一〇年以上も原稿用紙をかえりみなかった私が、果して書きとおせるかどうか不安だが、ともかくやってみよう。

このノートは、この大河小説「生徒会長」を書くための資料を集め、そのメモをとるためのものである。

じっくりと、この小説に私の命をかけてとりくもう。
やりとげることについて、神々の加護を祈ろう。

昭和四二年三月一二日

この作品について、村松剛は「常陽新聞」昭和五十九年一月一日紙上で、次のように評している。評文の一部を引用する。

…この戯曲の長所も弱点も、極度にジャーナリスティックな点にあります。年齢の限定が明確さを缺（か）くことや、肝腎の人工子宮なるものの実体の不明確さや、フランスのアース賞【筆者注：人工子宮を開発した正峰に贈られる賞】とかいう（アースとフランス語の綴りでどう書くのでしょうか）不思議さや、誤字の多さや、さらに結末のヨオロッパ社会についての記述の甘さです。ヨオロッパについてこの作者は、短期間の観光客以上の知識をもたないようです。それだけの缺点をもちながらも、なおこの作品は御園ゆきに名女優を配すれば魅力的な芝居になり得ると思います。時代的话题を、雑然とながら十分にとりこんでいるからです。それにしてもジャーナリストの姿をはじめ、すべての人物が紋付的でありすぎる点は、どうも気になります。

このように、フランス文学者らしく、海外旅行の経験がない松村の欠点をずばりと突いているが、まったく批判的という評言にはなっていない。事実上の主人公を、オールドミス御園と捉えている点も核心を突いていると思う。

前述の「とまと」の項で記したように、「科学技術は果たして人間を幸福にすることが出来るかどうか」という命題は、昭和三十年代から松村の抱き続けてきたものであった。このテーマに対する松村の一つの結論は、正峰の息子で、人工子宮に反対する久の台詞「僕たちは、これ以上科学を進歩させる必要はないと思うのです。科学は、もう十分人類の役に立ったと思います。これ以上の発展は、人間を不幸にするだけです。僕たちは、科学の行き過ぎを止めなければいけない、そう考えます」に表れているのではないだろうか。研究室員たる柳と響も、人間性を再認識した結果、人工子宮を用いず普通の結婚生活に入ることになる、という点にも表れている。一方で、桐崎助手の台詞には科学技術の可能性を信頼する考え方も窺える。

松村の受賞の弁の一部を次に引用して、筆者の考えを補強しておく。

「科学の進歩を絶えず見直すことは大切。進歩の波に乗る人もいるだろうがそれはごく一部でやはり最後には人間らしい生活を望んで元に戻ってくる。そういうところを作品で出したかった」（「常陽新聞」昭和五十九年一月一日）

松村は、さらにこの作品の執筆時期、女性の権利拡大・フェミニズム運動などについて、新聞の切抜き等を集めて熱心に勉強を続けていたことが分かっている。彼の生来の几帳面さ、女性への優しい眼差しが窺われる作品でもある。

最後に、数少ない全国的に公刊された作品として、一幕二場の戯曲「父はふとんをすみに敷くゆえ」（「芸芸広場」昭和六十年五月号）を取り上げる。

梗概を述べる。妻を早くに亡くした四十五歳の治男は、一人娘の順子の高校受験の合格発表の日の朝、落ち着かず習い始めの短歌を詠んでいる。そこに友人吉川が遊びに来て、治男はエリートの集まる街の倍率の高い公立校を受けさせた苦悩を語り、今朝まで父と並んで寝ていた程おぼこい彼女の初恋の顛末なども語る。芸能記事を見るために新聞を買いに行っていた順子が帰宅する。治男は直接発表を見に行くといつて吉川と家を出るが、順子はラジオで合格発表の速報を聞き、自分が落ちたことを知る。その日の夕方、遊びに来た順子の友だちはグループの中で順子だけが志望校を落ちたことを知り、声をかけるのをやめる。治男が帰宅した直後、担任の先生が来訪し、順子は奥の間から出て来られなかったが、治男に先生は心の籠った話をし、これからも力になるといふ話をし、先生が帰った後涙でくしゃくしゃになった顔で順子は出てきて、すべり止めの高校に行くことに決めたと言う。食事をしながら治男は高校へ入ったら男に気をつけると芝居がかった調子で話す。友人からの電話があつて順子の表情がぱつと明るくなる。順子に今晚だけ自分と蒲団を並べて寝ないかという提案をするが順子は拒否する。そこで「寂しくばいつでも来たい」とし子よ父はふとんをすみに敷くゆえ」といふ短歌が出来て、幕となる。

福田清人による、同誌掲載の「選評」に次のようにある。

高校受験発表の朝受験生の娘を持つ父親とその娘の様子を描く。母はその前病死している。その淋しさを短歌入門でまぎらそうとしている父の、娘の入学を気づかう心情、また娘の周辺など、現代の高校入試の様子などに配慮もみせて、よくまとまった本誌に珍しい一幕物。

松村はこの時期、既に創作活動の中心を俳句・短歌に移していたことが、この戯曲のモチーフの形成に大きく関わっている。そして松村の一人娘は、昭和六十年には既に専門学校を卒業して保育士として就職していたが、数年前に遡っての実体験

過ぎて読む者を興醒めさせる内容となっている。残念だが失敗作と言えよう。

第三号(昭和三十七年三月)には、前作に続き伊勢湾台風に取材した合作シナリオ「土と水」が掲載されたが、松村の原作ではないので本稿では省略する。中心人物だった松村の東京教育大学転勤を契機として、「ちんぺら」誌は第三号をもって事実上終刊となった。

この他に、昭和二十七年に社会に出てからの約十年間に松村が書いた戯曲・シナリオとしては、「ある夕方の方の出来事」(二十八年九月)、「綾子の恋」(二十九年十一月)、「宿直の夜」(三十一年十二月)、「考える馬車馬」(三十四年一月)、「日本のまがりかど」(三十六年十月)などがある。紙幅の都合があつて紹介できなかったが、素晴らしい旺盛な創作意欲を感じさせる。

次に、約二十年のブランクを経て、四幕の大作戯曲として発表された「テレビ塔の礎石」(昭和五十八年作)を取り上げる。この作品は先に名を挙げた筑波大学教授(当時)の村松剛らを選考委員とする長塚節文学賞(常陽新聞社主催)の佳作第二位に入選し、「常陽新聞」五十九年二月〜三月に十回に分けて発表された。

まず、作者本人による、冒頭に掲げられた「梗概」全文を引用する。

正峰優教授が人工子宮を開発した。

受精卵を子宮から取り出して、体外で育てる画期的なもの。これによって、女性が背負っていた妊娠と出産という肉体的負担と、社会的ハンディキャップを完全に解消することが出来、真の女性解放と男女平等が可能となったのである。清らかに夢開くとして、バイオレットカプセルと名付けられた。

研究員の柳盛男と響まさは、誰よりもこの完成を喜んだ。二人は近く結婚する。しかし、夫婦が同居して家族を構成することによって、お互いの自由を束縛されるのがいやだった。そこで新しい生活方式を考えていた。すなわち契約結婚である。つまり夫婦は別居する。会う日時、場所を契約書に記しておく。生活費の分配も。子供は施設に預ける。会う日時も取り決めの対象だ。子供への愛も夫婦間で差が生じないようにである。そんな二人も、妊娠出産という女の一方的負担についての解決策が無く困っていたからだ。

一方、正峰の片腕として、この開発に大きな力となった同じ研究員の桐崎敬

も悩んでいた。郷里の父が倒れ、ばく大な財産の管理をしなければならなくなったこと。それに、このような不幸も、長男が家に居ないからだという神様のお告げがあったとして、村人や親類からのすぐ帰れとの強い催促にである。

研究室の事務員御園ゆきは、先代の教授の時から勤続三十年。教授や研究室員の論文はすべて彼女の手でタイプに打たれて来た。バイオレットカプセルも例外ではない。

正峰とは高校の同級生、しかも好き合っていた。しかし、彼女は兄が戦死したので、両親のめんどうをみなければならず、正峰をあきらめた。このことを知る人は誰も居ない。

両親が亡くなった今は一人暮らし。古い彼女の家は、テレビ塔のすぐ下にある。玄関の前に、三百メートルの鉄塔の脚の一つを支える巨大な礎石が埋め込まれている。塔の先端からは、正峰の偉大な功績をたたえる電波が発信されているが、礎石が誰からも振り向かれず、雨に打たれ風に耐えている。まるで彼女の今まで生きて来た姿を語るかのよう。

バイオレットカプセルに反対運動が盛り上がる。その過激派の中に正峰の息子久も居た。

デモが荒れて、けがをした久は、御園の家とは知らず逃げ込んで来る。久は、彼女の古いはずの考え方に、理由はわからないが、不思議に引きつけられてしまう。

桐崎は、とうとう郷里へ帰る決心をする。

柳と響は、新婚旅行の先々で、人々の暖かい心に触れ、合理主義に徹していた自分たちの考え方に疑問を抱くようになる。

久、桐崎、そして柳と響が、心境の変化を告げに相次いで御園の家を訪れる。花も咲かない冷たい礎石のような御園の家も、この日ばかりは久しぶりにはなやいだ。埋め込まれた礎石を、どっかと抱きかかえ、時には花も咲かせる礎石の土のように――。

正峰の息子・久のモデルは、昭和五十七年に筑波大学第二学群比較文化学類に入学し、月一回は松村宅に会食に伺い交流の深かった筆者自身であろうと思われる。

滝の家に突然哲夫の懲戒免職の報が届き、哲夫や仲間の安西は桑山に詰め寄るが相手にされない。臨時組合大会が開かれ再びストライキが始まるが、労組から離脱した社員等で第二組合が結成され、会社の御用組合となって哲夫らの第一組合と対立する。ピケを張る第一組合が居る正門に第二組合が乱入し、警察隊やマスコミが入り込んで大乱闘が繰り広げられるが、「何のためにこんなことをしなければならんだ」「俺達は働きたいんだ」という声があちこちから起こり、争闘は終結する。回復した上野社長から老齢の社員たちに僅かな退職金が渡される。会社は新道徳により統制され、乱闘で負傷した哲夫には警察から暴力罪で逮捕状が来る。警察官に連行される哲夫のジープを、ようやく生まれた子を見せに来た啓子は、茫然と見送るばかりであった、というものである。

昭和三十五年のまさに安保闘争真っ只中の時期に書かれたシナリオで、「安保態勢を粉砕せよ」「反動岸内閣打倒」というようなスローガンも組合の決起集会の場面に出て来て、いかにも時代を感じさせる。哲夫の隣人で解雇される六十歳近い社員山下や、宇治ダンボールの社長令嬢ながら上野陶器に秘書として勤めるさかえなど、登場人物も多彩で、いかにも合作らしい力がみなぎった作品である。

「編集後記」で、松村は次のように五人の役割分担を記している。

合作遠い渚について、テーマの提案は駒田、小山両氏。それをどのようにとりあげるか、検討を加え(激論デシタヨ)松村がプロットを書き、それを小山氏がシーン割りし、更にそれによって松村がシナリオにした。そのシナリオをカメラという点から落合氏が、更にテクニクの点から駒田氏がそれぞれ加筆修正。途中、五月に東京から帰った早川氏にも加わってもらって、六月四日夜、五人が検討を加えて決定したものである。：

つまりプロット・シナリオという作品の中心をなす部分は松村の作ということになる。この作品は前記の賞を受けたのだが、その講評を次に掲げておく。

：「遠い渚」は三重県の同人雑誌の同人たちの合作である。労働争議の表裏を衝くという社会性の強い題材を選んだのは非常に結構だが、合作のせいか、扱い方、つまり作者の角度が常識的になり、鋭い社会批判の独自性が見られないのが最大の欠陥となった。《中略》「ちんべら」は遠い地方都市から、《中略》

今後共ますますいい作品を生み出されるよう祈ってやまない。本誌は、つねにその活躍をみつめ待望していることを申し述べて、次回への激励の言葉に代えたい。

次にその「ちんべら」第二号(三十五年十二月)に掲載された「黒い渦の中に」を紹介する。これは当初「流された公務員」のタイトルで松村の単独作品として作られたもので、三十四年九月に東海地方を襲った伊勢湾台風が、舞台背景としてあるはずだが、このシナリオではむしろ人間模様を描くことに力点がある。

梗概を述べる。台風の接近する夜、ある官庁の業務課に勤める沢木は、用務員の山下と共に宿直に当たっていた。山下の娘の幸子と沢木は付き合っている。突風で吹き飛ばされたガラスを敷居の上に乗ってはめ直した後で降りようとした時、足を滑らせた山下は外に消え川に流されてしまう。沢木は庶務課長に有志を募って捜索することを願い出るが、課長は超過勤務手当を出せない、捜査は打ち切りと言う。義憤にかられた沢木は庶務課の高橋・山本・斉藤、幸子と共に捜索に出る。業務課長と庶務課長は責任を押し付けあう。幸子の伯父や近所の人々も加わって捜索したが、一夜明けても手がかりがない。翌朝庶務課の宮島は沢木らを欠勤扱いにしようとして口論となる。翌日も捜索を続ける沢木らのところに、本省からの視察団が来て「遺族の方へのお言葉」を下さるといふのを幸子は拒絶する。その日に堤防で釣りをしていた所長の息子・一郎が誤って川に転落して行方不明となる。たちまち官庁を挙げての大捜索の態勢が取られ、沢木は山下との扱いの違いに怒るが捜索隊に加わる。全所員が手をつないで川へ入り川上へさかのぼって捜すという策が取られ、夜を徹した捜索の結果、最初に山下の遺体が浮いているのが見つかり、翌朝一郎の遺体が海岸に打ち上げられているのが見つかる。所長官舎では盛大な葬儀が行われ焼香客が絶えないが、幸子の家では質素な葬儀が行われ参列者も少なかった。

脇筋として、業者と癒着して接待を受ける業務課長の姿や、庶務課長が仲人となつていたのでこの騒ぎのため結納を延期される若いカップルの姿なども描かれるが、特に必要性が感じられない。このシナリオは用務員山下の捜索とキャリアの高所長の息子の捜索を巡り、露骨な保身に走る官庁の管理職と義憤に駆られ献身的に行動する若い職員が余りにも対照的に描かれ、善人と悪人の色分けが明瞭であり

境や山上夫婦のいさかいの姿を見て、いったん縁談を断って帰った。第三幕では、下宿の奥さんの働きで江島と加代子の縁談もうまくまとまり、結婚式の日となる。あくまでしきたりに拘らない江島は色々常識不足を指摘されたりするが、平服のまま役所で結婚届に署名し、披露宴は行わないという自らのスタイルを貫く。前田と結婚することになった律子の豪華な花嫁道具が入ってくると同時に、加代子の質素な花嫁道具がリヤカーで運び出されていく。

執筆時期は、ちやうど皇太子明仁の結婚で世上が浮き足立っている時期で、作品中にもそのことが出て来る。松村は今上天皇明仁と同年の生まれであり、しかもこの年五月には富士子と結婚しているから、ちやうど結婚に伴う様々な手続き等を体験しているときでかなり疲労があつたに違いない。主人公江島の形式にとらわれない質素な結婚への取り組み方は、松村の理想を表現したものだつたかも知れない。「悲劇喜劇」(昭和三十五年三月号)に講評がある。次に引用するが、やはり一方的に意見を主張する傾向が評価を低くしている。

作者の意図もはっきり判りますし、筋も簡単明快でそのものずばりなのは気が持がいいくらいですが、作品は作者の意図を説明するためにのみあるのではないことはいうまでもありませんし、その限りではこの作品は作品の前段階にあると言わなければならないかも知れません。体験をもとにして書かれたのかも知れませんが、にもかかわらず甚しく観念的なのは、つまりは意図を説明することに急ぎ過ぎたからでしょう。

次にテレビドラマ「スイカ泥棒」(三十五年二月作)を取り上げる。

梗概は、科学使節として渡米する中谷教授と大川助教授の壮行会の場面から一転して、ある農村で大学を出ながらスイカを栽培して一本松に供え、養老院に寄附に行く寺沢という男が描かれる。十五年前、中谷教授・大川と共に大学の卒業研究のため、その集落でスイカを栽培していた寺沢だが、スイカ泥棒に手を焼き交代で夜見張っていた。盆踊りの夜、若い女がスイカを盗んだのを捕まえる。先刻危篤の母親に食べさせるためお金も無いのでスイカを恵んで欲しいと来た娘だった。中谷・大川は研究のため印を付けていたスイカを盗んだことを許さず、駐在所に連れて行くが、巡査は娘の母親の死を告げる。それを聞いた娘は一本松で首を吊って自死す

る。その時の巡査が現在の養老院長であり、その娘幸子が、自死した娘のまだ幼かった妹で、巡査に引き取られたのだと分かり、寺沢の胸で幸子は泣きじゃくる。

一読して分かるように、戯曲「とまと」の換骨奪胎であり、その後日譚を含めた内容になっている。テーマもやはり科学の進歩と個人の幸福の矛盾について言っているが、大学を出て農業普及研究所に勤務した寺沢が、新しい機械や肥料を現場の百姓に勧めても、それを買う金が無いという現実を直面し、学問や科学の恩恵を受けようとしても受けられない人々が多いことを知り、一介のスイカ作りになることを決めた、というエピソードが示され、より広がりのある内容になっている。だが首を吊った娘の妹がヒロイン幸子だったという設定はいかにも作り過ぎであろう。ただし、昭和二十八年に本放送を開始してから七回程でしかないテレビ向けのドラマを企画したということには、先見の明があつたというべきではなからうか。

次に合作シナリオ「遠い渚」を紹介する。松村勝行・落合喜好・駒田弘之・小山啓和・早川弘一の合作により、如月真珠というペンネームで、彼らの同人誌「ちんぺら」創刊号(昭和三十五年七月)に発表された。彼らは、亀山や四日市に住んでいた劇作家を目指した文学青年達であつた。「遠い渚」は昭和三十五年十二月、「シナリオ」誌の「全国同人誌推薦シナリオ・コンクール」で奨励賞を得ている。

二段組四十四ページ、シーン一四七までであるこのシナリオの梗概を以下に記す。なお本文は、「文化研究」10号(平成二十三年十月 亀山市芸術文化協会文学部門文化研究部会編)に復刻されたものに拠った。

上野陶器で技師として働く滝哲夫は、労組委員長を務めており、妻啓子との間にもうすぐ子供が生まれる。上野陶器は労働基準法を遵守し社員の福利を考える会社で、労使関係は良好であつた。ところが取引先の宇治ダンボール、熊本製油などは新道徳に従業員に強制し、労働者の権利を奪う会社であつた。上野陶器の姿勢を快く思わない宇治・熊本の社長の策略によって生産原料が入って来ず、上野陶器は生産がストップし、大幅減給を強いられる。上野社長の交通事故に乗じて会社を乗っ取った桑山専務は、減給に怒った労組に対してあくまで強硬姿勢を貫いたため、労組はストライキを強行する。組合事務所に泊まり込む哲夫に啓子の出産の朗報が届く。会社は労働時間を守る等の斡旋案を受諾し、争議はいったん収まる。ところが

3、次にこの作者は、果たして児童心理学なるものを、充分に研究し理解しているのだろうか。その点が、甚だ疑問である。：」（森和夫）

「：『少年が女教師を恋する』このテーマ・ストーリーは私小説・同人誌でよく書かれたものである。このシナリオはこの域を出ていない。これはこのテーマがシナリオに適していないのではなく、テーマの対し方がイジーに過ぎるのではなからうか。：」（石川善雄）

「シナリオ『児童心理学』は、ラスト・シーンがファースト・シーンになるべきであった。そこから始まるべきものが、そこで終わっている。労作でありながら、失敗作に終わった原因がすべてそこにあるように思われる。：」（山田信夫）

このように批評家諸氏の評言は惨憺たるものがあるが、部分部分を見れば、光るものを多く持った作品だと筆者は感じる。運動会や学芸会といったイベントはもちろん、シーン74の「反省の時間」（いわゆるホームルーム）の子供たちと先生のやりとりなど、非常に生き生きしており、大学事務職員であり当時まだ独身であった松村が、どうしてこんなに小学校六年生の言動を等身大に近く活写することが出来たのかと舌を巻く程である。作品としての構成は失敗しているかもしれないが、「性の芽生え」を題材にしながら卑俗に陥ることなく、昭和三十二年という早い時点で、映像作品として構想しようとした意気込みは買われるべきであろう。

次に一幕物の戯曲「とまと」を紹介する。「悲劇喜劇」に投稿され、作品掲載は確認できないが、その昭和三十四年三月号に講評がある。

梗概は、昭和二十一年夏のある夜、関西地方のある村で、トマトの品種改良についての卒業論文を書くため、一つ一つ番号札の付いたトマトの植木鉢を整然と並べて栽培している大学生A・Bがいる。そこに男女数人の買出し客がやって来て、トマトを高額で譲って欲しいと頼むが、一つでも欠けると研究に支障を来すと、大学生は拒絶する。そこに今度は母親が危篤なので大好物のトマトを食べさせてやりたいと言う都会から疎開してきた若い娘が来る。人の命がかかっているのにBは分けてやろうとするが、Aは納得しない。村人たちがやって来て畑泥棒が横行しているので気を付けるように注意した矢先、先ほどの娘がトマトを数個盗んだ現行犯で連れられて来る。村人たちは激しく罵りそれまでの畑泥棒の罪を全て娘になすり付

けようとする。巡査が来て、危篤の母の看病をしなければいけないならば、とその場は解放してやるが、そのすぐ後、その娘は首を吊って自殺する、というものだ。

「悲劇喜劇」に掲載された講評は以下の通りである。

「誰の為の研究？」はどんな場合にも問題となることですし、面白いと思いましたが、いかにも芝居気がなく——と言っても「お芝居」にしるということではありません——頭で考えたことをそのまま文字にした印象を免れません。一人一人の登場人物に、作者がその時に言いたかったことを残らずしゃべらしてしまっているといった調子で、芝居としての性格にもう少し考えを深める必要があったでしょう。

要するに、登場人物の台詞が演説調になっている点を指摘している訳で、これはやはり松村が弁論の世界に深く足を踏み入れていたことと関係が深いのだろうと思われる。また、ハウス栽培が無かった時代とは言え、研究のデータを取るために一つも欠けてはならない作物を、盗難の危険のある露地栽培している、という設定は不自然である。だが「科学技術は果たして人間を幸福にすることが出来るかどうか」ということをテーマにしている、後年のつくば在住時代の大作「テレビ塔の礎石」に繋がる要素を持った作品であるとも言える。

次に三幕物の「結婚の手續」（三十四年四月作）を紹介する。二百字原稿用紙一九二枚の力作である。これも「悲劇喜劇」に投稿されたが、作品掲載は確認できなかった。

第一幕では、下宿屋の座敷が隣家の結婚式の来賓控え室に使われ、こた返す中、下宿している小学校教師江島に來客があり、独身の彼に縁談を薦めるが、相手にされない。実は江島は下宿屋の女中の加代子と交際しており、江島は自分たちだけの意思で結婚すればよいと言うが、加代子は親の承諾を得てからという考えであった。また女性をテクニクで口説き落とすものと考える前田、駆け落ち同然に結婚した山上夫婦が登場する。第二幕で、下宿の奥さんの発案で、江島と加代子を一度見合いさせた上で結婚させようとした。前田は江島の同僚教師律子という仲になる。奥の間で江島の母と兄が結納を出さないことについて対話し、何もかも下宿の奥さんに任せることにしたのに対し、加代子の両親は、身分違いで結婚した隣家の嫁の苦

取り上げる。三幕もので、七十枚の力作である。なお、本文は前掲「文化研究」9号に復刻されたものに拠った。

ある小学校の小使室が舞台で、五十八歳になる小使(事務員)が主人公。第一幕では、卒業式の朝、準備に追われる小使の姿が描かれる。宿直明けの先生の朝食のおかずを買いに行かせられ、講堂の入口の掃除をし、上靴を失くしたり忘れ物をしたりズボンを汚したりした生徒の面倒を見ていて暇もない彼に、弁当を届けに来た息子の太郎は「本当に大変な仕事」だが「馬鹿らしい仕事」という。第二幕では、饅頭屋の小僧との会話で「小使は先生と同じにはならない」と言い、祝い酒が不足しているので買いに行かせられ、また講堂で嘔吐した生徒の後始末や家への連絡係までさせられる。第三幕では、卒業式の夜、学校で飲んで騒いでいる先生に酒を買いに行かされる。教育委員会に務める太郎が再びやってきて、酔っ払いの先生の私用など聞く必要はないと言ひ、五十五歳以上の事務員が全員退職させられることになった事実を伝え、自分の安月給ではお父さんを養えないという。それでも軍需工場がつぶれた後十年学校で働かせてもらったことを有り難い事だと答え、「先生の云われるとおり働くのが学校の小使なんだ。」と言う小使であった。

「伊勢新聞」(昭和三十三年一月九日)に「力作だが簡潔に 松村氏の戯曲『小使さん』と題してこの作品への批評があるので、一部を引用する。

みんなに親しまれ、そしてこき使われた小使が、停年退職になるといふ話だが、これだけの枚数なら一幕物にすべきだろう。戯曲は単に地の文を会話に直したのではないのだから。素材そのものは悪くないし、作者のねらいもいい。ただこれを上演するわけにはいかないだろう。幕切れで、小使の息子との論争、卒業式で酔っぱらった先生たち、たとえ首になっても、この学校にいる間は小使だーといいきるあたりは面白い。しかし、それも常道であり、作者はただ、その場面だけを心にもって書き、あとはそれを書くためのつけたたりといった感じで、会話も平板、構成も弱い。…

というような評文で、好評とは言い難い。ただこれを書いた松村自身が学校職員として、教員たちの、時に横暴な態度に接したとしてもじっと堪え、職に勤しんでいたことを想像すると、何か深い哀愁のようなものを禁じ得ないのである。

次に映画シナリオ「児童心理学」(三十二年七月作)を取り上げる。雑誌「名古屋シナリオ」に投稿されたが本文は掲載されず、筆者が読んだのは未定稿であるが、原稿用紙一一八枚にも及ぶ力作である。松村自身による紹介文『児童心理学』のストーリーとこのシナリオが出来るまで」と、三名による批評文が「名古屋シナリオ」第一号(昭和三十三年九月)に掲載された。

松村自身の要約によるその「ストーリー」を、注釈を加えつつ次に紹介する。

大阪のある小学校。六年A組の木村吉彦は六年B組を受持っている寺島百合子という若い女の先生に対して「好き」とも何とも形容のしがたい、そして今までに経験したことのない感情を持つ。(筆者注：木村が運動会で怪我をしたとき、寺島先生に手当てをしてもらったことが一つのきっかけである。)木村の担任である山口四郎という老先生が休んだ時等、寺島先生が木村の級へ来るが、その度に胸が高なる。運動会や学芸会、遠足等でB組の者が、寺島先生と親しくしているのを見るのがうらやましいし、又その一段とあでやかな姿に心はいよいよ、かきむしられるような思いになってゆくある冬の寒い日、医院の診察室でばったり、寺島先生と(筆者補充：出会った)木村はそこで寺島先生が裸になってゆくところを見る。それから木村は異様な感情にかりたてられる。こんな生活がつづいて、木村はどうとう夢遊病となり、ある月のあかるい晩、学校の職員室へしのびこみ、寺島先生の机のひきだしからさまざまのものをひっぱり出して、それをだきしめ、泣いているところを宿直の先生にみつかるとやがて木村は無事卒業するが、山口老先生は彼の寺島先生への思慕の情を感じて現在の児童心理学が忘れて一つの大きな問題があることを考えさせられる。

このようなストーリーであるが、「名古屋シナリオ」誌に掲載された諸氏の批評は次のように非常に辛辣なものであった。

「1、この作品は、テーマの設定が非常に不明確である。作者はこの作品を通じて、一体何を観客に訴えんとしたのか。…

2、「児童心理学」という、大上段にふりかぶったタイトルに対して、この作品の内容は、あまりにも浅薄である。…

遅くなったとの言い訳に耳を貸さない。定一のことを、露子家前に集まった敬司・政文・正弘らは吉生から聞き、共に「倒幕の志士」の意気込みでみち子宅へ説得に行く。数カ月後、運動会に和解した父が来ることをみち子は吉生に話す。

青春時代にありがちな親と子の衝突を、友人たちが力を貸して円満に解決しようとする、という他愛ない学生演劇の試みだが、戦後の民主主義教育への希望と批判の両面が語られていて、いかにも昭和二十年代の〈青葉の頃〉を感じさせる。

二十七年春に高校を卒業して就職してからも、彼の演劇熱は収まるどころか熱く燃えさかる一方であった。次に「共かせぎ夫婦のある日の夕方」(二十九年九月)を取り上げる。この作品も三重県公務員リクリエーション協会主催第一回芸能祭にて上演された作品で、当時の社会の演劇熱というものも感じることが出来る。

一幕一場。秋の夕暮れ、閑静な住宅街、共稼ぎの新婚夫婦が相次いで帰宅する。早く帰った方が夕食を作るというルールで、妻が卵を買いに行っている間、夫は飯炊きを担当するが、そこへ隣家の妻や町内会総代の老人らが訪れ、色々な名目で集金していく。妻が帰宅した頃婦人会長が訪問し、新婚生活への羨望が語られ、新憲法下での妻の権利なども話題になる。会長が街頭募金に立つことを妻に依頼して去った後、押し売りの女が来て卵をしつこく売ろうとするが応対に出た夫は断固拒否する。押し売りが去った後で妻が、卵を買いに行ったが売り切れていたので押し売りを呼び戻して欲しいというので、しぶしぶ夫は出て行くが、財布を家に置き忘れたままだった。

特に深い内容もないちょっとしたコントであり、妻が卵が売り切れていたことを最後まで言い出さないという不自然さはあるが、公務員が余興として演ずるには適切な作品といってもよからう。押し売りが売る食べ物を買って買うという感覚も、現代とは違うのどかな時代性が感じられる。

次に「退庁時刻」(三十年六月)を取り上げる。この作品は、分かっている限りで松村の唯一の全国的な演劇雑誌に発表できた作品である。「新劇」昭和三十一年三月号に、後に関わりを持つ評論家・村松剛の演劇論などと並んで掲載されている。「新劇」(白水社)は昭和二十九年から平成二年まで三十七年間にわたって刊行されていた演劇専門誌で、松村がどのようなつてがあつて中央のこの雑誌に作品を登

表できたのかは、現在のところ詳らかではない。

一幕一場。現代の地方都市のある官庁の会計課が舞台。午後四時二十分、職場の電話で恋人と退庁後のデートの約束をする若い女性藤本を苦々しく見つめる課長代理の村上。孫に誕生日の贈り物を渡す古参の大井や、藤原義江のコンサートに行く予定のある相川、オールドミスの広田は温かく見守る。村上は課長の帰参前に部下の退庁は許さないといい、藤本に煙草を買いに行かせる。相川は労働組合の書記長として忙しい。もう一人の課員山中は公務員の組合活動に批判的で、村上の滅私奉公的な勤務態度に追従的言動をとる。行商人と押し売りが課にやって来るなどしたが、五時になり村上が用事で課を出た後、相川は課長が帰らなくても退庁してはいはずだと批判し、公務員の理想的な在り方を述べる。五時十五分を過ぎて山中が藤本に用を押し付けるなどして険悪な雰囲気になりかかるが、妻の出産が迫っているとの電話が入って急に村上が帰宅してしまい、藤本・相川・大井の退庁に支障がなくなる。デートに行く藤本の化粧を広田は直してやる。

このように、行商人や押し売りが官庁に平気で入って来るなど、現代ではあまり考えられない出来事があったり、村上の妻の出産など、突発的な出来事によって事態が急に好転するなど、あまりに都合な筋の展開に疑問を覚えざるを得ないが、労働基準法が施行され八時間労働制が始まって間もない時代背景の中で、上司にどこまでも忠義を尽くすことが美德だと考えられる風潮が未だ残存していた昭和三十年の時代背景が窺えるし、専門の演劇人たちにとっては官庁の仕事場の雰囲気は活写されているところがやや斬新に映ったのだろうか、高評価を得たようだ。

松村は昭和三十一年二月二十八日の日記に「ところで昨日、ドンカミロ頑張ると慕情を見にゆき、久しぶり晴快な気持ちになつて朝から降りつづいてる雪みぞれの中家へかへつたら何と新劇から原稿料として三四八五円送って来ていた。四一〇〇円のところ税金六一五円引たとある。原稿用紙一枚一〇〇円である。一応作家なみ。三〇〇〇円の大金が入りこんでくるとは夢にも思っていなかった。…」と喜びを語っている。現代の貨幣価値に直すと幾ら位になるか不明だが、数万円に相当したのか。プロ作家並みの原稿料をもらって昂ぶる彼の気持ち伝わってくる。

次に、同人誌「辻」の創刊号(昭和三十三年一月)に発表された「小使さん」を

ちから高い人望があったらしいことがこのエピソードからも窺われる。

本章の弁論活動・方言研究等については、松村勝順氏の「兄・松村勝行と亀山の風」(「文化研究」9号 平成二十二年十月 亀山市芸術文化協会文学部部門文化研究部会編)に多く拠るところがあった。このように、「話しことば」というものへの強い執着心・探究心が若い頃から松村の脳裏にあり、それが学生時代からの戯曲・シナリオの執筆の原動力の一つになっていたことが窺えるのである。

三 文芸活動の概観

次に松村の生涯にわたる文芸創作・文化活動について、大きく五つに区分し、それぞれの時期の特徴について簡潔にまとめてみることにする。

・(第一期) 昭和二十二年～三十七年頃 ↓ 亀山市在住時代にほぼ重なる。学生時代の習作期から、戯曲・シナリオと小説、詩作に意欲を持って取り組んだ多作の時代。

・(第二期) 昭和三十八年～五十二年頃 ↓ 松戸・伊勢・つくばと転居を繰り返した時代。時折の詩作(作詞・作曲)と日記・感想などが主で、事務(用度・経理)の仕事と子育てに主な関心があったと思われる時代。

・(第三期) 昭和五十三年～五十五年頃 ↓ 心筋梗塞による病臥の時代。父親の死と、自ら生死の境をさまよう経験をしたこの時期、詩作・短編・日記等、治療の間を縫っての創作活動に意欲を燃やしていた。

・(第四期) 昭和五十六年～平成八年頃 ↓ 短歌・俳句の制作に意欲を燃やした時代。また数は少ないが代表作となる戯曲も書いた。複数のサークル・結社に顔を出し、その中心的な存在となって数々の秀作を生み出した。

・(第五期) 平成八年～平成二十一年 ↓ 昭和五十七年頃の桜村古文書研究会から端を発した、古文書解読と歴史散歩に意欲を燃やした時代。ここでも「歴史を読んでみる会」代表として集団を統率する才を発揮した。一方で俳句・短歌の創作も継続していた。

このように、十四歳頃の少年時代から、七十六歳の死に至るまで、ほとんど断絶

することなく、文芸創作活動や歴史研究など幅広い文化活動に邁進した、多彩で勤勉な生涯であったことが分かる。(この項は、拙稿「永遠の『生徒会長』——評伝松村勝行」(「文化研究」9号所収)よりの引用を元に作成した。)

また、松村勝順氏の調査によれば、昭和二十年(小学校六年)から亡くなる前日まで、「日記」を丹念に長期間にわたって書いており、大学ノート約五十冊にわたっていた、とのことである。「生来、几帳面ではあったが、これほどとは思わなかった。家族にとつて興味深いばかりでなく、『戦後六十五年の庶民史』としても価値がありそうに思われた。」(前掲・「文化研究」9号所収論考より)と述べられているが、日記もまた文学的営為の一つと考えられ、その意味でその一部なりとも活字化し、彼の生の軌跡を後世に残せれば、と願う次第である。

四 戯曲とシナリオ

本章では、松村の遺した多様な文芸作品のうち、青年時代に最も力を入れていたと思われる戯曲・シナリオ作品の幾つかについてその梗概を紹介し、同時代評なども紹介しながら、その文学作品としての価値を考察していきたい。

松村の最初の戯曲作品は、昭和二十三年七月作の「キューリー夫人」辺りに遡ることが出来る。当時在学していた三重師範女子部附属中学校の学芸会で演劇部によって上演されたらしい。その後進学した亀山高等学校で演劇部により上演された作品が幾つかある。「青葉の頃」(二十五年五月)、「たいやき人生」(二十六年二月)、「続・青葉の頃 白い花の咲く丘」(二十六年五月)などである、このうち手元にある「続・青葉の頃 白い花の咲く丘」の梗概を次に紹介して寸評を加えよう。

一幕四場。古い思想の残る或る田舎の高等学校が舞台。三年生生徒の敬司・政文・正弘と生徒会長の吉生、副会長の露子らが登場して、授業をサボってマージャンをした学生の処分について役員会で話し合う予定を告げ、生ぬるい戦後の民主主義教育を批判する。その夜七時に帰宅した自治会書記のみち子の父親定一は、遅く帰ったことを謝らないみち子に腹を立て、学校をやめろと言う。定一は男女が一緒に歩くこと等を許す現代の教育に批判的である。彼は同行して来た吉生の、役員会議で

古文書解読と史跡踏歩を目的とした「歴史をよんでみる会」を発足し代表を務めた。話題の人物・書物を研究対象として何度か地元マスコミに登場。一方で俳句・短歌の創作も継続し「朝日歌壇」等にも登場している。四十六歳の大手術の後、薬剤と節制による体調のコントロールに努め、三十年の長きにわたって様々な文芸活動に従事したが、平成二十一年八月二十六日、心不全にて七十六歳の生涯を終えた。

二 弁論・「話学」の運動

本論考は生涯にわたって多彩な文化活動を行った松村勝行の事績のうち、特に戯曲(シナリオ)・小説・エッセイ、および古文書研究について取り上げて論じることを目的としている。だがその前に、彼の青春時代に深く関わった弁論活動、それを学問にまで高めようとした独自の「話学」の運動について触れておく必要がある。

新制高等学校の草創期である、昭和二十五・二十六年度の、一年数ヶ月にわたって、松村は三重県立亀山高等学校の生徒会長を務めた。彼は弁舌に巧みで、二十五年度には関西高校弁論大会で二位、全国高校優秀弁士のひとりに選ばれた。その年度には亀山高校第一回校内弁論大会を開催している。

その当時、ぼろぼろの帽子を被り、黒いマントを身に付けて高下駄を履いて校内や街中を闊歩する、旧制高等学校生然とした、いわゆるバンカラストイルの彼の姿は、亀山の町中の話題になっていたという(亀山高等学校で松村の二年後輩・久留原敦子「筆者の母」の談)。そのくせそのような身なりや弁論の実績を、家庭ではまったく見せることなく、よく冗談や世間話に応じ、よく遊んでくれた兄だったとは、実弟・松村勝順氏(皇學館大学教育学部教授)の述懐である。

戯曲・詩などの創作活動を盛んに行う一方で、弁論活動は社会人となってもますます活発で、昭和二十八年に三重県青年弁論大会で第一位、その自信を胸に「話学」を「言葉学問にする」という主張の基に、三重弁論研究会を結成、機関誌「話学」を昭和二十八年十一月に創刊、二十九年十二月まで四号を自費で編集発行したことが確認されている。「話学」が実際何号まで続いたかは、明らかではないが、「ライブワークである弁論誌『話学』の編集に当たっている。」という「伊勢新聞」昭和三十

十一年一月十六日号の「ホープ登板」欄の記事を見ることができ、その後何号かは発行されたものと思われる。

その主張は「話術から話学へ」と題して、雑誌「弁論」第七十六号(昭和二十九年十一月刊)に掲載され、また「日本のコトバ」三号(昭和三十年四月)に「三重弁論研究会をこうやってつくった」という文章を発表している。三十年度にはNHK「青年の主張」県予選で第一位となり全国大会に出場した。この時点で弁論活動で三重県を代表し全国にその名を知られる存在であったことが分かる。三十一年一月には「三重大学新聞」五十号に「話術を学問に」という文章を発表している。

その主張するところを簡潔にまとめた文章を次に引用してみる。前掲の「伊勢新聞」昭和三十一年一月十六日号同欄に「新しい弁論へひたむき 年齢をあざむく誠実と自信」と題して、以下のような談話が掲載されている。

：言葉ほど恐ろしいものはないと思うのです。あいまいな言葉の認識から生れた会話から進んで弁論ということがどれ程私たちの生活を左右するかわかりません。井戸端会議から国会の答弁まで見てもよく解ることです。だからこれらの弁論は話をするという現象を科学的に考察し、正しく話すということに基礎を置かねばならぬと思うのです。それにはたえず客観的な論旨の考察と在来の弁論に見られた主観性を打破し「話学」という理論づけと体系づけのもとに新しい弁論を志向せねばならぬと思います……

一方で、方言の研究にも興味を示し、昭和三十一年十一月には言語学の全国的な雑誌である「言語生活」五〇号に『津』という発音」という小論文を発表している。三重県津市の「津」という地名を、三重県の他地域の人々は「ツウ」と長く発音しがちだが、市内の人は短く「ツ」と読みがちである、という点に着目している。また、三十一年九月の「三重県方言」第二号(三重方言学会発行)に「桑名の武家ことば」の特集があり、その録音速記者として彼の名前が記されている。

こうした弁論活動の余徳として、彼は昭和四十二年三月、在職していた鈴鹿工業高等専門学校第一回卒業式において、卒業生の呼名と、卒業式後の祝賀パーティーの司会を務めるといふ、事務系職員としては異例の大役を仰せつかることになったのである。朗々とした声調と巧みな話術を持っていて、その当時の同僚・学生た

文人・松村勝行の研究(上)

― 弁論と戯曲・シナリオ・小説・エッセイなど ―

久留原 昌宏

一 初めに、その生涯の素描

ここに広く世に認められることなく逝った不世出の文人が一人いる。

彼の名は松村勝行。昭和八(一九三三)年四月十九日津市下部田町(現在の羽所町)の鉄道官舎に生まれた。父勝義は当時津駅助役、五男二女の兄弟の三男であった。昭和十五年父の転勤に従い、鈴鹿郡亀山町立亀山尋常高等小学校に入学したが、その後大阪市東住吉区への転居を経て、昭和二十一年鈴鹿郡神辺村立神辺小学校初等科を卒業後、旧制三重県立津中学校へ入学する。

昭和二十二年、母志つが死去し、この頃から小説・戯曲などの創作活動に手を染め始める。昭和二十三年、学校統合再配置令により、三重師範学校女子部附属中学校に転校、翌年卒業して、三重県立亀山高等学校に入学した。在学中、文芸部・合唱部・演劇部など様々な部活動で活躍し、生徒会長を二期連続で務める。関西学生弁論大会で二位を取り、自らの脚色・創作した戯曲を演劇部に上演させるなど、弁論と演劇の二分野での活動が高校卒業以後も長く続けられる。昭和二十七年亀山高校卒業後、一時、三重定期貨物自動車株式会社に就職するが、程なく日本教育大学通信協会通信教材部三重大学支部に採用後、昭和三十年より三重大学学芸学部に採用、以降は大学職員としての人生を平成五年の退職まで続けることになる。一方で二十八年には「る・ぼあん」、二十九年には「歴象」などの詩誌に現代詩作品を「関行美」のペンネームで発表し始めた。また学生時代からの劇作の一つの頂点として、戯曲「退庁時刻」が一流の演劇誌「新劇」昭和三十一年三月号に掲載される。その後も昭和三十五(六年)、五名による合作ペンネーム「如月真珠」の名で、シナリオ同人誌「ちんぺら」を三号まで発行したり、三十四(五年)には詩の同人誌「泥んこ村」を発行して多くの作品を発表したりするなど、伊勢湾台風の来襲という一つの

時代のメルクマールと重なるように、旺盛な文学活動が繰り広げられた。さらに職業面では、昭和三十一年頃、三重大学教職員組合の書記長を務め、婦人の社会的地位向上の観点からある女性職員の不当降格に抗議する運動を起こして学校当局と交渉するなど、社会的に目立つ行動的な側面も見せている。

一方、家庭面においては、昭和三十四年五月、久留原富士子(著者の父の妹)と結婚し、二度の流産等があったが、昭和三十九年に女兒(すゞか)が誕生し、平穏な生活を送る。昭和三十六年末に東京教育大学国府台分校に転勤して松戸市に住み、その後昭和四十年から鈴鹿工業高等専門学校(用度係長)、四十三年から鳥羽商船高等専門学校に勤務し、伊勢市に約十年居住するが、五十一年、開学間もない筑波大学医学専門学群に転勤し、茨城県新治郡桜村(現・つくば市)に転居してからは、完全に関東の人となった。昭和三十七年に松戸に転住の後、文芸創作活動については、作詞・作曲でNHKテレビ「あなたのメロデー」に採用・上演される(四十年六月)などということもあつたが、一時期の勢いは衰えたかに見えた。

ところが昭和五十三年、四十五歳の若さで心筋梗塞にて倒れ、二度の入院・バイパス手術を経て、九死に一生を得て職場復帰する。その入院の間、生と死を見つめた彼は膨大な量の日記・小説・詩などをノートにまとめ、そこから文人としての新たなスタートを切ることになる。昭和五十七年頃からは俳句・短歌の創作に本腰を入れ始め、「桜村俳句会」から中村草田男の「萬緑」、「双峰会」(筑波大学教授・森田孟主宰)から近藤芳美の「未来」など、数多くの俳句・短歌会に所属、持ち前の統率能力でそれぞれの地域集会の責任者になる。戯曲では「テレビ塔の礎石」という作品で長塚節文学賞の佳作に入選するなど、かつての才能を再び発揮している。昭和五十五年頃から古文書の解読に興味を持ち、「桜村古文書研究会」に参加した。平成五年に筑波大学を学生課を最後に退職後、平成八年から晩年に至るまで、

Mao Zedong's Political Ideals and "the Thought of *Dui*"

— Using the analysis of the *Private Life of Chairman Mao* by Li Zhisui as a clue (2) —

Masaaki OGURA*

At the foundation of Mao Zedong's thought, "the thought of *Dui*", which is a traditional and basic mode of thinking for Chinese people existed: confirmation and denial of Confucius, confirmation and denial of Marx, and confirmation and denial of the United States and the Soviet Union. This dualistic thought was the source leading to the "one country, two systems" theory after Deng Xiaoping's liberation line. Mao Zedong's theory of establishing socialistic states differed from the establishing line of the USSR type moderate communism by Liu Shaoqi and others. In his theory, the following two theories coexisted: establishing socialism loyal to Marxism that stood on high productivity in Europe and North America and establishing non-Marxist communism that was based on real agricultural villages.

Key words: thought of *Dui*, confirmation and denial of Marx, confirmation and denial of the United States and the Soviet Union, "one country, two systems", USSR-type moderate socialism, theory of establishing two socialistic states

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

- (三八) 『毛沢東の私生活』上 一八九頁 参照
- (三九) 『毛沢東の私生活』上 一九一頁 参照
- (四〇) 『毛沢東の私生活』上 一九三頁 参照
- (四一) 『毛沢東の私生活』上 一八九頁 参照
- (四二) 『毛沢東の私生活』上 二〇三頁―二〇四頁 参照
- (四三) 『毛沢東の私生活』上 二〇五頁 参照
- (四四) 『毛沢東の私生活』上 二〇四頁 参照
- (四五) 『毛沢東の私生活』上 二二二頁 参照
- (四六) 『毛沢東の私生活』下 八八頁 参照
- (四七) 『毛沢東の私生活』上 二九八頁 参照
- (四八) 『毛沢東の私生活』上 一九九頁 参照
- (四九) 『中国思想を考える』(金谷治 中公新書 第三章 一一五頁 参照)
- (五〇) 『毛沢東の私生活』上 一一六頁 参照。ソ連モデルへの毛沢東の懐疑は、「早くも中国革命時代にすでに芽生えていた」とする小島氏の見解は、注目値する。(『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(八〇頁 参照)
- (五一) 『毛沢東の私生活』上 一九九頁 参照
- (五二) 『毛沢東の私生活』上 一九三頁 参照
- (五三) 『毛沢東の私生活』上 三七〇頁 参照
- (五四) 『毛沢東、鄧小平そして江沢民』(渡辺利夫他 東洋経済新聞社 一九九九年 七頁 参照)
- (五五) 『毛沢東の私生活』上 四四八頁 参照
- (五六) 『毛沢東の私生活』上 三四三頁 参照
- (五七) 『毛沢東、鄧小平そして江沢民』(渡辺利夫他 東洋経済新聞社 一九九九年 七四頁―七五頁(小島) 一九頁(渡辺) 参照)
- (五八) 『毛沢東の私生活』上 一八一頁―一八二頁 参照
- (五九) 『毛沢東の私生活』上 一八一頁―一八二頁 参照
- (六〇) 『毛沢東の私生活』上 四四三頁 参照
- (六一) 『毛沢東の私生活』上 四四三頁―四四四頁 参照
- (六二) 『毛沢東の私生活』下 九〇頁 参照
- (六三) 『マオ 誰も知らなかった毛沢東 上・下』(ユン・チアン 講談社 二〇〇五年 下 一〇〇頁 参照)
- (六四) 『毛沢東の私生活』上 三〇二頁 参照
- (六五) 『毛沢東の私生活』上 一九五頁―一九六頁 参照
- (六六) 『毛沢東の私生活』上 四五四頁 参照
- (六七) 『マオ 誰も知らなかった毛沢東 上・下』(ユン・チアン 講談社 二〇〇五年 下 一六九頁以下 参照)
- (六八) 『マオ 誰も知らなかった毛沢東 上・下』(ユン・チアン 講談社 二〇〇五年 下 一八三頁以下 参照)
- (六九) 「世界の教科書シリーズ― 中国高等学校歴史教科書『中国の歴史』(人民教育出版社歴史室編著 小島晋治他訳 明石書店 二〇〇四年 七五頁 参照)
- (七〇) 『マオ 誰も知らなかった毛沢東 上・下』(ユン・チアン 講談社 二〇〇五年 下 一八六頁以下 参照)
- (受付日二〇一一年 八月 三〇日)
- (受理日二〇一一年十二月 二二日)

- 上庄太郎 社会思想社 昭和五八年 初版 第五刷 二二五頁―二二六頁
 参照)
- (六) 『毛沢東』(小田実、岩波書店 一九八四年 一六四頁―一六五頁 参照)
- (七) 拙稿「毛沢東の人格と対の思想―李志綏『毛沢東の私生活』の分析を手掛かりにして(一)―」(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 参照)
- (八) 『東アジアの中の中国史』(岸本美緒・浜口充子著 財団法人 放送大学教育振興会 二〇〇三年 一五八頁 参照)
- (九) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年 第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第一章 毛沢東時代の中国経済 二九頁―三七頁 (渡辺) 第二章 毛沢東の思想、人物そして政治行動 八二頁(小島) 参照)
- (一〇) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第一章 毛沢東時代の中国経済 一八頁参照)
- (一一) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第一章 毛沢東時代の中国経済 三三頁 参照)
- (一二) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第一章 毛沢東時代の中国経済 三五頁 参照)
- (一三) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第二章 七四頁―七五頁 参照)
- (一四) 「体用の論理」とは、本体と作用の略称。本質とその現象の意。(『朱子学と陽明学』島田虔次 岩波新書 二〇〇〇年 第二九刷 五七頁 参照)
- (一五) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年 第二刷 渡辺利夫 小島朋之他 第二章 六一―七頁 参照)
- (一六) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』(東洋経済新聞社 一九九九年第二刷
- 渡辺利夫 小島朋之他 第一章 七頁以下 第二章 八〇頁 参照)
- (一七) 拙稿「毛沢東の人格と対の思想―李志綏『毛沢東の私生活』の分析を手掛かりにして(一)―」注(三)「本稿の目的」並びに注(一五) 参照
- (一八) 『毛沢東の私生活』上 二〇三頁 参照
- (一九) 『毛沢東の私生活』下 一九四頁 参照
- (二〇) 『毛沢東の私生活』上 一七三頁 参照
- (二一) 『毛沢東の私生活』上 一七四頁 参照
- (二二) 『毛沢東の私生活』上 二〇九頁 参照
- (二三) 『毛沢東の私生活』上 二四三頁 参照
- (二四) 『毛沢東の私生活』下 二八頁 参照
- (二五) 『毛沢東の私生活』上 二四五頁 参照
- (二六) 『毛沢東の私生活』上 三五五頁 参照
- (二七) 『毛沢東の私生活』上 三八〇頁 参照
- (二八) 『毛沢東の私生活』上 一一八頁 参照
- (二九) 『毛沢東の私生活』上 一一八頁 参照
- (三〇) 『中国思想を考える』(金谷治 中公新書 第三章 一一五頁以下 参照)
- (三一) 『毛沢東の私生活』上 三八七頁 参照
- (三二) 『毛沢東の私生活』下 一一九頁 参照
- (三三) 『毛沢東の私生活』上 三八五頁 参照
- (三四) 『人類の知的遺産 毛沢東』(野村浩一 講談社 昭和五三年 八頁参照)
- (三五) 『毛沢東の私生活』上 三八六頁 参照
- (三六) 『毛沢東の私生活』上 三八五頁 参照
- (三七) 『毛沢東の私生活』上 一八八頁 参照

一「対の思想」は、古代からの中国人の基本的な伝統的思想である。毛沢東は、「対の思想」を駆使して独裁権力の維持に努めた。人事調整方法は、敵対者を相互に対立させて、そして混乱を収拾するために相互の利害の調停役となり、自己の独裁的権力の地位の安定化を志向した。

二毛沢東のマルクス主義の肯定と否定、孔子の肯定と否定、スターリンの肯定と否定等の自己分裂的な政治思想の本質は、状況の変化に応じて両方を巧みに使い分ける両面思考―「対の思想」の現れである。

三毛沢東の政治思想理論は、劉少奇等の中国共産党幹部が理想としていた第一級のソ連型漸進的発展とは全く異質であった。社会主義国Ⅱソ連と資本主義国Ⅱアメリカという、対立的性格を持つ両文化を吸収して中国独自の新国家を建設するのが目的であった。毛沢東のマルクス主義の肯定と否定、欧米文化の肯定と否定、鄧小平の「白猫・黒猫」の肯定論は、社会主義国家の中国における資本主義の導入Ⅱ一国二制度論に繋がる思想的な淵源であった。

四毛沢東の社会主義建設の理想には、ソ連型漸進的社会主義建設と異なる中国型社会主義建設方法が解放以前より存在していた。毛沢東は欧米の近代的技术を讃嘆した上での中国型社会主義建設を志向して、ソ連への不信感もあつた。従つて一九五八年のスターリン批判を分岐点にしてより急速にソ連型より中国型社会主義路線へ方向転換をしたのではない。

五毛沢東の独創的で冒険的な中国型社会主義国建設には、相矛盾する二つの道があつた。一つは、「大躍進」に代表される。西洋の近代的高度な生産力発展に基づく、マルクス主義原理に忠実な性急な社会主義の実現である。もう一つは、「人民公社」に代表される。マルクス主義原理に背く、現在の経済レベルで、社会主義から共産主義を実現する性急な社会主義国家の実現である。

この相矛盾する二つの社会主義国家建設が並行して進行する混合的社会主義国家が、毛沢東の理想とする中国型社会主義国家であつた。ここに中国人の基本的思考である「対の思想」が、毛沢東に強く働いていることに注目しなければならぬ。しかしどちらにおいても劉少奇等の中国共産党幹部の理想とするソ連型漸進的社会主义国家建設とは全く相いれない性格を持つものであつた。

六本稿では、毛沢東の政治支配方法、政治思想、社会主義国家建設と、中国人の基本的思想である「対の思想」の相互関係と述べて、マルクス主義者・毛沢東の政治思想の根底には、「対の思想」が深く生きていことを確認した。

七毛沢東の二つの中国型社会主義国家像は、劉少奇等の中国共産党幹部のソ連型漸進的社会主义理想と甚だ異なる性格であつた。従つて両者間の権力闘争は必然的であつた。毛沢東はどのようにして権力闘争を生き抜いて行ったのであろうか。「対の思想」との関係で検討することを、今後の課題とした。

(二〇一一年八月三十一日 稿了)

注

- (一)『程伊川哲学の研究』(市川安司 東京大学出版会 一九六四年 三頁参照)
- (二)『新編 対の思想』(駒田信二 岩波同時代ライブラリー二三〇 一九九二年 第一刷、「対の思想―あるいは影の部分について」 原載は、『新潮』昭和三九年 『対の思想』 参照)
- (三)『中国思想を考える』(金谷治 第三章 对待 参照 中公新書 一二二〇一九九三年 第八刷 参照)
- (四)『世界の名著六四 孫文 毛沢東』(責任編集 小野川秀美 中央公論社 昭和四四年 「孫文と毛沢東」 六〇頁―六二頁 参照)
- (五)『現代教養講座八三二 世界の歴史二二―二〇世紀の世界』(穴戸寛 山

欠けると、毛沢東は思った。制度といい制度上の組み立て方といい、中国の特殊性を無視して模倣されたにすぎないとした。毛は部下たちにいらだちをおぼえていたのだった。・・・自分の党に向けた不満は年ごとにつのり、かつ育っていき、その果てにとうとう文化大革命の破局にみちびいていくのである」(六五)と、述べている。毛沢東の社会主義建設は、ソ連型の官僚主義的社会主義建設の模倣批判であり、中国の特殊性を生かした創造的社会主义国家建設であった。

以上に述べたように、西洋的近代化を志向する農工業の「大躍進」と、西洋の近代化を否定する農業・工業・軍事の共同体を目的とする「人民公社」は、全く別次元の毛沢東の相異なる二つの中国型社会主義の具体的表れであった。

従って「大躍進」Ⅱ「人民公社」建設という貝塚氏、野村氏、浜口氏、渡辺氏の学説は成立しない。小田氏の土着型社会主義説も成立しない。渡辺氏の農工業の近代化Ⅱ「人民公社」前提Ⅱ「まず集団ありき」説も成立しない。

毛沢東の社会主義建設方法について、多くの研究者の誤解した根本的原因是、中国人の基本的思想である「対的思想」Ⅱ両面思考が、毛沢東の政治思想に深く浸透していることへの無理解に由来していると言える。

「大躍進」と「人民公社」運動は、全く異なる社会主義国家建設の性格である。この事実について李氏は、「毛沢東の「大躍進」計画は壮大なユートピアだったー十五年以内にイギリスに追いつこうと農業生産方法をかえ、人民公社をつかって社会主義から共産主義へ、貧しさから豊かさへの道をつきすすもうというのだ」(六六)と、「大躍進」と「人民公社」は、全く別次元のものと明確に指摘している。これは何よりの証左である。

ユン・チアン氏も「大躍進」と「人民公社」を別次元で理解している。「大躍進の目標は、中国が「比較的短期間ですべての資本主義国を追い越して世界で

最も豊かで先進的で強力な国家のひとつになることだ」と聞かされていた」(六七)と言い、「毛沢東の人民公社設立の目的は、奴隷労働の監督を一層強化するためである」(六八)と、述べている。中国の高校生用の歴史教科書でも、「総路線、大躍進と人民公社化運動は党の社会主義建設の道の模索であり、人民の迅速に社会主義を建設したいという願望を反映していた」(六九)として、「大躍進」と「人民公社化運動」を、並列表記して、別次元で解説している。

また小島氏の毛沢東の社会主義国建設の理解ー伝統的な中華思想中心主義の西洋文化の「つまみ食い」説は、歴史的事実においても成立しない。

ユン・チアン氏は、「毛沢東の描く理想とは、純粋な工業中心地だった。・・・一九五八年、政府は北京の歴史的建造物を調査して、八〇〇〇の歴史的建造物をリストアップした。政府はそのうち七八点についてしか保存を認めなかった。・・・「南京や濟南などの城壁も取り壊されたと聞いて、嬉しく思っている」と、毛沢東は発言した。また毛沢東は中国建築に対する嫌悪をくりかえし口にし、ヨーロッパや日本の建築を賛美した。一九五八年一月、毛沢東は最高幹部に、「北京や開封の建築物は我慢ならん。青島や長春の建物のほうがはるかに良い」と話している」(七〇)と、述べている。

このように毛沢東は、一方で重要な伝統的な中国建築を残しながらも、他方では伝統的中国文化の破壊者であり、西洋近代化への深い傾倒者でもあった。

おわりに

以上に毛沢東の政治思想と「対的思想」の相互関係について述べてきた。簡単に要約すると、凡そ次のようになるであろう。

毛沢東の最終的な社会主義理想は、「集団所有制、共同生活であり、平等、原始的な分配であった」というように、社会主義のための社会主義を理想としていた。それが、「人民公社」のかたくなな維持に頑固に拘る原因であった。

この李氏の資料においても、毛沢東は生産力の増強の上に立つ社会主義国家と、これを否定するような集団所有制と原始的な平等分配を眼目とする、社会主義のための社会主義という、二つの全く相異なる社会主義国家建設の道を模索していたこと―毛沢東の社会主義の「対の思想」が了解されるであろう。

従って毛沢東の理想である想像的で冒険的な中国型社会主義国家像は、「大躍進」に代表される西洋資本主義を止揚した高度な工業生産力の上に立つ社会主義と、「人民公社」に代表される西洋資本主義を否定する中国の遅れた現状を前提にした社会主義と言う、全く相容れない二つの相対立する混合国家であった。

この事実は、毛沢東の提起した「社会主義総路線」は、「大躍進」と「人民公社」運動が同時に並列して進行させていたことにおいて、容易に理解することができるであろう。しかし上に述べた二つの相異なる社会主義建設のどちらにおいても、劉少奇・鄧小平らの共産党幹部のソ連型の計画経済に基づく漸進的社会主義とは、社会主義建設の方法において全く異なっていたのである。

ユン・チアン氏は、この両者の路線対立を、「共産党が政権を取ったところから、強行軍で軍事超大国への道を通つて走ること優先するか、それとも生活水準の向上を優先するかをめぐって、二人のあいだに深刻な意見の違いが生じるようになった。後者の方針を唱える劉少奇を、毛沢東は機会あるごとに茶化して・・・」(六三)と、述べている。

ところで李氏は、一九五三年に発表された「総路線」・「大躍進」・「人民公社」との関係について、以下のように毛沢東の立場を説明している。

「第八回党大会で打ち出された穏やかな前進、均衡のとれた総合的な総路線は結局、毛沢東の支持するところとはならなかった。毛がそれ以後に仕掛ける政治的イニシヤチブのすべては―党内の整風も大躍進も社会主義教育運動もはたまた文化大革命も―第八回党大会の定めた総路線を骨抜きにしようとする努力であった。一九六九年の九回党大会をひかえた前年の十月、第八期中央委員会第十二回全体会議(八期十二中全会)にいたってやっと正式に劉、鄧の両名を追放し、第八回党大会で選出された中央委員の大多数を放逐したうえ毛沢東思想を国の指導原理として特記することにより、毛の復讐は完結するのである」(六四)と、述べている。

つまり「総路線」は、劉少奇や鄧小平ら党中央幹部の大多数が支持したソ連型の漸進的な社会主義建設であり、これを毛沢東は全く支持していなく、その後「総路線」を骨抜きにする急進的な中国型社会主義を強行したという。

従って劉少奇らの「総路線」と、この路線を否定する毛沢東の「大躍進」と「人民公社」とは、全く異なる社会主義建設理想であり、この二つを同一方向の性格として理解していた従来の浜口氏や渡辺氏の学説は、李氏の資料的根拠により成立しないであろう。

(三) 毛沢東の社会主義建設の心情

中国型社会主義建設について、李氏は毛沢東の心情を次のように述べている。「往年の革命家たちはすすんで高級官僚となり、毛沢東の革命的な理想より、みずからの安泰や社会的地位にますます汲々とするようになった。毛沢東は我慢ならなくなった。革命を継続させるために素早い行動をとりたくなったのである。しかし最高幹部ら党の高級官僚たちは慎重な姿勢を説き、ソ連型の漸進的な発展という考え方にかじりついた。ソ連のもの真似という姿勢は創造性に

子恢は合作社解体の指令すら出しつつあった。主席はせっかくの自分の計画を潰すものだと鄧子恢はじめ党幹部に激怒した。・・・わたしは主治医になった当初、・・・じつは主席が党内保守派に加える反撃の謀略を策するため大半の時間をさいているのに少しも気づかなかった。一九五五、五六年の冬から秋にかけて、主席は一連の会議を通じて社会主義改革の抱負を促進しようとしてめ・・・そのため全国津々浦々から農業集団化に関する報告書を集めてみずからそれを編集したり、助言を付したりして農村部の急激な社会主義転換を呼びかけたのである。それは党中央の指導部に対する攻撃であり、急速な社会主義化を推進しようとする主席なりのやり方であり、そしてこの期間中、毛は大いにいらだって眠れない日夜つづくようになるのだ。」(五九)と述べている。

毛沢東には西洋文明を吸収することを待たないで、これを否定する「人民公社」建設という性急な社会主義、共産主義国家建設の理想も存在していた。人民公社が河南省で初めて誕生した時に、毛沢東は次のように感嘆している。

「この名前、"人民公社"ってのはすばらしい」と、毛は言った。「フランスの労働者が権力を奪取したとき、パリ公社(コムニオン)をつくった。わが国の農民は人民公社(コムニオン)を政治、経済組織として創設し、共産主義に向けて前進した。人民公社はすばらしい」(六〇)と言い、フランスでは労働者が、中国では農民が、公社(コムニオン)を創造した、と言うのである。

人民公社の目的であるが、李氏は、「中国はついに貧しさから豊かさへの道を見つけたのだ、中国農民の救済は目前にせまっていた。私もまた、人民公社の設立運動を支持した。毛主席は正しかったのである。人民公社はすばらしかった。専用列車で北載河にもどりながら、毛沢東はずっと興奮していた。こんなに幸せそうな毛沢東を見たことがなかった。中国の食糧生産問題はついに解決

したのだ。人民が食べられる以上の食糧を生産しているのだと彼は確信するにいたっていた。」(六一)と述べているように、人民公社は農業の集団所有による貧しい農民の食糧問題を解決する平等社会の建設のためであった。

毛沢東にとっては、「大躍進」に代表されるような資本主義的な生産力増強の上に立つ高度な中国型社会主義建設は、社会主義国家建設の反面の理想に過ぎなかったのである。毛沢東は、「人民公社」に代表される中国型社会主義・共産主義国家を最終的な理想としていたと、李氏は以下のように述べている。

「党は黨員間の、社会主義とは何か、一体何がこの国にとって最善なのかという認識の違いによって分裂しつつあった。社会主義のための社会主義を信じていた彼にとつて最高の理想は富みでもなければ生産高でもなく、集団所有制、共同生活であり、平等、原始的な分配性だった。・・・毛沢東は、農民が何よりも自分の土地を所有したがっているのを百も承知していた。「しかし、われわれが望んでいるのは社会主義である」と毛沢東は言った。「われわれはいま、農業生産の困難と直面しており、そのためわれわれは農民に譲歩しなければならぬ。しかしこれはわれわれが将来とるべき方法ではないのである」。農地請負耕作が農業生産高を増加させるのに人民公社よりは効果的であると思えるという点も、毛沢東にとってはさしたる問題ではなかった。毛は頑固な人間であり、古い中国の俚俗を引いてこう言った。「黄河を目の目にしてははや退却する余地まで信念をすてない者もおる。私は黄河を目の前にしても信念はすてないぞ。」毛はこりんざいあきらめつつもりはなかった。」(六二)と、述べている。

毛沢東は、大躍進の失敗で農民の生産意欲を高めるために、党中央幹部が提言した資本主義的な戸別農地請負制度を一旦は認めたのであるが、これは毛沢東の最終理想ではなかったのである。

基本的な指針とみなし、中国におけるその生産増強の必要性を説いた。「わが国の鉄鋼の生産はあまりに少ない。われわれはあらゆる手をつくして物質的な増強をはからなければならない。そうでなければ、人々はわれわれを見くたすようになるであろう」(五三)と、述べている。渡辺氏は、毛沢東は建国以前の一九四五年において、「われわれの資本主義はむしろ少な過ぎるのである」と、自国の資本主義の発展の必要性を主張していた指摘している(五四)。

また李氏は、「裏庭煉鋼炉」の全国的普及に言及して、「毛主席は国民に対し、早急かつ経済的な方法で十五年以内にイギリスの鉄鋼生産高を追い抜こうと国民に呼びかけていた」(五五)との毛沢東の理想を述べている。そして一九五七年の夏に李氏は、毛沢東の社会主義実現方法の理想を次のように述べている。

「それは右派に対する新たな攻撃であり、また毛沢東の社会主義観—社会主義志向のテクノクラート大集団による近代的農工業の建設—を繰り返したものであった。…われわれの任務は一九五三年を起点として四〇年から五〇年以内に、経済的にアメリカ合衆国を追い越して社会主義から共産主義に移行することだ、と毛沢東は述べた。何かが毛主席の脳裏に芽生えつつあった。それが何であるか、まだはつきりしていなかった」(五六)と。

毛沢東の社会主義建設の理想は、ソ連型計画経済の推進という漸進的社会発展を志向する劉少奇や鄧小平などの多くの中国共産党幹部の社会主義建設の方法とは全く異なる。急速な西洋的な高度な生産力の上に立つ近代的社会主義国家理想であり、このような中国型社会主義路線と劉少奇等の共産党幹部とのソ連型社会主義国家建設の理想の違いが、毛沢東の反右派闘争の原因になった。

従って小島氏の学説—「吸収」される西洋近代は、中国の革命や建設に都合のよいと思われる部分だけの「つまみ食い」だけに終わり、西洋近代の「普遍

的真理」の全面的・根底的な「吸収」はあり得ない」(五七)—は、李氏の紹介する毛沢東の発言—史料的事実から見て決定的に誤りである。

(二)マルクス主義原理を否定する急激な社会主義・共産主義国家建設

毛沢東の高度な生産諸力の上に立つ西洋型資本主義を止揚する、理想的なマルクス主義的社会主義建設は、彼の社会主義建設理論の半面に過ぎなかった。もう一つは、マルクス主義原理の否定に由来する。小田氏が「土着型の近代化」と指摘し、小島氏が指摘した農村を基盤とする国家建設である。それは、西洋の資本主義生産力の諸成果を無視して、マルクス主義原理の性急な中国への適用による農村型の中国型社会主義、共産主義国家建設の理想であった。

これが「人民公社」建設から「文化大革命」への道程という、前代未聞な極左派的な共産主義建設のための権力闘争の道につながったのである。

李氏は毛沢東の社会主義建設の理想について、「毛沢東の目標は中国を改革するにあたり、いそげばいそげほどよい、徹底的にやればやるほどよい、ということであった。毛は一九五〇年代の初期に実施された土地改革に満足していなかった。…それでも私有制度は相変わらず支配的に存続していた。毛沢東は社会主義化をよく望み、農業の集団化を意味した。農業の機械化など待つていられないのだった。中国はあまりに貧しくて、機械化に長い歳月を要するからであった」(五八)と、「大躍進」と全く正反対の事を述べている。

渡辺氏は、「要するに毛沢東は何らの理論的根拠も用意せずに、ただ協同化すれば農業生産力は飛躍的に上昇すると考えるある種の「進行」に突き動かされていたのであろう」(五六)と言うが、李氏の史料によれば事実とは全く逆であった。

李氏は続けて、「農業の集団化は一九五三年の早い時期から中国の農村地帯に導入されたが、しかしそのペースが早すぎたり、…党中央農村工作部長の鄧

李氏が毛沢東と初対面した時期は、一九五五年四月二五日であり、一九五八年の中ソ間の対立激化の三年前である。この初対面の時に、すでに毛沢東は欧米賛美を語り、ロシア語より英語を学びたいと李氏に言っていた(五〇)。

一九五三年には毛沢東の著書『実践論』・『矛盾論』について、スターリンの派遣したソ連大使ユージン氏は、毛沢東を修正主義者と批判して、両国間に思想対立が存在していた(五一)。一九四九年の人民共和国内政直後の毛沢東へのスターリンの戦後処理交渉の遅延策や、一九五〇年の朝鮮戦争参加の是非についての毛沢東とスターリンとの対立で、両者の間では深い不信感があつた。この毛沢東のソ連とスターリンへの不信感について李氏は、

「毛沢東の断言はわたしを仰天させた。あらゆる公式文書を見ても、ソ連は中国の「偉大な兄弟」であり、わが国の社会主義のモデルであつた。中ソ両国はもつとも緊密な同盟国であつた。が、毛にいわすれば、実際の両国関係は皇帝と臣民どころではなかつた。「やつらはわれわれを食いつぶそうとしているんだ」と、毛沢東はだれにも臣従するのを拒絶した。．．．しかしながら毛沢東は対ソ不満を決して公にあかさなかつた。革命的リーダーシップの正当性が依然スターリンに密着していたからである。フルシチョフの批判は中国の内政においてもひとつの分岐点となつた。．．．(五二)」と、言っている。

以上のようにスターリンやフルシチョフと毛沢東の間では、一九五八年以前より根深い思想対立が存在していた。毛沢東は、解放以前より欧米の近代的技術に讃嘆して、西洋的な高度な生産力に立脚した社会主義建設を志向しており、ソ連への不信感もあつた。それがフルシチョフのスターリン批判を分岐点にした一九五八年の対立激化で、反ソ化への方向転換が鮮明に表面化した。従つて一九五八年より毛沢東は急速にソ連型より離脱して中国型社会主義路線の方向

転換をしたのではなかつた。時期が熟しただけである。従つて浜口氏、渡辺氏、小島氏等の従来の研究者が主張する毛沢東の急激な方向転換説は成立しない。

また「大躍進」は、西洋の近代的農工業の生産力の発展に追いつく生産力発展を意図したものであり、他方の「人民公社」は、共同生活・平等分配を目的とする政治・経済・軍事の全てを同一単位で実施する一種の公社であり、社会主義から共産主義社会へ移行することを意図した前身的政策である。従つてこの二つは性質が異なり、同一方向で理解することは困難であると思われる。

従つて毛沢東の社会主義建設の理想には、ソ連型の漸進的社会主義建設と道を異にする、およそ相異なる二通りの中国型社会主義建設の雛型が中華人民共和国成立以前より存在していたのである。つまり解放以前の毛沢東の政治思想について、渡辺氏は、「われわれの資本主義はむしろ少なすぎる」と紹介していたように(二六)、毛沢東は資本主義的生産力の増強の意図を強く持っていた。他方で小島氏は、「中国的特色に沿つてそれ(マルクス主義)を応用していくべきである」と紹介して(五〇)、毛沢東は農村を基盤とした社会主義路線の意図を持つていたと言う。両氏の紹介する史料的事実が、毛沢東は解放以前より全く相異なる二つの社会主義国家建設の意図を持っていた何よりの証左である。

(二)マルクス主義原理による高度な資本主義生産力を踏まえた社会主義建設
毛沢東の社会主義建設の一つの道は、劉少奇・鄧小平らの指導した第一次五年計画(ソ連型計画経済)を否定した「大躍進」に代表される。マルクス主義原理の肯定に由来する、欧米の先進工業文化を性急に取り入れた、高度な生産諸力の発展の上に立ち、西洋型資本主義を止揚するマルクス主義原理に忠実に理想的な中国型社会主義建設であつた。

李氏は、毛沢東の生産力増強の意図について、「毛沢東は鉄鋼こそ経済発展の

化の停滞を憂へ、西洋の思想が中国を活性化するかもしれないと語った。従属されないような形で西側から借入し、中国的でも西洋的でもない混合文化をあらたに創造したがった。私が東西文化の大いなる相違を指摘したりすると、それは想像力と冒険心にかけてと主席は私を攻撃した(四七)と、毛沢東は西洋文化が中国を活性化すると信じており、李氏の反対発言を創造性と冒険心にかける、と激しく批判したのである。

従って毛沢東の新中国の理想国家像は、「中国的でも西洋的でもない混合文化をあらたに創造したがった」と述べていた所から、中国と西洋の混合文化であることは容易に理解することができるであろう。

当時の中国共産党の幹部の大多数が、ソ連一辺よりだったのに比較して、毛沢東にはソ連に従属されたくない中国の最高指導者としての誇りと、西洋文化の優秀性を見抜く卓越性を持っていたのであり、新文化創造への「対の思想」——中国文化と西洋文化の対等性を維持して融合する必要性——を抱いていた。

従って毛沢東の国家建設の理想は、小島氏の外国文化を「つまみ食い」するだけの古い伝統思想にしがみ付いたとする「体用の理論」——中華思想の持ち主——学説は成立しない。また逆に小田氏の指摘した土着型の近代化でもなかった。

しかし他方、外国文化をそのまま吸収すると、以下のような問題が新たに起きてしまう。ソ連を模倣すればソ連型漸進的社會主義になり、アメリカを模倣すれば西洋的資本主義国に変質してしまう。これでは毛沢東の中国独自の社會主義国建設を実現して、中華帝国の繁栄の回復する意図に矛盾する。「われわれ中国人はわれわれなりの習慣を持つ。なぜ外国の真似をしなければならないのか」と言い、毛沢東は中山服を着たと述べる。毛沢東は、あくまで中国文化の主体性を失わず(四八)、先進的な外国文化を吸収しようとしたのである。

しかし毛沢東の東西両文化の融合方法論は、李氏の言うように社會主義国と資本主義国は対立的で水と油の関係であり、両者は容易に癒合できない根本的な社会システムの違いを持つ。中国文化を維持したいという限り、弁証法的統一は不可能であったであろうが、そもそも「対の思想」の持ち主である毛沢東にはマルクス主義的な対立物の統一という思考はなかったであろう(四九)。

金谷氏は、毛沢東の『矛盾論』をマルクス・レーニン主義的な矛盾論でなく、中国的な対立関係を容認する矛盾関係を示している両面思考と指摘していた。

従って毛沢東の新中国の中国型社會主義の理想国家像は、「中国的でもなければ外国風でもない。ロバでもなければ馬でもない。ラバさ」と言い、李氏は「中国的でも西洋的でもない混合文化をあらたに創造したがった」と言う所から理解できるが、中国(社會主義)と西洋(資本主義)と言う容易に融合できない混合国家を創造することであった。

まさに毛沢東の東西両文化の融合政策理論は、中国文化と西洋文化の対等平等な融合の志向という「対の思想」から由来している以上、想像的であり冒険的であり、自己分裂的思考であったと思われる。

四 社會主義建設の相異なる二つの方法

ところで貝塚氏、野村氏、浜口氏、渡辺氏の四人の研究者は、一九五八年のソ連との対立激化という国際外交の状況の変化から、ソ連型から中国型の社會主義路線への変更をしたと述べていた。また「大躍進」と「人民公社」を同一方向で理解していた。しかしこれらの学説ははたして妥当なものであるか。この研究史の是非について検討してみたい。

また中国文化の覚醒のための社会主義であり、中国の特殊性が創造的に生かされる社会主義でなければならなかった。諸外国の文物を未消化のまま見境なく輸入したり、それをただ再生産したりするのはよくない、というのが毛主席の口癖だった。主席は一度としてソ連型の社会主義を無批判、無修正のまま中国に適用しようとしたことはなかった。そればかりか、初めて面談したその日から、主席は欧米の技術、活力、科学に対する称賛の念を持ちつづけた。「一方の側に寄る」という姿勢は常に、ソ連だけが活性化を学習すべき唯一の潜在的源泉でないという認識によって歯止めがかけられていたのである。」(四四)と、述べている。

毛沢東の社会主義観は、常に中国的特質を持った社会主義であり、社会主義国の先進国であるソビエトだけが、中国が学ぶべき唯一の国ではない。西洋、特にアメリカの先進文化を学ぶ必要性を指摘しており、非常に弾力的発想をしており、硬直した伝統的な社会主義者ではなかったのである。

従って毛沢東の中国型社会主義建設は、「反米連ソ」から中ソ関係の悪化した政治情勢の変化により「反米反ソ」に転換した一九五八年以降に独自の国家建設の模索が始まったとする浜口氏の学説は成立しない。また小島氏の中国文化を主体とした西洋近代化の「つまみ食い」吸収説も成立しないであろう。

毛沢東は、一九四九年の新中国建国以前から欧米への深い関心と欧米文化の全面的吸収による独自の中国型社会主義建設理想を持っていたのである。

また毛沢東は次のようにも言い、アメリカを高く評価している。食品検査法の改良方法について、「ソビエトに学べと私が言ったとして、大小便の仕方までソビエトから学ぶ必要はない、ちがうか。どちらかといえば、もうソビエトなんかから学びたくないぞ、むしろ、アメリカ合衆国から学びたい」(四五)と述べ

ている。ソ連とアメリカの両方から学ぶ必要性―「対の思想」を持っていただけでなく、むしろアメリカから学ぶ必要性を述べている。当時の社会主義国の指導者としては型破りの親米発言をしている。従って浜口氏が指摘したような毛沢東は単純な反米主義者ではない。反米感情は彼の半面に過ぎない。

以上、毛沢東は中国の発展のためには、社会主義国・ソ連と資本主義国・アメリカの両方から科学技術を学ぶ必要性を述べていた。一方だけに与しない、両面思考のできる中国人の典型的存在であった。文革中に毛沢東により追放され、二度も復活した鄧小平も、毛沢東と同様に対の思想を持っていた。

李氏は、「一九六一年三月にはじめて、私は、党中央総書記の鄧小平が曾希聖の提案を支持し、その政治的経歴のうちもつとも有名で、もつとも悪名高い発言を耳にした。「白い猫だろうと黒い猫だろうとどちらでもかまわない。鼠をとるのはよい猫である」。資本主義と呼ぼうと社会主義と呼ぼうとどちらでもよく、とにかく農業生産を上げることで飢饉に終止符を打つのが鄧小平の最優先目標だった」(四六)と、述べている。

毛沢東や後継者の鄧小平等の中国の最高指導者は、柔軟な両面思考方法を持っているが故に、多くの東欧の社会主義国が衰微して官僚主義的社会主義国家が解体して行くなかで、開放路線後の中国は社会主義と資本主義の併用―二制度論を導入して、一層の経済発展していく国であり続けた理由であろう。

それは暫く置き、では毛沢東はどのような方法で外国文化を中国文化の発展のために吸収しようとしたのであろうか。その受容方法が次の問題である。

(三) 毛沢東の外国文化の吸収方法

毛沢東は外国文化の受容方法について、以下のように李氏に述べている。

「ソ連への不満、そして西側から学ぶべき必要をしきりに話題した。中国文

でも、ソ連は中国の「偉大な兄弟」であり、わが国の社会主義発展のモデルであった。中ソ両国は最も緊密な同盟国であった。が、毛にいわすれば、実際の両国関係は皇帝と臣民どころではなかった」(四〇)とも言っている。

李氏は、「いまになってはじめて、毛沢東が自分の政治目的に都合よく合致するならば、しばしば嘘をつくということに気づくのだ」(四一)と言うように、「毛はしばしば嘘をつく人間」と理解している。しかしこの事は、スターリンを肯定するのは、毛が中国のスターリンだからで、否定するのは毛の中国共産党を軽視して破壊したからである、と理解しなければならぬであろう。

マルクス主義の肯定と否定、孔子の肯定と否定、スターリンの肯定と否定という毛沢東の自己分裂的な政治思想の本質は、状況の変化に応じて両方の対立的な評価を巧みに使い分ける「対の思想」——両面思考の本質の現れである。

三 社会主義国家建設理論と対の思想

(一) 中国の現状認識と外国文化の受容方法

まず毛沢東の新文化の創造方法——中国文化と外国文化の融合による新文化の創造——についての両面思考を述べたい。

毛沢東の中国文化の認識について李氏は、「中国の文化は氣息奄々の状況にあると毛は信じていた。中国文化を活性化させるのは自分の使命であり、そのためには海外から学ぶのは不可欠であるとして諸外国の知識を中国の状況に生かすべきだと思った。彼はしばしばその成果をこう表現したものである。中国的でもなければ外国風でもない。ロバでもなければ馬でもない。ラバさ」(四二)と述べている。そして毛沢東の理想の新中国像は、中国(ロバ)と外国(馬)

の両者の血が同程度に混ざった混合物(ラバ)であったのである。

また李氏は、「主席は私に對してついで「近代化」なる言葉を使ったことがなかった。彼は近代人などではなかった。そのかわり、富める国造りを達成して往時の栄光を取り戻すことばかり語りつづけた。叛逆者、偶像破壊者でありながら、あえて中国を改造して、偉大な国家に仕立てあげよう、自分なりの「万里の長城」を築いてやろう、という気概であった。おのれの偉大さと国家の偉大さがないまぜになっていた」(四三)と言う。

李氏は、毛沢東は近代人的思考をしておらず、外国文化を吸収して中国の往時の栄光を取り戻すことを夢見る人物であった、と評価している。しかし小島氏の言うように、毛沢東は旧来そのままの皇帝的人物ではない。伝統的文化を破壊する叛逆者であり、新文化を創造して旧中国の栄光を取り戻す気概を持つ人物というから、古来よりの伝統文化の擁護者ではなかったのである。従って小島氏の「体用の論理」に依拠した外国文化の吸収説は成立しない。では毛沢東はどの様な外国文化を学び、中国文化の新発展をしようとするのであろうか。

(二) 毛沢東の中国型社会主義国家の建設に導入すべきモデル

李氏は、毛沢東の外国文化の吸収方法について、

「社会主義は毛沢東にとって中国人民の創造的エネルギーを爆発させるための方便にはかならなかった。そうすることによって中国古代の栄光を回復しようとしたのであった。創造的刺激をえようとすればソ連に顔を向けないわけはいかななかった。ソ連は第一級の社会主義国家だったからであり、中華人民共和国の成立の時点から中国は「一方の側に寄る」と毛は主張していたからだ。

ソ連は中国の新政府が見習うべきモデルだった。が、毛沢東の社会主義観はつねに中国的な特質をもった社会主義であり、また中国の富強と栄光のための、

のかね? ところが、キリストの創設した宗教は今日まで生きつづけておるじやないか。・・・」(三五)と、述べたと言う。

しかし他方、毛沢東は孔子を否定する。李氏は、「毛はそうした奴隷根性を中国の儒教的な過去にまで跡づけていった。中国人は孔子を畏敬するあまり、その実名のかわりに「賢人」という敬称で呼ぶことしかできなかった。・・・孔子主義は過去において創造性を窒息させた。いまはマルクス主義が創造性を窒息させているのである」(三二八)と、毛沢東は金貨玉条的に偉大な思想として教条的に尊敬することは、新思想の発展と創造性を窒息させる害毒だと述べていたと言うのである。毛沢東は孔子について肯定と否定の両面的発言をしている。

(三) スターリンの肯定と否定

スターリンの肯定について李氏は、「毛沢東こそ中国のスターリンであり、それに気づかない者は一人としていなかった」と言い、また「当の毛にすれば、スターリン批判に同意するのは、自分への批判も同じように容認される、ということ容認する羽目になってしまう。これは断じてあつてはならないことだった、一九五三年にスターリンが死んでフルシチョフが後継者になったとき、毛沢東はこの人事を歓迎した。ところがスターリ批判後、毛はフルシチョフに激しい敵意を抱くようになり、ソ連の新しい指導者は不動の忠誠心という革命的倫理の根本教義を侵犯するものと確信するにいたった。フルシチョフが後継者になれたのはスターリンのおかげではなかったか。フルシチョフは今日の彼をあらしめた恩人に矢を向けたのである」(三七)と、毛沢東はフルシチョフを激しく非難していた、と述べている。

また李氏は、「毛沢東はフルシチョフのスターリン批判が帝国主義陣営のアメリカにとって思う壺だとした。・・・ソ連がスターリンを攻撃しても、われわれ

それはそんな真似はしない。そればかりじゃない。われわれはスターリンを支持しつづけてやる」・・・」と毛沢東は言っていた、と述べている。

そしてまたマルクス主義の否定では共通していた故に、李氏は、「マルクスはいまや新しい孔子であり、中国の能力を麻痺させて、国家が前進するのを妨げている。毛沢東はスターリンを毛嫌いしつつも、彼がマルクス批判をしたのは正しいと思った。スターリンはマルクスが常に正しいとはかぎらないということをとさとしており、社会主義の理論と実践とを進展させるべく勇往邁進した」(三六)とあるように、毛沢東は高くスターリンを評価していたと言う。

他方、スターリンの否定について李氏は、「しかし非スターリン化を受け入れ用としない毛の態度は、スターリンへの関心と何のかわりもなかった。じつのところ、彼はスターリンをさげすんでいた。毛沢東の口からじかにスターリンとの長い関係や、ふたりのあいだは決してうまくいかなかったことなどを聞かされて、私は非常なショックを受けた。・・・いまになってはじめて、毛沢東が自分の政治目的に都合よく合致するなら、しばしば嘘をつくということに気づくのだ」(三八)と、李氏は、毛沢東は自分の政治目的に合致すればよく嘘をつく人物だ、と酷評している。

また李氏は、「毛は党初期の破滅的な損害をスターリンやコミンテルンのせいにした。・・・毛はまた、スターリンが第二次大戦後にアメリカの軍事力の前に拝跪したと非難した。・・・国共間の内戦中、スターリンは何一つ援助してくれず、共産軍に一挺の銃も一発の弾も、毛にいわせればそれこそ「屁ひとつ」くれることさえ拒絶した」(三九)と、毛沢東はスターリンを極端に毛嫌いする評価をしていた、と述べている。

そして李氏は、「毛沢東の断言に私を仰天させた。あらゆる公的な文書類を見

ソ連側のマルクス主義理論の修正主義論であるとの断定への、毛沢東の深い不快感が述べられており、毛沢東は自己の二つの自慢の著書について、マルクス主義を創造的に発展させる政治理論として位置付けを意図していた。

つまり毛沢東は、『実践論』と『矛盾論』の内容について、マルクス・レーニン主義と現実の中国との統合物であり、マルクス主義(普遍的原理)と中国の現実(特殊性)を統合した新しい哲学思想であることに自負している。

この点について金谷氏は、「毛沢東の矛盾論は本当の矛盾ではない」と言う西洋哲学者の批判を引用して、矛盾物の弁証法的統一的理解であるマルクス・レーニン主義⇨西洋哲学では理解できない、中国独特の自己分裂的思考である「対の思想」より由来する矛盾関係であるとしている(三〇〇)。従って同氏の論理を敷衍・展開すれば、毛沢東の思想は、スターリンの肯定と否定、マルクスの肯定と否定、中国の伝統思想―孔子の肯定と否定につながることは明白である。

(一) マルクス主義の肯定と否定

李氏は、毛沢東のマルクスの肯定については、「しかし他方では、慎重な態度を説いたりする者はだれであろうとまたもや攻撃をかけて批判し、一同に分かるような言葉で、「急進な前進」という主張に反対する者は、反マルクス主義であり、したがって右派分子なるぞと論じた」(三二一)と述べている。

また李氏は、「きらいだからといって党の最高指導者たちをあっさり追放するわけにはいかなかった。しかも、毛にはもはやそれだけの権力がなかった。中国のあらゆる指導者たちと同じく毛もまた自分の行動を正当化するためにはマルクス主義の論理を必要としたのだった。マルクス主義の論理によつてたてば、あるいは追放したいと思う相手に向けて人民大衆を動員できるかもしれない。」(三二二)と述べるように、毛沢東はマルクス主義を援用しなければ、自己の政

治的立場を正当化できなかったという。

他方、マルクス主義の否定については、「マルクスはいまや新しい孔子であり、中国の能力を麻痺させて、国家が前進するのを妨げている。毛沢東はスターリンを毛嫌いしつつも、彼がマルクス批判をしたのは正しいと思った。スターリンはマルクスが常に正しいとはかぎらないということをさとっており、社会主義の理論と実践とを発展させるべく勇往邁進した」(三三三)と、スターリンのマルクス主義の否定を賛美している。

また李氏は、「毛はそうした奴隷根性を中国の儒教的な過去にまで跡づけていった。中国人は孔子を畏敬するあまり、その実名のかわりに「賢人」という敬称で呼ぶことしかできなかった。・・・孔子主義は過去において創造性を窒息させた。いまはマルクス主義が創造性を窒息させているのである」(三三三)と述べている。毛沢東は、マルクス主義を孔子と同じように思想の創造的發展を硬直化させる教条主義理論と位置付けて、肯定と否定という両面的評価をしている。

野村浩一氏は、「マルクス・レーニン主義という、いわば中国にとってはまったくの外発的な発想と、そして毛沢東の思想―かれ自身がしばしば語っている「私は土着哲学だ」と言う、その思想は、一体どのようににかかわり合っているのだろうか」(三四四)と、毛沢東には外発的なマルクス主義と内発的な土着思想があったと指摘していた。この野村氏の疑問である二つの関係は、以上に述べた毛沢東自身の言説から見て、マルクス主義の肯定と教条主義に反対する故の否定と言う―「対の思想」の論理で矛盾なく説明できるであろう。

(二) 孔子の肯定と否定

孔子の肯定について李氏は、毛沢東は「孔子が思想の新しい学派を打ちだし、弟子を集めたのは二十三のときだった。キリストはどんな教育をうけたという

仲裁に乗りだして調停役を演じながら常に安定性を欠く東の間の均衡にひきも
うどそうとするのであった」(二二五)と述べている。

部下を常に互いに対立させており、協調して陰謀を働かせないように個人
身支配していたのである。そして混乱に陥ると対立者の調停役をして、毛沢東
への忠誠を尽くさせる、対立と協力という「対の思想」を駆使して、毛沢東
は側近たちを支配していたのである。

次に毛沢東の政敵に対する対応について述べてみたい。

李氏は、「毛沢東の話に耳を傾けていると、主席は政敵に寛大であり、改心の
チャンスを与えていると本気に思うのであった。毛が政敵や反対者を殺す気が
ないと語ったとき、私は心から彼を信じた。だから、私は毛主席を支持し、反
右派運動を支持したのである。毛沢東は善であり、共産党も善だった。彼らは
中国を救ったのであった。・・・毛沢東は政敵や反対者をただちに殺さなかつた
のは事実である。しかしながら、「思想改造」「労働改造」にともなう肉体的、
精神的な辛酸はしばしば拷問にひとしいゆるやかで痛ましい死を意味した」(二
六)と述べている。

毛沢東の政敵への対応は、寛容と拷問という両面思考―「対の思想」を持つ
ものであったとしている。このような毛沢東の両面思考は、経済目標の実現方
法にも見えている。

李氏は、「それぞれの会議で毛沢東は党をまとめるのに叱咤するかと思えばな
だめすかし、あるいはいびる。・・・が、そんな会議が閉幕するたびに農
産物や工業製品の増産目標はきまって達成されるようになった」(二二七)と言っ
ている。毛沢東の生産目標実現の手法は、叱咤激励となだめるという、およそ
逆な手を使う、「対の思想」を駆使したものであったのである。

一 政治思想理論と対の思想

毛沢東の代表的著作である『実践論』と『矛盾論』は、「マルクス・レーニン
主義と中国の置かれている現実の特殊性との統合物」という、マルクス主義の
中国における創造的發展を目指して書き上げた作品であった。毛沢東は李氏と
の初対面で、『実践論』と『矛盾論』について、以下のように言っている。

「当時の私は、われわれの革命的な経験をマルクス主義の原理と中国の具体
的な現実との統合によって要約したいと思っていた。そこで私はこのようなふ
たつの論文をかいたのだ」(二二八)という。毛沢東の二つの著作について李氏は、
毛沢東自身の感想とソ連側の反応について、以下のように述べている。

「毛沢東が自分でこの両論文をいかに重要視しているかがとくとわかった。
両論文はマルクス・レーニン主義の哲学的發展―「中国の特殊性を持った社会
主義」の論述―に対する大きな貢献と毛は確信していたのだった、にもかかわ
らず、ソ連側は両論文に対しそのような名譽を与えるどころか、逆にソ連側は
修正主義のレッテルをはってしまった。耳にした噂によれば、スターリンは一
九五三年にソ連の著名なマルクス・レーニン主義の哲学者P・F・ユージン
北京駐在のソ連大使に任命し、毛沢東の思想を研究してマルクス、レーニンに
沿うものかどうか報告するようにさせた。主席はしばしばユージンをたずねて
夜遅くまで論争したが、大使は毛沢東の考え方をしつこいまではねつけた。主
席は面白くなかった。「哲学は本当にマルクス、レーニンで頂点に到達したのか」
彼はときたま声高にそういぶかるのだった。「中国の革命的経験を織り込むこと
で新しい哲学思想をみ出せるのではなからうか」・・・」(二二九)と述べている。

上々の健康状態がつづいた。毛沢東は自分がいざ政治的攻撃の的になると、しばしばベッドに難を避けたし、また病気をよく政治操作の手妻につかった。主席の健康と中国政治はなまぜに絡みあっていた」(二〇)と述べている。

李氏は、毛沢東の政治戦術は、活躍時は健康であり、被攻撃時には病気を装うという両面思考―「対の思想」を利用したものだ、と言う。

また李氏は、「毛沢東という人物は、人はよく陰謀をたくらむと非難するが、何を隠そうご当人こそ超一流の権謀術数家だったのである」(二二)と述べている。毛沢東は、陰謀についても、他人への非難と自己の正当化という、「対の思想」を持っていたのである。

また毛沢東の奴隸的人物であった周恩来が追放されず、政治理想を異にする劉少奇・鄧小平が追放された理由について、「最初のうち、時として主席と意見を異にした最高指導部の者が追放されずにすんだというのは事実である。しかしながら毛はそうした怨恨を決して忘れず、戦友であれ後輩であれその忠誠心が薄れたとみてとり、その政治的タイミングも熟したと判断するや、一瞬の躊躇もなく革命の元老でさえ切りすてた」(二二)と、李氏は述べている。

毛沢東への忠誠心の有無が、政治権力よりの追放の有無を左右したのであり、毛沢東の人事には忠誠心の有無という「対の思想」が機能していた。

このように毛沢東には、共産党幹部の政治人事において、自分に忠誠心があるか否か、また政治的に利用できる人物で有るか否かが、非常に重要な関心事であったのである。

東北行政委員会主席(政治局員)であり、一九五四年に「反党連盟」を結成したと告発されたのち自殺した高崗について、毛沢東は李氏に、「高崗の性的冒險なんか、ほんとうはさしたる大事じゃなかった。重大な政治誤謬をおかしさ

えしなかったら、われわれは問題にもしなかつたろう。たとえ政治的誤謬をおかしたとしても徹底的に自分の過ちを告白さえしておつたなら、まだまだ使える人物だったので」(二三)との感想を述べていた。

毛沢東は、高崗に対して非難と許容という両面思考を持っていたのである。どんな汚濁な人物であろうと構わなかつたのであり、まだ利用できる人物だから許容するのであり、利用できないから追放するのである。毛沢東の政治人事における「対の思想」の典型的な現れである。

このような毛沢東の政治人事基準は、独裁権力を維持するために、「対の思想」が駆使されており、下僚が自分に役立つかどうか、彼の重要関心事であり、その他の悪行には全く無関心であつた。

この事実について李氏は、「毛沢東はふだん汪東興ほど腐敗を気にかけていなかった。自分のスタッフがが連直であるかどうかはどうでもよかつた。もし下僚が役に立つなら、どんな欠点があるうと、毛はその部下をかばってまもつた。しかしいったん側近が役にたたなくなるや、情け容赦なく追い出して後悔の色などかけらもみせなかつた。側近中の側近だろうと緊密な政治上の盟友だろうと、一夜のうちにして毛の敵になりかねなかつた。」(二四)と述べている。

(二) 毛沢東の人事調整方法

次に毛沢東の政治人事の調整方法について述べてみたい。李氏は、「毛は下僚が一致団結して自分に反旗をひるがえすのを極度にきらい、そのため私どもをたがいに噛みあわせるべく丹念に情報を収集した。主席直属の第一組内が常に緊張関係にあるのをたしかめずにいられなかつた。たとえば江青はしょっちゅう葉子龍や李銀橋とごたつていなければならなかつた。・・・毛はむしろ不仲の火に油をそそぐような手を使い、両者の溝が埋めがたい瀬戸際までいくと、

以上に述べた毛沢東の政治思想における四つの疑問点・問題点を解く方法論は、市川市・駒田氏・金谷氏が指摘して、本稿で問題にする毛沢東の自己分裂的思想Ⅱ「対の思想」が、自己矛盾するほどに錯綜した毛沢東の政治思想の研究史の解明のキーポイントとなると思うのである。

(四) 本稿の目的―基本的資料の紹介

文革以前の毛沢東思想の研究史において、現代中華人民共和国建設の父・毛沢東の政治人事、政治理想、社会主義建設方法等は、公式報道以外は黒いベールに包まれて、その真実がよくわかっていなかった。また鄧小平の開放路線後においても、研究者間には毛沢東の政治理想認識には可成りの相違がある。

しかし二〇〇〇年代より毛沢東思想の真実に迫るルポルタージュや実録が出版され、これが毛沢東研究の新しい発展につながる可能性が出てきた。しかし、残念なことに、まだ十分に活用されていない。この事情が、毛沢東思想研究の学説が錯綜する根本原因なのである。現在の段階での毛沢東の政治思想の研究では、金谷氏の貴重な指摘を除いて、中国人の基本的思想である「対の思想」―両面思考との関係を念頭に置いた研究は、皆無であると言える。

本稿で引用する基本的資料について紹介する。李志綏『毛沢東の私生活』は、二二年間、毛沢東の主治医として仕えた李志綏が、公私にわたる毛沢東の言動についてメモ類を基に、波乱万丈に富む毛沢東の生涯に深い理解が得られるよう執筆された貴重な実録である(一七)。だから金谷氏が指摘した中国思想の伝統である「対の思想」が、マルクス主義者の毛沢東のなかで、どのように具体的に展開されるのかを検証するに適した好個の第一次的資料である。

そこで李氏により紹介された毛沢東の言説を通して、毛沢東の政治人事、政治思想、毛沢東の社会主義建設の理想と、「対の思想」との相互関連を指摘する

ことを目的とする。そして毛沢東の「対の思想」の考察を通して、毛沢東や鄧小平マルクス主義理論が変質して、現代中国の社会主義的市場経済路線Ⅱ―国二制度論が生まれてきた歴史的背景を探求する手掛かりとしたい。

一 政治支配と対の思想

李氏は、毛沢東の中国統治方法について、「中国古代の宮廷における権謀術数は、マルクス・レーニン主義よりもはるかに強い影響を彼の思想におよぼしたのではないかと私は信じて疑わない。たしかに毛沢東は革命家であった。中国をつくり変えてふたたび富国強兵の国家にするのが目的であった。ところが、どうやって統治すべきかの教えを、つまり最高指導部にはびこる謀議をどう操作したらよいのかというガイダンスを過去に求めたのである」(一八)と、毛沢東は政治支配のガイダンスを中国の古典に学んだと述べている。この様な毛沢東の中国の伝統的な政治支配方法のための古典の学習が、彼に中国人の基本的思想である「対の思想」を駆使する手法に深い影響を与えた根拠と思われる。

また毛沢東は、「毛は政治闘争の準備にはいるとき、きまってマルクスよりも史書を読みふつけたが、後漢時代の歴史はとりわけうまく書かれており、戦略的な術にはこと欠かない」(一九)と、李氏は述べている。この事実の指摘は、中国伝統の「対の思想」が、毛沢東の政治権力闘争の手段に利用された原因であったと思われる。そこで以下に、毛沢東の政治支配方法と「対の思想」の相互関係について述べてみたい。

(一) 毛沢東の政治人事―人間統御術と「対の思想」

李氏は、「文化大革命の初期ほど健康だった時分はないし、それ以後の数年は

がはかられた。……いったい何が急進主義へと路線変更させたのか……(一六)とも言う。この路線方向の急転換説は、小島氏も渡辺氏と同様の見解であるが(一六)、渡辺氏は、毛沢東の社会主義建設について、「われわれの資本主義はむしろ少な過ぎるのである」と言い、建国期は漸進志向であった毛沢東は、一九五三年に漸進的政策から短期間で急進的な社会主義政策に変化した、との説を展開している。この主張も浜口氏の見解と若干異なる。

(三) 研究史の成果と課題

本稿で紹介した貝塚氏、野村氏、浜口氏、小田氏、渡辺氏、小島氏等の毛沢東研究者の共通認識は、毛沢東は遅れた農業国を近代的工業国に変える社会主義理想を持ち、西洋近代文明を吸収する意図を持ち、ソ連型と異なる中国型社会主義国建設する理想を持っていたということである。しかしまた上述の研究者の間には可成りの相違点や問題点もある。

第一には、小田氏や小島氏は、毛沢東は中国の近代化に西洋近代文明の吸収する必要性を自覚していた。しかし中国文化に適合する範囲でしか受容する意図はなかった。土着的思想が基本で、西洋化は「つまみ食い」的な受容という中国型社会主義建設を意図していたという。しかし開放以前より西洋文化に深く傾倒していた毛沢東は、中国の西洋化を最小限に薄めるような旧中国依然たる伝統的な中華思想の持ち主なのであったのであろうか。

第二には、中国型社会主義建設の過程認識は各研究者では相違する。小田氏は当初から西洋近代化を薄め農村型の近代化を意図していたと言ひ、浜口氏は政治情勢の変化からソ連型から中国型社会主義に方向転換したと述べ、渡辺氏は小島氏とほぼ同じで、急進的思考であった毛沢東は、建国後急速に漸進的社

会主義から急進的社會主義に方向転換したという。このような主張では毛沢東は、ソ連型の漸進的路線から中国型の急進路線へ路線変更したのか、当初から急進的社會主義路線を持っていたのか、まだよく実証されていない。当時の毛沢東の言説と中国共産党幹部の内部事情を明らかにする必要がある。

第三には、貝塚氏、野村氏、浜口氏、渡辺氏、小島氏等の研究者は、「大躍進」と「人民公社」を同一の性格を持つ方向で理解していた。この学説は果たして妥当なのであろうか。

農工業の急激な生産力増進を目指す経済改革の「大躍進」と、政治・経済・教育・軍事のワン・ユニット化を目指す社会構成単位の「人民公社」建設とは別次元で理解しなくてはならないのは、誰が考えても自然な理論であると思う。この学説の混乱の大きな原因は、一九五三年に「過渡期の総路線」を宣言して、一九五八年に「大躍進」と「人民公社」運動がほぼ同時進行しているから、この事実が諸氏の誤解を招いた大きな原因と思われる。

第四には、小島氏は、毛沢東の外国文化吸収方法を、清朝末期の洋務運動と同様な中国伝統思想である「体用の理論」で理解していた。この理論で行くと、毛沢東は中国の伝統文化を破壊しない程度に外国文化を許容する「つまみ食い」者になる。毛沢東は中華帝国の伝統的思想を堅持した解放以前の支配者階級と変わらぬ保守主義者であり、前近代的な中国文化を作り変える革命家Ⅱ社会主義者ではなくなってしまう。しかし一般的な共通認識では毛沢東は革命家であり、旧来の伝統的な支配者階級を打倒したのである。小島氏の毛沢東思想の認識は甚だ特異と言わなければならない。だから小島氏のように、毛沢東思想の分析は、本質(伝統的な中国文化)とその作用である用(外国文化)とする「体用の論理」では、説明ができないのである。

欠な近代的投入財の導入が可能になるといっているのである。まずは集団化ありき、である」(二〇)と、毛沢東は農業の近代化について、「農業の近代化＝協同化による大規模経営→農業機械等の導入可能」のシエーマを描いていた、と言う。

しかし渡辺氏の言うように、農業の大規模経営は、「人民公社」のことを意味しているのかは疑問である。毛沢東の主張の題名が、「農業の近代化について」だからである。従って浜口氏と渡辺氏の毛沢東の近代化路線への理解は、大筋では同一であるが、細部では若干異なっているのである。

ところで毛沢東は、農村の大規模経営という集団化―「合作社」から「人民公社」への建設が、農業の近代化の前提と考え、その後に「人民公社」への農業の機械導入を考えていたのであろうか。しかしこの時点の毛沢東の「農業の近代化について」は、「人民公社」を念頭に置いた発言でなくて、ソ連型の集団農場制度(コルホーズやソホーズ)をイメージした発言であると思える。

なぜなら農業の近代化を目指す「大躍進」と、農業の集団化を目指す「人民公社」建設の指示は、一九五八年八月に同時に発表されているからである(一)。(一)この事実が、「大躍進」と「人民公社」は、全く別次元の問題であることの証左である。また渡辺氏自身、一九五八年八月の毛沢東の「人民公社」設立の決議について、「大規模農業の集団化が農業生産力をいかなる論理で向上させるのか、と言う肝心の論点については何も語っていない。農業の集団化は、毛沢東にあつては経済学ではない。・・・ユートピア思想の産物である」(一二)と述べ、ユートピア思想であると言うからである。従って渡辺氏の近代的農工業技術の投資に「まず集団化ありき」説と、「大躍進」と「人民公社」の同時進行の事実や渡辺氏の「人民公社」＝ユートピア思想説は、前後で自己矛盾している。次に毛沢東の外国文化の受容方法について研究史を紹介したい。

小島氏は、「新民主主義を指導した毛沢東思想」は、「マルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践を結びつけた所産」と定義づけられた。・・・つまり「マルクス・レーニン主義の中国化」である。・・・こうした文脈で見れば、毛沢東思想は中国近代史のなかで見られた近代化の試みの伝統を引き継いでいる。洋務運動で提唱された「中学以体、西学以用」つまり「中体西用」が毛沢東思想の中に継承されているのである。・・・毛沢東思想の「近代化」と「現代化」の実現の戦略は、「農村による都市の包圍」や人民公社運動のように伝統的な農村共同体という「中国的な特色」を利用したものであった。・・・「吸収」される西洋近代は、中国の革命や建設に都合のよいと思われる部分だけの、つまみ食い「だけに終わり、西洋近代の「普遍的真理」の全面的・根底的な「吸収」はあり得ないのである」(一三)と、毛沢東の西洋的近代化の吸収は、西洋思想「つまみ食い」だ、と言う。

小島氏は、「人民公社」運動を伝統的な農村共同体という中国的特色と理解しているのであり、毛沢東の政治思想を、中国古来の伝統を引き継いだ清朝末期の洋務運動理念―「体用の理論」と同一の中国文化優位、外国文化軽視の中華思想であると規定している。小島氏の毛沢東の政治思想認識は、中国人の基本的思想である「対の思想」とは異なり、「体用の理論」(一五)を使用した中華思想の保持という理解である。

渡辺氏は、「毛沢東の愛国主義を特徴づけたのは、急進主義であった。重工業化は社会主義の「公理」であり、毛沢東は建国当初からこれに強く傾斜した。しかしその追求はいかにも急であった。一九五七年の大躍進がその証左である」と言う。しかし「共産党の穏健で漸進的な現実的な路線は、一九五三年八月の毛沢東の重要指示文書「過渡期における党の総路線」において一挙に方向転換

もう一つ平等の実現と生産性の向上のために農業の共同化進められたが、その後ソ連モデルを打開するために大躍進、特に人民公社が生まれたと(五)という。

貝塚氏も野村氏の主張も、人民公社を生産性の向上の実現と理解しており、「大躍進」と「人民公社」を同一に理解しているのが特徴である。

小田美氏は、毛沢東の社会主義建設について、「ただ、社会主義「西洋化」をふくめて「西洋化」の害毒を十分に心得ていた彼は、「近代化」はたしかに社会主義の建設にとつて、それに基づいた中国の進歩にとつて、必要不可欠のものであるにせよ、そこからできるかぎり「西洋化」の影を薄くしようとしたにちがいない」と言う。また「毛沢東は「近代化」を否定したのではない。それどころかその重要性を大きく主張していたし、「近代化」に「西洋化」がともなう必然をも認めていた、ただ、その「近代化」ができる限り土着のものであることを求めていた。その意味で、「農村」はそうした土着の「近代化」を行うためのかつこうな「現場」だった(六)と、一九八〇年代の鄧小平の近代的な開放路線が進行している時代において述べている。

しかし小田氏の言うように、毛沢東は「西洋化」の害毒を十分に心得てこれを否定したのであろうか。私生活において毛沢東はその害毒に浸りきっていた以上(七)、「西洋化」の影を薄めようとしたとは考えられない。

また土着の近代化は、なぜ農村に基盤を置かなければならないのか、都市では不可能だったのであろうか、その回答は小田氏からは得られない。

小田氏は、毛沢東は西洋の近代化を認めながら、西洋型の近代化を薄めるような土着の近代化を志向した、と言う。これは一九五〇年代よりの西洋化への近代化路線と同時進行した、もう一つの西洋化を否定した特殊な中国的路線である「人民公社建設」と「文化大革命」という、自己分裂的な毛沢東の政治

行動を統一的に理解しようとする思索のように思える。

浜口充子氏は、毛沢東の中国型社会主義建設は、東西冷戦の中で一九五八年より激しさを増した対外対内路線の抜きがたい路線対立により、一九五〇年代の「反米連ソ」から一九六〇年代の「反米反ソ」の政治情勢の変化に伴い、ソ連型の社会主義国家建設より、ソ連モデルでない中国型社会主義の模索が始まったとしている(八)。浜口説では、なぜこのような路線転換が起きたのか、路線変更した中国共産党の内部事情が不明である。また浜口氏は、「社会主義総路線」の中に「大躍進」と「人民公社」を取り入れ、同一方向で理解している。

この「大躍進」と「人民公社」を同列に理解するのは、渡辺氏も同様であるが(九)、小島氏の場合は、「一九五八年にはさらに人民公社化や大躍進運動を展開し、共産主義の早期の実現を主張した」と言い、同じ性格を持つ共産主義の実現の方向で理解している(九)。

しかし一九五八年の中ソの対立激化が原因で、毛沢東はソ連型から中国型社会主義に急速に路線を変更したのであろうか。また「大躍進」と「人民公社」運動は、全く同じ方向を持つ中国型社会主義の実現政策であろうか。これらの事実関係は証明されていないのである。

ところで渡辺氏は次のよう言っている。「しかし毛沢東は、「社会主義工業化の最も重要な部門である重工業、そこではトラクターの生産、その他の農業機械の生産、化学肥料の生産、農業に使われる石油や電力の生産等が行われるが、これらのものはすべて農業が共同化されて、大規模な経営になったという基礎があつて初めて使用できるか、あるいは大規模に使用できる」(農業の近代化の問題について『毛沢東選集』)と考えた。毛沢東の考えによれば、農業の共同化—合作社から人民公社建設という前提があつてこそ、生産性の向上に不可

毛沢東の政治理想と対の思想

―李志綏『毛沢東の私生活』

の分析を手掛かりにして(二)

小倉正昭

毛沢東思想の根底には、孔子の肯定と否定、マルクスの肯定と否定、米ソの肯定と否定等、中国人に伝統的で基本的な「対の思想」が存在した。この二元論的思想は、鄧小平の開放路線後の一国二制度論に繋がる淵源であった。毛沢東の社会主義国家建設理論には、劉少奇等のソ連型漸進的社会主義建設路線と異なり、欧米の高い生産力の上に立つマルクス主義原理に忠実な社会主義建設と、現実の農村を基盤とした非マルクス主義的な共産主義建設理論が並存した。

キーワード：対の思想 マルクスの肯定と否定 米ソの肯定と否定 一国二制度論 ソ連型漸進的社会主義 二つの社会主義国家建設理論

はじめに

(一) 「対の思想」研究史の問題点

「対の思想」とは、是非・善悪・表裏等、同一物についての両面思考のことである。この思想は、中国人の伝統的な基本的な思考であることは、市川安司氏(一)、駒田信二氏(二)、金谷治氏(三)等により早くから指摘されている。しかし市川氏・駒田氏・金谷氏の三者の研究には、以下のような問題点が存在する。

市川氏の研究は、北宋時代の哲学者に限っての言及と実証であり、中国思想史の中での現代的意義に言及する研究ではなかった。駒田氏の研究は、日本と中国の文学上の表現認識の相違に言及する事を主眼にした論考である。

金谷氏の研究は、「対の思想」が、現在の中国人とりわけ毛沢東思想―にまで古代よりの伝統が生きていることに言及した卓越した識見を持つ著書である。しかし金谷・駒田氏の研究は、「対の思想」を基軸にして毛沢東の政治理想を本格的に紹介する歴史学的性格のものではなかった。

(二) 毛沢東の政治理想の研究史の現状

中国の歴史学や思想史分野では、毛沢東の政治理想について、どの程度の研究蓄積があるのであろうか。研究史の紹介と問題点を検討してみたい。

貝塚茂樹氏は、毛沢東は「農業国の中国を社会主義的な工業国に変えようとしたのであるが」、「爆発的に増加する人口を養う食料を確保し、重工業への投資を確保するために、農村の集団化をすすめて、大躍進の政策を採用して人民公社を作った(四)」としている。

野村浩一氏は、社会主義国建設について、「遅れた農業国を進んだ工業国に変えていくかという問題があり、これは第一次五カ年計画により実現されるが、

Mao Zedong's Personality and "the Thought of *Dui*"

— Using the analysis of the *Private Life of Chairman Mao* by Li Zhisui as a clue (1) —

Masaaki OGURA*

“The thought of *Dui*” is a two-sided mode of thinking that simultaneously regards two sides of the same entity: a pair of elements that are mutually opposed, such as right and wrong, good and evil, or likes and dislikes. This traditional and basic mode of thinking for Chinese people provides the ground for Mao Zedong's personality, who was a Marxist leader of the Chinese Communist Party. Examples of the “thought of *Dui*” in Mao Zedong can be found in various fields: generous in personality and strong suspicion, political personnel policy, illness and recognition of medicine, recognition of situation, recognition of foreign countries, and recognition of history.

In the case of Mao Zedong, the fundamental source to have acquired the dualist thought that is a Chinese basic mode of thinking was what he learned from experience: mah-jongg, which is a favorite game for Chinese people, and favorite reading of history books on Chinese successive dynasties.

Key words: thought of *Dui*, Mao Zedong's personality, recognition of medicine, recognition of the opposite sex, recognition of foreign countries, recognition of history

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

- (五四) 『毛沢東の私生活』下 二九三頁 参照
- (五五) 『毛沢東の私生活』下 二九三頁―二九四頁 参照
- (五六) 『毛沢東の私生活』下 二四〇頁 参照
- (五七) 『毛沢東の私生活』下 二五二頁 参照
- (五八) 『毛沢東の私生活』下 三五四頁 参照
- (五九) 『毛沢東の私生活』下 三五六頁 参照
- (六〇) 『毛沢東の私生活』下 四〇二頁 参照
- (六一) 『毛沢東の私生活』上 一五頁 参照
- (六二) 『毛沢東の私生活』上 一二八頁 参照
- (六三) 『毛沢東の私生活』上 一五三頁 参照
- (六四) 『毛沢東の私生活』上 一三九頁 参照
- (六五) 『毛沢東の私生活』下 一三八頁 参照
- (六六) 『毛沢東の私生活』下 四〇〇頁 参照
- (六七) 『マオ』(ユン・チアン) 講談社 二〇〇五年 上 五五六頁 参照
- (六八) 『マオ』(ユン・チアン) 講談社 二〇〇五年 上 五六一頁 参照
- (六九) 『世界の名著六四 毛沢東』(小野親爾訳 昭和四四年 所収 参照)
- (七〇) 『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』第七章 新中国婚姻法の基
本問題 仁井田 陞 一九五二年 東京大学出版会 五四九頁 参照
- (七一) 『毛沢東の私生活』上 一五五頁―一五六頁 参照
- (七二) 『毛沢東の私生活』上 三三六頁 参照
- (七三) 『毛沢東の私生活』下 四五頁以下 「毛沢東の女たち」 参照
- (七四) 『毛沢東の私生活』下 五八頁 参照
- (七五) 『毛沢東の私生活』下 五七頁 参照
- (七六) 『毛沢東の私生活』下 三二六頁 参照
- (七七) 『毛沢東の私生活』下 五一四頁 「解題 毛沢東とは何だったのか」 参照
- (七八) 『毛沢東の私生活』下 二二五頁 参照
- (七九) 『毛沢東の私生活』上 一一五頁 参照
- (八〇) 『毛沢東の私生活』上 一六七頁 参照
- (八一) 『毛沢東の私生活』上 一九二頁 参照
- (八二) 『毛沢東の私生活』上 四四四頁 参照
- (八三) 『毛沢東の私生活』上 二〇五頁 参照
- (八四) 『毛沢東の私生活』上 一二〇頁 参照
- (八五) 『毛沢東の私生活』上 一三八頁 参照
- (八六) 『毛沢東の私生活』上 一三八頁 参照
- (八七) 『毛沢東の私生活』上 二〇〇頁 参照
- (八八) 『毛沢東の私生活』上 二〇〇頁 参照
- (八九) 『毛沢東の私生活』上 二〇一頁 参照
- (九〇) 『毛沢東の私生活』上 二〇一頁 参照
- (九一) 『毛沢東の私生活』上 二〇一頁―上二〇二頁 参照
- (九二) 『毛沢東の私生活』上 二〇二頁 参照
- (九三) 『毛沢東の私生活』上 二〇三頁 参照
- (九四) 『毛沢東の私生活』上 一九八頁 参照
- (九五) 『毛沢東の私生活』上 一一八頁 参照
- (九六) 『毛沢東の私生活』下 八六頁以下 「白猫か黒猫か」 参照
- (受付日二〇一一年 八月 三〇日)
- (受理日二〇一一年十二月 二二日)

語る』(上下、上村幸治訳、文藝春秋、2007年/文春文庫、2010年)でも本書を(修正意見をいくつか加えつつ)多数引用している。著者もアメリカに亡命移住し、彼の地でこの著作を執筆した(ウィキペディア「フリー百科事典」参照)。

五以上の事実から考えて、李氏の『毛沢東の私生活』は、頗る真実性が高く、毛沢東の私生活を知る上での第一級の書であることは疑いえないであろう。そもそも中国で発売禁止処分になること自体に、信憑性の高い実録的価値が存在する。反論書の内容も真実を覆すような核心部分がなく、枝葉末節である。

- (一八) 『毛沢東の私生活』上 一一〇頁 参照
- (一九) 『毛沢東の私生活』上 四八二頁 参照
- (二〇) 『毛沢東の私生活』上 四八二頁 参照
- (二一) 『毛沢東の私生活』上 一一七頁、上一三三五頁 参照
- (二二) 『毛沢東の私生活』上 一一七頁 参照
- (二三) 『毛沢東の私生活』上 一一六頁 参照
- (二四) 『毛沢東の私生活』下 二七四 参照
- (二五) 『毛沢東の私生活』下 三五一 参照
- (二六) 『毛沢東の私生活』下 三四〇頁 参照
- (二七) 『毛沢東の私生活』下 三四三頁 参照
- (二八) 『毛沢東の私生活』上 一三五頁 参照
- (二九) 『毛沢東の私生活』上 一七四頁 参照
- (三〇) 『毛沢東の私生活』上 二〇五頁 参照
- (三一) 『毛沢東の私生活』上 二五頁 参照
- (三二) 『毛沢東の私生活』上 一九八頁 参照

- (三三) 『毛沢東の私生活』上 二〇五頁 参照
- (三四) 『毛沢東の私生活』上 二〇六頁 参照
- (三五) 『毛沢東の私生活』上 八七頁 参照
- (三六) 『毛沢東の私生活』上 九六頁 上一〇八頁 参照 『中国の歴史 第九巻 人民中国の誕生』野村浩一 講談社 昭和四九年 四三四頁 参照)

(三七) 『マオ 上・下』ユン・チアン 講談社 二〇〇五年 上 五五三頁 参照

(三八) 『毛沢東の私生活』上 七四頁 参照

(三九) 『毛沢東の私生活』上 九六頁 参照

(四〇) 拙稿『対の思想と状況の変化—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(一)』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四四巻 二〇一一年 参照)

- (四一) 『毛沢東の私生活』上 三七五頁 参照
- (四二) 『毛沢東の私生活』上 三七九頁 参照
- (四三) 『毛沢東の私生活』下 三五頁 参照
- (四四) 『毛沢東の私生活』下 三六頁 参照
- (四五) 『毛沢東の私生活』上 一四〇頁 参照
- (四六) 『毛沢東の私生活』上 一四〇頁 参照
- (四七) 『毛沢東の私生活』上 一三九頁 参照
- (四八) 『毛沢東の私生活』上 一四〇頁 参照
- (四九) 『毛沢東の私生活』下 一四七頁 参照
- (五〇) 『毛沢東の私生活』下 三九八頁 参照
- (五一) 『毛沢東の私生活』下 四一八頁 参照
- (五二) 『毛沢東の私生活』下 三九九頁 「八二 がんの手術を禁ずる」参照
- (五三) 『毛沢東の私生活』下 四一四頁 参照

- (五) 宮崎市定等「東洋学から見た“毛王朝”」『中央公論』緊急増刊号 一九六七年 参照
- (六) 「毛沢東主席との一時間半」『毛沢東ノート』竹内実 新泉社 一九七二年 所収 七二頁 参照
- (七) 「毛沢東伝」『毛沢東ノート』竹内実 新泉社 一九七二年 第三刷 所収 四七頁 参照
- (八) 「毛沢東伝」『毛沢東ノート』竹内実 新泉社 一九七二年 第三刷 所収 四七頁 参照
- (九) 『岩波講座 現代中国 第四巻』所収 VI「中国社会主义における毛沢東の映像と残像」二二九頁以下 岩波書店 一九八九年 参照
- (一〇) 『マオ 誰も知らなかった毛沢東 上・下』『ユン・チアン』講談社 二〇〇五年
- (一一) 『毛沢東、鄧小平、そして江沢民』渡辺利夫 小島朋之他 東洋経済新聞社 一九九九年一月 第二刷 第二章「毛沢東の思想、人物そして政治行動」 六九頁 参照
- (一二) 『毛沢東の私生活 上・下』李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第八刷 参照
- (一三) 『毛沢東の私生活上』二五頁 参照
- (一四) 『毛沢東の私生活上』二五五頁 参照
- (一五) 『毛沢東の私生活上』二六頁 参照
- (一六) 『毛沢東の私生活上』二五五頁 参照
- (一七) 歴史資料文献として引用する歴史的意義について補注しておきたい。
- 一「著者あとがき」にもあるように、この書物は単なる個人的執筆に係る毛沢東の伝記ではない。毛沢東の公私にわたる貴重な発言を正確に記録した歴史実

録なのである。それは孔子や孟子の言行録である「論語」や「孟子」や歴代王朝の皇帝の「実録」と変わらない歴史的意義を持つ二〇世紀の世界的指導者・毛沢東についての大変貴重な歴史資料文献なのである。

本書の訳者である新庄哲夫氏も、「文庫本訳者あとがき」において、「毛沢東時代の貴重な第一次史料としてはかりでなく、人間臭に満ちた興味津津の回顧録」としている。『毛沢東の私生活上』下 五三七頁 参照

二「現在、李氏が亡命先のアメリカで出版した本書は、中国では発売禁止処分」にされている。また本書の出版後に中国では、反論書として林克等の執筆による『毛沢東の私生活』の真相 元秘書、医師、看護婦の証言』村田忠禧訳・蒼蒼社、一九九七年八月）が出版された。

三「この本によれば李は保健医師に過ぎず、毛沢東と話をする機会ほとんどなかった。李は毛沢東の前に出ると緊張して話もできなかったし、婦長に様子を聞いて済ませ、出来るだけ毛沢東に会わないようにしてきた。重要な会議には参加する資格がなかった。李は泳げず黄河を、毛沢東といっしょに泳ぐ写真は偽造であり、実際には李自身は写っていない。毛沢東の側近は毛自身からの手紙を多数持っているのに李は一つも持っていない」と指摘し批判している(ウイキペディア「フリー百科事典」参照)。

四「しかしこの反論書出版後に、この反論を覆すような真実が多く発見・発表されている。例えば、①北海閑人『中国がひた隠す毛沢東の真実』(廖建龍訳、草思社、二〇〇五年)に「私生活」と同じ描写がある。著者は引退した中国共産党古参幹部のペンネーム。②しかし後に『毛沢東の私生活上』に載っている写真以外にも、李が毛の非常に近くにいる様々な写真が発見されている。③晩年の周恩来と毛沢東との関係を描いた高文謙『周恩来秘録 党機密文書は

」を持つ人物であった。

三―李氏は、毛沢東の人格について、「毛沢東は複雑かつ矛盾の多い人物だった」(八二)と述べていたが、複雑で矛盾に満ちた両面思考の人格は、理屈抜きの中国人の基本的民族性なのである。しかし特に毛沢東の場合には、大多数の中国人が古来より好んだ賭博であるマージャンや、数多くの中国歴代の歴史書を愛読することにより体得してきたものであった。特に毛沢東の場合の「対の思想」の淵源は、中国の歴史書を愛読する所から生まれて来たものであったといえよう。

四―毛沢東の人格に由来する毛沢東思想の根底を規定しているのが、中国人の伝統的で基本的な両面思考―「対の思想」であることが判明した以上、毛沢東思想を西洋で生まれ育ったマルクス・レーニン主義を中国の実情に即して創造的に発展させた高度な思想であると、単純に規定する事は不可能であろう。毛沢東の学んだ西洋で生まれた弁証法理論―一元論思想であるマルクス・レーニン主義が、中国人の二元論的思想―「対の思想」の影響を受けて大きく変質してしまったものが、毛沢東思想であると規定するのが正しい理解であると思われる。李氏は、毛沢東がマルクス主義の哲学的発展と自負する『実践論』『矛盾論』について、ソ連側のマルクス主義者の認識と毛沢東の自己認識の違いについて、以下の様に記録している。

「耳にした噂によれば、スターリンは一九五三にソ連の著名なマルクス・レーニン主義の哲学者P・F・ユージン在北京駐在のソ連大使に任命し、毛沢東の思想を研究してマルクス、レーニンに沿うものかどうか報告するようにさせた。主席はしばしばユージンをとがねて夜遅くまで論争したが、大使は毛沢東の考え方をしつこいまではねつけた。主席は面白くなかった。「哲学は本当にマルクス、レーニンで頂点に到達したのか」。彼はときたま声高にそういぶかるのだった。「中国の革命的経験を織り込むことで新しい哲学思想をみ出せるのではなからうか。」「……」(九五)、述べている。

従って毛沢東がマルクス主義哲学の創造的発展と自負する毛沢東思想は、西洋のマルクス主義者から見れば、マルクス・レーニン主義を大きく逸脱しており、中国の伝統的思想である「対の思想」により特殊中国的にマルクス・レーニンを解釈し直したものであり、マルクス・レーニン主義の中国型修正主義的思想であった。

五―毛沢東に見られるソ連と英米の賛美という自己矛盾的な国家体制認識論や、鄧小平の「白猫でも黒猫でもよい。鼠を執る猫は良い猫だ」(九六)という有名な社会主義と資本主義の対立的な両制度を肯定する中国人の伝統的な基本的思考である両面思考―「対の思想」には、開放路線後の現代社会主義中国において生産力の発展を実現するために市場経済制度を導入して、社会主義と資本主義の両制度の併存を肯定する一国二制度論の導入に発展して行く根本的原因が存在したのである。六―ところでこの毛沢東の人格上の「対の思想」―同一物の両面思考―が、毛沢東の政治理想の上に展開されると、一体どのような具体的な姿をして現れるのであろうか。今後の検討課題としたい。

(二〇一一年八月三十一日 稿了)

注

- (一)『程伊川哲学の研究』市川安司 東京大学出版会 一九六四年 三頁 参照
『中国思想を考える』金谷治 第三章 对待 中公新書一一二〇 一九九三年 第八刷)
- (二)『新編 対の思想』駒田信二 岩波同時代ライブラリー一三〇 一九九二年 第一刷、「対の思想―あるいは影の部分について」参照 原載は『新潮』昭和三九年 『対の思想』 参照)
- (三) 金谷治 『前掲書』一一五頁―一一六頁 参照
- (四) 貝塚茂樹 『毛沢東伝』岩波新書 岩波書店、一九五六年 参照)

海岸一帯を支配下におき数多くの異民族を単一支配のもとに統合したと指摘する」(八九)と述べている。

秦の始皇帝について、「毛にいわせれば、始皇帝が儒者を生き埋めにしたのは、中国統一と帝国建設という皇帝の努力をはばもうとしたからにすぎないのである。…始皇帝をみる場合、枝葉末節を誇張して偉大さを無視すべきでない」と毛は主張した(九〇)という。

則天武后について、「毛沢東もまた則天武后を高く評価していた。この女帝をどう思うかねときかれて、私は率直に答えた。「あまりにも疑い深く、あまりにも多くの密告者を擁し、あまりにもたくさんの人間を殺しました」「いや則天武后は社会改革者だったのだよ」と毛沢東。「貴族や有力な大家族を犠牲にして中小地主層の利益を推進した。」…(九一)と結論している。

そして隋の煬帝については、「中国の民衆からみれば、煬帝は極悪人のひとりだ。…大運河の開鑿を命じた大土木工事ではおびただし人命が失われた。が、毛は煬帝を最高の皇帝と位置つけた。…大運河の建造で中国は北と南が一直線に結ばれ、国家をひとつに結びつけるベルトとなった。煬帝もまた偉大な統一家だというのである」(九二)というのである。

これらの諸例を見ても、毛沢東の歴史観は、西洋教育を受けた李氏のみならず、日本一般の歴史研究者には到底想像がつかない冷酷な発想を持っており、歴史上の残忍な皇帝について、その長所と短所の両面を見る「対の思想」の歴史認識を持っているのである。

そして最後に李氏は、「毛沢東の歴史観は驚くべきものであったばかりでなく、それはおのずと毛沢東の人物をそっくりそのまま物語っていたのである」(九三)と、毛沢東を評価している。このような冷酷な歴史上の人物の中に偉大さをも見る両面思考の

歴史観は、毛沢東の複雑な人格と軌跡を一にしていることについては、容易に理解できであろう。

繰り返しになるが、李氏は、初対面での毛沢東の印象について、「私にいえるかぎりでは、最初の面談でしめされた親しみが忘れがたいにもかかわらず、毛沢東には人間的な感情が欠落しており、したがって愛することも、友情をいだき、思いやりをいだくこともできないのであった」(九四)と述べていた。毛沢東の人間性についての「対の思想」――親しみ深さと愛情の欠落――は、冷酷な暴君に偉大さを見て、これらの人物を受する人格的な根拠であった。

おわりに

以上、毛沢東の人格と対の思想との関係について、李氏の記録した貴重な実録資料である『毛沢東の私生活』より引用して、毛沢東の人格と対の思想との関係を多面にわたり検討して紹介してきた。その結果については、凡そ次のように要約することができであろう。

一―毛沢東の人格に言及している研究者は少数であるが、貝塚氏、竹内氏、スノー氏のような聖人君子とか、偉大な人物とか、それとは反対に徳田氏、小島氏、ユン・チアン氏が言うよう猜疑心の強い、冷酷非情な人物、皇帝的権力者とか、カリスマ的人物、狡猾な人物というような、単純な人物ではない。毛沢東は決してそのような一面的な性格の持ち主ではなかった。もつと複雑で矛盾に満ちた両面的な性格を持っていた。

二―毛沢東の人格は、「寛大であると同時に猜疑心が強く」、「近づきやすい庶民的であると同時に近づきがたい皇帝的性格を持ち」、「禁欲的であると同時に快樂的」性格を持つなど、中国人に特有な伝統的で基本的思想である両面的思考――「対の思想

思考が混在・共存していたと言える。次に毛沢東の中国歴代の歴史認識についての発言を引用して、毛沢東の「対の思想」を検討したい。

八 毛沢東の中国の歴史認識と対の思想

―毛沢東の「対の思想」意識の淵源―

毛沢東の中国人としての基本的思考である「対の思想」を持つ人格的特徴は、中国の歴史書を受読したところに一つの淵源があったと思われる。李氏は、毛沢東思想の淵源は、中国の歴史に伝統的発想を学ぶところにあったと述べている。

毛沢東は、「私はまた歴史の勉強が大切だと思う。歴史を勉強しないと、どうして現在が生まれたのかわからない(八四)と、李氏に述べている。

また毛沢東は李氏に対して、「主席は話題をかえた。中国は世界の三大貢献をしたというのである―漢方、曹雪芹の小説『紅樓夢』、そしてマージャンだ。マージャンをやるかね、と毛沢東は聞いた。・・・『いいか。マージャンをみくびちやいけな』と主席はたしなめた。「牌は合計百三十六枚で、四人とも自分の手の打ちばかりでなく、テーブルの捨て牌まで気をくばつていなくちゃならない。あとの三人がどんな打ち方をしていいのか読みながら、そんな込み入った情報をつとりまとめて勝敗の可能性を計算するのだ。」(八五)と述べたという。

毛沢東自身は、自分の手の内だけでなく相手の手の内までを読む複雑な思考方法は、古来より大多数の中国人が好んで行う賭博であるマージャンから学んだと言う。

しかしこれに対して李氏は、「マージャンは確かに戦略のゲームであり、毛沢東は中国の偉大な戦略家であると同時に一流のマージャンうちであった。しかし私にいわせれば、毛の戦略家としての卓越さはマージャン以外の拠りどころ―中国の古典的な兵法

書『孫子』、中国の史書、羅貫中の『三国志演義』を読むこと―から生まれたのだ。が、戦略家としての英知に磨きをかけることだけが、マージャンを好んで打った理由ではない。・・・(八六)と、毛沢東の両面思考―対の性格は、マージャンだけでなく、多くの中国歴史書の愛読に由来している、と述べている。

そして李氏は、「毛沢東を夢中にさせ大半の時間を割かせたのは中国の歴史であった。」「彼は歴代王朝の歴史を紀伝体で記した二十四史を愛読した」、「現在の政治状況を過去のそれに重ねあわせてみるという読み方をした(八七)と、言っている。

どれも毛沢東が中国の歴史書を受読していたのか理解できるであろう。毛沢東が好んだマージャンだけでなく、この史書の愛読の中で、自然に中国人の伝統的で基本的思考である「対の思想」を体得していったと思われる。

それでは毛沢東は、どのように歴代の有名人物を理解していたのであろうか、有名人物についての毛沢東の対の思想を検討してみたい。

毛沢東の歴史上の有名人物の理解方法に対して、李氏は、「毛の歴史観は大多数の中国人とは異なるのもであった。彼の政治感には道徳など入り込む余地はなかった。その毛沢東が中国の歴代皇帝に己を擬するばかりか、最高の敬意を史上最高の無慈悲かつ残忍な暴君のためにとつておいたことを知って、わたしは非常な衝撃を受けた。目的を達するためならば、どんな冷酷かつ専制的な方法を用いることも辞さない気だつた(八八)と述べている。

毛沢東は、冷酷な暴君の良い面と悪い面の両面を同時に見る両面思考―「対の思想」を持つていたと述べている。そして具体的な人物について李氏は、毛が称賛したのは、紂王、始皇帝、則天武后、煬帝であると述べている。

殷の紂王について、「だが、そうした悪逆非道ぶりも、紂王のなしたげた業績にくらべれば何ほどでもない」と毛は主張した。紂王は中国の領土を大いに拡張し、南東部の

ダンス・パーティーは容認でできるものではなかった。八月下旬、江青は主席を説いて中止させた。「おれは坊主になってしまったよ」。その直後、主席は私にばやいた。……ところが数週間のうちに、若い女性がまた毛沢東のもとにやってくるようになる。……文革の絶頂期、天安門広場が熱狂的な群集であふれ、市街が混乱を極めていたときでさえ、毛沢東は皇帝ばりの生活をむさぼりつづけ、大会堂のなかでも中南海の内側でも、女たちを相手に楽しんでいたのである(二七八)と、述べている。

「私は聖人ではないし僧侶でもない。そんなものにはこんりんざいなりたくないよ」と、絶対に聖人や坊主にならないと言っていた往年の毛沢東も、文化大革命の禁欲主義に刺激を受けて、一時的に女遊びを止めているのであるが、それもつかの間で再び女遊びをはじめた、と李氏は述べている。

次に毛沢東のアメリカとソ連という対立する国家体制を持つ二代大国に対しての外国認識について紹介して、毛沢東の「対の思想」の検討を試みたい。

七 毛沢東の外国認識と対の思想

―ソ連とアメリカの両面肯定―

李氏は、毛沢東のアメリカに対する敵対性と親近感という自己分裂的な外国認識と、ロシア語と英語の学習について、

「君は中学を出てから、完全にアメリカ式の教育を受けた」と毛沢東。「蒋介石と国民党に対する解放戦争中、アメリカは蔣を助けた。アメリカはまた朝鮮でもわれわれと戦った。それでも私は、アメリカ式やイギリス式の訓練を受けた人たちに働いてもらいたいと思う。私は外国語に興味がある。ロシア語を学ぶべきだという者もいるがね、私はいやだ。むしろ、英語のほうを学びたい英語も教えてくれるな」(二七九)と、初

対面時に毛沢東は李氏に述べたと述べている。

毛沢東は、アメリカに対しては敵対的態度と高度文化への憧れという、相矛盾するアメリカ認識を持っていたのである。また社会主義国・ソ連への親近性と、同時に資本主義国・アメリカへの親近性という両面性をも持ち合わせていたのである。

また毛沢東は、アメリカとイギリスについても、英米賛美と英米敵体制という肯定と否定という「対の思想」を持っていたのである。毛沢東は李氏に英米賛美について、

「アメリカ合州国はまた、多くの熟練技術者を養成してくれた」と主席はつづけたが、普通の中国人なら到底考えられない発言だろう。合衆国はまだ公然と中国につて「敵性国家第一号」のレッテルをはられており、そんなアメリカを称賛するのは革命的であつた。「すると君たちはみんな英米系の学校を出たんだな。私は英米両国で訓練を受けた人たちが好きだ。」(二八〇)と述べている。

他方、李氏は、毛沢東の英米批判について、「朝鮮戦争中、アメリカ軍が中朝国境の鴨緑江に到達したとき、私はスターリンにたいしわれわれは軍隊を派遣して戦わなければならぬと言つてやつた」ところが、スターリンは「ノー」の返事をした。第三次世界大戦を誘発するものとおもつたからだ。……とにかく毛は戦う決意だったので、ソ連の兵器がほしかった(二八一)と述べている。

また李氏は、「金門島砲撃はアメリカがどこまでどう出るか、見きわめようとする挑戦にほかならなかつた。毛は何週間にもわたつて砲撃をつづけた」(二八二)と述べ、毛沢東はネルーに、「帝国主義者との戦いで勝利をおさめるためならば、原子爆弾で数百万人の人民を失つてもかまわない」とのべたことも、……原資爆弾で一千万か二千万の人間が死んだところで恐れるにたりない(二八三)と述べている。毛沢東は反米・反帝国主義者である、と言つたのである。

従つて毛沢東には、帝国主義国の代表であるアメリカへの賛美と非難という、両面

童養媳、売買婚の禁止、婚姻は男女の自由意思によるなどを内容としている(七〇)。毛沢東は女性解放運動の先頭に立つ近代主義者であったと言えよう。

ところが他方では、毛沢東は 新憲法に公表された女性の位置の向上による男女平等性、一夫一婦性の奨励、畜妾の禁止などの男女同権論主義とは全く異なる、女性の権利蔑視、自己の奴隷として扱い、実質的な重婚を強制する女性遍歴を生涯にわたり繰り返していたのである。李氏は、毛沢東の素行を以下のように述べている。

「数年たつてからようやく、これらダンスパーティーの真の目的を了解するようになったのである。党中央警衛団所属の文化工作隊は公式に説明されているように、団長の汪東興が警衛団(八三四一部隊)の慰問、娯楽用に創設したのではなく、じつは毛主席を慰めるのが狙いだった。文化工作隊には一段の若い女性、容貌、タレント性、政治的信頼性を基準に選ばれた娘たちがいた。歳月を経るにしがた、こうしたダンスパーティー、そしてパーティーに参加した女性の役割は、私にしてからが思わず目をおおいたくなるほど露骨なものになっていった(七一)と言う。

毛沢東の女性遍歴は、平和な新中国になつてから始めたのではない。李氏は、「王実味は作家で、延安における共産党について痛烈な批判の書を出し、党の指導者は禁欲主義と平等主義を説きながら甘い生活を送っていると告発したのだった。指導者がダンスに興じているあいだに、一般の中国人は日本軍の侵攻と闘いながら塗炭の苦しみにあえていた」・・・王実味の告発はあたつていと思つた。彼は私が中南海で目撃したとおなじ腐敗ぶりを批判したのであった。共産党の墮落はすでに延安時代からはじまつていたのだ、と私は思い知らされたのである(七二)と、解放以前に共産党の兵士達が苦闘している最中での毛沢東の女性遍歴の実情を述べている。

毛沢東の若い未婚女性に狙いを定めた女性遍歴の性生活は、李氏の「毛沢東の女たち」(七三)の節に詳しい。李氏は、「道教の性的実践は健康をたもつための

手段だという毛沢東の主張は、単に自分の性的欲望を満足させるための言い訳に過ぎなかった(七四)と、不老長寿を説く道教に名を借りた女性狩りを、毛沢東は繰り返していたと述べている。

そして李氏は、「毛沢東は女たちに対し他のだれにも求めたのと同じ忠誠を求め、結婚するには毛の許可を必要とした。ところが、その許可たるや通常、毛に捨てられてはじめて与えられるのだった。(七五)と、毛沢東は未婚女性を自己の奴隷として扱っていたという。

文革時においても毛沢東は、公的生活での禁欲主義と私生活での快楽主義を追求していた。李氏は、「禁欲主義は文革の表向きの合言葉であったが、党の教えが禁欲的かつ道徳的になればなるほど、主席自身はさらに快楽的な生活にのめりこんでいった。主席はいつも群がる若い女性にかしずかれていた。しかも文革の最盛期にあたるこの時期には、毛沢東はときとして同時に三人、四人、あるいは五人以上の女たちとベットのともにしていった(七六)と、述べている。

アンドリュウ・ネイサン氏は、李氏の『毛沢東の私生活』の解題を書く中で、「女性が料理のように注文された。毛主席の名において男女間の純血主義が唱導されながら、彼の性生活は宮廷の中心的プロジェクトであった。・・・国家の道徳観を守護するはずの党および軍の政治部門は、堅実なプロレタリアートの出身で見事な肉体的外観を持つ若い女性を駆り集め、ダンスパーティーで最高指導者の相手をつとめさせたばかりでなく、場合によってはベットの相手までさせたのではないかとされる(七七)と、自己分裂する毛沢東の異性認識を述べている。

李氏もこの毛沢東の性生活の自己分裂性について、「つかの間だったが、北京にもどつた直後はみずからの文化大革命の禁欲主義に刺激を受けたのか、毛沢東も女遊びをあきらめる。・・・江青の新しい信条からすれば、

毛沢東は李氏に次のように述べている。

「後年、毛沢東をよりよく知るようになってから、毛は買宝玉にかなり自分が投影されていると思ひこんでいるように受けとめられたのだ。……毛もまた、若い女性を誘惑したがる反抗児みたいなどころがあり、身辺には愛人やコン・ニョンを侍らせた。しかし毛は宝玉とちがひ、決して出家しなかった」。「私を聖人君子だと思つてはいけな」と毛は、まだ接触の月日が浅い頃に警告を發した。「私は聖人ではないし僧侶でもない。そんなものにはこんりんさいなりたくないよ(二六四)と、言うのである。

現実の生活を快楽的に享受する、現実の欲望に非常な関心を持つ毛沢東の立場が、自己の言葉で表現されている。毛沢東には国家主席としての公式的報道では知られなかつた退廢的な私生活を、平然と認めて自己矛盾することがなかつたのである。

(二)ブルジョア生活の否定

しかしその一方で毛沢東は、李氏に文革の必要性について、「われわれは経済において社会主義の基盤を確立したが、しかし上部構造——文学や芸術——はあまり変わつていない。過去の人間がいまだに文学や芸術を支配しておる。……黨員さえ熱心に封建的、資本主義的な芸術を推進しながら、社会主義的芸術をかえりみない。ばかげた話だ(二六五)とも述べている。

ところで毛沢東はブルジョア文化を否定して、文革中は一時的にダンスパーティーもやめている。どう見ても毛沢東の思考構造が自己分裂していると思なれば、毛沢東の文化行動が理解することはできないであろう。毛沢東の文革時におけるブルジョア文化の否定と肯定という、自己分裂性を端的に実証しているのは、文革の発動中に極左派の江青の提案でなされた西洋映画＝ブルジョア文化への興味の深さである。

この辺の事情について李氏は、

「主席はもはや活動的でなくなり、視力がおちてきたために読書もしなくなつてい

た。江青の提案で書齋は映写室にかわり、香港、日本、アメリカから輸入された映画を見はじめた。「カンフー」ものが毛のお気に入りであつた(二六六)と言つてゐる。

新中国建国の初期より深く西洋ブルジョア文化に関心の深さを示していた毛沢東であるが、晩年において文革を發動した時点においても、西洋ブルジョア文化への興味は衰えることは全くなかつたのである。ブルジョア文化を否定する文革のリーダーの江青も、このブルジョア文化への関心の深さは毛沢東と同様であつた。

ユン・チアン氏も、毛沢東の私生活の質素ぶりとは、多くの別荘などの豪華な贅沢生活を好む、自己分裂性を指摘している(二六七)。そしてまたユン・チアン氏は、「毛沢東ほど自分の欲望を際限なく追及する一方で人民の欲望を徹底的に否定した矛盾だらけの支配者は、他に例を見ない。こうしたダブル・スタンダードは……(二六八)も言い、毛沢東は矛盾だらけの、自己分裂的な人間だとも述べている。

次に毛沢東の女性問題認識について、公私の主張と行動の食い違いや自己分裂性格についての主張や行動を紹介して、毛沢東の「対の思想」の検討を試みたい。

六 毛沢東の異性認識と対の思想

—純血主義の唱導と女性遍歴の生活—

中国共産党の父権からの女性解放の最初の理論となつたのが、毛沢東が一九二七年に出した「湖南省農民運動視察報告」(二五七)が初めてである。「毛沢東によれば……この三つの権力のほかに女の場合にはなお夫権すなわち男子からの支配を受けている(二六九)と言つ。

また一九五〇年に發布された新婚姻法の基本精神は、封建的な婚姻制度の廃止を否定して、婚姻の自由、一夫一婦制、男女の権利の平等、重婚・妾の制度・

東は文化大革命が誤りだったとは決してみとめなかった。しかし林彪の裏切りにより戦略の変更が必要であることをさとしたのである。主席は周恩来に、失脚した多くの人たちの名誉回復の作業を一任した。(五九)と、毛沢東は「二月逆流」は、実は陳毅ら毛沢東に忠実な古参幹部が、林彪らの過激派に対する反撃であったと肯定的評価の変更したのである。そして毛沢東は最終的に林彪を評価して、「右派的な急進主義者、修正主義者であり、党を分裂させようとしながら党と国家を裏切る陰謀をたくらんだ」と断定して、林彪事件に決着をつけている(六〇)。

毛沢東は主席の地位回復のために発動した文革を阻止したことで、右翼ブルジョア主義者⇨反動主義者として党中央より追放した古参幹部への否定的評価を、林彪の裏切り行為という状況の変化により、毛沢東に忠実な古参幹部等の林彪等の過激派への反撃行為であったと、肯定的な評価に逆転的理解を行ったのである。

政治状況の変化に応じて、林彪⇨味方が敵になり、陳毅⇨敵が味方になり、極左が右派になり、右派が左派になるのであり、党内の人事評価を一八〇度変化させた毛沢東の柔軟性思考である「対の思想」が、典型的に表れた好個の実例である。そしてまた毛沢東は文革中においても、常に人事のバランスを忘れなかった。

「毛沢東は極左派グループをなだめるために、騒ぎを助長させたとして弔辞を読んだ穏健派の鄧小平を追放した。しかし常に人事のバランスを忘れない毛主席は、党中央委員会第一副主席に華国鋒を指名することで極左派を失望させる。こうして華国鋒は政府の最高責任者、また毛沢東が選んだ党主席の後継者として追認されたのであった(六一)と、李氏は述べている。

毛沢東は、極左派と穏健派の人事バランスに腐心して、一方に偏らない両側面を睨む政治感覚を持っていたのである。これら上記の二つの事実は、毛沢東が極左派的思

想と穏健的思想の両面―「対の思想」を持っていたことの証明でもある。次に毛沢東の公私の生活における「対の思想」を検討してみたい。

五 毛沢東の公私の生活での対の思想

李氏は、毛沢東の私生活にける禁欲的な清貧生活と公的生活での豪勢な皇帝的生活という、自己分裂的な公私の生活について、

「毛沢東はこれまで禁欲的な生活、模範的な清貧な生活を送ったと説明されている。死後に住居が公開されたとき、着ふるした衣服類やスリッパのたぐいが、民衆との接触を失わないために贅沢を犠牲にした証拠として一般に公開された。毛は農民の出であり、簡素な好みがあった。どうしても避けられない場合にかぎって服を着用し、それ以外は一日の大半をベットで過ごし、バスローブしか身につけず、靴下を履かなかつた。…それでいながら毛沢東は皇帝然とした生活をおくっていた。…中国の帝政時代にとられた歴代の皇帝を守るための念入りな警戒態勢の名残でもあった(六一)と述べている。李氏は、毛沢東は質素な私生活と豪勢な公的生活という、正反対の両面を持っていたとしている。

毛沢東のダンスパーティーの意識について李氏は、「毛沢東がダンスパーティーを開くと知って、私は驚愕した。革命後、社交ダンスは頹廢的、ブルジョア的だとして禁止され、ダンスホールはすべて閉鎖されたのだ。しかし中南海の城壁内、主席亭のちようど北西にある巨大な「春運齋」では、毛沢東は週一回ダンスパーティーを開いていた(六三)という。毛沢東はブルジョアの退廢文化の公式的な禁止と私生活での容認という、相矛盾する二重人格的生活を送っていたのであった。

(一)ブルジョア生活の肯定

席まで批判するということで応じたのだった。文革中、毛は党や政府のやっかいな官僚主義の頭越しに、自分を崇拝していると知れた人民大衆のもとへと向かった。そして若者こそだれよりも信用できる見方であると考えた。若者だけが古い政治勢力と戦う勇氣を持つ、毛沢東は七月、われわれがまだ武漢に在る際にそう語ったものである。「われわれは造反、すなわち革命をおこすには若者たちにたよらなければならぬ。そうでなければ、あの牛鬼蛇神どもを倒すことはできないだろう」。(五六)と云う。

「あの牛鬼蛇神どもを倒す」とは、劉少奇や鄧小平の党中央幹部を打倒することを意味しているのであるが、他方で毛沢東は、自己の身の安全のためならば、造反運動を否定するのである。このような事情について李氏は、以下のように述べている。

「公安体制を断じて崩壊させはならない」と主席は私に言った。主席は周恩来に指示をだし、周恩来はかわつて、主席付きの者はだれであれ革命的な造反運動に参加してはならないと言いわした。・・・「おれがそう言ったとみんなにつたえろ」。毛沢東自身の安全確保がかかっていたのである。みずから仕掛けた騒乱の中にあつて、主席は自身の安全を確実なものにしたかったのだ。(五七)

つまり毛沢東は、政治的敵対者を打倒するために若い世代に造反運動を呼び掛けると同時に、自己の生命と地位の安全を保証するために側近の造反運動への不参加を命令するという、造反運動の肯定と、他方で造反運動を否定するという、自己分裂した文化大革命を断行したのである。

次に毛沢東の「二月逆流」についての逆方向の理解―「対の思想」について述べてみたい。一九六七年二月、文革の行き過ぎ、紅衛兵の狂気、林彪国防相の誤った指導に対する陳毅らの数少ない最高幹部の批判について、毛沢東は自己の唯一の支援者である林彪の批判を受け入れる。李氏はこの政治過程について、

「この書簡をうけとったのち、毛沢東は対応策を練るため中央文革小組のメンバー

数人を集めた。譚震林、陳毅らは君主制の復活をはかり、文化大革命路線を逆行させようとしているとした林彪の非難を受け入れる。文化大革命を阻止しようとした彼らのころみは「二月逆流」として知られるようになった。毛の非難に勢いをえて、林彪と江青は自分たち批判した人物への全国的キャンペーンを開始するのに必要な口実を手に入れた。新たな追放の波が起つた。陳毅は外相のポストを追われる。(五八)と述べている。毛沢東は、文化大革命を遂行するのを阻止した反革命分子を「ブルジョア主義者」として、林彪や江青らの極左派の急進主義者の意見を聞き入れて、古参幹部らを次々に解任していったのである。

しかし毛沢東は、最も信頼をしていた林彪が、一九七一年九月、毛沢東を暗殺し国家主席を奪い取ろうとする野望が発覚して、ソ連逃亡を企て外モンゴルで墜死事件により、文革の推進を見直すことに毛沢東は迫られた。

毛沢東が自分の味方と思っていた林彪が、実は敵対者であったことに目が覚めるや、自己の敵と思っていた陳毅らの古参幹部が、逆に毛沢東に忠実であった事実が判明することになり、毛沢東は全く逆の「二月逆流」の再評価をしたのである。この事実について李氏は、以下のように毛沢東の主張を述べている。

「毛主席は(シアヌーク)殿下と対話中、失脚させた指導者たちとの和解をほのめかす。・・・その身近な同志とは林彪なのですが、本当は私に「反逆した。私をささえてくれたのは陳毅だったのです」ついで毛沢東は「二月逆流」について語りはじめ、じつをいえば自分は「二月逆流」を林彪はじめ王力、閔鋒、戚本禹ら文化大革命で失脚した過激派に対し陳毅ら忠実な古参幹部たちが反撃するところみとみなすようになったのだと述べた。「逆流」はじつのところ、前向きの流れだったと言うのであった。・・・「私は林彪の言葉を入れて羅瑞卿を解任した。林の一方的な意見をなんども聞き入れたのは私の不覚だ。私は自己批判しなくてはならない。毛沢

癒への肯定と否定という、「対の思想」を持っていたのである。

共産党幹部には、病氣治療の時には毛沢東の許可が必要であったが、周恩来の肺ガン治療について、毛沢東は、ガンを不治の病として、治療の許可を出さずに、最後まで首相の執務をさせたのであった(五二)。このような病氣治療について、毛沢東の明るい面と暗い面をみる両面思考は、老年における自分の重病罹患についても、同様の認識を持っていた。李氏は病氣治療の報告書を作成して、毛沢東がそれを一読し、李氏が面会に行くと、毛沢東は以下のように発言した。

「それまで何度もそうしたように今度もまた、医者というのは悲観主義者で明るい面を決してみようとしな。毛はそう指摘したのであった。医者は患者ばかりでなく医者自身もおびえさせる。毛沢東は自分が重病にかかっているとは信じなかった(五三)と、毛沢東は病氣について両面認識を持っていたと李氏は述べている。

次に文革中の毛沢東の発言を引用して、毛沢東の「対の思想」を検討してみたい。

四 毛沢東の文化大革命中の対の思想

文化大革命中において、造反学生が毛沢東に指摘した毛沢東思想の分析について、学生との話し合いの中で、毛沢東は次のように造反学生に返事をしている。

李氏は、「毛は学生たちの各派閥が暗闘を止めて統合することを望む一方、もし君たちが二分化を続けるなら、じきにすべての大学が二分化されるようになるだろうと警告した」と述べている。これに対して毛沢東に面会した造反学生のリーダーの韓愛晶は、「両方が主席の言葉を利用して、自分たちの行動を正当化してきたのです(五四)と毛沢東に返事して、以下のように述べている。

「ところが主席のお言葉は異なる解釈がされやすく、相反する解釈さえ可能です。

主席が生きておられて紛争を解決してくださるあいだは問題ありません。しかし主席がもう僕たちといてくだされなくなったら、一体どうすればいいんでしょうか」。康生と江青は激怒した。「どうしてまた、そんなばかなことがぬけぬけと言えるのか」とふたりはつめよった。にもかかわらず毛沢東はその問いかけがいたく気に入った。毛沢東はかつて江青に同じような問題に関しそれとなく触れている。「若い時分、私も自分にそうした問いかけをしたものだ。他人があえて持ち出さないような問題だよ。確かに私の言葉は違った解釈ができる。それは仕方がないことだ。儒教を見てみるがいい、仏教、そしてキリスト教もだ。これらの偉大な思想はみんな分派に割れている。それぞれ本家本元の真理に違った解釈をくわえているんだよ。いろいろな解釈がなければ、成長も変化もありようがない。停滞がはじまり、本来の教義は死んでしまうだろう」(五五)と、毛沢東は韓愛晶に返答しているのである。

つまり毛沢東は、自己の思想が相反される解釈を持つていることを、十分に理解していたのであり、自己分裂している自己の思想を自己正当化しているのである。また自己矛盾した両面思考―「対の思想」を偉大な思想家はみな持つていると、自分の思想を偉大な思想と見做して自己陶醉しているのである。

また毛沢東は造反運動を呼びかけた文革において、何と驚くべきことに造反の支持・肯定をする一方で、造反の否定という全く逆な両面政策を実行したのである。

毛沢東は文革において、若い無教育な青年にプロレタリア階級の権力確立という社会主義革命推進を期待していた。李氏は以下のように毛沢東の主張を述べている。

「主席は自分の党の最高指導者らと対立しており、いまや一九五七年頃以上に党の浄化を、もはや党それ自体にまかされないとさどっていたのである。また知識人に党の批判をたのむわけにいかなかった。毛沢東が「百花齊放、百家争鳴をよびかけるとき、知識人は毛の敵を攻撃するばかりでなく社会主義に反論し、あまつさえ主

三 毛沢東の病氣と医学に対する対の思想

まず毛沢東の漢方と西洋医学の統合による新医学の創造＝医学論についての「対の思想」を紹介したい。

毛沢東は李氏に、「私は漢方と西洋医学を統合すべきだと思ふ。西洋医学の訓練を十分受けた医師は漢方を学ぶべきだね。上級の漢方医も解剖学、生理学、細菌学、病理学等々を学ぶべきだ。近代科学をつかつて漢方の原理を説明する方法を学ばなくちゃいけない。一部の古典的な医術書を現代語に翻訳しなくちゃいけない、注解をつけてな。さすれば、中西医学の統合体にもついた新しい医学が出現するし、世界への大いなる貢献になるのじゃないか(四四五)と、述べている。

陰陽の気で病状を説明する非科学的な漢方と、病状を精査分析して根本的原因を特定する西洋医学は、方法的には相反的であり統合は不可能である。このような対立的な中西医学を両認して統合する毛沢東の新医学創造の認識は、自己分裂的であり、漢方と西洋医学の両方を睨む「対の思想」の現れである。

その証拠に、「主席はわたしが漢方の書を読んだかどうか知りたがった」との毛沢東の質問に、李氏は、「私は主席に、たしかに中国の古い医学書をいくつか読みましたが、とくに五大要素(五行)―金・木・火・水・土―についての理論はほんとうに理解できなかったと説明した(四四六)と返事している。科学的な西洋医学を学んだ李氏には漢方の陰陽の理論は理解が不可能であった。

漢方の効能を信じる毛沢東は、漢方についても信頼感と不信感という、「対の思想」をもっていた。毛沢東は李氏に、「主席は中国の大きな人口は漢方の効力にあるとした(四七七)と言う。しかしながら他方では、「漢方を普及させるべきだと思ふが、私は漢方なんかを信じていない。私は漢方を用いない。不思議な話だと思わなかね?(四

八)とも、李氏に述べている。これについて李氏は、「不思議な話だと私は同意した。」と、毛沢東に返答した。毛沢東は、漢方医学について信頼と不信感という、全く相反する認識を持っていたのである。

毛沢東は自己の病気の進行状況について、主治医の李氏に次のように述べている。

「列車内で君は、問題は深刻なものじゃないと言ったぞ。ところが、どえらいことになってしまった。医者として、良いことと悪いことの両方を予想すべきだね。そうすりや、虚を疲れるようなことはないだろう。最初のうち切開すれば二、三日で治ると言っていたが、もう十日もたっているのに、まだ治っていない。重病になるか、すぐに治るかのかどちらかだと、のつげに告げるべきだったんだ。そうすりや、どちらにしろんでも問題はなかったはずだ(四四九)と李氏に注意している。李氏は毛沢東に、「これからは両方の可能性に留意しますと私は約束した。(四四九)と、返事したのである。

毛沢東は、両方の可能性に注意することの必要性を李氏に述べている。毛沢東の「対の思想」が典型的に表れている好個の具体例である。毛沢東の「対の思想」の意図や目的が、李氏の責任回避と自己保全にあることの好個の証拠である。

毛沢東の薬効認識について李氏は、「薬はなんの手をくわえずに直る病気にだけ有効だと毛は思った。その病気が重ければ、薬を投与しようとしまいと病人は必ず死ぬ(四五〇)という感想を述べている。毛沢東の認識では、病気には治癒可能な病気と不治癒の病気があり、薬は不治癒の病気には効き目が無いという。毛沢東は、「治る病気と治らない病気がある」と、病気についての両面思考を持っていたのである。

このような認識があれば、毛沢東においては、病気に対する放任主義につながることは目に見えている。毛沢東は、「庶民は病気になる、ほっておくことが多い。しばらくすると、病気がうそみたいに消える。そうでなかったなら、不治の病にかかったということなんだ(五一一)と述べている。毛沢東は、自然的な治癒と不治癒という、病気治

しかしこれは毛沢東の人格の半面に過ぎなかった。この逆に毛沢東の賄賂の是認について、「七年後、香港の友人からヤンに贈賄するよう強くすすめられたと毛沢東に話すと、主席は腹を抱えんばかりに哄笑した。「君は本当に世間知らずだ」と、毛はからかった。「どうしてそんなにしみつたのかね？ 君には人間関係がまたよくわかつていないんだ。水清ければ魚棲まず、というではないか。人に贈り物をするのが、一体どこがそんなにおかしいのかね。あの郭沫若だって、重慶交渉の際に腕時計をくれたんだぞ」(三八)と、毛沢東は李氏に述べていたのであった。

また李氏は、「一九五一年末にはじまった党幹部に対する反腐敗、反浪費、反官僚主義の「三反運動」中、毛岸青は同僚のひとりがかまさまさま書類に必要な毛の署名を改竄することで手数料を横領したと発見するや、怒りにまかせて相手を殴りつけた。主席は事件を耳にすると激怒し、息子を手厳しく叱責した。」(二九)と述べている。

社会主義国の新中国誕生時においても、旧中国の汚濁に満ちた賄賂政治の伝統的な横行を、毛沢東は新中国でも許容していた。賄賂を否定したり肯定したりする毛沢東は、まるで二千年前に、必要時には賄賂を肯定して、不必要時には賄賂を否定する、状況の違いに応じて全く逆の行動をした孟子の様な人物であった(四〇)。

次に毛沢東の政治的人事について、毛沢東の「対の思想」がどのように具体的に展開しているのかを検討してみたい。

毛沢東の側近幹部の喧嘩仲裁の方法について李氏は、「主席は私の前で江青を批判し、看護婦たちをほめたが、妻との話し合いでは看護婦の側を批判したのである。が、どうやら私と仲なおりするようにと妻にすすめたらしかった(四一)と述べている。「対の思想」を利用して、片方だけに肩入れしないで、両者の政治的バランスを常に維持する姿勢を採り、自己の政治的安定を保持していた。

そして政治的な重要会議においては、毛沢東は会議では、緊張感とリラククスとい

う、両面思考「対の思想」をもって臨んだという。李氏は、「毛沢東の気分は、みずからの怒りが触発した明白な緊張とは鋭い対照をなした。いったんなんだか癩癩をおこしてしまえば、あとはリラククスしはじめるのだった。会議のおわり頃にはふだんの禁を破つて打ち上げの宴席にも顔を出し、とりわけ「竜虎鬪」の名で知られる珍珠に嬉々とした(四二)と述べている。政治的ストレスを後に引かさない気分転換の早い人物であったのである。

毛沢東の人事政策において李氏は、「これが主席なりのフェア・プレーであった。右派の葉子龍と李銀橋と、中道派の王敬先と林克と一緒に出かけていくという仕掛けだ(四三)と述べている。政治的に対立する右派と左派を相互に監視させて、朋党を作らせない仕組みを採用しており、法家思想流の相互監視という、「対の思想」をもっていたのである。

また毛沢東は、不必要になった人物を思想改造するための解任人事においても、同様の態度を採った。李氏は、「毛沢東は素晴らしい役者だった。毛は自分のスタッフから主要人物を追い払い、彼らを困難と苦勞へと送ろうとしていたのだけれども、解任するに際しても、依然として彼らの忠誠を求めてやまないのだった。そこで毛は、彼らは自分の友人であり、彼らの助けを必要としているからこそ、みずからの意思に反してこの処置をとろうとしているのだ、というふりをしたわけである。友人たちはほとんどそんな毛沢東を信じていることができた。感謝し、心づかいの表明に動かされた。しかしそれでもやはり、彼らは出かけて行きたくはなかった(四四)と述べている。

つまり毛沢東は、思想改造のための人事においては、解任・追放と援助・支援という、「対の思想」を駆使して、自己の政治的地位の安定を図っていたのである。次に毛沢東の医学と病気についての認識を紹介して、毛沢東の対の思想を検討してみたい。

「何か変わったことがあるかね？」がこの先、主席の日常的な挨拶がわりなっていくのである。主席付きのスタッフにもひとり残らずおなじような質問が発せられた。それは彼なりの情報収集法であり、またスタッフ一同の言動をたえずチェックしておく手でもあった。それが私どもを管理する主席流のやり口だった。・・・いかなる秘密もの存在も許さなかった(二二八)と、些細な事にも常に神経を研ぎ澄ましている神経質で猜疑心の強い人物であったのである。

また李氏は、「毛沢東という人物は、人はよく陰謀をたくらむと非難するが、何を隠そうご当人こそ超一流の権謀術数だったのである(二一九)と、毛沢東は一流の陰謀家であったと言う。毛沢東自身は、自分が嘘つかない誠実な人物と言うのであるから、真心や誠実さと猜疑心の強さや陰謀家という、両側面を併せ持つ人物であったと言わなければならない。李氏は毛沢東の猜疑心について、

「毛沢東が中国そのものであり、したがって自分の地位をおびやかさそうとしたり、もの見方が自分のそれと異なるものがいれば、相手がだれであろうと疑い深くなった。敵を抹殺するに際しては情け容赦がなかった(三〇〇)と、自分以外の異なる見識を持つ人物の存在を認めないと言う。毛の猜疑心は、自分に同調しない人物に向けられており、中国＝毛沢東という図式の当然の帰結であった。

李氏はまた次の様にも毛沢東の複雑な人格について述べている。毛沢東の人間性について、「親しみ深さと愛情の欠落」(三二)した対の人格の人物であると言う。

この愛情の欠落が、歴史的な暴君を愛する人格的な根拠であるが、李氏は、「私にいえるかぎりでは、最初の面談でしめされた親しみが忘れがたいにもかかわらず、毛沢東には人間的な感情が欠落しており、したがって愛することも、友情をいただき、思いやりをいただくこともできないのであった(三二二)と、述べている。

李氏はまた、「帝国主義者との戦いで勝利をおさめるためならば、原子爆弾で数百万

万人の人民を失ってもかまわないとのべたことも、・・・原子爆弾で一千万か二千万の人間が死んだところで恐れるにたりない。ネルーは非常な衝撃を受けた。(三三三)と、中国人民の生命の尊厳性をなんとも思わない、ユーマズムの欠落した冷酷な人物であると紹介している。

「大躍進になって、・・・主席は数百万も餓死しつつあるのを知っていた。毛はそんなことを少しも意に介さなかったのである(三四)と述べている。これらの事実は、毛沢東が人民の生命を尊重しない冷血で非情な人物であったことの何よりの証拠であろう。次に毛沢東の政治人事についての発言を引用して、毛沢東の「対の思想」を検討してみたい。

二 毛沢東の政治人事についての対の思想

まず毛沢東の清廉さと、汚濁に満ちた人格という複雑性を、政治上の賄賂の否定と肯定という両側面から見てみたい。

毛沢東の賄賂の否定について李氏は、「長征にくわわって、蒋介石とその腐敗墮落した国府政権に挑戦するためのゲリラ基地を築くべく想像もつかぬ危険や辛酸に出くわしたのだ。これらの党幹部は仕事に全力をつくし、個人的な利得などいっさい眼中にないでなかつたか。そうした人々に一度もお見えにかかったことがなかったのだ、彼らへの感嘆で圧倒されてしまった。彼らこそ新中国にとって希望の星だった(三二五)と言う。毛沢東は清廉な社会主義建設実現の希望の星と、李氏は考えていたのである。事実、中国共産党は、一九五一年から五二年にかけて、「三反五反」運動を全国的に展開したのであるが、「三反」とは、反腐敗、反浪費、反官僚主義の三つに反対することである(三二六)。そして毛沢東は率先して三反運動を指導したのである(三二七)。

間違わない(表)けれどけど、間違わされる(裏)という、両面を持っていた述べている。

また李氏は次のようにも毛沢東の人格の矛盾を述べている。「毛沢東は寛大であると同時に猜疑心が強かった」(二二)と言う。つまり李氏の印象では、毛沢東は相矛盾する両面的性格を持つ複雑な性格―「対的思想」を持つていたというのである。以下に引用する文章は、上記に述べた文章の資料的な根拠である。

(一)毛沢東の寛大さ

「主席は私の家族的な背景と政治的な過去という問題点を見事に解決してくれたのだ。……君はほんの餓鬼だった」と毛は言ってくれた。「問題は真心だ」。その論理は非常に簡単なものであったが、私が背負う過去の重荷をすっかり取り払ってくれた。毛沢東は最高指導者である。……毛沢東は私を救ってくれたのだ」(二二)と、李氏は自己のブルジョア的な過去を、毛沢東は清算してくれた、と述べている。

「主席は唐朝の第二代皇帝・太宗の話を引き合にだした。唐の太宗は重臣たちの諫めも聞かず、疑惑のある將軍を重用して自分のかたわらに寝ることさえ許した。將軍は非常に知略に長けていて大いに皇帝の役に立つようになった。……真心だ。お互いに真心をもつて相手をあつかわなくちゃいけない。人間関係も真心も長い年月にわたつてためされなければならない。たとえば許世友だと毛沢東はつづけた。……そこで私は言つてやった。『わかった。ここにとどまるがいい。ひきつづき部下の指揮をとれ。これだいい。』それ以来、許世友はりっぱな仕事をやってきたじゃないか。突如、何年も不安、鬱々とした気分ですごしてきたあとだけに、わたしはほっと安堵の胸をなでおろした。主席は私の家族的な背景と政治的な過去という問題点を見事に解決してくれたのだ。」「(二三)と言うように、毛沢東は中国歴代随一の偉大な皇帝である唐の太宗に匹敵するような懐の深い寛大な人物であった。

従つて毛沢東の真実の姿は、竹内氏やスノー氏の指摘しているような聖人君子であ

り、ユン・チアンの言うような冷酷非情の人間味のない人物ではなかったのである。

例えば文革時の政敵の劉少奇・鄧小平・陶鑄への紅衛兵の行き過ぎた拷問には、「三人の指導者を虐待しないように言いわたしてあつた」と言う(二四)。また文革後には追放した政敵との和解の道を歩み彼らの名誉回復とカムバックを望んで、実際にそういう行動をしているのである(二五)。

また李氏により政敵を絶対に許さなかつたといわれている毛沢東は、自己を裏切つた林彪との権力闘争の激化についても、「これは単なる権力闘争ではなく、毛沢東の指導力を奪い、党を分裂させようとするところみであつた。その責任を毛は林彪に帰していた。だがすすんで妥協に応じてもよいという気分があり、力づくで党の再統一をはかるよりも、むしろ「教育」に訴えたい気であつた―毛にいわせれば「患者を救うための治療」であり、「われわれは林彪を救う努力をすべきだ。だがが過ちをおかそうと、団結の必要性を無視するわけにはいかん。そうしないと見たくれがよくないんだよ。北京に帰つたら、林彪とその一派を見つげ出して話し合い申し入れることにしよう。連中が私に接触しようとしないのであれば、私のほうからそうしよう。一部の者は救えるだろうが、あとの連中はとても」(二六)と、毛沢東を暗殺しようとした過ちを犯した林彪一派に対する温情のある配慮をもしている。そしてまた自己の政治的失脚の危機を察知した林彪一族のソ連への逃亡行為にも、「林彪は逃走したがつておる。そうさしてやれ。撃つてはいかん」(二七)と指示している。以上の発言によつても政敵に寛大な毛沢東の反面が理解できるであろう。

(二)猜疑心の強さ

他方では毛沢東は、竹内氏や小島氏の言うような聖人君子でもなければ偉大で威厳ある人物でもなかつた。ユン・チアンの指摘するような冷酷非情の人物であつたのである。李氏は毛沢東の猜疑心の強さについて、以下のような記録を残している。

ところでここで、本稿に引用する基本的資料の性格について紹介したい。本稿で紹介する李志綏『毛沢東の私生活上・下』(一二)は、二十二年間もの長い間「私だけが汪東興を除けばだれよりも長く毛主席に側ちかくつかえた」(一三)と述べるように、毛沢東の主治医として仕えた李志綏が、公私にわたる毛沢東の言動をメモ類に記録して、毛沢東の波乱万丈に富む生涯について、深い理解が得られるようにと、執筆された貴重な実録である(一四)。

「著者あとがき」には、「この二十二年間に及ぶ記憶を跡形もなく消滅させたくなかった。私は半生の記を書きなおすことを決めた。一九七七年から開始してしばらくは途切れがちにつづけたあげく、メモは二十冊以上に達した。毛沢東の言葉遣いはカラフルで生彩に富み、私の脳裏に深く刻みこまれていたので、私は毛発言の大部分を一語一句まで思い出せるほどであった。」(一五)とあり、一度書いたメモを文革時に「消去した後に、再び鮮明な記憶を基にした毛沢東の日常記録である、と言う。

また葉劍英元帥は、「一九七七年夏のある日に、私が院長を務める第三〇五病院に葉劍英元帥が健康診断に訪れた。私と雑談しているうちに、元帥はこう言った。「君は二十二年も毛主席のために働いた。ずいぶん長い年月だ。半生の記を書くべきだよ。歴史の一部だからだな」。もしそれを本にして出版したら、売り込みに手を貸すぞ、と元帥は言ってくれた。」(一六)と述べている。李氏の体験は、現代中国史の貴重な歴史だ、と言うのである。

従って李氏の『毛沢東の私生活』は、市川・駒田・金谷氏により指摘された中国人の伝統的で基本的思想である「対の思想」が、マルクス・レーニン主義者である毛沢東の思想のなかに、どのように具体的に出現しているのか、歴史的に検証するには、絶好の生きた第一級の資料なのである(一七)。

そこで本書の随所に述べられている毛沢東自身の発言に見られる「対の思想」を紹介して、「対の思想」がマルクス・レーニン主義者である現代の社会主義中国の最高指導者にまで深く息づいている中国人の伝統的思想であることを確認することにする。

一 毛沢東の人格と対の思想

李志綏氏は、初対面した毛沢東の印象について、「対面は驚くことばかりであった。ベットに横たわっている主席、普通ではない睡眠のとり方。皮肉っぽいユーモアのセンス、こちらを気楽にさせて思うことを語らせる能力。主席は近よりがたいと同時に近よりやすく、賢明であると同時に型破りであった。私の緊張感は無霧散無霧してしまい、不意に何年となくなかった安心感をつよく覚えたのであった」(一八)と述べている。

つまり毛沢東の人格は、「近づきがたいと同時に近づきやすい人物」であるという。李氏には、毛沢東は複雑な性格であり、両面的性格——「対の思想」を持つ人物であるとの印象を強く持ったのである。

李氏はこのような毛沢東の人格を、「毛沢東は複雑かつ矛盾の多い人物だった」(一九)と述べている。この複雑で矛盾に満ちた毛沢東の人格こそ、本稿で問題にする毛沢東の人格についての「対の思想」である。中国人に基本的で伝統思想である「対の思想」が、マルクス・レーニン主義者の毛沢東の人格の根底に深く生きていたのである。

李氏は毛沢東の政治行動について、「自分は誤らないが、下僚には誤らせられる」と言う。毛沢東の両面思考を、他人に責任転嫁させる複雑で矛盾の多い性格と言う。

「毛沢東は複雑で矛盾の多い人物であった。「皇帝」として、自分は絶対に誤りを犯さないと信じきっていた。決定が間違っていたとすれば、また誤った政策が導入されたとすれば、その責めは自分ではなくて提供された情報にあるとした。つまり皇帝は過ちをおかすはずはないが、しかしだまされることはありうるというわけだ。」(二〇)と、

つまり徳田氏は、スノーや竹内氏とは逆に、毛沢東の人格を、政治的猜疑心が深く、狡猾な冷淡さを持つ専制的な皇帝意識であり、敵対者には寛容と報復という、屈折した心理を持つていた、と言っているのである。紅衛兵として文革を経験したユン・チアンの十数年にわたる調査と数百人の関係者のインタビューに基づき書き上げた『マオ』は、革命家としての毛沢東の関係を歴史的事件についての詳細な叙述であるが、同氏は大筋として、毛沢東の人格を人民の生命の尊厳さを無視する冷酷非情な人物であった、として描いている(一〇)。

また小島氏は、「一九七一年に毛沢東に会見したキンジャーは、『身体からは、感じられるすべてを圧倒する意志の力が出ていた』『彼の存在それ自身が意志、力と権力の巨大な作用の証である』との印象を持っていたと言い、たしかに、カリスマの資質が彼に備わっていたのであろう。しかし人を威圧し、ひれ伏させる指導者としての威信は、彼の長い革命と戦争の実績に加えて、党内と政権内での権力闘争によるライバルあるいはその候補者たちの排除によって、唯一の指導者としての地位を確保したことにも負っている(一一)と、述べている。小島氏は、毛沢東のカリスマ的人格は、長い革命生活と権力闘争の中で鍛え上げられてきた結果であり、圧倒的な威信感の存在する偉大な人物である、と言う。

以上に述べてきた毛沢東の人格についての従来の研究史の問題点を要約すると、凡そ以下のようなようになるであろう。解放前より鄧小平の改革開放路線前までの研究では、聖人君子とか、偉大な英雄とか、威信のある偉大な人物との好意的評価が主流であり、他方で改革開放路線後においては、人間性の欠落した冷酷非情の独裁的人物という悪人的評価であり、どちらかの一方の極端に走る人物評価像が主流であった。

従って毛沢東の人格の表と裏の両面を総合的に判断する両面思考―「対の思想」から考察した毛沢東の人格についての客観的評価について、本格的な論文や著書が未だ

に存在しないのが実情なのである。

(三) 本稿の目的

毛沢東の死後、その人格や思想をめぐる評価は微妙に揺れ動いている。毛沢東の後継者である華国鋒の唱えた『二つのすべて(两个凡是)』は、毛沢東自身が唱えた「实事求是」を持ち出して毛沢東路線の継続を主張したが、これに対抗した鄧小平より批判され華国鋒が失権すると、鄧小平は彼自身の解釈に基づく「实事求是」を中国共産党の指導方針として実権を掌握した。一九八一年六月の「第一期六中全会」で採択された決議書―「建国以来の党の若干の歴史問題について」では、毛沢東思想を「毛沢東同志を主要な代表とする中国の共産主義者が、マルクス・レーニン主義の基本原理に基づき、中国革命の実践経験を理論的に総括してつくりあげた、中国の実情に適した科学的な指導思想」と定義している。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義を基本的原理として規定しているが、この規定は現在でも変更されていない。

本稿の目的は、毛沢東の政治の善し悪しを、肯定的に評価する事でもなければ、否定的に評価する事でもない。マルクス・レーニン主義の中国の実情にも基づいて創造的に発展させたと言われている毛沢東思想の根底に内在する毛沢東の基本的な思考方法をより客観的に探究する事にある。

本稿では、第一に現代中国建国の父であり、マルクス・レーニン主義者である毛沢東の公私の生活の中で、中国の伝統的思想である「対の思想」が如何に深く息づいているのかについて、毛沢東の公私の生活の多方面にわたり実証することを課題とする。

第二には中国の伝統思想である「対の思想」が、毛沢東やその後継者・鄧小平に深く息づいているために、毛沢東や鄧小平のマルクス主義理論が変質して、現代中国の特色である社会主義市場経済の特色―一國二制度論が生まれてきた歴史的背景を探究する手掛りにしたい。

(二) 毛沢東の人格についての研究史の成果と課題

次に毛沢東自身の人格についての研究史を紹介して、その成果と課題について述べてみたい。中国古代史の第一人者・貝塚茂樹氏は、毛沢東の生い立ちから日中戦争勃発までの歴史的事件に関する評価について、「かれはひじょうな楽道家である。革命家はすべて理想主義者であり、ロマンチストであることは当然である」、国慶節での毛沢東を「それはすこし重々しいがしかし気取りも格式ぶったところもなく、ただ素朴で、誠意にあふれ、まことに彼自身の挺唱する『群衆のなかへ』という評語を身をもって示しているという感じであった」、「私が毛沢東伝において追及したのは、この毛沢東の人間性であった。毛沢東におけるヒューマニズムを、かれの日常生活と行動のなかでとらえようとした」と言う。欧米留学をしなかった事を、「立身出世の野望なき人物」として、これを「謙譲というよりは徹底した無欲と形容したほうが妥当」とか、「個人的利害を全く無視する非打算的な態度」、「無慾謙遜と相関連した美点」と称賛している。

本書の執筆は、毛沢東伝を記す上で参考に出来るものが、『中国の赤い星』しかなかったと回想しているように、毛沢東の客観的評価を行なうのが極めて困難な時期に執筆された限界性を持つが、高潔で偉大な公平無私の人物と絶賛している(四)。

しかし一九六七年に文化大革命中について、京都学派の宮崎市定等との四氏の座談会では、宮崎氏は、「日本の総選挙に匹敵する人事更新」と理解しているのに対して、貝塚氏は、建国期を脱した新中国における文化大革命を、守成期の中国において政治組織を破壊して、「いつも社会を新しく作って行くという考え方はばかな考え方だ」と否定的に理解して、毛沢東像を軌道修正している。

四氏とも、文革について毛沢東の権力闘争との認識を持つておらず、毛沢東の独裁王朝にける周恩来主導の人事刷新と理解するに止まっている。国際社会に門戸を開きざして中国よりの情報量の少ない時代における文革理解の限界だと思われる(五)。

日本の毛沢東研究の第一人者である竹内実氏は、「それはいままで論文をつうじて描いていた毛沢東の像より、もっと人間味にあふれ、若い世代に期待をかける成熟した、偉大な人間であったとしている(六)。また竹内氏は、同書において以下の様に『中国の赤い星』を書いたエドガー・スノーの毛沢東の人物評価を紹介している。

これに因ると、中国の解放戦争当時に直接毛沢東に接していたスノーは、「彼を偉大にしているのは、彼がたんに党のボスであるだけでなく、中国人にとつてまったく純粹な意味で、教師、政治家、戦略家、哲学者、桂冠詩人、国民的英雄、家長、そして歴史上もつとも偉大な解放者のすべてであるからである。中国人にとつて毛沢東は、孔子、老子、ルソー、マルクス、それに仏陀を合わせた存在である」と、毛沢東は「これまで人類史上の偉大な人物の総合的人物であると絶賛している(七)。

また竹内氏は、「私の印象では、彼は伝統的な中国知識人の型を、再極限にまで自己発展させた、人間である。深夜、中国の直線的な家具を置いた書齋に閉じこもつて、孤独に瞑想し思索している彼を想像することが、もつとも彼にふさわしいように思える」と、紅衛兵を動員して文革を断行した毛沢東を、伝統的中国知識人の最高のタイプと評価している。貝塚氏も「スノー氏も竹内氏も、毛沢東の人格を完璧無欠な聖人君子像として描いている(八)。

これに反して徳田教之氏は、「五 政治的人格の謎」で、「毛沢東の政治的人格の全体像については本格的な研究も資料も少ない」と述べ、「毛沢東批判の中心的論点の一つは、一九五八年からの個人的崇拜の広がりと、個人的専制の形成」、「毛沢東の非凡と言ふべき政治的猜疑心と狡猾な冷淡さ、…毛沢東の支配のスタイルも、中国の皇帝のイメージを連想させる」、「恣意的で、挑戦的で、専制的な政治的人格のイメージ」、「毛沢東の内面に潜む疑似皇帝意識と、敵対者への寛容と報復の衝動の屈折した組み合わせが、毛沢東の独特な精神力学を構成している(九)」と述べている。

毛沢東の人格と対の思想

—李志綏『毛沢東の私生活』

の分析を手掛かりにして(一) —

小倉正昭

「対の思想」とは、是非・善悪・好悪等のように同一物の対立的両面を同時に見る両面思考方法のことである。この中国人の伝統的で基本的な思考方法は、中国共産党のマルクス主義者のリーダーである毛沢東の人格の基底を規定している。毛沢東の「対の思想」の実例は、人格的な寛大さと猜疑心の強さ、政治人事政策、病氣と医学認識、情勢認識、外国認識、歴史認識等の多方面に見出すことができる。

毛沢東の場合、中国人の基本的な両面思考を身につけて来た根本的な淵源は、中国人の好む麻雀や中国歴代の歴史書の愛読により体得してきたものであった。

キーワード：対の思想 毛沢東の人格 医学認識 異性認識 外国認識 歴史認識

はじめに

(一) 対の思想の研究史の成果と課題

本稿で取り扱う「対の思想」とは、是非・善悪・表裏など、同一物についての両面思考のことである。この思想は、中国人の伝統的で基本的思考であることは、中国哲学や中国文学の先学である市川安司氏、金谷氏(一)、駒田信二氏(二)等によりすでに指摘されている。しかしながら市川・金谷・駒田氏等の研究には、未だ以下のような問題点が存在している。

市川氏は、「対の思想が中国人一思惟の根底にある重要なものの一つであり、
・・・伊川の哲学も中国人一般の思惟法の上に立つて成立しているのである」として、多くの北宋学者の思考の根底に存在する対の概念を明らかにした。市川氏の主張は一般論として非常に貴重なものである。しかし同氏の研究は、「対の思想」が中国人一般の思考であると指摘するのみであり、研究が宋学という狭い範囲に止まり、現在の中国人の思考様式まで規定している事実についての言及なされていない。

駒田氏の研究は、中国文化と日本文学との比較の中で中国人の基本的思想であるとの指摘に止まり、伝統的な「対の思想」が現代の中国人にいかんにかに生きているのかというところまでは、歴史的に論証されているものではない所に、今後の研究課題がある。

また金谷氏は、「対の思想」が中国人の基本的思想であり、古代より現在の中の中国人の思想を貫く中国の伝統的思想であることを指摘されている。この思想がマルクス・レーニン主義者の毛沢東の思想にまでに深く生きていくことを、毛沢東の『矛盾論』を引用して指摘している(三)。同氏の研究は、これまでの対の思想の研究にない誠心で斬新で貴重な研究として注目しなければならぬ。しかし金谷氏の指摘は、毛沢東の一書作の中での一断片的な指摘に止まり、毛沢東の公私の生活全体にわたる思想や行動を分析した結果ではない点に、重要な問題点が残されている。

“The Thought of *Dui*” and Mencius’s Theory of the Ideal State
— State power structure in Confucian thought from a standpoint of the thought of *Dui*
(dualist thought) —

Masaaki OGURA*

“The thought of *Dui*” produces a balance between the state (public power) and the family (private power) and maintains the condition. When developing the thought on the Confucian theory of the ideal state, centralized feudalistic states before the Zhou Dynasty emerged. In the Confucian theory of the state structure in the Zhou Dynasty, the dual control of power, public and private powers, is multiply carried through the family system and the state/ social system. The thought of “king’s land, king’s people” is regarded as the state’s landownership and people-control system. The dual control of power, commission into service (public control of power) and exemption from service (private control of power), was carried through the thought. Additionally, in the well-field system that was a land system in the Zhou Dynasty, the dual control of power coexisted: public fields (public power) and private fields (private power). Similarly in the equal-field system in the Tang Dynasty that succeeded to the idea of the well-field system, “the thought of *Dui*” (dualistic land ownership system) coexisted: distribution fields (state’s land ownership system) and inheritable fields (private land ownership system).

Key words: Confucianism, centralized feudalistic state, public and private, thought of “king’s land, king’s people”, well-field system

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

- 四頁―二四五頁 参照)
- (一一) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一三八頁―一四〇頁 参照)
- (一二) 『史記(本記)』吉田賢抗 新釈漢文大系 第三九卷 平成六年 二五版 高祖本記 第八 五六七頁 参照)
- (一三) 『韓非子 第四冊(全四冊)』(金谷治訳注 岩波書店 一九九九年 第五刷 二四五頁 参照)。竹内氏も、「詩にいう、天下はすべて王の地であり、四海の内はすべて王の臣である、と。もしこの通りであるとすると、舜は、外においてはわが君を臣にしまい、内においてはわが父を臣にし、母を召使とし、君の娘を妻とした(もので、実に不忠不孝である)。・・・」『韓非子』新釈漢文大系 第一三巻 竹内照夫 明治書院 昭和三九年 初版 八八四頁 参照)と通釈している。
- (一四) 『詩経(中)』(石川忠久 新釈漢文大系 第一一 明治書院 平成〇年 初版 三八七頁―三九一頁 参照)。
- (一五) 『史記(本記)』新釈漢文大系 第三八巻 吉田賢抗 明治書院 平成五年 二三版 五帝本記 第一 五〇頁 参照)
- (一六) 『孟子(下)』小林勝人訳注 岩波書店 一九九五年 第三〇刷 卷第九 万章章句上 一四五頁 参照)。
- (一七) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 藤文公章句上 二〇三頁 参照)
- (一八) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 藤文公章句上 一九八頁―二〇四頁 参照)
- (一九) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 藤文公章句上 一九八頁―二〇四頁 参照)
- (二〇) 玉井是博「唐代の土地問題管見」『支那社会経済史研究』所収 岩波書店 昭和十八年 第二冊発行 参照) 玉井氏は、「均田制下の田土の還受不還受の別を重視して、口分田Ⅱ国有地、永業田Ⅱ私有地」(堀前掲書 一五九頁)とするが、公私の区別の基準は税負担の有無にあり、土地処分権の帰属が何処に存在するのかわかると考える。
- (二一) 『礼記(上)』(新釈漢文大系 第二七巻 竹内照夫訳注 明治書院 平成五年 一九九九年 第三六刷 一九八頁 参照)
- (二二) 『日本人には言えない中国人の価値観』(李年古 学生社 二〇〇六年 第一章 中国人の伝統的な価値観 三項 二三頁 参照)
- (二三) 『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年 第一刷 五頁、一〇三頁、一八九頁 参照)
- (二四) 『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年 二頁 参照)
- (二五) 『孟子(下)』小林勝人訳注 岩波書店 一九九五年 第三〇刷 卷第九 万章章句上 三四七頁―三七八頁 参照)。
- (二六) 『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年 一〇九頁 参照)
- (二七) 『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年 一七八頁参照)
- (二八) 『日本人には言えない中国人の価値観』(李年古 学生社 二〇〇六年 第一章 中国人の伝統的な価値観 二項 二〇頁―二二頁 参照)
- (二九) 『資本主義に先行する諸形態』(手島正毅 国民文庫二八 青木書店 一九六三年 参照) 『資本論』(マルクス全集刊行委員会 国民文庫二五 青木書店 一九六三年 参照) 『マルクスとアジア―アジア的生産様式論争批判』(小谷汪之 青木書店 一九七九年 参照)
- (三十) (受付日二〇一一年 九月 二七日)
- (三十一) (受理日二〇一一年 十二月 二二日)

土地制度論では、宮崎氏¹¹荘園制¹²国家的土地所有制、西嶋氏は漢代の
占田¹³私有地、日野開三郎氏¹⁴均田制否定論¹⁵土地私有制の説がある。

日本史では中田薫¹⁶土地私有説と今宮新氏・虎尾俊哉氏・石母田正氏¹⁷
土地国有制に二分されていて、未だ統一的見解が出ていない。

三―堀氏は、井田制は後世の理想像、孟子の助法税制実施の空論として
、曾我部氏の「均田制は井田制の後身」説を批判する。しかし堀氏も「公
田と私田」の存在した事実は認める。孟子は、「井田の実施は経界より
始めよ。汚職官吏はこれを疎かにして私利私欲を図ってきた」(注一八)
と述べる。玉井氏は、「井田制度は春秋戦国時代に崩壊しはじめるが、井
田制度の完全崩壊は、秦の孝公十二年に商鞅の開阡陌¹⁸周の井田制の阡
陌を悉く開除して自由に開墾せしめその兼併を自由にしたのである。」

(玉井 前掲書 四頁) 従って井田制度が存在した事は間違いない。

四―堀氏は、「唐代の口分田と永業田は、後者にも国家の規制・干渉は強
く、土地所有権上の違いはなく、口分田と永業田の実際の違いはない」
と述べ、国家的土地所有説と私的土所有説の二者択一を否定して、「土
地は占有」として、仁井田氏の「上級所有権と下級所有権」に同意する

(四一八頁)。しかし占有ならば永代耕作権の資料が必要だが証拠がない。

また律令制下の授田・退田規定に矛盾して、形式論理上では誤りと思う。

(四)『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一八一頁 参照)

(五)『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年一八七頁 参照)

(六)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六六刷 三六五頁

―三六六頁 参照)

一―吉田氏は、注(四)の葉公と孔子の家族道徳の問答の「解説」におい

て、「天子の位よりは、父子の情が大切であるという、人情の自然に生き
るヒューマニズムが、孟子の根本思想である。天子となって政治をする
人は他にもあろうが、父と子の代役を果たすことのできる者は誰もない。
父子の間は絶対である。この真理を無視しては、倫理道徳が成り立たな
いところに儒家の学説の根本がある」と言う(新訳漢文大系 第一巻

『論語』 吉田賢抗 明治書院 昭和三八年 五版 二九〇頁 参照)。

二―儒教では、国家¹⁹公権力よりも家族制度²⁰私権力の方が大切であつ
たという。この解説は文章から見ても誤りであろう。事実関係において舜
が瞽瞍を連れて逃亡したならば、吉田氏の言う指摘も当て嵌まる。

三―しかしこの文章は、問人の桃応が、「ではこの際、舜はどうしたらよ
いのでしょうか。」と言う質問に、孟子は、「舜は天下の事などは忘れて
しまうことだろう」と、舜の将来的行為を予測して答えているのであり、
事実とは全く違う、仮定の話なのである。

四―どんな人間でも、相矛盾する二つの行為を同時にすることは絶対に
不可能である。孟子は両面思考をして、自分の頭で未来を想像して考え
ているだけである。これが儒教の特色である二重人格性なのである。

(七)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六六刷 三六五
頁―三六六頁 参照)

(八)『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六六刷 一三二頁
―一三三頁 参照)

(九)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 四一七頁 参照)

(一〇)『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店一九九四年 一二三頁参照)

(一一)『韓非子 第四冊』(金谷治訳注 岩波書店 一九九四年 第一刷 二四

「公私の二重権力構造の支配関係が貫徹している、と言いたいのである。」
 七―堯舜時代の国家権力構造を図式化すると、天下の父(瞽瞍)↓天子(舜)↓百官
 ↓人民となるのであり、この権力図式において、上は天下の父から下は人民に
 まで、公権力(国家制度)と私権力(家族制度)が直線的に複合して貫徹する。
 八―儒家と法家の政治論争は、全く正反対の両面的性格を持つ事物の、どちら
 か一方を選択して、自己の思想を展開する手段として利用した。儒家と法家の
 政治理論は、政治理論の展開が全く食い違いすれ違いをしている所に、全く正
 反対の同一物に対する両面思考―「対の思想」が展開しているのである。
 九―『詩経』時代には、すでに王権には、公権力と私権力という二重権力機能
 ―「対の思想」が存在した。周王⇨公権力⇨王土王民思想⇨征役への就役⇨家
 族生活の破壊と、周王⇨私権力⇨王土王民思想外⇨征役からの免役⇨家族生活
 の享受という、凡そ正反対の二つの形式的理論に要約できる。
 一〇―周代の土地制度⇨井田制度においても、上は周王から下は庶民に至るま
 で、国家的土地所有制度と私的(均田)土地所有制度という、二元的土地支配制度が存
 在して、上は統治者階級から下は被治者階級にまで二重権力支配関係が貫徹し
 ていた。井田制度の理念を継承した唐代の均田制でも、国家的土地所有制度と
 私的(均田)土地所有制度が並存して、周代の井田制度と同様の二元的土地制度が
 実施されていた。これで戦前よりの土地国有制と土地私有制の如何という均田
 制論争に一つの結論がついたと思う。土地国有制論は半面であり、土地私有制
 論も半面の事実である。これらは、土地制度論における中国人の基本的思考で
 ある「対の思想」の具体的展開であった。
 一一―専制君主制下の国家的土地所有制度論⇨「王土王民」思想は、中国古代
 史においては、半面の事実なのである。マルクスが『資本主義に先行する諸形

態』・『資本論』で述べたアジア的生産様式論⇨「国家が最高の地主であり、私
 的土地所有は存在しない」⇨「王土王民」思想⇨全般的な国家的土地所有制度
 論は、成立しないと断言できる(二九)」。マルクスも中国古典思想に関する書物
 を一つでも読んでいれば考え方が変わっていたであろう。

二〇一一年八月三〇日 稿了)

注

- (一) 拙稿「対の思想と中庸思想の歴史的展開―対の思想(両面思考)の生ま
 れてきた歴史的背景について(五)―」(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第
 四五巻 二〇一一年 参照)
- (二) 『詩経』小雅・北山之什にある「溥天之下 莫非王土 率土之濱 莫非王臣
 (大空の下に王土でない土地はなく、地の果て(浜辺)まで王臣でない
 人間はいない)」という詩句に代表されるように、中国では早くから中央
 集権が進むとともに四海・天下の概念が発達して、帝王二元的・排他的
 な世界支配を象徴する考え方として説かれ、儒教・律令などにも反映され
 てきた」(ウイキペディア「フリー百科事典」 王土王民思想 参照)
- (三) 氣賀澤保規氏「均田制研究の展開」(『戦後日本の中国史論争』谷川道雄
 篇 河合文化教育研究所 一九九三年)に拠り、問題点を要約した。
 一―「均田制研究」の研究史については、堀敏一氏『均田制の研究―中
 国古代の土地政策と土地所有制』(岩波書店 一九七五年 参照)にも
 書末に「参考文献目録」を付記して、簡潔に要点をコメントしている。
 二―これによると均田制下の農民には、加藤繁氏・谷川道雄氏の自作農
 論、志田氏・浜口氏(君主の農奴)・宮崎氏の農奴制論、前田直典氏の奴
 隸制論があり、直接生産者の存在形態には、現在の所では三説がある。

て慈愛をかけてやれば、刑罰は軽くてもうまく治められる、と考えているのだが、この意見は間違っている。およそ、人が思い罰を受けることになるのは、もちろん衣食が十分になってから後のことである。生活の資材が満ち足りて手厚い慈愛を施したとしても刑罰を軽くしているとなお乱れるものである。．．．およそ、人間の生き方としては、生活の資材が十分にあれば努力を怠るものでもあり、お上の取り締まりがゆるやかであればのびのび悪事を働くものである。」(二六)と、「衣食足りて刑罰を被る」のであると批判している。

このように儒家と法家の両思想は、凡そ逆方向の統治理念を持っていて、人民統治方法が全く逆で、両者の議論が噛み合わない。両思想はすれ違う相互関係にある。人民統治の経済思想においても、儒教と法家の両思想には同一物における全く正反対の理解をしており、両者の経済思想は、表と裏という相互補完関係にあり、凡そ正反対の「対の思想」が展開されているのである。

五 結語

一 儒教の国家権力理論は、公権力支配の貫徹する国家・社会と私権力支配の貫徹する家族制度という二元的統治構造である。孔子や孟子の理想とした周代の理想的国家論である中央集権制封建制国家の構造論においても、公権力と私権力の二重権力が複合して貫徹する。儒教の国家理論は、相矛盾する二つの中心が併存する世界―「対の思想」も持つ政治思想であった。

二 儒教の政治理念である封建制度国家における公権力支配と私権力支配という二重権力支配機構は、州県制Ⅱ公権力、家族制度Ⅱ私権力である、主張する気持ちは全くない。言うまでもなく州県制支配は法家の統治理念であり、儒教の国

家理念は君臣の主従関係で成立する封建制国家の統治理念である。

三 儒教の理想国家論は、修身↓齊家↓治国↓平天下の直線的な政治思想理想によく表現されているように、家族制度の擬制的拡大の上に治国・平天下の天下統一の政治理論が展開されるのであり、この政治理想が国家論に展開されると、中央集権的封建制国家の中に公私の二重権力支配構造が貫徹することになる。

四 韓非子も、「いま儒家や墨家はみなこう言っている。「古代の聖王は天下の人々をひろく愛したので、父母のような態度で民衆にのぞんだ」と。．．．それが彼らの言う古代の聖王である。そもそも、君臣関係も、親子の関係と同じようにしたなら必ずうまく治まると考えているのだが、もしそういう理屈で推しはかるなら、仲違いする親子はいなくなると言うことになる。」(二七)と、儒教の国家論は家族制度の擬制的拡大である家父長制支配理論と述べている。

五 李年古氏は、中国の封建国家の構造について、
「中国国家システムの構造は、血縁の家族システムと非常に似ている。中国人にとって、国と家とは一体化した組織であり、「国之本在家」(国家の根本は家庭にあり)といわれている。．．．さらに「家国同構」(国と家庭は同じ構造だ)と言う考え方にも結びつく。つまり、中国における封建主義の特徴の一つは、国家は拡大した家庭であり、家庭は縮小された国家であり、ともに同じ構造をなしているということだ」(二八)と、述べている。

六 儒教の説く封建制国家は、家族制度と同じ構造をしている。封建制国家において、君臣関係を結ぶ場合は公権力支配が貫徹して、家族制度を維持する場合には私権力支配が貫徹する。西周時代の中央集権制封建制国家には、家族上下関係における保護と奉仕の私権力関係が、君臣上下の主従関係という保護と奉仕の公権力支配関係に内包されていて、君臣上下の主従関係の中に、仁義

をまかなう。(二二)とあり、明確に公的収入と私的収入の区別が存在していた。

ところで最後に指摘したいのは、本文の「西山」の後半部分において述べられているように、「或るものは・・・しかし或るものは」と、全く正反対の内容の文章が、繰返して展開されているということである。つまりすでに『詩経』の生まれた西周時代には、中国人の基本的な伝統的思考である「対の思想」が、すでに形成されていたということである。

ここでこの『詩経』・「西山」に記載されている「対の思想」に関連して、以下に二つの重要な事実を述べておきたい。

一つには、この文章の後半は、何も「対の思想」を持ち出さなくても意味が通るのである。例えば「私のみが苦勞しているが、他のものは・・・」などして安楽にしていない」と言えばよいものを、わざわざ「苦痛と安楽」とを、並列して繰り返して述べている所に、中国人の基本的で伝統的な「対」の思考方法が意識的に使用されているのである。

二つには、李年古氏は、儒教思想の強制により中国人は二重人格者に意識的に作り上げられたと述べていた(二二)。しかし実はその反対で、中国人の二元的な発想―「対の思想」は、儒教思想の成立する以前にすでに存在していた。

従って儒教は、中庸思想や「対の思想」という、中国人の基本的で伝統的思考を吸収して、これを取り入れて発展してきた中国人には普遍的な思想であったということである。このことは韓非子の場合にも当て嵌まる。

韓非子の「対の思想」の事例を示すと、「そもそも権勢というものは、国を治めるにも役立つが、国を乱すにも便利な物である」、「利益を望む者は必ず損害を憎む。損害は利益の反対であるからである」、「むかし、蒼頡が文字を作ったとき、自分でまるく囲うのを「ム(私)」とし、「ム」に反対するのを「公」と

した。「公と私とがあい反することは、つまり蒼頡もすでにそれを知っていたのだ」(二三)等、多くの事例が存在する。

また中庸思想については、「ところが、世間の為政者はみな「特別でない」程度の人々でつづいている。わたしが勢を取りあげて論じるのは、その中程度の人々が目当てである。中程度というのは、上は堯・舜には及ばないが、下もまた桀・紂ほどでない人々のことで、法を守って権勢の座にいればよく治まるし、法にそむいて権勢の座を去れば乱れるものである。」(二四)と述べて、儒教に言う両極端を否定する中和の中庸論を展開している。

以上のように、韓非子も中国人の基本的で伝統的な「対の思想」と、中国思想の精髓である中庸思想を具有していたことが理解できるであろう。

韓非子に見える中国人の基本的発想である「対の思想」の存在の事実は、「対の思想」の前提条件である中庸思想の古代よりの永続性との関係で言えば、ある意味では当然なのである。

だから例えば人民支配において、孟子は以下のように述べている。

「孟子がいわれた。「田畑をよく治めさせ、税金の取り立を少なくすれば、人民を富ますことができる。人民の生業を助けてやるにもそれぞれ時期を考え、人民を使うにも節度になつた使い方をすれば、国家の富は溜まって使いきれないほどになるものだ。・・・されば、聖人が天下を治めるには、必ずや豆や穀物などの常食を水や火のように豊富にさせることを理想としている。豆や穀物が水や火のように豊富になれば、人民もしげんに礼節をわきまえて、どうして不仁な者などあるはずがあるか。」(二五)と、「衣食足りて礼節を知る」と言うのである。

しかし孟子の主張とは逆に韓非子は、「・・・これは、生活の資材を十分にし

③―周代の土地制度においても、上は周王から下は庶民に至るまで、国家的土地所有制度と私的土地所有制度、つまり公権力支配と私的権力支配という二元的土地支配制度が存在して、上は統治者階級から下は被治者階級にまで、二重権力構造の支配関係Ⅱ「対の思想」が貫徹していることを確認できた。

④―「王土王民」思想との関係で、周代の井田制度論を述べると、凡そ以下のように結論できる。周代の農民は、自己の私有地Ⅱ私田を耕して家族の生計を営む国家権力から解放された自由民である。しかし他方では国家の公有地Ⅱ公田を耕して税役負担の義務を負う国家権力に隷属・服従する被治者でもある。つまり周代の土地制度は、国有地もあるが、農民の私有地もあるのである。

また人民支配は、国有地を耕して税役を負担する国家的隷属民でもあるが、私有地を耕して税役負担を免除された自由民でもある。

だから王権による一元的土地・人民支配思想Ⅱ「王土王民」思想は、中国全体を覆い尽くして全面的に貫徹していかないものである。あくまでも中国における土地・人民支配における半面の事実にすぎないのである。

⑤―従って「王土王民」思想と井田制度を継承したといわれている唐代均田制においても、同様の結論を導き出すことができるであろう。

律令制度に規定された唐代均田制度では、農民は国家より口分田Ⅱ八〇畝と永業田Ⅱ二〇畝、合計百畝を授田される。北魏・孝文帝代の資料には、「(2) 授田は十五歳に達して課役を負担すると同時にし、七十歳に達して課役を免除されると共に還さしむ。(3) 土地の還受は毎年正月以て行ひ、・・・遠流配謫子孫なき者及び絶戸の田はこれを没収して公田として給田に充つ。(4) 露田は公田にして還受せしむ。別に私田として桑田を給し還受の法に従わせしめず。・・・桑田に余りある者は余分の田を売り、足らざる者は足らざる数を買うこ

とを許す。」(玉井 前掲書 一三頁)とある。また北斉の均田制は、武成帝・河清三年の詔の要旨に、「(1) 男子は十八歳に達すれば田を給し租調を納めしめ、二十歳にして力役に充て六十歳にしてこれを免じ、六十六歳にして租調を免じて田を還さしむ。(4) 露田は公田なるも別に私田として毎丁桑田二十畝を給し、桑に適せざる処に於いては麻田を給す。」(玉井 前掲書 一八頁)とある。これらの資料から考えて、授田農民には国家に租庸調雑徭の税役負担の義務があるが、国家に口分田を返却する退田時には税役義務も消滅する。つまり口分田は国家に土地処分権が存在する国家的土地所有制度である。

これに対して永業田は、子孫に世襲される税役免除の私有地であり、過不足については売買が可能である。農民に土地処分権が存在する私的土地所有制度である。官僚に官品に応じて支給される官人永業田Ⅱ莊園制は、税役免除された私的土地所有制度の代表である。玉井氏が既に指摘したように、律令に規定された均田制度下の土地制度は、国家的土地所有制Ⅱ口分田と私的土地所有制度Ⅱ永業田という、二元的土地所有制度であった(二〇)。

従って『詩経』・「西山」の「王土王民」思想に表現されている就役Ⅱ役負担Ⅱ国家的土地所有制度と、蠲役Ⅱ役免除Ⅱ私的土地所有制度という、自己分裂した相矛盾する二つの土地制度理論は、周代の井田制度に的確に表現されている。そして井田制度の理念を継承した唐代の均田制度にも、公私の二元的土地制度論が継承されていることが判明するであろう。このような二元的土地制度の伝統は、中国人の基本的思考である「対の思想」から生まれて来たのである。

⑥―因みに王権自身の公私の二重財政制度についても『礼記』には、「天子は機内の一部分の(百里四方の地)からあがる収入)によって、朝廷の百官を歌維持し、(畿内全体の)千里四方の地(穀上がる収入)によって、内廷の費用

ある「王土王民」思想の実体を疑問視して議論していたのである。

つまり『詩経』・「西山」の詩句に謳われた「王土王民」思想に表現されている周代の土地制度論には、公権力Ⅱ国家的土地・人民支配制度と私権力Ⅱ私的土地・人民支配制度という、公私の二元的な二重権力的支配理論―「対の思想」が存在したということである。

四 井田制度における公権力と私権力

『詩経』・「西山」に謳われた「普天の下、王土に非ざる莫なし、率土の浜、王臣に非ざる莫なし」の詩句より導き出されてきた土地人民支配理論―公権力支配と私権力支配―という二元的な土地人民支配の事実は、周代の土地制度論である井田制度においても、確認できるのである。

孟子は、夏・殷・周の三代の土地制度論について、滕の文公に以下のように詳しく説明をしている。

「このような夏・殷・周の三代は貢・助・徹とそれぞれ名まえはちがっていますが、その内容はみな同じで十分の一を租税として取っていました。．．．」とところでお国では、まだ井田の助法の制度は実行されておりませんが、それについて『詩経』には『まず公田に雨ふりて、やがてわれらの私田にも』とありま

す。これは周人の作です。周の時代にも初期には助法が行われていたものと思われま

す。なぜなら、貢法には公田はなく、ただ井田の制による助法だけ

に公田があるからです。助法はもちろん殷の制度ですが、この詩は周人のものであり、しかも公田という言葉があるのを見ますと、周の徹法もまた助法を兼ね行

ったものと思われま

す。〔ですから、お国でもこの井田の助法を行われま

すようにおすすめていたします。〕．．．

それからまた、朝廷に仕える卿以下士・大夫などの役人には、世禄のほか

別に「祭祀の費用にあてるために」圭田すなわち井田とは関係なく特別に区画

された田五十畝ずつ必ず与えたいものです。また士・大夫達の子弟で家を継ぐ

ことができず、庶民となった者にも同じく圭田を二十五畝ずつ与えたいもので

す〔そしてこれらの土地は例外で、どちらも課税はしないものです。〕．．．こ

こで、「井田の制度の」もう少し説明すると、一里四方の田地が一井で、その面

積は九百畝あります。これを井の字型に分けると、百畝ずつ九つに分けたこと

になります。その真中の一つすなわち中央の百畝が公田で、周囲の八つを私田

とします。八家族でまず共同に公田を耕して、それがすんでからめいめいの私

田を耕すのです。〔そして公田の収入はすべて租税として納め、めいめいは私田

の収入で生活をします。〕このように公事を先にして私事を後にするのは、つま

り公田は主君と役人のため、私田は庶民のためと、その「上下の」区別をはっ

きりをつけるためです。以上が井田法のあらましです。．．．」(一九)と、周

代の井田制度の概要を述べている。

従って孟子の述べる周代の井田制度論から、以下の事が判明するであろう。

①―周王以下、卿・大夫・士の精神労働者Ⅱ支配者階級には、役人としての公

田から上納される世禄Ⅱ国家的土地所有制Ⅱ公権力支配と、不課税である祖先の

祭祀のための圭田Ⅱ私的土地所有制Ⅱ私権力支配という、公と私の二元的な俸

禄制度が存在したのである。

②―庶民Ⅱ被支配者階級には、周王と役人を養うための公田Ⅱ国家的土地所有

制度下の租税負担制度と、私田Ⅱ私的土地所有制下の個人的収入制度という、

公権力と私権力という二元的な土地所有制度が存在したのである。

だとすれば、この場合の王権の機能には、全く相異なる二つの機能が存在することになる。一方では就役Ⅱ公權力Ⅱ「王土王民」思想Ⅱ国家的土地所有制度となり、他方では免役Ⅱ私権力Ⅱ「王土王民」思想外Ⅱ私的土所有制度となる。従って王権が正常に機能した場合は、理論的に言えば王権には、本来的に公権力機能と私権力機能という、全く相異なる公と私の機能が具有されておられ、これが行政実務において混合されて、公平に行使されることになる。

つまり王権が正常に機能していた場合には、王権には公権力の機能と私権力の機能という、公と私の二元的機能が存在していたとすることである。このことは「西山」の後半に「或る者は・・或る者は・・」と、全く正反対の状況が、「対の思想」を導入して、対等に謳われている事でも理解されるであろう。

だから征役労働はたとえ辛くとも、公権力である王権が、言葉通りに正常に機能して人民に貫徹していれば、全ての大夫が平等に使役されて、作者のように徭役負担の偏重という、徭役負担の不公平を嘆く必要がないのである。

征役の不公平による苦痛を嘆かなければならない所に、王権Ⅱ公権力機能が低下・衰退して、一方的な偏重が起きて、徭役負担が重くなり、使役されて苦しんでいる人間がいる。その一方で公権力支配から徭役負担を全く免れて、私生活や家族生活を十二分に享受させるような、王権Ⅱ国家権力の私権力的機能が增大していて、『詩経』・「西山」にも謳われるほど酷くなり、徭役負担の不公平性が露呈してきていたのである。

このような不公平な徭役負担制度の結果になるのは、恐らく人脈や賄賂等によつて、官吏と富民が結託して、就役と免役の公平な輪番機能が捻じ曲げられて、本来的に王権が具有していた公平な公と私の二元的機能が変質を来たして、徭役の不公平負担が拡大されて行き、特定個人には就役負担の義務を回避させ、

特定個人には徭役負担を偏重的に賦課するような、全く不公平な行政機能に変質していったと思われる。

孟子は、滕の文公に招かれ周の井田制度の内容を詳細に述べて、その実現を強く主張したが、滕の文公の家臣である畢戦との会話において、

「ところで仁政とは、まず耕地の境界を正しくすることからはじまるものです。境界が正しくないと、井田の土地の分け方が均分にはいけません、つれて役人の俸禄も公平というわけにはいかなくなります。それで昔から暴虐の君主や貪欲な役人は、みなこの境界をいい加減にし「て私利私欲をはかつ」たものです。ところが、ひとたび境界さえ正しくなると、井田を分けることも俸禄を決めることも、いながらにしてたやすくできるものです」(一八)と述べている。中国ではいつの時代でもそうなのであるが、公平な制度が不公平になる原因は、富民と私利私欲を図る汚職官吏との結託に原因があったのである。これが「大夫不均」という嘆きの実情であったと思われる。

つまり西周時代の歌謡を孔子が編纂したと言われている『詩経』時代には、王権Ⅱ公権力が正常に機能した場合においても、正常に機能しない場合に置いても、そのどちらにおいても、すでに周王Ⅱ王権Ⅱ国家権力機能には、公権力と私権力という二重権力機能Ⅱ「対の思想」が存在したということである。

これを簡単に定式化すると、周王Ⅱ公権力Ⅱ王土王民思想Ⅱ国家的土地所有制度Ⅱ征役への就役Ⅱ家族生活の破壊と、周王Ⅱ私権力Ⅱ王土王民思想外Ⅱ私的土所有制度Ⅱ征役からの免役Ⅱ家族生活の享受という、凡そ正反対の二つの形式的な土地人民支配理論に要約できるのである。

孟子も韓非子も、このお互いに反発する二つの土地・人民支配理論における国家権力の二重権力構造論を前提にして、王権の一元的土地・人民支配理論で

には行かずに舜のところへ行った。天子の徳をほめたたえて歌うものは、丹朱をほめたたえて歌わないで、舜をほめたたえて歌った。舜は「ああ、天命だ、しかたがない」といって、やっと中国に赴いて、天子の位を踐んだ。これが堯帝である」(一六)と、述べている。

この舜の事例で分るように、天下を私有物としない公平さが公権力なのであり、それは、具体的には天下万民が何処の誰に帰趨するの否かにより規定される。中国思想の特色である天人相関説でいえば、「民視民聴」に規定された天命思想で決定される。この無為者としての天命思想に基づいた舜の天子即位の経緯については、孟子も司馬遷と同様の記載をしている(一七)。

聖人の堯も、「舜に天下を授ければ、天下の人民は利益を得て丹朱が苦しむだろうし、丹朱に天下を授ければ、天下の人民は苦しんで丹朱は利益を得るだろう。」とあるように、「対の思想」の体現者であり、王権を公権力と見なすか、私権力と見なすか、天下万民のための人主としての立場と、父親としての家族の親愛の情の中で、堯帝の心中は揺れに揺れて動いていた。聖天子・堯の思考においても、中国社会の伝統的な思想的特色である、国家と家族という二つの中心を持つ楕円形の世界観が、よく表現されている。

話は元に戻るが、この『詩経』の西山の詩の中心にあるテーマは、一読してわかるように、孟子が指摘していたように、士大夫Ⅱ王の家臣が、大勢の家臣がいる中で、自分ひとりが父母の養生も全うできないほど、北征の労役に酷使されている就役の不公平な現実について、嘆き怨み悲しんでいる点である。さらには、大夫への徭役負担が不公平で、一方では安楽に家族生活を楽しみ、酒を飲むなどの遊興に日夜となく耽っている大夫が現実存在している、天子の不公平な政治姿勢を怨んでいる、という点である。

ここで重要な問題点は、古来より天子の絶対的支配を表す言葉であるとされる「普天の下、王土に非ざる莫なし、率土の浜、王臣に非ざる莫なし」の解釈である。石川氏は、「解説」で、孟子と同じような解釈をして、「その本来の意味は、このように国が広く人が多いのに、なぜ自分だけがかくも不公平に使役され、このように王事に苦しむのかという心持ちである」と、注釈している。

確かに文章の意味は、孟子や石川氏の言う通りであるが、「普天の下、王土に非ざる莫なし、率土の浜、王臣に非ざる莫なし」と明言している以上、この二句は絶対に無視できないのである。

それではどのようにこの詩を理解すれば、文意が通じるのだろうか。その問題を解決するヒントは、すぐ後の文にある「大夫均しからず、我のみ事に従いて独り賢づく」(原文は、「大夫不均、我従事獨賢」という一句である)と思う。

つまり中国全土に「王土王民」の意識が貫徹する中で、王権Ⅱ公権力に就役して私的家族生活を破壊されている人間と、逆に王権Ⅱ公権力からの就役を免れて、私的家族生活を享受している人間が大勢いるという、全く不公平な徭役負担制度が実施されている周代の政治の現実である。

従ってここから本節に関係した重要な視点について、以下の結論を導き出すことができるであろう。

先ず中央集権制下の統一的王権Ⅱ「王土王民」思想Ⅱ国家の一元的土地・人民支配制度が正常に機能している理想の場合には、どのような土地制度論が導き出されるのであろうか。「西山」の「大夫不均、我従事獨賢」という言葉から推察すると、周代の征役制度は、全人民に定額・均等に負担させて、征役の義務を課す差充輪番制であったと思われる。この場合の人民には、徭役負担をす就役期間と、徭役負担の免除されている歇役期間とが存在することになる。

による一元的公権力支配Ⅱ「王土王民」思想には疑問を持っていた。外と内と述べているように、公権力Ⅱ国家制度とともに、私権力支配Ⅱ家族制度も認められていて、全面的な国家の一元的支配の意識と思想はなかった。つまり韓非子は、国家と家族という、外と内Ⅱ公と私の二元的な世界観をもっていたのである。

ここで、孟子と韓非子が引用した『詩経』(「小雅」・「北山」)の石川氏の通訳した本文を紹介して、本当の『詩経』の意味は、どのようになっていたのかを述べて、その国家権力構造の問題点を検討しておきたい。

「あの北方の山に登り、枸杞の葉を摘み取とる。(捧げて山の神靈に申し上げる)強くたくましい私は(群臣らと共に)朝に晩に王命に従う。王の征役は休む(間も)なく(続き、故郷の)父母を憂えさせ(心配させ)る。

大いなる天の下、王の土地でないところはない。地の続く極みまでも、(そこに住む人は誰一人として)王の臣でない者はない。(なのに王が)大夫(を使うのを)公平にせず、私だけが王命によって(多くの役を与えられ)独り苦勞をする。

四頭の牝馬は(休まず)力強く(馳せる、そのように)王命の征役は盛んに(起こる)。私がまだ老いていないことをよいことにし、私がまさにさかんになることをよいこととする。(私の)体力がまさに剛いので、四方の国々を経営させる。(なぜ私独りが王命により多くの役を与えられ苦勞するのか。)

或るものは(ゆっくりと)静かに休息して家でくつろぎ(ぶらぶらしているのに)、或るものは憔悴して国事に仕える。或るものは休んで寝台にあおむきに寝て(いるのに)、或るものは(王事)の用向ききに歩くことを止めず(忙しく動き回っている)。

或るものは(安楽に耽って、世の人の)悲痛の叫び声を聞かない(のに)、或

るものはいたみ悲しんで骨を折り苦しむ。

或るものはくつろぎ休み(気ままに)寝たり起きたりする(のに)、或る者は征役に忙しく苦勞する。

或るものは楽しみに耽って酒を飲み、或る者は痛み悲しみ罪を(受けなかと)畏れる。或るものは(暇に任せて朝廷に)出入りし(その場で)勝手気ままに(口先だけの)立派な議論をする(だけなのに)或るものは何でもやらない仕事は無く苦勞をする。」(一五)と言うのが、「西山」の詩の内容である。

ところで今まで何の断りもなく、王権Ⅱ公権力として使用してきたが、国家権力の公権力機能とは、この『詩経』・「西山」の資料に「大夫不均」と表現されているように、王権の政治が天下人民に公平であるか否か、天下人民を私有物として扱わないか否か、で決定されるといふことである。王権の行使が不公平であれば、王権が私権力機能になるのであり、無前提的に王権Ⅱ公権力機能として、考えたてて使用してはいけないのである。

この一つの事例について、堯から舜への王位交代―禪譲を例にとって説明してみたい。司馬遷は、舜の天子即位の経緯について、

「前々から堯は、子の丹朱が不才で天下を授けるに足らないことを知っていた。故に仮に方便として、天下の政を舜に授けてみた。舜に天下を授ければ、天下の人民は利益を得て丹朱が苦しむだろうし、丹朱に天下を授ければ、天下の人民は苦しんで丹朱は利益を得るだろう。堯は「どうしても、天下人民を苦しめて、一人を利せしめることはできない」といって、結局、舜に天下を譲りわたした。しかし堯が崩じて三年の服喪が終ると、舜は天子の位を丹朱に譲ろうとして、南河の南の地に居住した。ところが、諸侯の朝勤するものは、丹朱のもとへは行かずに、舜のところへ行った。訴訟事のあるものは、丹朱のもとへ

支配における「対の思想」を持っている。しかし他方では、舜の父の瞽瞍と弟の象の処遇に対する孟子の理解は、家族制度Ⅱ私権力での保護であり、韓非子の理解は、国家Ⅱ公権力での処分という、舜の瞽瞍と象という親族への対応について、全く正反対の理解をする。「対の思想」を展開していることである。

そしてここでもう一つ重要な事実は、天子である舜自身は、父の瞽瞍と弟の象について、公権力支配での処分と私権力支配での保護という、全く自己矛盾した正反対の「対の行動」をしたという事実である。

従ってこの二つの事実について、孟子と韓非子は、舜の自己分裂した二つの全く正反対の行動の、どちらか一方を選択して―孟子の場合は私的な家族的保護、韓非子の場合は公的な国家的処分―、自己の思想的展開の理論武装の手段として利用しているということである。

このように儒教と法家の政治理論は全く噛み合わず、政治理論の展開が全くすれ違いをしているところに、儒教と法家の両思想は、全く正反対の相対立する同一物に対する両面思考―「対の思想」を展開しているのである。

三 「王土王民」思想における公権力と私権力

ところで孟子の場合には、『詩経』の王土王民思想を記載した字句を全面的に排斥しなければならぬのは、『詩経』の意味を文面通りに解釈すると、王権による人民と土地への一元的支配体制となり、国家的な土地所有制と人民所有制―王権への土地と人民の全般的な隷属性に繋がってしまうからである。

これでは、公権力支配Ⅱ国土制度と私権力支配Ⅱ家産制度、つまり国家的土地所有制と私的土地所有制の併存性という、儒教の二元的統治体制―「対の思

想」が、論理的に破綻してしまう結果になるのである。

孟子によれば、『詩経』(「小雅」・「北山」)の意味は、王事―王土王民思想―公権力支配を認めないわけではないが、父母を養えないほど労役が多いことを怨んでいるのであり、私的家族生活を営む困難性を批判している、と言う。

このような孟子の主張する公権力支配と私権力支配の並存という二元的支配思想は、韓非子でもほぼ同様な思考方法を展開していた。

韓非子は、臣下の舜は主君の堯の土地を奪い取り、父親の瞽瞍を追放した、君臣上下の仁義をも弁えない輩であり、国家と家族の上下秩序を混乱させた元凶であり、賢明な人物とは言えない、と批判した後に、

「・・・『詩経』には「広い天のおおうところ、すべてが王の土地である。大地のつづくかぎり、すべてが王の臣下である」と言われている。もしほんとうにこの詩の言うとおりのであるなら、舜は外では自分の主君を臣下にし、内では自分の父親を臣下にして、母親を下婢にし、主君の娘を妻にしたことになる・・・」(一四)と、言うのである。

つまり「王土王民」思想が正しいならば、舜は、外Ⅱ国家制度下では主君の堯を臣下にして、内Ⅱ家族制度下では父の瞽瞍を臣下には出来ない筈だ。しかしそのような非行をしたのであり、『詩経』の「王土王民」思想とは逆の行動をしたと述べている。「王土王民」思想をバックにして、舜の非行を責めている。興味深いのは、「王土王民」思想について、孟子は斉東野人の戯言だと言うが、韓非子は自己主張の正当化の武器にしている。全く逆の理解であり、孟子と韓非子は、「王土王民」思想についても「対の思想」関係にある事である。

それは兎も角として、韓非子は、「もしほんとうにこの詩の言うとおりのであるなら」(原文は「信若詩之言也」)と仮定形で述べている事で分るように、王権

天下の父にしたのであるから、尊ぶことの極致であるし、また天下の富を傾けて瞽瞍に孝養したのであるから、孝養の極致である。」と、舜は瞽瞍を天下の父にしたのであり、尊ぶことの極致であると述べている。

孟子は、舜の父親の瞽瞍を、新天地・舜の上に立つ天下の父—公権力の代表者—としての認識をもっており、舜を父親のためにただ単に公的資産を私的に流用した私権力行使者のみとは捉えていないからである。

従って舜が天子である場合の国家権力構造を図式すれば、天下の父(瞽瞍) ↓天子(舜) ↓百官 ↓人民となるのであり、この権力図式において、上は瞽瞍から下は人民にまで公権力(国家制度)と私権力(家族制度)が直線的に複合して貫徹すると、言いたいのである。このようにしてこそ平民出身の舜と瞽瞍との公私にわたる矛盾関係が解決できるのである。

実際の歴史上の史実において、右の父親の瞽瞍と子供の舜の事例の図式が適応される代表例は、舜と同じく一介の平民より皇帝にまで上り詰めた漢の劉邦と父親の劉大公との関係であろう。司馬遷は、劉邦が父親の存命中に太上皇の尊号を与えた経緯について、次の様に言っている。

「漢の六年となった。高祖は五日に一度は父君に御目通りして挨拶することは、一般家人の父と子の礼義のようであった。太公に仕える執事がいうには、「天に二つの太陽はなく、地に二人の王はありません。いま、皇帝は子ではありませんが、万民の主であります。太公は父であつても人臣であります。どうして、人主に人臣を礼拝させてよいでしょうか。そのようになさいますと、皇帝の重厚な権威は天下に行われなくなりそうです」と、しごくもつとも忠告をした。その後、皇帝が伺候されると、大公は竹箒をもって道路を払い、門に迎え、後ずさりして敬意を表した。高祖は大いに驚き、車から飛び下りて大公をささ

えた。太公はいった、「皇帝は万民の人主です。どうして、わたしが父だからとて、天下の法を乱してよろしいでしょうか」と。高祖はなるほどと思ったのだろう。父すなわち太公を尊んで、太上皇の尊号を上つて、ますます子としての礼を尽された。そして、心中に家令のいった言をよみして、褒美として百斤を与えた。」(二三)と、司馬遷は記述している。

「天に二つの太陽はなく、地に二人の王はありません」と言うのは、孔子の言葉である。劉邦は、父親の太公と子の親子の上下関係と、万民の主である皇帝と人臣の父親との矛盾関係を解決するために、太公に太上皇の尊号を奉り、皇帝と人民との国家権力関係⇨公権力と、親子の上下関係⇨私権力との間に存在する自己矛盾する溝を埋めたのである。この結果、太上皇(父親) ↓皇帝(劉邦) ↓百官 ↓人民という図式が成立して、国家⇨公権力と家族⇨私権力という、二重権力の支配構造が、お互いに矛盾することなく、上は太上皇から下は人民にまで直線的に複合して貫徹する事になったのである。

最後に孟子と韓非子の主張の結論として、以下のように言えるであろう。儒家と法家の両者は、忠孝について—家族制度と王土王民思想—には、同様の理解をしている共通点が存在している一方で、他方では全く異なる解釈をしているのであり、根本的な相違点が存在している、ということである。

両思想の共通点とは、王権の支配⇨公権力と、家族制度の保持⇨私権力支配という、国家権力と家族権力の二重権力支配体制を肯定していることである。

また両思想の相違点とは、孟子は、舜は父の瞽瞍と弟の象を公権力外の家族制度の保護下に置き、両者を厚遇したという。しかし韓非子は、舜は父の瞽瞍と弟の象を公権力下に置き両者を処分した、舜は不孝者というのである。

従って孟子も韓非子も共通して、公権力支配と私権力支配という、政治権力

はならぬ。つまりは、自分の心で作者の真意をよく酌みとって説いてこそ、はじめて詩が分るといふものだ。．．．いったい孝子の極致は、その親を尊ぶよりも大なるものではなく、また親を尊ぶことの極致は、天下の富を傾けて親に孝養をつくすよりも大なるものはない。ところで、舜は瞽瞍を天下の父にしたのであるから、尊ぶことの極致であるし、また天下の富を傾けて瞽瞍に孝養したのであるから、孝養の極致である。詩経に『永遠に偉大であるわい孝道は。ただひたすらこの孝道に則ることだ』とあるのは、この舜のような孝子の行いをいっただけである。また書経にも『舜は平生子としてのつとめをよく果たし、父の瞽瞍の前にでれば、常にかしこまって恐れ慎んだので、さすがの瞽瞍もついにその真心に打たれて心から信じるようになった』とあるが、舜は実にこのような孝子であった。それなのにどうして『父でも子供として扱うことはできない』などと、いうことができようか。(一一二)と、孟子は言うのである。

舜の天子即位に際して、王土王民思想Ⅱ公権力支配を理論的に考えれば、舜が天子になった場合には、舜と瞽瞍との間には、君臣関係Ⅱ主従関係が成立して、父親の瞽瞍も臣下の礼をとるのが、当然なのである。

しかし王権Ⅱ国家社会の唯一的存在に対して反発して、親子の肉親の愛情の大切さを主張して、家族制度の存在や家族内の父子の上下関係を重視する儒者の孟子には、家族制度秩序の安定的維持を重視しなければならない以上、父親の瞽瞍や他の家族までも公権力支配Ⅱ王土王民思想内に受け入れようという気持ちはさらさらなかったのである。

舜の父親・瞽瞍は、王土王民思想Ⅰ王権による公権力支配から除外された存在であり、『詩経』の「西山」に記載されているような、王事に抜き使われて怨み嘆く大夫と異なり、傍観者的な外部的な存在なのである。

つまり舜の父親・瞽瞍は、舜によって公権力が貫徹しない私権力支配Ⅱ家族制度下に厚く保護された存在であった。そして舜が父親の瞽瞍に孝養を尽すために、公権力下の全資産を私用に悪用Ⅰ「滅公奉私」して、瞽瞍が初めて舜を信用して父子の家族秩序が成立したと言う。

だから舜は全中国を家産視したのであり、舜と瞽瞍との関係は、父子間の上下関係が成立する家族制度Ⅱ私権力支配下で生活している人間関係なのである。つまり孟子の『詩経』の「北山」の理解は、「詩の意味は『自分たちの仕事はみな王様への奉仕には違いないが、(王様の領土は広く、王様の臣下は衆のに)、自分たちだけがこんなに苦勞ばかりしているとは』と怨み事を述べたものである」と言うように、王権に北征への労役に扱きつかれている人間についての公権力支配と、王権に扱きつかれていない人間の存在している現状Ⅰ家族制度を保持する私権力支配の存在という、二重権力支配体制を述べた内容なのである。

そして舜の父親・瞽瞍は、後者の家族制度Ⅱ私権力下に温存されて父子の上下関係の下に存在する、という思考方法を展開していることである。

ところでこの資料の後半部分において、もっぱら舜と瞽瞍との親子関係において、舜の親孝行を説明するために、舜は瞽瞍を公権力支配の及ばない私権力支配Ⅱ家族制度下に置いたと述べてきた。しかしそれは、舜の親孝行という家族制度秩序の維持を強調して説明するために、言っただけである。

儒教思想における公権力支配と私権力支配という、二重権力構造的な支配理論は、舜と瞽瞍とのような親子関係や家族関係にまでも勿論、貫徹している。

その証拠の一つ目の事例は、注(六)で、瞽瞍がもし殺人罪を犯した場合、舜は公法的な対応方法をするであろうとの、孟子の発言で示した。

二つ目の証拠は、この資料の終わりにおいて孟子は、「ところで、舜は瞽瞍を

のような君臣関係が成立する理論には、一応、孟子も是認している。しかし直ちに孔子の発言は、実は斉東野人の戯言だと一蹴するのである。

なぜならば、これを事実として認めてしまうと、先の天子・堯と臣下の舜との君臣関係が逆転してしまい、君臣の義が成立たず、舜と瞽瞍との仁孝の上下関係も逆転して、瞽瞍が臣下となり、家族の上下関係が成立しない。公権力支配下の理論では、堯と舜との君臣関係や舜と瞽瞍の親子関係も、全ての君臣・父子の上下関係が逆転してしまう結果に陥るのである。

儒教にとり天地がひっくり返る、大騒動になるのであり、孔子は冷や汗が出たといっているのも無理がない。儒教思想の仁義という、最も大切な道德秩序が成立しなくなる。孟子にとってこのような儒教モラルを顛倒させて、崩壊させてしまうような事はあってはならず、事実として絶対に是認できるものではない。孟子が斉東野人の嘘八百の戯言と言うのも、決して無理はない。

では、どのような理論的な反論方法を駆使して、孟子はこの天地がひっくり返るような重大問題を論理的に矛盾することなく説明したのであるか。続けて孟子は、門人の咸丘蒙に言う。

「堯の存命中は、瞬は天子にならなかつた。」堯が年老いたので、舜は摂政として政治を扱ったまでだ。その証拠には、堯典にも『舜が摂政となつて二十八年、偉大な堯帝はついに崩御された。百官はあたかも父母を失つたかのように、悲しんで三年の喪に服し、また三年の間というもの、天下の人民は一切の鳴物をやめて謹慎した』と言っておるのである。孔子も『天に二つの太陽はなく、民に二人の天子はない』といわれたが、もし舜が堯の死ぬ前にすでに天子となつていて、堯の死後、天下の諸侯をひきいて堯のために三年の喪に服したとすれば、それこそ堯と舜と、二人の天子がいたことになつてしまう。」咸丘蒙

がいった。「舜が堯を臣下としなかつたことは、先生のお話でよくわかりました。」(一一二)と、孟子に答えている。

孟子は、堯の生存中は、舜は摂政として堯の政治を補佐しただけで、天子にはならなかつたと言う。従つて堯と舜との君臣関係は逆転せず、堯と舜の禪讓説話は理論的に崩壊することなく、儒教思想も混乱せず安泰に済んだのである。

それでは舜と父親の瞽瞍との親子関係について、孟子はどのようにして門下の咸丘蒙に説明しようしているのか、これが次の問題である。

先に述べた韓非子の不忠不孝批判に対抗するかのように、これに反して舜の忠孝を持ち上げて主張する孟子は、『詩経』は字句通りでなく心意をもつて解釈せよ、でないと『経書』は理解できないという。続けて孟子は言う。

「孟子の門人の咸丘蒙がたずねた。……ところで、詩経には、『普く覆う大空の下は、天子の領土でない処はなく、大地のつづく果てまでも、天子の臣下でないものはない』とあります。さすれば、舜が天子となつた以上、父も瞽瞍だけがひとり臣下でないというのは、いったいどういう理由なのでしょう。か。ぜひおきかせください。」孟子はこたえられた。「この詩はそういう意味のものではない。(周の)幽王の時、士大夫がながく王事(征戦)に苦勞させられて、帰つて父母を養うことができないのを嘆き怨んだもので、詩の意味は『自分たちの仕事はみな王様への奉仕には違いないが、『王様の領土は広く、王様の臣下は衆のに』、自分たちだけがこんなに苦勞ばかりしているとは』と怨み事を述べたものである。「だから、この詩を舜と瞽瞍との場合に於てはめて、親も臣下とみなしてよい、という意味にとつては、大変な間違いである」それ故に、おおよそ詩(経)を説くには、一つ一つの文字にとらわれて、一句の意味をとり損ねてはらぬ。また一句の意味にとらわれて、全体の意味(作者の真意)をとり損ねて

下の混乱をまねく妖術である。瞽瞍は舜の父であったが、舜はそれを追放し、象は舜の弟であったが、舜はそれを殺してしまった。父を追放して弟を殺したのでは、仁者というわけにはいかない。帝の二人の娘を妻にして天下を奪い取ったのでは、義人というわけにはいかない。こうして仁も義も持ちあわせていないのでは、賢明とも言えない。『詩経』には「広い天のおおところ、すべてが王の土地である。大地のつづくかぎり、すべてが王の臣下である」と言われている。もしほんとうにこの詩の言うとおりのことであるなら、舜は外では自分の主君を臣下にし、内では自分の父親を臣下にして、母親を下婢にし、主君の娘を妻にしたことになる。・・・彼らはすべて世間をすててそれを治めようとはしない者である。」(一一)と、韓非子は言うのである。

孟子と韓非子の舜に対する「忠孝」解釈の違いは、以下の様に要約する事ができるであろう。

一つには、国家制度と家族制度の認識の違いである。孟子は、堯の存命中には舜は天子に即位しなかったというのである。また家族道徳の親愛の情から、父の瞽瞍や弟の象を公権力の支配外に置き、厚遇したという。これに対して韓非子は、舜は父の瞽瞍を追放して、弟の象を死刑にして、家族の両者を冷遇して、公権力支配下に置き処分したというのである。両者は真つ向から正反対の解釈をしている。だから家族制度を重視するのは、韓非子でも同様なのである。二つには、『詩経』「小雅」の「北山」に出典する、「普天の下、王土にあらざるはなく、卒土の浜、王臣にあらざるはなし」の解釈論である。韓非子は、『詩経』の文面にあるように文面通りに字句通り解釈して、舜は父の瞽瞍と弟の象を私権の支配する家族制度下に置いて両者を保護せず、また堯の天下を奪ったと、舜の不忠不孝を激しく批判している。

では、韓非子の言う通り本当に舜は、堯の天子の位を篡奪して天子に即位して、父親の瞽瞍を追放したのであるか。孟子の反駁を聞く必要がある。

孟子は、堯・舜の禅譲説話と、舜の父・瞽瞍への処遇方法について、門人の咸丘蒙に以下のように述べている。そしてまた孟子の発言は、儒教思想における公権力支配と私権力支配との相互関係―国家権力構造における二重権力支配構造理論を考える上で、重要な資料としての好個の事例ともなるであろう。

「孟子の門人の咸丘蒙がたずねた。「古くから伝えられている言葉に『徳のすぐれて高い人は君子も臣下として扱うことはできず、父も子供として扱うことはできぬ。』されば舜が南面して天子の位につくや、今まで天子であった堯は諸侯を率いて臣下の礼をとって北面して拝謁し、瞽瞍もまた父でありながら北面して舜に拝謁した。舜は流石に臣下の礼をとる父の姿を見て、恐縮して居たたまれない様子であった。この事を孔子が批評して『この時ばかりは「君臣・父子が処を易えて」、天下の人倫は実に危険の上でもないことであった』といわれた、このことですが、実際にあったのでしょうか。」孟子はこたえられた。「いやいや、これは君子の言葉ではなく、斉の東の鄙の分らず屋の田舎者のたわごとだ。」(一二)と、孟子は答えている。

ここで大切なことは、門人の咸丘蒙の質問、つまり舜が天子の地位に就いた場合、理論的に言えば、有徳の天子・舜―公権力の代表者―の前には、先の天子・堯や父親・瞽瞍が、新天地・舜の前に北面して跪き、臣下の礼を取り拝謁しなければならぬのである。舜と堯、舜と瞽瞍との間には、君臣関係や主従関係が成立することを認めなければならない、と云うことである。

新天地・舜―公権力支配者―には、先の聖天子・堯であろうとも、父親の瞽瞍であろうとも臣下なのであり、どの様な人物であろうと例外は許されない。こ

「孟子が言われた。「墨翟の説にかぶれて学ぶものが、その誤りを悟ると、必ず楊朱の門に走り、やがて楊朱の説の誤りを悟ると、必ず中庸をえたわが中庸の道に帰ってくるものだ。「かくて両極端の邪説から目覚めて」、わが道に帰ってきたなら、心よくこれを受け入れてやるまでのことだ。・・・」(九)と、儒教の懐の深い複合的な思想的長所に言及している。

孟子は、墨翟の思想には長所と短所があり、楊朱の思想にも長所と短所が存在すると言っているのである。そしてこの両極端の思想の長所と短所を抱え込むことのできる思想は、「対の思想」を具有する儒教だということである。この事実は、韓非子の儒教批判においても、明瞭に述べられている。

「世間で有名な学派は儒家と墨家である。儒家の祖は孔丘であり、墨家の始祖は墨翟である。孔子が死んでから、儒家では子張派・子思派・顔氏派・孟子派・漆彫氏派・仲良氏派・公孫氏派・樂正子派が分立している。・・・だから、孔子と墨子との後では、儒家は八派に分裂し、墨家は三派に分裂したのであって、それぞれに学説の内容は反対で違い違っているのに、各派ともわれこそ孔子あるいは墨子の正統だと自称している。・・・」(一〇)と述べている。韓非子が述べているように儒教には、自己矛盾する学説を内包していたのである。

法家の大成者である韓非子は、育った家庭状況が違う。「孟母三遷」の言葉があるように、教育熱心な母親に慈しまれ育てあげられた孟子と違い、韓非子は、情け容赦なく秦に領土を削り取られ滅亡した韓国の悲運の貴公子の出身である。この二人の出自の違いが、その後の政治思想家として大成していく過程において、仁義による道徳政治的立場に立つのか、法術による人民統治的立場に立つのかという、両者に決定的な違いに決定的な影響力を与えたと思われる。

彼は、性悪説を説く儒家の荀子の門下に学び、その後一家をなしたが、李斯

の謀略により毒殺される直前・直後に秦の始皇帝に高く評価された経緯をもつ。それだけに韓非子の文章には、法術による人民統治の立場からの儒教批判の主張が多い。この点でも仁義による家族主義と国家統治の原理を展開する儒教と正反対であり、仁義を説く儒家への政治批判の文章が夥しく出てくる。

一一 儒家と法家の政治思想論争

このことを実証するために、孟子と韓非子の政治思想の思考方法の違いを展開している事例として、一―二例を挙げてみる。孟子は、舜は無徳でどうにも扱えない父親の瞽瞍に天下の富を挙げて奉仕したから、初めて人民の中に家族道徳が成立したという。また何度も父親の瞽瞍と共謀して兄の舜を殺害しようとした不徳の弟の象を有庠の君主に厚遇した、とも言う。しかし韓非子は、以下の様に、全く孟子と正反対の解釈をするのである。

「忠臣はその君を危険におとしいれず、孝子はその親を非難しない」といわれる。ところが、今、舜は賢人であることによって君の国を奪い取り、湯王・武王は義人であることによってその君を追放したり弑殺したりした。かれらはみな賢人であることで主君を危険におとしいれたものである。ところが天下の人々はこれを賢人としてほめていた。昔の烈士は「名節を重んずるために」外にあっては君に仕えて臣になろうとはせず、内にあっては家のために働こうとはしない。これは、外ではその君を非難し、内ではその親を非難しているのと同じことになる。それに、そもそも外にあって君に仕えず、内にあって家のために働かないというのは、世間を乱して跡嗣ぎを絶やす道である。そこで、堯・舜や湯王・武王を賢としてほめあげ、烈士を善しとてあがめることは、天

らだ。自分の身は天子でありながら、弟を一介の平民のままに放っておいては、どうして親愛するといわれようか。・・・孟子はこたえられた。「象は不徳なひとだから、彼に直接その国を治めさせるといふわけにはいかない。そこで舜は、べつに役人をして国を治め、租税徴収させたのだ。だから、人によつては封じたといわずに追放したともいうのだ。だが、こうしておけば、いかに象でも人民を苛めるわけにはいかんではないか。このようにしながらも、弟思いの舜はいつもしばしば会いたいと思ひでいたから、悦んで象もたえず都にやってくるようにさせたのである。『朝貢の時期が来なくても、政治の用むきでなくても、たびたび有庠の君に接見された』と古書にあるのは、つまりこの事をいつたものである。」(七)と、孟子は言うのである。

孟子は、舜は弟の象は不仁・不徳者であるから地方に左遷したが、逆に親愛なる弟である故に地方君主に封じて厚遇して拔擢した、と言う。孟子は、「対の思想」を駆使して、舜の弟・象に対する封建的な任用を説明している。

天子である舜においては、国家制度Ⅱ公権力支配Ⅱ象の追放Ⅱ役人の地方統治、逆に家族制度Ⅱ私権力Ⅱ象の厚遇的君主Ⅱ私的接見という、二重権力構造の支配体制による地方統治体制が、中央集権制的封建制度国家の上に明瞭に展開されている事実が、理解されるであろう。

本来の封建制度の支配体制理念は、天子と臣下の主従関係に基礎を置き、親愛関係や功績の度合いを勘案して、主君と臣下の御恩と奉公による、封建的主従関係で結合するのである。地方君主に封じられた有徳の功臣の場合には、土地と人民を支配する、公権力と私権力(例えば公財(国財)と私財(家産))の管理者であり執行者という、公私の二重権力者であるのが、建国の建て前である。

しかし不仁・不徳の象の場合には、税の徴収などの土地と人民の管理や支配

という公権力の執行は、表面的な地方君主である象の代理者である役人に、その権限を委譲して、象を土地と人民から切離して寄生領主にしたのである。

ところで、『孟子』では、法家思想の批判をした文章を見ていない。これは、孟子の生きた時代の儒教の最大の思想的ライバルが、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義であったことに起因するのであろう。そしてこの時代の法家思想は、儒教に敵対出来る程の発言権を持つ思想にまでには、その思想と政治情勢が熟して発展していなかったものと思われる。

しかし古代中国においては、「対の思想」を持たない思想は、たとえ一世を風靡して、当時の人口に膾炙されたとしても、やがては中国の世界から消えていく運命にあつたのであろう。孟子は、楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義の両極端思想を、以下の様に激しく批判していた。

「父を無視し主君を無視する禽獣にもひとしい野蛮人は、これこそ周公が打つ懲らしたもうたところなのだ。私もまた天下の人心を正し、間違つた学説を排撃し、片寄つた行いを防ぎとめ、でたらめな無責任きわまる言論を追放して、そして禹・周公・孔子の三聖人の志をうけ継ぎたいと思つている。・・・私にかぎらず、誰でも言論をもつて、楊朱・墨翟の邪説を排撃するものは、すべて聖人の仲間なのである」(八)と、禹、周公、孔子の聖王が、伝統的に心血を注いで敵対・弾圧してきた政治的敵対物であり、家族制度と国家制度のどちらかを無視する両極端思想は打倒される運命にあると厳しく批判している。

今日の日本においても、家族があり国家がある以上、常識的に考えても、家族制度は無視できないし、また国家や社会も無視できないのは、至極、当然である。孟子の批判する両極端思想は、一方に偏つた偏向思想であることは、間違いないであろう。だから孟子は、悠然と余裕を持つて言うのである。

うな、単純で安易なシエーマを想定すべきではないのである。

次の孟子の公権力と私権力の相違についての主張をよく検討すれば、この事実がよく理解できるであろう。孟子も孔子の主張と同じ様に家族主義の重要性についての主張を展開している。

「孟子の門人の桃応がたずねた、「先生、舜が天子で、皐陶が裁判官であるときに、舜の父がもし人殺しをしたら、「その処分は」どうするのでしょうか。」孟子はこたえられた。「もちろん、皐陶は法によってすぐさま瞽瞍を罪人としてとらえるだけのことだ。」孟子はこたえられた。「いくら舜が天子だからといって、どうしてそれを差し止めることができよう。彼には代々受けついできた天下の大法というものがあつて、天子といえども私することができないのだ。」桃応がいった。「ではこの際、舜はどうしたらよいのでしょうか。」(父が死刑になるのを黙ってみているのですか)。孟子はいわれた。「舜は天下を捨てることは草履をすてぐらいにしか思っていないから、天子の位をなげうって父を背負って逃げ、人知れぬ海辺にそくて遠い辺地に行つてかくれ住み、一生にこゝして父に仕えて楽しみ、天下の事などは忘れてしまふことだろう。」(六)と、家族制度の危機には、公権力を棄てて逃亡すると、門人の桃応に答えている。頑迷固陋な父親で、普通の人間にはどうにも対応できない父親の瞽瞍に対して、舜は公法下に置き処分しなく、父を背負い逃亡して親を保護する、と言う。これまでの論考で累説したが、如何に古代中国では家族制度の存在が大きく個人の人生を規定していたのか、その一端を理解することができるであろう。従つて孟子においても、法家思想と同じように、舜が天子にいた場合には、公法の貫徹する国家(社会)権力が人民にまで貫徹する。しかし他方では、舜が国家を放棄した場合には、公法の貫徹しない私法の支配する家族制度が、蔽

然として存在するのである。つまり儒教の法思想においては、国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力という、家族と国家という二つの中心が距離をおいて厳然として存在する楕円形の二重権力構造の世界であることが実証されたであろう。

つまり儒教的世界は、どちらかを一方の比重を大きくして、どちらかの一方に収斂させて、論理性の整合性を採ろうとするのではない。国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力の両者を、同じ比重で見ている。公と私という二重権力構造の支配体制が社会と家族にまで貫徹する、「対の世界」なのである、

このような儒教の家族制度を重視する思想は、国家理論や政治理論に展開すれば、仁愛を基礎にした修身・齊家の家族制度が、治国・平天下の国家制度への擬制的拡大である、封建制度Ⅱ封土建国の政治制度に繋がって発展していくとは、容易に理解できる。孟子は、門下の万象に、以下の様に述べている。

「万章はたずねた。『舜の弟の象はいつも舜を殺すことを日日の仕事の様にしていたのに、舜は天子の位につくと、この弟を死刑にもせずただ追放しただけなのは、どういうわけなのでしょう。』孟子はこたえられた。「いや、追放するどころか、有庠という地方の君主にしたのだ。もつとも一説には追放したのだともいつているが。」万章は意外に思い、またたずねた。「……ところが、象はこの上もなく不仁なのに、有庠の国に封ずるとは。いったい有庠の人は何の罪があつて、象のようなものを君主に仰がなくてはならないのでしょうか。それとも仁者というものはがんらいこのように不公平なものでしょうか。……孟子はこたえられた。「仁者の弟に対する態度は、怒つてもその怒りをかくさないし、怨んだからといっていつもでも根に持たない。ひたすら弟を親しみ愛するばかりである。親しみ愛すれば」誰しも貴かれと願ひ、かつ富むことをのぞむものだ。舜が象を有庠に封じたのも、つまりは弟を富貴にしてやりたかつたか

干でも儒家と法家の思想的対応関係について展望しておく必要性があると考えられるからである。先ず儒教との相関関係を検討して、その特質を洗い出しておかないと、法家独自の客観的特質がよく理解できないと思うからである。

三つ目の問題は、中国人の伝統的な基本的思考である両面思考―「対の思想」と、「王土王民」思想(二)やその制度的展開と言われている周代の土地制度である井田制度をどの様に統一的に理解すればよいのかという問題である。

周代の井田制度の継承であると通説的に言われている唐代均田制度下の土地・人民支配論について、研究史の論争点を要約すると、凡そ以下のようになる。

土地制度については、土地国有制度説(玉井是博・宮崎市定)・国家的莊園制(と原則的土地私有制説(仁井田陞・志田不動麿)の二つがあり、人民支配については、国家的農奴説(志田不動麿・宮崎市定)・自由民(自作農説(加藤繁)の二つが並存している(三)。つまり均田制度下の土地・人民支配理論において、全く相違する二つの学説が、戦前より現在まで対立的に並存していて、未だ統一の見解が出ていない状況である。

そこで中国人の基本的思考である「対の思想」と、「王土王民」思想↓井田制度↓均田制という、論争が続いてきた国家的な土地人民支配理論の問題について、一つの私見を提起して、その問題を解明する手掛かりにして見たい。

一 対の思想と中央集権的封建制国家論

管見の限り、『論語』には一か所に法家思想への批判が見えるだけである。孔子は、楚国の葉県の長官である沈諸梁に、次のように儒家と法家との家族制度に対する違いについて述べている。

「葉公が孔子に話した、「わたしどもの村には正直者の躬という男がいて、自分の父親が羊をこまかそうとしたときに、息子がそれを知らせました。」孔子はいわれた、「わたしどもの村の正直者はそれとは違います。父は子のために隠し、子は父のために隠します。正直さはそこに自然にそなるものですよ。」(四)と反論している。この説話は韓非子にも見えていて、

「儒家は学問によって法をかき乱し、俠客は刀剣をふるって禁令を破っているが、君主はその両方をともに礼遇している。それこそ国家の乱れる原因である。・・・楚の人で正直ものの躬というものがいたが、その父親が羊を盗んだときにそれを役人に知らせた。楚の宰相は「こやつを死刑にせよ」と命じた。君に対しては正直であるが、父に対しては悪いと考えて、これを捕えて罰したのである。このことからすると、君に対しては正直な臣下というものは、父にとっては手に負えぬ子供なのである。・・・このことからすると、父にとつて孝子というものは、君にとつて逆臣なのである。こうして、楚の国では宰相が直躬を罰したために、悪事をお上に知らせる者がいなくなり、・・・(五)と、君臣と父子の利害は異なると、国家統治の立場から儒家の家族道徳論を痛烈に批判している。韓非子も国家と家族の二元的世界観を持つ思想家である。

父と子の相互隠匿を是認して家族主義道徳の大切さを主張する儒家の立場と、子が父の隠匿を暴き、家族主義を否定して国家権力に忠誠を尽す法家との立場の相違が見事に展開されている。公権力を排除するのが儒家の家族主義であり、公権力が家族制度の内部まで貫徹させるのが法家の立場である。この例でも儒家と法家は、「対の思想」の関係にあることが、理解できるであろう。

しかしここで重要なのは、積年に亘る自己の研究姿勢への自戒を込めて言うのであるが、中央集権制⇨公権力⇨法家、地方分権性⇨私権力⇨儒家というよ

対の思想と孟子の理想国家論

—対の思想(両面思考)から見た

儒家思想の国家権力構造について—

小倉正昭

国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力を均衡状態に実現して維持する「対の思想」は、儒教の理想的国家論の上に展開すれば、周代以前の中央集権制封建制国家(Ⅱ国王が移封・改易権を握る主従関係Ⅱ寄生領主制)となる。儒教の周代的国家構造論の中には、公権力と私権力という二重権力支配が、家族制度と国家・社会制度に複合的に貫徹する。国家的な土地所有制と人民支配制度といわれている「王土王民」思想の中には、就役Ⅱ公権力支配と免役Ⅱ私権力支配の二重権力支配が貫徹していた。周代の土地制度である井田制度にも、公田Ⅱ公権力と私田Ⅱ私権力の二重権力支配が並存していた。井田制度理念を継承した唐代の均田制度でも、口分田Ⅱ国家的土地所有制と永業田Ⅱ私的土地所有制という「対の思想」Ⅱ二元的土地所有制が並存していた。

キーワード：儒教 中央集権制封建制国家 公と私 王土王民思想 井田制度

はじめに

これまで上梓した論考において、儒教思想は中国人の基本的思考である両面思考—「対の思想」を持つことを累説してきた。そして「対の思想と中庸思想」(一)の論考では、儒教思想の精髓である中庸思想は、公権力と私権力という

相異なる両権力を、どちらにも偏らずに均衡状態に保持することを実現・維持して行く所に、政治思想史上の理論的意義が存在することを述べた。

そしてこの論考では中和の中庸思想は、公私の両権力が五分五分に混じり合い、修身・齊家には私権力が、治国・平天下の理想実現に貫徹して、中権の中庸思想は、修身・齊家には私権力が、治国・平天下には公権力が貫徹すると述べた。

そこで本稿で検討したい一つ目の問題は、対の思想を持つ中庸思想の政治学的理論が、国家権力論の上に展開すれば、一体どの様な具体的な国家権力構造になるかという、儒教思想の国家権力構造への具体的展開の問題である。

二つ目の問題は、儒教思想と法家思想の相関関係の問題である。法家思想は、中国では、儒家思想と並び称される大政治思想であり、儒教思想と法家思想は、中国思想の二本柱であることは、先学の大家が全て指摘する所であり、通説である。しかしこれまでの拙稿「対の思想の生まれてきた歴史的背景について」の各論においては、儒教思想と法家思想はどのような対応関係にあるのかについては、非常に重大な問題であるにも関わらず、全く触れず仕舞いに終わった。

そこで本稿においては、「対の思想」と儒教の理想的国家権力構造論は、一体どのような対応関係にあるのであろうか、また儒教と法家の政治思想は、どのような対応関係にあるのであろうかという問題について、先ず検討してみたい。

今後の研究課題である法家の政治思想の特徴を解明するためにも、ここで若

(Original Article)

3–Political Ideological Significance of the Thought of *Dui***— Historical background from which the thought of *Dui* (dualist thought) arose (Epilogue) —****Masaaki OGURA***

Two-sided thinking—“the thought of *Dui*”—is a basic mode of thinking for Chinese people. As the historical background from which the thought of *Dui* arose, we have pointed out special factors in China (and its people): “Respect for Reality”, “Changing Circumstances”, “Vast Country (Diverse National Character)” and “the Doctrine of the Mean”. Those factors are, however, merely superficial and phenomenal characteristics of Chinese society. Their fundamental factors must be considered to have been present from the developmental stages of humanity in world history. It is found on the one hand in the early maturity and firmness in the establishment of the family system in Chinese society associated with the breakdown of primitive communal society, and on the other in the firmness of the communal remnants of Chinese society (survival of humanity’s species-being). The family system and the social system opposed each other. Such tense simultaneous coexistence of the two different systems is the original factor to have had dualist thought arise—“the thought of *Dui*”—which is the philosophical distinction of Chinese people in world history.

Key words: thought of *Dui*, historical background, fundamental factor, individual family system, state social system

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

(五四) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版)

一〇一頁 参照)

(五五) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版)

九〇頁 参照)

(五六) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版)

八二頁 参照)

(五七) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版)

九一頁 参照)

(五八) 『宋名臣言行録』諸橋徹次・原田種茂著 明德出版社 平成元年 五版

「4・君子をしてあひ朋して善をなさしめよ」七九頁 参照)

(五九) 『続資治通鑑長編』卷一百四十八 戊戌条 仁宗 慶曆四年 参照)

(六〇) 儒教の富貴思想について、卓見を述べておきたい。

儒教は、義⇨君臣関係と仁⇨家族愛のどちらにおいても、富貴を肯定する。人間の世の現実を肯定する思想である。文面を一読する限り、歐陽脩は、君子⇨義⇨無欲と小人⇨利を対立して捉えて、富貴の追求を否定しているように思える。孔子も「子の曰わく、君子は義に喻り、小人は利に喻る。」

『論語』金谷治訳注 前掲書五七頁)と云うように、君子の義と小人の利は、対立概念である様に思える。しかし歐陽脩は、国家滅亡の危機状態において正義の追求をする君子の朋党の必要性を述べているだけであり、富貴の追求を全面的に否定していない。孔子の言葉も君子は義に明ると述べるだけであり、利欲自体を否定しているのではない。儒教の本来の教えは、仁と義の両面において富貴を肯定して、これを是認する。

孔子は富貴について、「不義にして富み且つ貴きは、我において浮雲の如し」(『論語』金谷治訳注 前掲書 九六頁)と、不義にて富貴の追求するのを恥じるだけであり、正義を貫いて富貴を求めることを肯定している。むしろ孔子は、「天下道あれば則ち見れ、道なければ則ち隠る。邦に道あるに、貧しくして且つ賤しきは恥なり。邦に道なきに、富みて且つ貴きは恥なり」(『論語』金谷治訳注 前掲書 一一一頁)とあり、正義や天下に

道ある時には、貧賤の身分は恥ずべき事なのである。

仁においても孔子は、「子の曰く、富と貴きとは、是れ人の欲する所なり。

其の道を以てこれを得ざれば、処らざるなり。貧しきと賤しきとは、是れ人の悪む所なり。其の道を以てこれを得ざれば、去らざるなり。君子、仁を去りて悪にか名をなさん」(『論語』金谷治訳注 前掲書 五三頁)と、仁を成して富貴を求めるのを君子としている。富貴を求める事を是認する。

また「子貢が曰く、貧しくして諂うこと無く、富みて驕ること無きは、如何。子の曰わく、可なり。未だ貧しくして道を楽しみ、富みて礼を好む者には若からざるなり」(『論語』金谷治訳注 前掲書 二五頁)と述べている。富貴にして礼(仁と義の両者の融合徳目)を好むことを称揚している。

このように孔子や孟子の唱える儒教の教えは、仁と義の両面において、人間の本来的な欲望である富貴を推奨する。ここにおいても儒教は、人間の本能的欲望を肯定する思想である故に、長く中国思想の正統的地位を獲得して維持する一つの大きな原因が存在したと言えるであろう。

(六一) 『中国的思维の伝統—対立と統一の論理—』(大濱皓著 勁草書房 一九六九年 初版 参照)

六九年 初版 参照)

(六二) 『易の話』(金谷治著 V—易と中国人の考え方 一—対立と統合 講談社 学術新書 昭和四七年 初版 一五〇頁—一五一頁 参照)

(六三) 対の思想の研究史の概略は、拙稿「対の思想」研究史の現状と課題—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景について(序章)—」(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一二年)を参照して頂きたい。

(六四) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版)

一〇六頁 参照)

(六五) 『韓非子第四冊』(金谷治訳注 難勢第四十 岩波書店 一九九四年 初版 一七頁—一八頁 参照)

(受付日二〇一一年 九月 二七日)
(受理日二〇一一年十二月 二二日)

た歴史の内容をなすのである。」そして続けてエンゲルスは、社会権力たる国家は公権力の起源及び機能について、「それは、この社会が自分自身との解決しえない矛盾にまきこまれ、自分でははらいのける力のない、和解決しえない諸対立に分裂したことの告白である。ところで、これらの諸対立が、すなわち相対抗する経済的利害をもつ諸階級が、無益な闘争のうち自分自身と社会を滅ぼさないためには、外見上社会の上に立つてこの衝突を緩和し、それを『秩序』のわくのなかにたもつべき権力が必要となつた。そして、社会からうまれながら社会のうえに立ち、社会にたいしますます外的なものとなってゆくこの権力が、国家である」と述べている。

(三五) 『史記(本記)』(新釈漢文大系 第三八巻 吉田賢抗 明治書院 平成五年 二三版 五帝本記 第一 五〇頁 参照)

(三六) 『詩経(中)』(石川忠久 新釈漢文大系 第一一一 明治書院 平成一〇年初版 三八七頁―三九一頁 参照)、

(三七) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一六三頁 参照)

(三八) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二六〇頁 参照)

参照)

(三九) 李年古氏『中国ビジネス企業研修』コラム記事「中国人の対日観」第四回 「中国人と付き合つて、人間不信に陥つた」 参照)

(四〇) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二二五頁 参照)

参照)

(四一) 『日中親族構造の比較研究』(官文娜著 思文閣史学叢書 二〇〇五年 参照)

照)。范仲淹の義荘設立等の経緯については、「范文正公、財を軽んじ施を好み、もつとも族人に厚くする。すでに貴にして、姑蘇の近郊におい良田数千畝を買いて義荘となし、・・・とありて、軽財好施の代表的な善行としてゐる。『宋名臣言行録』諸橋徹次・原田種茂 明德出平成 元年 五版 一〇・「財を軽んじ施を好む」 八三頁 参照)

(四二) 荀子は墨翟を批判して、「天下を統一し国家を建てるための根本重点を知らず、功利実用を尊重し儉約を重んじてものごとの区別等級をなおざりに

し、従つてとても社会的階級分別を容認して君臣間の秩序を立てることができない。ところが彼らが自説を守るには理由をかかげ弁舌には条理を作りあげて愚昧な民衆を惑わすことには十分である。これが墨翟と宋鋼とである。」と、階級区別をしない水平平等社会の実現としてゐる。『荀子(上)』

金谷治訳注 岩波文庫 二〇〇六年 第一五刷 九〇頁 参照)

(四三) 『荀子(下)』(金谷治訳注 岩波文庫 二〇〇六年 第一五刷 一六二頁―一六三頁 参照)

(四四) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一五〇頁―一五一頁 参照)

(四五) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 三二頁 参照)

(四六) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三二〇頁 参照)

(四七) 『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 一〇五頁 参照)

(四八) 拙稿『対の思想と中庸思想―対の思想(画面思考)の生まれてきた歴史的背景について(四)―』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一二年 参照)

二年 参照)

(四九) 拙稿『対の思想と中庸思想―対の思想(画面思考)の生まれてきた歴史的背景について(四)―』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一二年 参照)

二年 参照)

二年 参照)

(五〇) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版 一〇七頁 注(8) 参照)

(五一) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版 九三頁 参照)

(五二) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版 八九頁 参照)

(五三) 『程伊川哲学の研究』(市川安司著 東京大学出版会 一九六四年 初版 九九頁 参照)

- (二四) 『毛沢東の私生活(下)』(李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第八刷 二九三頁—二九四頁 参照)
- (二五) 『中国思想を考える』(金谷治訳注 第四章 中庸 三 礼の中と樂の和 一四五頁 参照)
- (二六) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 五七頁 参照)
- (二七) 『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波文庫 二〇〇一年 第五刷 一八七頁 参照)
- (二八) 『礼記(上)』(新釈漢文大系 第二七卷 竹内照夫訳注 明治書院 平成五年 一九版 第三六刷 二二二頁—二二四頁 参照)
- (二九) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 滕文公章句上 二〇三頁 参照)
- (三〇) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一二頁 参照)
- (三一) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 滕文公章句上 三八頁 参照)
- (三二) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二二三頁 参照)
- (三三) 『日本大百科全書(小学館)』(執筆者・安倍道子)
- (三四) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一四七頁—一四八頁 参照)
- (三五) 『韓非子 第一冊(全四冊)』(金谷治訳注 岩波書店 一九九九年 第五刷 二八四頁 参照)
- (三六) 拙稿『対の思想と現実の尊重—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(一)』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四四卷 二〇一一年 参照)
- (三七) 拙稿『対の思想と状況の変化—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(二)』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四四卷 二〇一一年 参照)
- (三八) 拙稿『対の思想と広大な国土(多様な国民性)—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(三)』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四四卷 二〇一一年 参照)
- (三九) 拙稿『対の思想と中庸思想—対の思想(両面思考)の生まれてきた歴史的背景(四)』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五卷 二〇一一年 参照)
- (四〇) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一三五頁 参照)
- (四一) 『荀子(上)』(金谷治訳注 岩波文庫 二〇〇六年 第一五刷 一六四頁 参照)
- (四二) 『古代社会(上・下)』(モルガン著 青山道夫訳 岩波書店 [全二冊] 二〇〇三年 第一二冊 参照)
- (四三) 『家族・私有財産および国家の起源』(エンゲルス著 戸原四郎訳 岩波書店 一九八〇年 第一八冊 参照)
- (四四) 『家族・私有財産および国家の起源』(エンゲルス著 戸原四郎訳 岩波書店 一九八〇年 第一八冊 序文 一〇頁 参照)

エンゲルスは以下のように人類史を総括して述べている。「労働がなお未発達であればあるほど、その生産物の量が、したがってまた社会の富が制限されていなければならないほど、社会秩序はそれだけ強く血縁的紐帯に支配されて現れる。だが、この血縁的紐帯にもとづく社会の編成のもとで、労働の生産性はだんだん発展し、それにつれて私有財産と交換が、富の差別が、他人の労働力の利用可能性が、したがってまた階級対立の基礎が發展してくる。すなわち、新しい社会的な諸要素が發展してくるが、これはいく世代ものあいだ、古い社会制度を新しい状態に適応させようと努力しながらも、結局はこの両者の非両立性が完全な変革を惹起するのである。血縁団体に立脚する古い社会は、新しく發展してくる社会的な諸階級と衝突して粉砕される。それにかわって、国家に総括される新しい社会が現れるが、この国家の下部単位は、もはや血縁団体ではなくて地縁団体である。この社会では、家族の秩序は完全に所有の秩序によって支配され、いまや階級対立と階級闘争が自由に展開をとげるが、これが、従来のすべての書かれ

の機能と理解している。金谷氏は対の機能について、「二つの対立というのは、実は対立ということばだけであらわすのはふさわしくない。この二つは確かに反対ではあるが、たがいに排斥しあう反対、あい容れない矛盾した関係ではなくて、逆にたがいにひきあう関係、あいてがあることによって自己があるという関係である。・・・そういう関係を、中国の言葉では對待という。たがいに対立しながら、しかも、たがいにあいての存在によりかかって共存している関係である。あい対しあい待つのである。そこには相互の対立とともに相互の依存がある。」(六二)と、具体的に説明している。他方では、駒田氏、山田氏は、「善のなかに悪を、さらに悪のなかに善を見る」とか「静から動へ、動から静へ転換する」との循環論を展開している(六三)。しかし南宋の朱子は、対の機能について、「陰陽は循環で説く場合と、對待で説く場合がある」(六四)と述べて、對待(相互依存関係)と循環論(相互反発関係)の二つの機能が存在すると述べている。つまり対の思想にも、相互に共存する場合と相互に排斥し合う、つまり両極端の肯定と否定という、対の機能が存在するというのである。このことは韓非子が「矛盾」の説話で、「対立する物は両立しない」(六五)と明確に述べていることから、対の機能には對待の機能だけではないことは明瞭であろう。

一〇〇ところで対の思想の生まれてきた歴史的背景に関する拙稿の各論では、対の思想の自己矛盾する二つの機能―肯定と否定という対の関係―について、両者を明確に分類・区別しないで、両者を曖昧にして論旨を展開してきた。その理由は、今までの拙稿では対の思想の生まれてきた歴史的背景についての要因を解明する事に主目的が存在したためである。

特に両極端の肯定と否定という二つの対立する対の機能を明確に区別して論理展開をしなければならぬ中庸思想については、説明不足であったことを自覚している。この相矛盾対立する対の機能論の具体的展開の不備については、今後中庸思想の構造論研究を展開する場合の課題としたい。

(二〇一一年九月二六日 稿了)

注

(一)『新編 対の思想』(駒田信二 岩波 同時代ライブラリー一三〇 一九九二

年 「対の思想―あるいは影の部分について」 二二頁―二三頁 参照 原載 『新潮』 昭和三十九年七月号 『対の思想』)

(二)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 第三章 對待 九六頁 参照)

(三)拙稿『程ほどの大切さ―中国思想の特質・中庸に就いて―』(『鈴風』一〇五号 二〇〇五年 参照)

(四)『韓非子 第一冊(全四冊)』(金谷治訳注 岩波書店 一九九九年 第五刷 解説 一〇頁―一五頁 参照)、『諸子百家』(浅野裕一 講談社 二〇〇〇年 第

一章 法術思想の貴公子・韓非子 二四四頁―二四五頁 参照)。本文の末尾において浅野氏は、韓非子の法術思想は秦の滅亡と共に中国政治思想より政治思想的生命が終焉したように記述しているが、それは間違いである。漢の宣帝時代の賈誼の法儒の二元論的な統治理念の展開をみれば、容易に理解できる。

(五)『韓非子 第一冊(全四冊)』(金谷治訳注 岩波書店 一九九九年 第五刷 解説 一頁 参照)

(六)『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三四頁 参照)

(七)『資治通鑑』(卷一四 漢記六 文帝六年 参照)

(八)『韓非子 第一冊(全四冊)』(金谷治訳注 岩波書店 一九九九年 第五刷 解説 九頁 参照)

(九)『毛沢東の私生活(上・下)』(李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第八刷 参照)

(一〇)『日本人には言えない中国人の価値観』(李年古 学生社 二〇〇六年 第一章 中国人の伝統的な価値観 四項「権治主義」 二五頁―二九頁 参照)

(一一)『老子』(蜂谷邦夫訳注 岩波文庫 二〇〇九年 第五八章 二六五頁 参照)

(一二)『諸子百家』(浅野裕一 講談社 二〇〇〇年 第一章 中国兵学の最高峰・孫子二三八頁―二三九頁 参照)。

(一三)『諸子百家』(浅野裕一 講談社 二〇〇〇年 第一章 中国兵学の最高峰・孫子 二二八頁 参照)。

対の思想が生まれてきた歴史的背景には、古代より現代にまで連綿と続いてきた中国社会に於ける、現実社会の善・悪などの多様性、平和と乱世などの状況変化の多様性、広大な国土に生きる国民性の多様性、凡そ逆方向の性格を持つ中庸思想の多様性がある。このような中国社会に特有な具体的様相の多様性に対して、上手に対応して、一度しかない貴重な人生を失敗しないで、現実の人生を成功に導いて行くための方便として生み出されてきた、中国人特有な思考方法である。

それは、中国という歴史的に複雑極まりなき自然的環境や社会的環境の中において、鍛え抜かれて生まれてきた中国人独自の基本的思考様式であったといえよう。

自己分裂する思考と行動を際限なく展開する中国人の特性は、人間を取り巻く全てのものが多様性に満ちている中国の現実社会に対して、この一度しかない人生を、如何に上手く対応して、人生を成功裏に全うするかという所に最大の関心を持つ。現実社会に上手く処世する、人生哲学に最大の関心を持つ中国哲学の本質的特色に根ざした、中国人の伝統的で基本的な思考方法であったということである。

四 結語と展望

本稿で述べた所を要約すると、凡そ以下のようなようになるであろう。

一 本稿で展開した「対の思想」研究の各々の論考は、研究上、論証の展開を簡潔に平易に読みやすくするために行った、一時的な便宜的な方法である。従って本稿の六本の論文で展開した「対の思想」の議論を、もう一度、中庸思想を中心にして総合化する研究作業が残されている。

二 中国の歴史においては、両面思考のできる「対の思想」でなければ、長く思想生命を維持して二十世紀までは生き延びることができない。国家と家族の二元的世界を是認する「対の思想」を持つ点においては、儒教思想と法家思想は同様の性格をもつ思想であった。しかしその国家統治方法論が、仁義政治か、法術政治かという点では、正反対でかつ対立的な性格を具有しているのであった。

三 儒教思想と共に中国歴史上におけるもう一つの政治思想の柱である、法術を中心とした法家思想の「対の思想」を具体的に説明する作業が、本稿では全く触れ

ていない。解決するべき大きな課題であり、今後の研究課題として残っている。

四 中和Ⅱ礼制の中庸思想は、国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力のほどよく混合する思想であり、中権の中庸思想は、国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力のほどよい水平的均衡の実現と維持への思想であった。古代より現代までの中国人が、この二つの実現と維持に懸命であったという事実は、国家の安定的維持を目的にしていたことを意味しているのであり、国家の崩壊現象の建直しに懸命であったということである。

五 家族と社会・国家という二つの中心を持つ中国人の世界観という、二つの相異なる世界をどの様にコントロールして現実を生きていくのか、との根本問題に対して、家族と社会をどちらの一方にも収斂できない、両方を同等の比重で考えて行動するところに、中国人の自己分裂的思想の特質が存在する。

六 中国において特異な対の思想が生まれてきた根源的理由は、一つの要因には中国は原始共同体社会の崩壊過程が全世界史の中で早熟であり、世界史の普遍的発展法則の流れのにおいて、自己を含めた家族制度への目覚めが早熟で、かつその意識が特に強かったという事である。二つ目の要因は、自己・家族Ⅱ私権力とは反発する人類社会の混乱を防止する社会権力・国家制度Ⅱ公権力への自覚も早熟で、その意識も特に強かったと言うことである。この相矛盾する両権力を緊張状態において実現・維持して行く所に、中国特有の対の思想が生まれてきたのである。

七 孔子や孟子や毛沢東の思想に内包されている「対の思想」という自己分裂的な思想は、どの様な状況に陥ってもどちらに転んでもすぐに立ち上がられて、自己弁護が可能な思想である。そしてありとあらゆる状況に対応して生きていけるように意識的に創意工夫された、家族と国家の二つの中心を持つ中国人特有の世界観を保持しながら、複雑な現世を上手く生きて行くための人生哲学である。

八 「対の思想」の歴史哲学的意義に言及したい。万物には対の機能が有り、対の機能の上に万物の生成が存在する。対の機能には、循環論と対待論があり、これが相互に循環していく。そして君子と小人の対立物が、対立・反発と共鳴・協調を繰り返して、国家の生成↓発展↓没落を繰り返すと認識する所に、中国人の世の中に対する歴史的意義を見出す思考方法なのである、と言えるであろう。

九 対の機能については、大濱皓氏(六一)、金谷氏、山田氏、戸川氏は、対待

「慶暦四年四月戊戌、上、執政と論じて朋党のことによぶ。参知政事范仲淹こたえて曰く、「方は類を以て聚り、物は群を以て分る。古より以来、邪正朝に在りて、いまだかつておのおの党をなさずんばならず。禁ずべからず。聖鑑のこれを弁ずるにあるのみ。まことに君子をしてあひ朋して善をなさしむれば、その国家におけるやなんの害あらん」と(五八)と、述べている。

つまり范仲淹の言うには、君子＝善人の朋党と小人＝悪人の朋党は、堯・舜時代より存在しているものであり、これは仕方のないことであり、朝廷内に正邪が混じり合っているのを、聖鑑以て弁別する必要がある。善をなす君子の朋党が存在して君子の朋党と小人の朋党は伯仲していれば、小人の朋党が存在してもそれ程国家に損害はなく、国家の安定期を維持して行ける、と言うのである。朝廷内に公私の朋党が混在していると言うのは、中和の中庸思想の具体的展開論であろう。

しかし歐陽脩の朋党論は、范仲淹の朋党論と異なり、危機意識をもつ内容である。「修すなわち朋党論を作り、これを上つる。臣聞く、朋党の説、古よりこれあり。ただ幸いに人君はその君子と小人を弁ずるのみ。大凡、君子は君子と道と同じくして朋をなし、小人は小人と利を同じくして朋をなす。これ自然の理なり。然るに臣は、小人には朋なく、ただ君子のみ朋あり、と謂う。その故は、小人の好む所のもは禄利のみ。貪る所は財貨のみ。その利を同じくするに当たりては、暫くあい党して以て朋をなすは、偽なり。その利を見るに及んでは先に争い、利尽きれば交々疎く、反つてあい賊害する。その兄弟・親戚と雖もあい保つことあたわず。故に臣は、小人は朋なく、その暫く朋をなすは、偽なり、と謂う。君子は然らず。守る所は道義にて、行うところは忠信、惜しむ所は名節、これを以て身を修めれば道を同じくしてあい益し、これを以て国に仕えれば心を同じくして共に済し、終始一の如し。これ君子の朋なり。故に人君たるものは、ただ当に小人の偽朋を退けて、君子の真朋を用いば、天下治まるべきなり。・・・それ前世の主、よく人人をして心を異にして朋をなさしめざるは、紂にしくはなし、よく善人の朋をなすを禁絶するは、漢の献帝にしくはなし、よく清流の朋を誅戮するは唐の昭帝にしくはなし。然れども皆その国を乱亡する。更にあい称美して、推譲して自から疑わざるは、舜の二十二臣にしくはなし、舜亦疑わずして皆これを用いる。然れども後世、舜は二十

二人の欺く所となると謂わずして、称して聡明の聖主となし、以てよく君子と小人を弁ずるとなすなり。周の武の世、その国の臣三千人を挙げて共に一朋となす、古より朋の多くて大なるは、周にしくはなし。然れども周はこれを用いて以て興るは、善人多くと雖も、厭わざるなり。それ興亡治乱の迹、人君たるもの以て鑑となすべきなり。」(五九)。

古来より朝廷内には、君子の朋党と小人の朋党が混在しているのは自然なのであるが、人君がそれを弁別するのみである。君子の義合した朋党は、善をなす朋党であり、これが多くなれば国家は発展するが、小人の利合した朋党は利欲の朋党であり、小人の朋党が多くなり、君子の朋党を圧制していくと、国家は没落して行く。このことは中国古来より歴史的事実が証明しているのであり、国家の発展を維持して行くためには、小人の利合した偽朋を朝廷より排除せよ、と主張しているのである。塞外民族が興起して対外的危機に直面した慶暦時代の国家滅亡への危機意識に燃えた欧陽脩の君子の朋党論の必要性を強調した議論であった(六〇)。

博愛主義＝善と義で結合した君子の朋党＝公権力と、個人主義＝利で結合した小人の朋党＝私権力とは、同時両立できないのであり、国家の危機状態において公権力と私権力を臨機応変に使い分ける中権の中庸思想の具体的展開論であろう。

従つて対の思想の二つの機能論から導き出される中国人の対立→協調→対立、動→静→動と言ふ哲学的循環論を、政治思想史や国家論へ展開した場合の中国人の歴史認識論についての結論として、凡そ次のように結論できるであろう。

全ての生命現象には対の機能があり、対の機能の上に万物の生成が存在する。対の機能には、循環論と對待論の二つがあるが、この二つは相互に循環していく。そして万物が流動化して、この世の中が治乱興亡する中で、君子と小人の対立物が、対立・反発と共鳴・協調を繰り返して、国家の生成→発展→没落という。無限の流転を繰り返して、歴史が変化・発展して行くこと認識する所に、中国知識人の人間の世の中についての歴史的意義を見出す思考方法である、と言えるであろう。

最後に対の思想の生まれてきた歴史的背景(序章)より対の思想の生まれてきた歴史的背景(終章)まで、対の思想(両面思考)の研究についての考察を終えるに際して、対の思想の歴史哲学的意義について、簡単に要約しておきたい。

周濂溪も太極図説で、「動が極まって静になり、静になって陰が生まれる。静が極まると復び動になる。動静が互いに根になりあっている。」(五四)と述べている。このように陰陽や動静は、陰から陽へ、再び陽から陰へ、また動から静へ、再び静から動へと、両者は循環論的に繰返し巡り続けるのである。

このような哲学上の循環論は、中国の歴史に展開されると、国家の成立と発展と没落の循環理論になるのは自明であろう。そこで対の機能論に見られる対立物の相互敵体性論と協調性論の相互循環理論を、中庸思想の政治思想論から導き出されてくる公権力と私権力の均衡論の上に展開すると、以下の様になるであろう。

既に前節において中権の中庸思想は家族制と社会制度の混乱期における已然の安定策であり、中和の中庸思想は家族制度と国家・社会制度の安定期における混乱の未然の防止策であると述べてきた。従って国家創業期における国家社会の危機状態の時には、個人主義・家族制度Ⅱ私権力より国家社会の安定のために公権力に飛び移りこれを安定化させ、逆に家族制度Ⅱ私権力が危機状態の時には、公権力者から家族制度Ⅱ私権力に飛び移り、家族制度を安定化させる、臨機応変に両極端を飛び移り、両者を安定化させる中権の中庸思想が必要になるのである。

そして混乱期が過ぎて国家の安定期に入ると、この家族制度と国家社会制度の両制度の平和を維持して両者を混乱状態に陥れないために、公権力と私権力を五分五分に混じり合わせた中和の中庸思想Ⅱ礼制が必要になってくるのである。

両極端を肯定した上で両極端の同時両立を否定する思考方法から、非常事態に対しては国家と家族という二つの相異なる楕円形世界の安定の実現を目指す、中権の中庸思想が生まれてくる。そして両極端を否定した上で両極端を同時両立させる思考方法から、平和時においては国家と家族という相異なる方円形世界の安定的維持を目指す、中和の中庸思想が生まれてくるのである。

それではこのような家族制度と国家・社会制度の安定と混乱の原因は何処にあるのであろうか。程伊川は、「独陰は生ぜず、独陽は生ぜず。(独陰不生、独陽不生―程氏遺書四)―(五五)と述べていて、単独物では万物は生まれてこないと言う。

また程伊川は、「實に文があるのは自然の理である。理として必ず対のあるものは、生生現象の根本である。上があると下があり、此れがあると彼があり、質があ

ると文が有る。一では独立せず、二だと必ず文ができる。道を知るものでなければ、それが分からない(程氏粹言 論道篇)―(五六)と、全ての生命の現象には、単独物は不安定であり、対の思想があるという。この二つの主張を総合すると、万物の対の機能の中には、物事が発生する根源的原因が育まれているという。

この哲学上の対の思想に見られる万物発生論と循環論が政治論に展開されると、一体、どの様な政治理論になるのであろうか。程伊川は、「対は世界中に存在する。

陰があれば陽があり、善があれば悪がある、君子小人の気は常に共存する。常に君子ばかり生まれるわけにはいかない。ただ六分が君子だと治まり、六分が小人だと乱れ、七分が君子だと大いに治まり、七分が小人だと大いに乱れる。それで、堯舜の世にも小人がいけないわけにはいかない。(程氏遺書一五)―(五七)と云う。

歴史の発展は、君子と小人の数量的消長に、その根本原因があると言ふ。君子が多いと世の中は善く治まり、小人が多いと世の中は混乱する。治乱興亡の歴史の原因は、君子と小人の数量的消長に、その根本原因がある、と言ふのである。

だとすればここから、自己や家族という個人主義Ⅱ私欲を犠牲にした国家の事Ⅱ公権意識Ⅱ義を重視する君子が多くなると、社会の混乱状態を解決して国家は成立して発展して行くのであり、善と義を思う君子と利欲を重視する小人との力関係が伯仲していると、国家は安定状態を維持しているが、しかし利益を求めると小人の数量が、善と義を追及する君子よりも多くなると、国家は没落へと向かっていくのである。君子と小人の数量的変化や消長により、国家の成立↓発展↓没落の循環理論が生まれてくる。程伊川の議論から、このような国家の生成↓発展↓没落の循環理論のシエーマが描けるであろう。

この程伊川の国家の成立・発展・没落理論のシエーマの中に、社会の混乱時における国家Ⅱ公権力と個人家族Ⅱ私権力は同時に両立しないという臨機応変に中を執る中権の中庸思想と、社会の平和時における両者は同時両立するという両者を混じり合わせた中和の中庸思想が、実に展開されていることが理解できるのであろう。

ではこの相異なる中庸思想に見られる国家理論の生成↓発展↓没落の軌跡を、以下に范仲淹と欧陽脩の朋党論の展開において具体的に証明して見たい。

范仲淹は、朋党論について、以下のように述べている。

り、時には一八〇度、政治状況が変化する事も往々にして生起する。このような常に状況の変化の中で生きていく政治家にとつては、今日は安泰と思つていても明日は奈落の底に陥る危険性だつて往々にして起るのである。

だから一面的な偏つた考え方に拘つて固定的な思考をしていけば、絶えず変化する政治環境に対応して官界を上手く遊泳して生きていけないのであり、このような厳しい官界を上手く生き抜いていこうと思えば、何時どの様な状況の変化に遭遇しようとも、何時でも上手に対応できるように弾力的な思考方法が、政治の世界に生きる人々にはどうしても必須なモラルとされるのである。

中国において古来より聖人といわれる堯・舜や孔子・孟子、あるいはまた歴史上の明君と言われる人々、更には現代の毛沢東・周恩来は、状況の変化に対してごく自然に華麗に変身できる人物であつたということであり、これを実現させる思想である両面思考―対の思想と中庸思想をとりわけて上手く体得することができた中国歴史上における偉大な人物であつたと言ふ事ができるであろう。

最後になるが、宋代の儒者の「対の思想」の機能論を紹介して、対の思想の機能と国家論との相関関係について述べて、中国人の歴史認識論について言及したい。つまり対の思想の機能論が、中和と中権という二つの相異なる中庸思想に見られる政治思想的意義から導き出されてくる国家権力論の上に展開すると、どの様な国家論の具体的展開過程を辿るのであるか、という問題である。

中庸思想の対の思想には、中権における両極端の肯定と中和における両極端の否定という、両極端についての肯定論と否定論という対の思想が存在した(四八)。そして中庸思想には、両極端は同時に両立しない中権の場合に見られる公から私へ私から公へと臨機応変に飛び移り中庸を実現する場合と、両極端は同時に両立する中和の場合に見られる公と私が五分五分に混じり合い中庸を実現する場合があり、中庸思想の実現方法論にも全く相異なる対の思想が存在した(四九)。

朱子は、「凡そ、陰陽は循環で説かれる場合もあれば、對待で説かれる場合もある(大抵陰陽、有以循環言者、有以對待言者―朱子文集五一 答吳伯豊第一〇書)(四九)と、対の思想には循環論と對待論という、二通りの機能があると述べている。朱子の言う循環論とは、伊川の兄の程明道が、「万物はすべて相對のものを待つ。

陰に対して陽、善に対して悪がある。そして、陽が盛んになると陰が消え、善が増すと悪が減る。この道理は、推しひろめると広がる。人が注意すべきところだ。(程氏遺書一)(五二)と述べるように、対の関係にある両者の相互対立や相互反発と、それらの消長関係を意味している。

また對待論は、程伊川が、「天地や陰陽の場合は、その勢いや高下は甚だ相反するが、必ずや相手を必須として用をなしている。陰があれば陽があるし、陽があれば陰がある。一があれば二があり、一二ができれば、そのとたんに一二の間ができる。即ち三である。(程氏遺書一八)(五二)と述べるように、対の関係にある両者の相互依存関係を意味している。

以上に述べたように、対の思想には、対立物はお互いに両立せず反発・対立するという考え方Ⅱ否定論と、対立物は両立してお互いに感応・助け合うという考え方Ⅲ肯定論という、対の機能が存在するのである。

つまり対立物の交互循環論による先後出現や運動論的出現と、対立物の相互協力・相互感応による同時出現や静的な並立的出現が存在するのである。前者は対立する両者の同時並存や同時実行は不可能という、「対立物の敵対性」に注目した思考方法である。後者は対立する両者が単独物では物は完成しないという、相手を認めて助け合うという、「対立物の相互依存性や共存性」に注目した思考方法である。

これを中庸思想に当てはめると、前者は個人主義Ⅱ私権力と博愛主義Ⅱ公権力は同時に両立せず臨機応変に運動論的に中庸を実現する中権の中庸思想であり、後者は個人主義Ⅱ私権力と博愛主義Ⅱ公権力が同時に両立して科学的反応のように両者が混じりあう中和の中庸思想であろうことは言うまでもなからう。

それでは対の思想に見られる循環論と對待論はどの様な関係にあるのであろうか。張横渠は、「象があれば対があるし、対は必ず相反の現象を起す。相反があれば争いを起すし、争いは必ず和解する。(正蒙 太和篇)(五三)と、述べている。

対の思想は、正反対の対立物であるが故に、相反する敵対関係を起すが、これは永続せずに、正反対の対立物はお互いに和解して依存し合う協調関係に落ち着くと、言うのである。対の思想は、対立性と協調性という対の関係を保持して、対立関係論から協調関係論へと運動論的に発展すると言う。

ていた。冉有の消極的人格を否定して子路の積極性を肯定するが、他方子路の積極的人格を否定して冉有の消極性を肯定するのである。積極性の肯定と否定、消極性の肯定と否定という、自己分裂した両面思考を展開している。聖人と言われる孔子程の知識人が自分は自己分裂する発言をしていないとは、絶対に言われない。知って自己分裂する発言をしている所に、孔子は自分自身で、自己分裂した発言をわざと知っている、と十分に認識していたのである。

また孟子は、博愛主義と個人主義を否定しながら、他方で博愛主義と個人主義を肯定する。伯夷、柳下恵は偏っているから従わないと言うが、他方で伯夷と柳下恵は百代の模範だと言う。既存思想や聖人への否定と肯定へと言う、全く自己分裂した発言は、孟子ほどの知識人が、自分が自己分裂した発言をしていることを知っていないとは、絶対に言われない。

自己の思想が自己分裂していることを知っていて、わざと「快く墨翟と楊朱を受け入れてやることだ」と言う孟子の発言の中に、孟子の説く儒教が自己分裂した思想を持っていることを十分に認識しながら、自己分裂した既存の両思想について包容力を持って受け入れる発言をしているのである。

毛沢東も、自己の思想が全く逆な主張をしていて自己分裂していることを十分に認識しており、その意義について分裂的な思想は永遠に生きると、自己の思想に永遠な生命を与えるためだと述べていた。毛沢東の自己分裂的性格は、自己の生命が亡びようとも、自己の思想だけは永遠的な不滅の生命をあたえておきたいと言う、人間の本能的欲求を持つ自己保存意識から生まれてきた思想なのである。

従って対の思想という自己分裂的な両面思考の思想は、どの様な状況に陥っても、どちらに転んでも何時でも起き上がれて、自己弁護することが可能な思想なのであり、ありとあらゆる状況に対応して生きていけるように意識的に創意工夫された、複雑な現世を生きる中国人の知恵なのである。

孔子は、「君子は器ものではない。〔その働きは限定されなくて広くて自由であるべきだ。〕」(四五)と言う。君子たる者の思考方法は、物を盛る器ではないのである、硬直的でない弾力的性質のあるものだ、と述べている。

また孟子は、「天命を心得た人は、危なっかしい岩石や崩れかかった石塀の下な

どには、「不慮の死を招くことがあるから」決して立たないものだ」(四六)と述べている。「君子は危うきに近寄らず」というが、両面思考のできない一面的な硬直した思考では、危険な目に遭遇しても危機を回避できないのである。

このような両面思考―「対の思想」の機能についての好個の一つの事例を、北宋の時代の知識人・王洪辰の場合に見ることができる。

「富鄭公、慶曆中、知制誥を以て北虜に使いして還る。仁宗これを嘉す。一日、王洪辰、上にいひて曰く、「富弼また何の功かこれあらん。ただ能く金帛の数を添え、夷狄に厚くして中国を弊すのみ」と。仁宗曰く、「しからず。朕が愛するところのものは土宇生民のみ。財物は惜しむところに非ざるなり」と。洪辰曰く、「財物はあに生民に出でざらんや」と。仁宗曰く、「国家の経費は、これを取ること一日の積に非ず。歳ごとに以て夷狄に賜うも、またいまだ民を困しむるに至らず。もし兵興りて調発せば、歳出費られず。今の緩く取るがときに非ざるなり」と。洪辰曰く、犬戎は厭くことなし。好んで中国の隙を窺ふ。かつ陛下ただ一女あり。万一、和親を請はんと欲せば、これをいかんせん」と。仁宗、憫然として色を動かして曰く、「いやしくも社稷を利せば、朕またあに一女を愛まんや」と。洪辰、言塞り、かつ譖の行われざるを知る。にわかにして曰く、「臣、陛下の己を屈して民を愛することかくのごとくなるを知らず。まことに堯舜の主なり」と。泣を洒ぎ再拜して去る。」(四七)。

王洪辰は、富弼を館職の地位から追い落とすために、外交に成功した富弼を厚遇しようとした仁宗の政治的過失を述べまくって、思い止まらせようとした。しかし少しも仁宗は聞く耳をもたないので、責める材料が出尽くして自己の讒言が通らなると悟った王洪辰は、急遽自己の発言を一転させて仁宗は人民を愛し思う聖天子・堯舜の再来であると持ち上げて、自己の政治的生命を保全する自己防衛に転身したのである。王洪辰にとって変わり身の早さが政治生命を保持する手段であった。

柔軟性のある両面思考―対の思想こそは、どの様な状況になろうとも危機を回避できて何時でも逆の立場になれる可変的思想なのであり、自己の逃避場所を常に心がける中国人の自己保存の本能が生み出した思想であると結論できようであろう。

思うに、とりわけて政治の世界では、状況の変化が時々刻々と目まぐるしく変わ

界の民族的特殊性から地域差が存在して、各民族において時間的差異のある事は、モルガンもエンゲルスも共通して認めていることである。

この事実から考えると、中国人は、原始時代より個人主義的な発想が特に強く、全世界史の普遍的発展法則の流れのにおいて、自己を含めた個別家族制度への目覚めが早熟であり、個人主義と家族主義の主張が特に強かったという事である。

また逆に原始共同体的遺制 \parallel 人間の類的存在を太古の昔より強調する事も、中国人は世界の他の諸民族に比較して、これまた特に強かったと言うことである。

詳細な個別の実証は今後の研究史の発展に俟つ必要があるが、前者は孔子・孟子の個別家族制度の主張や楊朱の個人主義的思想に代表されて、後者は中国社会に特有で伝統的に継統されてきた男系親族で構成される宗族的結合の強さ \parallel 宋代の范仲淹の義荘創設 \parallel に具体的事例を見ることができ(四一)、孟子が激烈に批判している家族制度を無視する墨翟の博愛主義(四二)に代表されると思う。

ここに中国人の民族的基本的思考特色である両面思考 \parallel 「対の思想」が生まれてくる根源的な原因が存在したと言うことである。従つて対の思想が生まれてきた根源的背景には、個人を含む家族制度と君臣関係を含む社会制度の並立的存在があるとなれば、両面思考 \parallel 「対の思想」は、この二つの相異なる制度論に展開されていなければならないであろう。

孟子は、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義を、人類に対して敵対的な極端思想であるとして徹底的に嫌い激しく批判して、楊朱の個人主義は君主や国家を無視するから不可なのであり、墨翟の博愛主義は父子の家族を無視するから不可なのであり、到底人間とはいえない禽獣の行為なのであると言う。つまり個人主義 \parallel 家族制度と博愛主義 \parallel 社会制度の両方を兼ね備えた、両面思考 \parallel 「対の思想」が可能な思想でなければ、絶対に許容されることがないのであり、人間の思想ではないと言う。

この孟子の発言は、家族制度と社会制度を同時両立させるために、両面思考 \parallel 「対の思想」が生まれてきたということの意味しているのである。この事実について荀子は、以下のように述べている。

「唯一の統一原理で雑多な万事を処理し、始めれば終り終わればまた始まってあつたかも円環に端のないようにどこまでもつづけていく。こうしたり方をとらなけ

れば世界は衰微するであろう。・・・君臣・父子・兄弟・夫婦の倫の道が天地とひとしい秩序を得て、始めれば終り終わればまた始まって万代までつづいていく。そもそもこういうのを大本というのである。・・・君臣の分が守られ父子の分が守られ兄弟の分が守られることも同じである。農民と士人と工人と商人と、それらも同じである。「みな形はそれぞれに違つていても大本を得てこそ治まるのである。」(四三)と、述べている。

君臣関係が始まれば終り終わればまた始まり、父子関係が始まれば終り終わればまた始まるという事は、対の思想の無限的な連続的循環論の展開である。これが家族制度と社会制度の両者に展開されており、対の思想が連鎖反応的に万代にまで展開することが世界の大本と言う。これがなければ世界は衰退すると言うのである。

ところで中国人の両面思考 \parallel 「対の思想」を歴史上の具体的な展開過程でみると、凡そ以下のように言うことができるであろう。孔子は、門人の子路と冉は逆の性格だから、両者には各々逆の教育をする必要がある、と言うのである。

「子路が「聞いたらずぐそれを行いましょか。」とおたずねすると、先生は「父兄といった方がおいでになる。どうしてまた聞いてすぐそれをおこなえよう。」といわれた。冉有が「聞いたらずぐそれを行いましょか。」とおたずねすると、先生は「来たらずぐにそれを行え。」といわれた。公西華は「由(子路)さんが『聞いたらずぐにそれを行いましょか』とおたずねしたときは、先生は『父兄といった方がおいでになる』といわれたのに、求(冉有)さんが『聞いたらずぐそれをおこないましょか』とおたずねしたときには、先生は『聞いたらずぐに行え。』といわれました。赤(このわたくし)は迷います。おそれいりますがおたずね致します。」先生はいわれた、「求は消極的だから、それを上げましたのだが、由は人をしのぐから、それをおさえたのだ。」(四四)と、述べている。

門人の冉有は、消極的人物だから、「すぐに行え」と教えて、消極的でもないが、また積極的でもない中和の人物になるように教育をして、逆に門人の子路は積極的人物だから、「父兄に相談しろ」と教えて、積極的でもないが、また消極的でもない、中和的人物になるようにしたと、孔子は言うのである。

相反する反対的性格を持つ人間には、意識的に全く逆の事を教えたと明確に述べ

二つ目の特殊性は、モルガンやエンゲルスが主張するように、農耕牧畜の開始以後に、原始時代の母権性の共同体的遺制が漸次的に消滅して、父権性の個別家族制度が大きくクローズアップされてくるという世界史の普遍的発展原則論から見ると、孟子が「古の賢人は自分ひとりで楽しまないで、人民といっしょに楽しんだからこそ、ほんとうに楽しめたのです」(梁恵王章句上)と言い、荀子が「人間は生まれながらにして社会的動物(群)なのである」と言うように、墨翟の兼愛説の如く原始共同体社会の遺制を階級国家成立以後も強く残していることである。それは中国社会に延々と継続されてきた周代以後の宗族制度や、時代は下るが宋代の范仲淹の親族振救の義荘創設に具体的事例を見ることができるところである(四一)。

つまり原始共同体が崩壊して家族・私有財産・国家の発生過程において、家族制度の誕生が早熟でその私的家族意識が強く、他方では逆に古い血縁的紐帯に基づく原始共同体社会制度の公的意識の遺制を強く残し続けてきた所に、モルガンやエンゲルスが述べる全世界史の普遍的発展法則論とは、歴史発展認識を甚だ異にする地域的特殊性から生まれてきた特殊中国的思想である、と言うことである。

以下に中国におけるこのような公と私の対等平等的な両面的存在を同時に主張する「対の思想」の事例を紹介することにしよう。

堯は誰に禅譲したらよいかについて、「舜に天下を授ければ、天下の人民は利益を得て丹朱が苦しむだろうし、丹朱に天下を授ければ、天下の人民は苦しんで丹朱は利益を得るだろう。」(三五)とあるように、堯も王権の譲位を家族制度と社会制度という公と私の間で苦しみ、心が揺れ動いたのである。

『詩経』の成立した西周時代より「対の思想」が存在する事は既に述べたが(三六)、孔子も「斉の景公、政を孔子に問う。孔子対えて曰く、君 君たり、臣 臣たり、父 父たり、子 子たり。」(三七)と述べている。

このように、社会Ⅱ君臣関係と家族Ⅱ父子関係という、同時並列的な「対の思想」の存在は、儒教には疑いようのない無前提的存在なのである。

孟子も楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義を批判して、「父を無視し主君を無視する禽獣にもひとしい野蛮人は、これこそ周公が討ち懲らしたもうたところなのである、私もまた天下の人心を正し、間違った学説を排撃し、片寄った行いを防ぎとめ、

でたらめな無責任きわまる言論を追放して、そして禹・周公・孔子の三聖人の志をうけ継ぎたいと思っておる。……誰でも言論をもって、楊朱・墨翟の邪説排撃するものは、すべて聖人の仲間なのである」(三八)と、述べている。

禹王や周公以来の伝統的思考では、楊朱と墨翟の思想は、一方に片寄った異端・邪説の偏向思想であり、到底、是認できる思想ではなかった。孟子は、儒教の家族と社会的国家の両面を認める「対の思想」こそが、普遍的真理と力説している。

この事實は、『大学』において修身↓齐家↓治国↓平天下という直線的な政治理論に、自己を含めた家族制度を出発点に置いている事でも理解できるであろう。なにも修身・齐家を主張しなくても治国・平天下↓天下統治の政治は可能である。

しかし修身・齐家↓家族制度を出発点において治国・平天下↓社会国家制度を述べる所に、普遍的真理を説く経書においても「対の思想」への民族的な固執を見る。

また現代の一般的な中国人の持っている「対の思想」について李年古氏も、「中国人は会社と個人を分けて考えている……会社に対する忠誠心が無いからと言って部長に対する背信行為だと結びつけることは、中国人の想像力を超えている。会社は私のものでもなければあなたのもでもない。会社に対する背信イコール部長への背信、といった発想は、やはり属会社の日本人的な発想で、属個人の中の中国人にはその価値観はない」(三九)と述べている。このように会社勤務の中においても中国人は、個人と社会という二重の楕円構造の意識を持って行動するという。

孟子は、博愛主義者の夷之に対して、「いったい、天が物を生ずるときには、其の根本は必ず一つなのだ。人間もわが身の根本は父母で、ただ一つだけである。〔だから、その根本である父母を何よりも愛するのは、人の天性である。〕ところから、夷之は自分の父母も他人の父母も〔愛することは〕全く同じでかわりはないというのは、根本を二つに〔も、三つにも〕考えるからで、〔それでは、自分の父母が二つにも三つにもあるというおかしな事になるので〕ある」(四〇)と述べていた。

このように孟子の認識では、人類誕生時代より自己を含む個別家族制度が存在するのであり、人間の根本は一つしかなく、我が父母だと言いきっている。

モルガンが数十年間かけて考察したアメリカ・インディアンのイロクォイ部族では一九世紀まで原始生活が続いていたように、原始共同体社会の崩壊過程が、全世

いということである(二二六)。「対の思想と状況の変化」において、様々な状況が急変する中国社会―特に味方が敵になり敵が味方になるような政治的世界においては、一面的思想に固執しては様々な状況の変化に上手く対応できず、両面思想の思想構造を持つていないと、自己・家族と社会・国家の二元的な両面世界に生きている人間には、この現実社会を上手く生きていけないということである(二二七)。

「対の思想と広大な国土」においては、西洋全体を包み込む様な広大な国土が存在する中国において、中国南北の国民性の相違や、中国人の性格の多様性、多民族国家の特殊性が存在する以上、一面的思考に固執しては、多様性を持つ広大な国土に生活する人々を満足させることは到底不可能であり、中国南北の相違性を初めとする多様な国民性を全て包摂することは可能な両面思考をしないと、中国社会のような地理的特色を持つ現実社会を上手く生きていけないのである(二二八)。

「対の思想と中庸思想」において、中国思想の精髓である中庸思想は、両極端に偏ららない「不偏不倚」の真ん中を実現する思想である故に、常に中庸を実現する必要条件である両極端の存在状況や有様に関心を持っていないと、本当の中庸を実現できないことになり、自己・家族と社会・国家の両面の安定と維持を上手く実現して、これを維持できないことになる(二二九)。

以上に要約したように、「対思想」の生まれてきた歴史的背景の諸要因を考察して結論として言えることは、中国人の伝統的世界観である自己・家族と社会・国家の二つの中心を持つ楕円形的世界を如何に上手く両立して、この現実の世界を生きていくかということに、中国人の最大の関心が存在したと言いうことである。

従ってこれまで発表してきた対の思想の生まれてきた歴史的背景について要約すると、中国人の基本的な伝統的思想である対の思想の生まれてきた根源的原因は、家族生活と社会生活を同時並列的に太古より存在する事を主張する思考である。

それは、孟子が博愛主義者の夷之に、「いったい、天が物を生ずるときには、その根本は必ず一つなのだ。人間もわが身の根本は父母で、ただ一つだけである。」(三〇)と述べているように、父母という家族があるから自分の存在があるのである。

しかし他方では荀子が、「人間は生まれながらにして社会的動物(群)なのである」(二二一)と云うように、生まれながらにして人間は社会的動物でもあるという

ことなのである。この二つが事実であることは、儒教が仁Ⅱ家族生活と義Ⅱ社会生活を最も強調することでも理解できる。

人間は生まれながらにして家族生活をしなければ生きていけないが、また家族という狭い生活単位の枠を超えて広い世界である社会生活をしなければ生きていけないという、家族生活と社会生活という無前提的な二つの現実の実態を肯定しなければならぬ、という所から生まれてきた思考方法の特異性なのである。

この二つの相異なる世界をどの様にコントロールして現実を生きていくのかとの根本問題に対して、家族と社会をどちらの一方にも収斂できない、両方を同等の比重で考えて行動するところに、中国人の自己分裂的思想の特質が存在する。

この中国人の特質は、モルガンが『古代社会』(二三二)で、エンゲルスが『家族・私有財産および国家の起源』(二三三)で述べている事実を照らすと明白になる。

エンゲルスは、人類史の開始は、原始共同体社会Ⅱ母権性氏族制の血縁的紐帯が最初に存在して、この崩壊過程から単婚制家族制度が生まれ、私有財産制度が発生して、地縁的団体Ⅱ国家権力機関が成立する。その結果として原始共同体社会Ⅱ血縁的母権性氏族制度の遺制が漸次的に消滅して、人間の血縁的紐帯に基づく類的存在の意義も漸次的に消滅して行き、国家成立後の家族制度秩序は、地縁的紐帯に基づく社会とそれの上に立つ公権力国家の支配下に支配され服従すると言う(三四)。

従って中国人の民族的な基本的特色である個別家族制度と社会・国家制度の両立思考Ⅱ対の思想は、エンゲルスが主張するような人類史上の普遍原則理論とは甚だ相違する中国人の特異的認識から生まれてきたものであると思う。

中国人の対の思想の世界史上での一つ目の特殊性は、モルガンやエンゲルスが主張する、原始時代に共同体社会の中に個別家族制度が埋没して、国家誕生以後には個別家族が国家に從属すると言う世界史の普遍的法則性から考えると、孟子が「およそ人間にとっては父母・君臣・上下の人倫を無視するよりも大きな不義はないのだ」(尽心章句上)と云う如く、自己を含めた家族制度を国家・社会制度と対等平等に力説する所に、人類の普遍的発展法則理論とは甚だ歴史認識を異にする発想から生まれてきた思想である。公権力の埒外に置く家族制度の実体を例証すれば、士人Ⅱ礼と庶人Ⅱ刑の規定、士人Ⅱ精神労働者Ⅱ免役の規定を指摘できるのであろう。

った。しかし、周の武王が父文王の死後すぐに殷の紂王を討つたことを、不孝、不仁として周の粟を食むことを拒み、首陽山に隠れてワラビを食とし、ついに餓死したという。その行いは孔子以来、儒家によって「仁」と高く評価されているが、一方、司馬遷はこの話から天道の是非、個人が歴史に名を残すことの偶然性などを思い、この伯夷列伝を『史記』列伝の最初に置いた。(二三)と説明されている。

ところで孟子は、このような行動をとった伯夷・叔斉を以下のように評価する。「孟子はいわれた。「伯夷は非常に潔癖で、立派な君主でないと仕えないし、正しい友達でないと交際はしなかった。だから、悪人で仕えている朝廷には仕えないし、悪人とは物もいわなかった。かれはそれをまるで朝廷に出仕するときの礼服・礼冠をつけたまま、泥や炭のなかにでも坐るかのようには穢らわしく思った。……伯夷は心が狭すぎるし、柳下恵は慎みが足りない。心が狭すぎるのも慎みが足りないのも、どちらも「一方にかたよっており」君子は従わない」(二四)と述べる。武王の父・文王の服喪中に、紂王を討伐した武王の不孝・不仁を嫌い、周の禄を食まらずに餓死した伯夷・叔斉は、異常な潔癖主義であり君子は従わないと批判している。また韓非子は、「むかし、伯夷と叔斉という兄弟がいて、周の武王が天下を譲り与えようとしたのにそれを受けとらず、二人は首陽山で飢え死にした。このような臣下どもは、……つまり罰で威して禁止することもできないし、賞で誘って働かせることもできない。こうした人物を無益の臣というのである。私の軽視して排除する者である。ところが、世の君主たちはそれを重んじてさがし求めるのである。」(二五)と、伯夷・叔斉の両者を批判している。

伯夷や叔斉のように、あまりにも清廉潔癖過ぎて、自己や家族制度の重要徳目である仁孝を否定すると、自己の生命までも滅亡させる結果になるのである。

ここまで中庸思想の具体的展開を述べれば、何故に孟子は、一方で楊朱の個人主義と墨翟の博愛主義を激しく批判しながらも、他方では楊朱や墨翟さながらの個人主義や博愛主義を主張したのか、この両面思考——「対の思想」の前提に存在する中庸思想の精髓である中庸思想の政治思想上の意義も自ずと判明するであろう。

個人主義と博愛主義を否定して、公権力と私権力のほど良く混合した化学的な中和状態を主張する中庸思想は、平和時における家族秩序と国家秩序の安定状態を維

持して、この両秩序の崩壊化を食い止める未然の防止策だった。

個人主義と博愛主義を肯定して、公権力と私権力の権力バランスの力学的な平衡状態を主張する中庸思想は、混乱時における家族秩序と国家秩序の崩壊状況を救済して、この両制度の安定化を実現する已然の解決策だった。

ところで島田氏は、「儒教の古くからの「父子天合」に対して、「君臣義合」というテーゼを引用して、儒教的世界は、国家(天下)と家族(個人)の二つの中心を有する橢円形の世界である」と述べていた。また筆者は、中庸思想は中和の場合には両極端を否定して中央に求心性を志向する方円形の世界であり、中権の中庸思想は中央から両極端に遠心性思考を志向する橢円形的の世界である事をのべてきた。

従って島田氏の主張する二重の中心を持つ橢円形の世界観は、後者の中権の中庸思想のみに当て嵌まる主張であり、前者の中和の中庸の方円形世界観を志向する場合には当て嵌まらない主張であると言えるであろう。

それは兎も角も、中和にしろ中権にしろ、中庸思想はどちらにおいても、家族制度と国家制度と言う、私と公の相反する二つの中心の存在を無前提的に主張する特異思想であることには変わりがないのである。従って家族秩序⇨私権力と国家秩序⇨公権力という、相反する権力構造のどちらにも偏りなく、両極端制度を緊張関係の状態を保持して、両者の秩序の安定と維持の実現を目的とする所に、中庸思想の政治思想的な歴史的意義が存在したのである。

四 「対の思想」の政治思想的意義

これまでに展開した諸研究において、「対の思想」の有様を考察してきたが、「対の思想」の生まれてきた歴史的背景より導き出されて来る、対の思想の政治思想的意義について、結論を述べておきたい。これまで筆者が発表した対の思想の生まれてきた歴史的背景についての拙稿の要旨を纏めると、凡そ次の様になるであろう。

「対の思想と現実主義」において、中国の古代より現代までの現実の社会は、清濁や善悪が曖昧で混沌とした社会である故に、清濁や善悪という表と裏の両面を呑み込む心の幅の広い両面思考を持たないと、中国社会の現実を上手く生きていけな

つまりある時は博愛主義Ⅱ公権力者であり、ある時は個人主義者Ⅱ私権力者であるという、相異なる支配権力の使い分けが、臨機応変に出来る人間ということであり、孟子に「時の聖」と言われた孔子が、とてもこの二重権力構造の力関係のバランスの実現と維持に長けた人物であったということの意味しているのである。

③中和Ⅱ礼と中庸Ⅱ時中の中庸思想の実現と維持に腐心する理由

中庸思想を国家権力構造の中で論じると、中和Ⅱ礼による中庸思想は、国家と家族という公私の二重権力支配が、ほど良く入り混じり融合した権力構造であり、他方の中権Ⅱ時中の中庸思想は、国家・社会と家族・個人の公私の権力バランスが、どちらにも傾かないほどよい水平状態にある権力構造であることを意味する。だから中庸思想を精髄と考えるのは、自己を含めた家族制度と、社会と国家制度の両者の安定的維持と実現にはどうしても必要不可欠な政治理念だからである。

従って孔子から毛沢東に至るまでの中国知識人の伝統的な権力支配の理想は、国家Ⅱ公権力と家族・個人Ⅱ私権力の権力バランスの均衡状態の実現と維持であり、この実現と維持に奔走した一生涯であったということである。

④公と私の二重権力支配のバランスが崩壊する結末について

周代の土地制度と税制である公権力支配と私権力支配を判然と区別する井田制と中庸税たる十分の一税は、人倫不易の大道を述べる経書・『孟子』だけでなく、『礼記』・『王制篇』(一八)にも記載されている、儒教思想の理想的な財政経済制度であることを意味している。従ってこの二重権力関係のバランスが崩壊するということは、とりもなおさず暴君汚吏による私権力の伸長を意味している。井田制の経界を判然とさせる必要のあることについて、周代を理想とする孟子は、

「ところで仁政とは、まず耕地の境界を正しくすることからはじまるものです。境界が正しくないと、井田の土地の分け方が均分にはいかなしいし、つれて役人の俸禄も公平というわけにはいかなくなりません。それで昔から暴虐な君主や貪欲な役人は、みなこの境界をいい加減にし〔て私利私欲をはかっ〕たものです。」(一九)と、述べているのである。

井田制度の公私の区別が曖昧になり、中庸税たる十分の一税制度が崩壊する原因は、国家権力者の私権の伸長にあると言うのである。その結果について孟子は、

「本当の国家の災害とは、上の者に礼義が泣く、下の者に教育がなくて道義をしらぬことであり、その結果は暴民の反乱が群がり起って国家は忽ちにして滅亡してしまうであろう。詩経にも『天は今に周室を覆そうとしている。周の群臣よ、そう呑気に泄泄としておるときではないぞ』とあるが、この泄泄というのは、今の言葉でいうならベラベラ喋りつつける沓沓と同じ意味である」(二〇)という。

礼義Ⅰ公権力と私権力のほどよく融和した権力支配の中和の状態Ⅰが崩れていく結末は、家族制度と国家制度の両面の滅亡に帰結する、と言うのである。このように国家の滅亡に導いていくのは、中和Ⅱ礼制の場合のみに、家族制度と国家制度の両側面が同時に崩壊するのではない。

中庸の中権の場合においても、公権力と私権力の力学的な権力バランスが崩壊した場合には、家族制度と国家制度のどちらか一方が必ず崩壊する危機に直面するであろうことは、容易に推測することが可能であろう。

孟子は、個人主義に拘り博愛主義に転換しない梁の恵王に、「書経」湯誓篇に、「人民は夏の桀王を太陽になぞらえて」『「ああ、苦しい」この太陽はいつたい。いつ亡びるのだろうか。その時がくるのなら、自分もいっしょに滅んだとてかまわない』というて呪ったとありますが、こんなに人民から『いっしょになら、この身を棄ててもかまわぬ』とまで怨まれるようになっては、いくら立派な台や池や鳥・獸があったとて、いつまでも自分ひとり楽しんでなどおられましようや。」(二一)と述べている。個人主義の結末は、自己の身と王朝を滅亡させることになるのである。

他方、家族制度を認めず、博愛主義に拘れば、孟子が齊の陳仲子を批判している文章の中に「齊の人」匡章が孟子に向っていった。「あの陳仲子こそは、なんとまことの清廉潔白な人物ではございませうまいか。彼は「名門に生まれながら、実家の世話になるのをきらって、家をとびだして」於陵にいたとき、非常に貧しく食べ物もなくて、三日の間も飲み食いしなかったので、耳も殆ど聞こえず、目も碌にいません。……」(二二)と述べているように、餓死の一步直前となる。

次に孔子・孟子に清廉潔白な聖人と高く評価されている伯夷・叔齊の例を挙げる。百科全書には、『史記』伯夷列伝によると、殷代の孤竹国の国君の子。父の死後、位を譲りあって、ついにともに国を逃れ、周の西伯昌(文王)の徳を慕って周へ行

三 中庸思想の政治思想的意義

中庸思想は、堯・舜・禹 (古代聖王) ↓ 『詩経』 (西周・春秋) ↓ 孔子 (春秋) ↓ 孟子 (戦国) ↓ 孔子思 (戦国『中庸』作者) ↓ 鄭玄 (漢代『中庸』古注) ↓ 戴顛 (南北朝・宋『礼記中庸伝』) ↓ 李翱 (唐代『中庸説』) ↓ 二程 (北宋) ↓ 朱子 (南宋) ↓ 毛沢東・華国鋒 (現代) ↓ 李年古 (現代) と、古代より現代に至るまで、中国の全歴史を貫いて長く生きてきた思想なのである。

また中庸思想の成立に必要な条件である「対の思想」も、堯・舜・禹 (古代聖王) ↓ 『詩経』 (西周・春秋) ↓ 孔子 (春秋) ↓ 孟子 (戦国) ↓ 孔子思 (戦国『中庸』作者) ↓ 鄭玄 (漢代『中庸』古注) ↓ 戴顛 (南北朝・宋『礼記中庸伝』) ↓ 李翱 (唐代『中庸説』) ↓ 二程 (北宋) ↓ 朱子 (南宋) ↓ 毛沢東・華国鋒 (現代) ↓ 李年古 (現代) と、「中庸思想」と相並び、古代より現代に至るまで、中国の全歴史を貫いて長く生きてきた思想なのである。

従って「対の思想」は、「中庸思想」の成立の必要不可欠な付随条件である以上、「対の思想」と「中庸思想」は、不即不離の関係にあり、「対の思想」は、「中庸の思想」出現の影の部分であり、その底辺部分を形成しているのである。

「対の思想」は、「中庸思想」と相並び、中国民族において、最も伝統的で最も重要な思想なのであり、古代中国より現代中国にまで、全中国史を貫き生きてきた、中国思想の中核なのであり、まさに中国思想の精髓といえるであろう。

「対の思想」に密接に関係する中庸思想が、国家権力構造において、一体どのような政治思想的意味を持つのであろうか。これまでに中庸思想について長らく述べてきた纏めとして、ここで問題にしておきたい。

孔子や孟子から始まり宋代の哲学者や名臣達、更には現代の毛沢東に至るまでの中国の知識人達は、伝統的に中庸思想を中国思想の精髓と認識して、何故にその実現と維持に異常な熱意を持っていたのであろうか、その根源的な理由である。

① 中和Ⅱ礼思想と国家権力関係について

金谷氏が引用する「礼とは中を制める所以なり」(『礼記』仲尼燕居篇)、「先王の

道は、中に比いてこれを行なう。曷をか中と謂う。曰く、礼儀是なり」(荀子儒効篇)に述べている中庸(一五)の中とは、一体、何と何との両極端の中なのであろうか。孟子は、これについて以下のように述べている。

「孟子はいわれた、「仁の神髄は親によくつかえること、すなわち孝であり、義の神髄は兄によくつかえること、すなわち悌である。・・・礼の神髄は、この孝と悌との二つの道を調節して立派にととのえることである。・・・」(一六)と述べているように、礼は仁(家族・個人)と義(国家・社会)とを程よく融合したものであるというのである。また『中庸』には、

「魯の哀公が政治について質問された。先生はこう答えられた、・・・仁とは人で「あつて、人と人が親しみあうこと」である。親しい肉親を信愛することが最も大切である。義とは宜で「あつて、物事に応じた適宜なあり方を得させること」である。「肉親の情をこえて」賢人を賢人として尊重することが最も大切である。肉親を親愛することにも「親疎による」差別があり、賢人を尊重することにも「才能による」区別があつて、そうした区別こそ礼の起る根拠である。「つまりは、礼とは仁と義とを節度をつけて飾るものである。」(一七)と、述べているように、礼とは、仁(家族の親疎)と、義(賢人の上下)という両極端を中和して、これに差等を付けて制度化したものであると述べている。

礼とは、国家Ⅱ公権力と家族Ⅱ私権力とを、ほどよく融合した中和の中庸思想の哲学的な表現であり、中和Ⅱ礼制の中庸思想とは、公権力と私権力を混じり合せて融合した国家権力の支配構造理論なのである。従って中和Ⅱ礼の実現と維持に懸命になるといふことは、公権力と私権力の五分五分にほどよく融合した国家権力の実現と維持に懸命であったことを意味しているのである。

② 中権Ⅱ時中思想と国家権力関係について

中権の中庸思想は、墨翟の博愛主義と楊朱の個人主義を臨機応変な豹変行動を実行して、両思想のバランスや均衡を実現し維持する思想であった。このことはとりもなおさず、中権の中庸思想における状況に的中する時中行動の精神は、国家・社会Ⅱ公権力と家族・個人Ⅱ私権力という、二重権力支配構造という国家権力支配の力関係のバランスと均衡状態の実現と維持を目的とする思想であったのである。

い、家族を裏切り冷遇する場面も出てくるし、李年古氏の著書にも、『権治』として法令主義の指摘がある(一〇)。

儒教を代表例にして、「対の思想」を中心テーマにして、本題に関する各々論文で述べてきた事実でも理解できるように、両面思考―「対の思想」を持つ思想でなければ、長く中国政治思想界では、生命を維持で見なかったことは、明白であろう。

「対の思想」を持つ老荘思想(一一)が、道教と密接に関係を持ち民間思想として発展して、二十世紀の現在まで長く庶民に支持されてきた事でも、容易に理解されるであろう。また「呉越同舟」に代表される「対の思想」を展開する孫子の兵法書も、「智者の慮は必ず利害に雑う」と言うのであり、中国の長い戦乱の歴史の中で、実戦の兵法書として長らく活用されてきた事も参考になるであろう。

浅野氏は、孫子の兵法の特徴の一つとして、「利害の両面を考えよ」との資料を挙げて、孫子は、「すべての物事には、必ず利益の面と害悪の面とが存在している。…利益の裏に潜む損害の面にも、十分な配慮を払ってこそ、事業は計画通りに達成される」と述べている(一二)。

また孫子は、「兵法の極意は、相手を騙すことである」(一三)と述べている。相手を騙すと言う事は、相手の裏をかくことであり、相手の表面の戦術が前提となつて、裏面がるのである。だから孫子の兵法の極意は、相手の戦術の表と裏の両面を同時に見る「対の思想」があつて、初めて成立する兵法であると言うことである。

以上の事実関係については、毛沢東の発言の中においても、証明しておきたい。毛沢東は、文革の混乱の最中に、造反派と保皇派に二分された学生達は、各々、毛沢東の言行録を自己の立場を正当化するための思想的武器にして、権力闘争をしていたが、両派統合を望む毛沢東に、造反学生リーダーの一人の韓愛晶は質問した。この質問に対する毛沢東の学生への返事を、毛沢東の主治医・李氏は、毛沢東の傍において、以下の様に興味ある記録を残している。

「造反学生たちは決起盛んな連中で、私はとりわけ韓愛晶のことをよくおぼえている。「両方が主席の言葉を利用して、自分たちの行動を正当化してきたのです」と、彼は毛沢東に指摘した。「ところが主席のお言葉は異なる解釈がされやすく、相反する解釈さえ可能です。主席が生きておられて紛争を解決してくださるあいだ

は問題ありません。しかし主席がもう僕たちといてくだされなくなったら、一体どうすればいいんでしょうか」。

康生と江青は激怒した。「どうしてまた、そんなばかげたことがぬけぬけと言えるのか」と、ふたりはつめよつた。にもかかわらず、毛沢東はその問いかけ方がいたく気に入った。毛沢東はかつて江青への手紙でおなじような問題にそれとなく触れている。「若い時分、私も自分にそうした問いかけをしたものだ。他人があえて持ち出さないような問題だよ。確かに私の言葉は違った解釈ができる。それは仕方がないことだ。儒教を見ているがいい、仏教、そしてキリスト教もだ―これらの偉大な思想はみんな分派に割れている。それぞれ本家本元の真理に違った解釈をくわえているんだよ。いろいろな解釈がなければ、成長も変化もあり様がない。停滞がはじまり、本来の教義は死んでしまうだろう」(一四)と、毛沢東は韓愛晶に答えた。

文革の急先鋒の康生や江青は、この問答にビックリして激怒したのであるが、それは毛沢東の自己分裂した両面思考―「対の思想」の持つ意味や内容をよく理解することができなかったからである。つまり毛沢東は、自己の思想が相反される解釈を持っている、自己分裂的な性質のあることを、十分に認識しており、自己分裂する自己の思想を自ら正当化しているのである。

毛沢東は、第一には、儒教や仏教やキリスト教の教義が、つまり古代より現代まで生き続けている偉大な思想は、みな自己分裂した内容を持つことを、毛沢東自身も、両面思考―「対の思想」を持っていることを、はっきりと自覚していた。

第二には、固定した一元的な教義は、解釈に柔軟性がなく、やがて停滞して死滅していくことを悟っており、自己分裂した両面思考―「対の思想」を持つ思想こそ、後世の解釈に多様性が生まれ、絶えず成長と変化を遂げて、永遠の生命を持つ思想なのだ、と言う。毛沢東は自己思想の自己分裂的性格について、儒教や仏教やキリスト教と相並ぶ、永遠の生命を維持する偉大な思想と自己陶醉している。

この毛沢東の発言の事例を見ても理解できるように、法家が二〇〇〇年もの長い間、儒教と並び称されて、中国歴史上の支配的思想であったことは、両面思考―「対の思想」を持っていたであろうことを、容易に推測させるのであるが、その詳細と実証については、全て今後の研究課題としたい。

しかし単に韓非子の利益誘導型の法術主義のみだけでは、広大な統一国家を統治する事は、これまた不可能であつたであらう。韓非子の言う「人口が少なく物資の豊かな」時代の延長戦上に統一国家が誕生してくる以上、利益欲望は古代よりすでに存在したのであり、そのような古代の統治原理である仁義の道德政治も、統一王朝出現以後にも絶対必要不可欠であると思う。何故ならば人間が存在する以上、愛情や正義の道德が、この世に不必要になる筈がないからである。

だから孟子も『孟子』の巻頭において、梁の恵王に対して利益政治について、「然れども」苟も義を後にして利を先にすることを為さば、奪わざれば餐かず。未だ仁にして其の親を遺つる者はあらざるなり。未だ義にして其の君を後(忽)る者はあらざるなり。王亦仁義を曰わんのみ。何ぞ必ずしも利を曰わん。」(六)と、利益政治は国家と家族制度を崩壊させると、孟子も戦国の乱世の時代の国王に利益

一点ばりの政治姿勢を激しく批判しているのである。そもそも孟子の発言を待つまでもなく、古代より人間は利益を追求する動物である。韓非子の歴史認識はあくまでも半面であり、人間の性向への偏向認識である。梁の懐王の太傅・賈誼は、「天下すでに安治している」と進言する臣僚達に長嘆息して、漢初より文帝時代にまで法家思想に大きく傾斜した政治欠陥を批判して、以下の様に儒教の政治的長所を述べて、文帝に深く嘉納されている。

「夏・殷・周は天子は皆数十世続き、秦は天子二世で亡くなりました。人間の性はそう異なっているものではありません。どうして三代は長く続き、秦は無道の暴行で滅んだのか、その理由をしるべきです。……凡そ人間の知恵という物は、已然に見えやすく、将然には見え難いものです。礼は将然の前に禁止して、法なる者は已然の後に禁止する物です。この故に法は見え易く礼は知り難いものなのです。……『礼記』に、礼という者は、悪を未萌に絶ち、教化を微小に起こすことを貴びます。孔子も「訴訟判断は凡人だが、徳義を以て教化して訴訟を無くさせることができます」と言っています。……秦王は宗廟を尊び子孫を安んぜようとする事は湯・武と同じでしたが、しかし湯・武は広く徳行を行ない、六七百年も続きましたが、秦派天下を治めること十余年で大敗しました。これは他でもありません。……湯・武は仁・義・礼・楽で天下を治め子孫数十世も続きましたことは、天下の

共に聞くところです。しかし秦は法令・刑罰で天下を治め、禍は自己の身に及びました。これも天下の人は共に見たことであります。もうその理由はつきりしているではありませんか。……今、礼義は法令に及ばない、教化は刑罰に及ばないと言う人がいるが、天子様はどうして殷・周・秦の事例を引用して観ようとしないのですか！ 国家の安定如何は堂階の階層ですぞ。堂階の階層が高ければ攀り難く、堂階が低ければ凌辱し易いのですぞ。……」(七)。

確かに秦は法家の商鞅等の法家思想を採用して短期間で強国になったのであるが、同時に皇帝も臣庶も法令の下に平等に処置する故に、その弱点も存在したのである。この法家思想を引き続いた漢初において、その政治思想の欠陥を指摘して、儒教の長所を取り入れ、法・儒の二元論的政治思想の必要性を説いたのである。

この結果、漢代に入り秦の法治主義の政治欠陥を是正すべく、儒家と法家の二元論的政治思想が政治上の現実的問題を解決して、王朝を長く維持するために導入されたのである。儒家と法家の一面的単独思想では、広大な中国全体を長く統治するのは不十分であり、両思想が表と裏の「対の関係」にある以上、両者を一対として捉えて初めて、統一国家統治の政治思想原理の完成に繋がるのである。

だからこそ漢代に入ると、仁義による儒教思想と法術による法家思想は、相互に欠陥を補完する「対の思想」となって、両思想の並立的共存思考―両面思考の考え方が主流を占めて中国社会二千年もの長く生きていくことになったのである。

家族制度の大切さを教えるのは、儒教の中心テーマの一つである。これまでの拙稿では、この立場に立ち論じてきた。しかし家族制度を重視する儒家と、家族を貫いて法が支配する法家は、家族制度と国家制度の両面を認める点では同様でも、両思想における国家統治の方法論は、全く正反対であり、「対の思想」なのである。

儒教思想の正反対にあり、家族制度を貫徹して法令が支配する法家思想が、道家思想とともに伝統的に中国で支持されてきたことは、歴代の中国史が教える所であり(八)、毛沢東が家族を冷遇しつづけたことや、中国共産党支配に韓非子の法術を利用したりしている。中国共産党幹部の家族内部においても、家族を裏切る反家族主義行為が見受けられる事は、李志綏氏の著書に随所に述べられている(九)。また今回に紹介したテレビドラマの世界でも、家族制度の否定としか言いようのない

自己矛盾した正反対の発言や行動を、時には意識的に採る必要があったのである。そして中庸思想の前提である両面思考―「対の思想」は、テレビドラマでも展開されているように、全ての要素が渾然一体的に展開されていくのが通常である。その理由は、「対の思想」が、「現実を尊重」する中国人に適合しており、「状況の変化」の激しい中国にも適合しており、「広大な国土に多様な国民性」がある現実にも適合しており、「中庸思想を実現」する上でも必要とされており、あらゆる場面において非常に大切な思想であると認識されてきたからである。

以上に述べたように、「対の思想」の生まれてきた歴史的背景の四つの要因は、本稿では問題点を簡潔に整理して、議論を展開しやすくなる必要上、六本に小分けしたが、本来は各々個別的に論じるべき性格のものではなく、テレビドラマの世界の様に、四つの要因が複雑に絡みつつ総合的に展開してきて、両面思考―「対の思想」が生まれてくるものである。

また対の思想が生まれてきた歴史的背景である四つの要因が、複雑に絡み合い一人の人生が展開されていくことは、テレビドラマの世界だけでなく、実際の現代中国政治世界においても、本稿の四つの論文の全てにおいて、毛沢東の「対の思想」が現れていることにより実証してきた。

従って対の思想が生まれてきた四つの要因を総合的に絞り込んで、中国思想の精髓である中庸思想を中心テーマにして、「対の思想」を一本化して総合的な論文に纏め直す作業が、今後に残されている。

この問題の解決方法論については、『孟子』の中に現れた孟子の言行を中心にし、すでに筆者は、「程ほどの大切さ―中国思想の特質・中庸について」(三)と題する小論で中心になる論点を要約しておいたので、今後はこの小論を導きの糸として、更に資料を豊富化させて、孟子の「対の思想」を中心に、具体的に実証的に中庸思想の政治的意義についての問題点を展開していきたい。

二 「対の思想」と法・儒の政治思想

第二は、性善説を説く儒家と性悪説を説く法家という「対の思想」関係にある政

治思想が、どの様な相互関係に在り、何故に中国歴史上において長く生き延びて、現代社会にまで強く影響を与えて来たのか、という問題である。

仁義を中心テーマにして思想展開する儒家と、法術を中心テーマにして思想展開する法家の国家統治の思考方法や発想方法の違いや、両思想の議論が噛み合わずにすれ違いの大きな原因や背景の一つには、孟子と韓非子の生誕にまつわる経歴の違いがあること関係していると思われる。

原因の二つには、両者の政治思想は、各々事物全体の半面だけを見て、自己の学説に都合のよい面のみを取り入れて、それを強調して自説を無理に完成の域に到達させているために、相互に相手を否定し合わなければ成立しない政治理念であるからである。つまり両思想とも単独では、同一物の半面のみしか捕捉していないために、国家統治の政治思想としては、未熟であり未完成な政治思想なのである。

原因の三つには、孟子は戦国時代の最中に活躍して、韓非子は中国統一の直前に自己の思想を完成させ、孟子の生まれた時代と戦国末期の韓非子の生まれた時代には、かなりの隔たりがあること関係していて、両者の活躍した時代背景が大きく影響していると思われる。つまり中国の統一国家の成立過程―秦漢時代の皇帝支配下の一元的中央集権制州県制支配の国家の成立過程と大いに関係がある(四)。

金谷氏は、「解説」において、韓非子の法術思想の生まれてきた背景について、以下のように解説している。

「人間の歴史は利益追求を軸として変化するとみたのである。人が少なくて物資が豊かであった古代では、人の欲望はまだ小さくて道徳がものを言った。しかし、人が増えて物が足りなくなった中世では、人々は頭を使って争うことになる。やがて利益を追求する欲望はますます増大し、今や力で争う時代になった、という(五蠹篇)。この時代認識は彼の人間観とびつたり一致する。始皇帝による統一前夜のまさに末期的な過酷な状況を反映したものであった。さて、時代が変わったからには事業もまた変わるべきである。儒者の主張する仁義の徳は既に古い。新しい力の時代にふさわしい支配の原理を求めなければならない(五蠹篇)。・・・ここに厳格な法術主義の施行が要請される。新しい時代に適応した客観的な統治の原則とは法術主義であった。」(五)

中国の歴史長編小説に匹敵する現代中国のテレビドラマである。

しかしよくこのテレビドラマを見てみると、状況の変化に右往左往しているように見える主人公の行動の中には、両極端の真ん中を執る中庸の思想が、しっかり腰を下ろしているのであり、そこに視聴者はホッと安心するのである。ドキドキしながらホットするところに、このドラマが熱狂的に支持された原因があるのであろう。

駒田信二氏や金谷治氏が指摘した、多様な「対の思想」が、縦横無尽に複合的に展開されているテレビドラマである。中国人一三億人が熱狂したというが、その理由は簡単で、中国人の基本的な民族的特色である両面思考―「対の思想」と中庸思想に、ピッタリとマッチングしている故である。

確かにドラマを見てみると、主人公の行動やドラマの背景には、論理的・一貫性がなく、その場その場の判断で場面が変わり、主人公達も自分の行動を変えていくところに、時間的な連続性がなく、日本人が伝統的に好む一貫性や論理的思考性がなく、これが両国の民族性の違いなのであろうと、つくづく見ていてそう思った。

駒田氏が、「そして、その善と悪とのそれぞれのなかにさらにまた善と悪とを見る。そしてまた、その善と悪のなかに、さらに対を見る。潔いことを好む日本の大衆一般は、このような思考の、くどさ、ねばり強さを好まない。中国の小説の場合には、△影の部分▽をつけ加えることによって物語がふくらんでゆくといったが、今日の中国のいわゆる「人民文学」は、そうではない。「人民文学」は一種の勧懲小説であって、典型を描くことが求められているが、その典型とは多く△影の部分▽を削り取った八犬士的な類型である」(一)と、述べている。

金谷氏も、「政治優先の現代の中国では、小説もまた社会主義の発展に向かって勇猛邁進する人々が描かれ、そこでは善玉と悪玉とがはっきり区別されるというのが多いようです。私は、中国の人々も本当はそうした小説をあまりおもしろいとは思っていないのではないかとかんがえます。・・・ですから、現に自由化に伴って少しずつ変わって来ているように、いずれはまた、彼らも本来おもしろいと感じるような一面的でない小説が盛んになるだろうと思っています」(二)と、述べる。

駒田氏が指摘して金谷氏が予測したように、近代自由化路線を歩む現代の中国では、文化大革命時に一時的に抑圧された、前近代的な解放前の中国人が熱狂した両

面思考―「対の思想」と中庸思想を縦横に展開した小説やドラマが、復活してきているのである。同じテレビドラマの『大唐遊俠伝』も同様な内容であった。

このテレビドラマを見て、後学の私としては、偉大な中国研究者である駒田信二氏や金谷治氏の、中国民族の好悪の趣向性に関する非常に的確な発言や未来を見通した透徹した慧目に敬意を表したいのである。

ここで上述した「強固な家族愛」と「善悪の両面を持つ中国人像」が、色濃く反映されている「新・上海グラウンド」というテレビドラマに関連して、これからの二つの重要な研究課題について、問題の提起をしておきたい。

二 対の思想から見た中庸思想の研究

第一は、本稿で個別的に展開した四本の論文を総合化する論文作成の作業である。

両面思考―「対の思想」の研究を通して、中国人の思考と日本人との思考の違いは、中国人は全ての物事には、「善い面もあるが、悪い面もある」という、善悪が曖昧な両面思考―「対の思考」をするのに反して、日本人は、「善いものは善い、悪いものは悪い」と、善悪の区別が明瞭である所に、民族性の違いによる思考方法の相違があるということである。

中国人は、極端な論理的理論を嫌い、常識や情理を重視して、両極端の平衡感覚やバランスを尊重する中庸の気質を伝統的に持つ民族である。決して一方に偏らない思考を、中国人は伝統的に最も重視してきた。そのためには、その実現・維持する前提として両極端思想―「対の思想」が必要なのである。

従って中庸思想を政治、経済、学問、美術、日常生活において実現するためには、古来より中国人は、その必要条件として万物における両極端物の存在―「対の思想」の存在の事実を証明することや、両面思考―「対の思想」の養成と実現に苦心惨憺として、努力する必要性があったのである。

中国人の基本的な思考方法である「対の思想」や、最高の徳目である中庸思想の実現のためには、臨機応変性のある思考方法と行動様式が常に必要であり、物事の両面思考ができることが、中国の知識人には必須要件であった。そのためには全く

対の思想の政治思想的意義

―対の思想(両面思考)の生まれてきた

歴史的背景について(終章)―

小倉正昭

中国人の基本的思考である両面思考―「対の思想」の生まれてきた歴史的背景として、中国(人)の特殊要因として、「現実の尊重」、「状況の変化」、「広大な国土(多様な国民性)」、「中庸思想」を指摘した。しかしこれらの諸要因は、中国社会の表面的・現象的特色であって、その根本的要因は、世界史上の人類の発展段階から考察する必要がある。それは、一方では原始共同体社会の崩壊に伴う中国社会の家族制度誕生の早熟性と強固性に求められるが、他方では中国社会の共同体的遺制(人類の類的存在の残存の強固性に求められる。このお互いに反発する家族制度と社会制度という、相異なる二つの緊張的な同時共存性が、世界史上における中国人の思考的特殊性である両面思考―「対の思想」の生まれてきた本源的要因である。

キーワード：対の思想 歴史的背景 根本的要因 個別家族制度 国家社会制度

一 はじめに

昨年(2014年)の夏、中国国民に圧倒的に人気を博した『上海灘』を、リメイクしてテレビドラマ化した『新・上海グランド』を見る機会を得た。中国一三億人が熱狂したと言われている。チョウ・ユンアン、レスリー・チャンが演じた伝説のドラマの再現である。男女の運命的な愛や、男と女の友情を中心に描いたハードボイルド・ラブストーリーである。義兄弟の契りを結んだ主人公の許文強(ホワン・シャオミン)、丁力(ホアン・ハイポウ)を中心に、疑似的兄弟関係を結んだ仲間が、悪人を相手に、時には善人をも巻き込み、善悪曖昧な中で、生死をかけて暴れまくり、相手を血祭りに挙げて活躍する映像を見てみると、中国人に伝統的に人気のある武勇長編小説の『水滸伝』の現代版であり、それを彷彿とさせる。

日本の『水戸黄門』、『吉宗評判記』のような、善悪の区別のはっきりした単純明快なドラマと違い、善悪が複雑に絡み合い入り乱れている。マフィアの悪人が、家庭では善良な妻子思いの善人であり、善人の主人公が悪行に走ったり、味方が敵に寝返り、敵対者が味方になり、悲しみの中で離別して墮落したかつての恋人が、再開後に再び純愛の恋心を寄せたりする。

「好きな故に上海を離れる」とマフィアの大家の父親に言い残したかと思うと、今度は「君が好きだから上海に止まる」と告白して、新しい恋人ができて、幸福な家庭が実現すると思いきや、また離別してしまうのである。

両面思考―「対の思想」が、何度も繰り返されて、何の前触れもなく舞台が急に変化する所に、如何なく表れていて、ストーリーや台本には、論理性や首尾一貫性がないのであるが、これが中国ドラマの特徴であり、精髓なのである。

このドラマで大切なのは、本稿の論考で展開してきた、「対の思想」の生まれてきた歴史的背景としての四つの要因―「現実の尊重」、「状況の変化」、「広大な大地―多様な国民性」、「中庸思想」―が、如何なく随所に展開されていることである。

恋人との絆を断ち上海を離れるという主人公が、恋人との別れを惜しみ、再びさしたる大きな理由や変化もないのに、上海に止まることや、善人を救うために無報酬の肉体労働をする道徳性を見せたかと思うと、悪人には悪人以上の暴行を繰り返される、善悪入り乱れの展開劇が幾重にも展開するのである。両極端に対する両面思考―「対の思想」が、幾つも重なり合い、随所に如何なく発揮されている。

中でも大きいのは、状況の変化である。状況の変化に対して、主人公達の運命が世の流れに翻弄されながら、主人公達は離合集散を果てしなく繰り返して、何時になったら幸せになるか、その結末が分らない。常に歌舞伎調のどんでん返しを繰り返されて、ハラハラ・ドキドキしながら、次回のドラマを期待してしまうのである。

(Original Article)

Historical Development of the thought of *Dui* and the Doctrine of the Mean
— Historical background from which the thought of *Dui* (dualist thought) arose (5) —

Masaaki OGURA*

The mean signifies “a balanced state, not being slanted toward a particular idea, not depending on anything, and not being too much or too little”. It is the thought that great importance is attached to respect for common sense and harmonization, which are essential aspects of Confucian thought. Two-sided thinking—“the thought of *Dui*”—that includes both ends of a spectrum, arose as a requirement to realize and maintain the mean, which is the backbone of Chinese popular thought. This can be verified concretely in ancient times, the Tang and Song, and modern times of China. Political, structural characteristics of the Doctrine of the Mean in successive Chinese dynasties lie in the intention to stabilize and maintain political balance between two different extreme powers: one is public power—state (society); the other is private power—family (self).

Key words: the thought of *Dui*, the Doctrine of the Mean, ancient China, Tang and Song Dynasties, modern China

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

- (四一) 『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 一四四頁 参照）
- (四二) 『宋名臣言行録』（諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 一
二五頁 参照）
- (四三) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一七七頁 参照）
- (四四) 『中国Ⅱ文化と思想』（林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年
第三章 中国人の精神 四 論理 一八〇頁 参照）
- (四五) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 八四頁―八五頁 参照）
- (四六) 『毛沢東の私生活（上）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 三七五頁 参照）
- (四七) 『中国人との交渉術』（李年古 学生社 二〇〇〇年 第二章 「中国人が
よく用いる奥の手」（三）「調停役」によって双方を立てる折衷案」五二頁
参照）
- (四八) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 四〇三頁―四〇五頁 参照）
- (四九) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 四〇五頁 参照）
- (五〇) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 四〇一頁 参照）
- (五一) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 四五二頁 参照）
- (五二) 『毛沢東の私生活（下）』（李志綏 新庄哲夫訳 文春文庫 二〇〇〇年 第
八刷 一一〇頁 参照）
- (五三) 『日本人には言えない中国人の価値観』（李年古 学生社 二〇〇六年
第三章 商売観 四項 六八頁―六九頁 参照）
- (五四) 『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 「成立と伝承」一
三〇頁―一三六頁 参照）
- (五五) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 八八頁 参照）
- (五六) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 三七頁 参照）
- (五七) 『孟子（上）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一八〇
頁―一八一頁 参照）
- (五八) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一一九頁 参照）
- (五九) 『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三八二
頁 参照）
- (六〇) 『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八八年 一五一頁 参照）
- (六一) 『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八八年 一五三頁 参照）
- (六二) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 三七頁 参照）
- (六三) 『孟子（上）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一九八
頁 参照）
- (六四) 『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二〇三
頁―二〇五頁 参照）
- (六五) 『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 四三頁 参照）
補注には、「杞・宋一周になってから夏と殷との王室の子孫がそれぞれに
封ぜられた小国。杞は河南省杞県、宋は河南省商邱県の地。」としている。
- (六六) 『武内義男全集 第三卷 儒教篇二』（角川書店 昭和五三年 初版 礼記
の研究 二四九頁 参照）
- (六七) 『程伊川哲学の研究』（市川安司 東京大学出版会 一九六四年 第三章 第
五節 「権」是認の根底にあるもの 一四四頁 参照）
- (六八) 『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 卷第五 公孫丑章句下 一六一頁
―一六二頁 参照）
- (六九) 『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一七四頁
参照）
- (受付日二〇一一年 九月 二七日)
- (受理日二〇一一年十二月 二二日)

- (二二)『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 二六七頁 参照)
 金谷氏は「補注」して、『列子』楊朱篇に「世界中の善事はみな舜と禹と
 周公と孔子へ、世界中の悪事はみな桀と紂へ。」と述べている。
- (二三)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 四二〇
 頁 参照)
- (二四)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三〇六
 頁 参照)
- (二五)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三三三
 頁 参照)
- (二六)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一七四
 頁―一七五頁 参照)
- (二七)『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二五九
 頁 参照)
- (二八)『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二五七
 頁注 五 参照)
- (二九)『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一二二頁 参照)
- (三〇)『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三〇八
 頁 参照)
- (三一)『程氏遺書』(卷一 参照) 『近思録』(卷一 参照)
- (三二)『程伊川哲学の研究』(市川安司 第二章 理の多様性 第六節 第二項 対
 観念成立の要因 東京大学出版会 一九六四年 九四頁 参照)
- (三三)『程伊川哲学の研究』(市川安司 第二章 理の多様性 第六節 第二項 対
 観念成立の要因 東京大学出版会 一九六四年 参照)
- (三四)『程氏遺書』(第一八巻 参照)
- (三五)『程氏遺書』(第四巻 参照)
- (三六)『中庸』(宇野哲人全訳 講談社学術文庫 一九八三年 四三頁―四五頁
 参照)
- (三七)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 一四四頁 参照)
- (三八)『朱子文集』(四二巻「答胡廣仲第五書」(市川安司『程伊川哲学の研究』九
 九頁 参照)
- (三九)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 二五〇頁 参照)
- (四〇)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 二五二頁 参照)
- (四一)『程伊川哲学の研究』(市川安司 第二章 理の多様性 第六節 第二項 対
 観念成立の要因 東京大学出版会 一九六四年 九九頁 参照)
- (四二) 対聯の始まりは、『宋史』の「蜀世家」によれば、五代の九四六年(広政
 二年)の春節前、後蜀の皇帝・孟昶の書いた春聯に「新年納余慶、嘉節号
 長春」との記載があり、現在記録される最も古い春聯の対句となっている。
- (四三)『中国思想を考える』(金谷治 第三章 对待 中公新書一―二〇 一九九
 三年 第八刷 一〇九頁―一一三頁 参照)
- (四四)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 三
 四頁 参照)
- (四五)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 四
 五頁 参照)。退静の儒教宰相・王旦の人格は、『論語』に「先生がいわれた、
 「君子は他人の美点を「あらわしすすめて」成しとげさせ、他人の悪い点
 は成り立たぬようにするが、小人はその反対だ。」『論語』金谷治訳注 岩
 波文庫 一九八九年 第四〇刷一六五頁 参照)とあるように、孔子の行動
 をそのまま踏襲していた。
- (四六)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 五
 三頁 参照)
- (四七)『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波書店 一九九八年 一五五頁 参照)
- (四八)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 五
 六頁 参照)
- (四九)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 七
 四頁 参照)
- (五〇)『宋名臣言行録』(諸橋徹次・原田種茂 明德出版社 平成元年 五版 七
 四頁 参照)

三—文革中の毛沢東は、鄧小平を復活したのは江青らの極左派の専権にブレーキをかけて、共産党組織の立て直しと自己の位置の保全のためである。毛沢東は、左右両派のバランスを維持して、権力安定を志向する中庸思想の人物であった。中庸人の華国鋒の大抜擢も、その証拠である。

四—現代中国人の商売原則には、双方が両極端に偏らずに、お互いに寄り添い、和合して人間関係を最善にしておくこと—「調和」の精神で人間関係を保持していくことが必須であると言う。儒教の中庸の精神が商売の世界まで生きていて、「対の思考」の精神上部に、儒教の中庸思想が、現代にまで中国人を強く支配している。

五—中国人の伝統的で現代まで規定する、中国人の全精神構造の上部にあり、「対の思想」を規定しているのが、中庸思想である。従って対の思想が生まれてきた歴史的背景の最大の要因は、中庸思想であると結論できる。

六—中庸思想を説く儒教が、二〇世紀まで支持され、知識人の根本思想になってきたのは、常識や調和—中庸が重要と認識され、「対の思想」が中庸思想の実現する必要条件として認識されてきたからである。善悪や長短を議論すること—論理性や科学的考察の追求を得意とする日本人や西洋人には、「不偏不倚」の中庸思想の精神は、非常に理解し難い、中国人の伝統的な政治思想的特質である。

七—中国思想の特質を規定している中庸思想は、何故に非常に実現が困難な思想であるかと言えば、それは中庸思想自身に存在するのではない。中庸思想の周囲に存在する政治・経済・社会の外部状況が絶えず変動する中で、「不偏不倚」の真ん中を実現維持することが非常に困難な思想であると言うことである。

八—中庸思想の政治構造的性質は、中国人の政治的世界観である家族制度—私権力と国家社会—公権力を、どちらにも偏らずに両立して、これを安定的維持して行く所に存在した。公権力と私権力という互いに反発する二重権力構造を、「不偏不倚」の精神において、常に緊張関係を以って、修身—齐家—治国—平天下の大理想の中に実現して行くことが、儒教の最高規範であり中国思想の精髓であった。

九—本稿では対の思想の生まれて来た歴史的背景として、中庸思想の具体的有様について古代より現代までの歴史的事例により展開してきた。しかし中庸思想には、数多くの研究史の蓄積が存在する。従って中庸思想に関しては、研究史の問題点や

中庸思想の構造的性質の原理的解明等の問題については、本格的に解明する必要がある。これらの諸問題については、今後の研究課題としたい。

(二〇一一年九月二六日 稿了)

注

(一) 拙稿『対の思想と中庸思想(一)—対の思想の生まれてきた歴史的背景(四)—』(鈴鹿工業高等専門学校紀要 第四五巻 二〇一二年 参照)

(二) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一〇五頁 参照)

(三) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一八三頁 参照)

(四) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 八三頁 参照)

(五) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一四八頁 参照)

(六) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 三三頁 参照)

(七) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 一八四頁 参照)

— 宮崎氏は、「和」を、「互いに仲好く」とか、「協力」と言う意味に解釈する(『論語の新研究』 宮崎市定 岩波書店 三〇二頁 参照)。しかし「和」の意味は、本文中の注(一七)において、金谷氏の指摘する所で明白の様に、「和」という意味であり、中庸の意味を逸脱した、明らかな誤訳である。

— 赤塚氏も、「和」について、「和合、調和すること。『論語』に「和して同ぜず」(子路篇)というように、「和」は付和雷同とは異なる。それぞれが独立しながら協同することである。」(新釈漢文大系第二巻 『大学・中庸』 赤塚忠 明治書院 平成六年 三五版 二〇五頁 参照)と、述べている。

(八) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 三一〇頁 — 三一頁 参照)

(九) 『孟子(上)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一四五頁 参照)

(一〇) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 七二頁 参照)

(一一) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 一〇六頁 参照)

そしてこの二つの相異なる中庸思想は、中国人の最高のモラルであり、中国思想の精髓であるということは、とりもなおさず公権力と私権力という互いに反発する二重権力構造を、「不偏不倚」の中庸思想の精神において、常に緊張関係を以って、修身→齐家→治国→平天下の理想の中に実現して維持して行くことが、中国人の最高規範であり、中国政治思想の精髓であったということの意味している。

何故ならば中庸思想を実現してこれを維持しないと、危機的状況に直面する大変な事になるからである。中国人の民族的特質は、個人⇨家族制度と社会⇨国家制度の二つの中心をもつ構造的体質が特色なのである。だから中庸思想のバランスが崩れて、どちらか一方に重心が傾けば、どちらか一方が犠牲になり、やがて家族と国家の両制度が崩壊する危機に直面するからである。

具体的には個人⇨家族制度⇨私権力が伸長すれば、社会⇨国家制度⇨公権力機能が犠牲になり、国家制度の崩壊する危機に直面する。逆に社会⇨国家制度⇨公権力機能が強くなってくると、個人⇨家族制度⇨私権力機能が危機になりやがて家族制度が崩壊する危機に直面すると言う事である。

孟子は、如何なる状況に遭遇しても礼を実践する孔子の人格について、

「かように、孔子は進んで仕えるにも退いて去るにも、礼儀の道によられたのであって、その結果地位を得るも得ないのもみな天命であるといつて悪あがきはなれなかった。・・・しかるにもし、孔子が寵臣の癡疽や宦官の瘡環などのような殿様お気に入りの側近を頼って身を寄せられたとしたら、いったい何処に孔子の孔子たる所以があるうか。」(六八)と、述べている。

甘い言葉や自己に有利な状況に動揺しないで、中和の中庸⇨礼をひたすら実践して行く所に、状況に動揺しない孔子の偉大さを称揚しているのである。

また逆に孟子は、状況の変化に対応して臨機応変に行動する孔子について、
「孟子は「これらの聖人を」批評していわれた。「四人ともみなひとしく聖人であるが、伯夷は聖人の中でもとくに清廉潔白なひとであり、伊尹は聖人の中でもとくに責任感の強い人であり、柳下恵は聖人の中でもとくに調和の心の豊かな人であり、「それぞれ一方に偏ったきらいがあるが」、孔子は「一方に偏らず」時の宜しきに従って正しく行動した人である。ゆえに孔子こそ、すべての徳を集めて大成(完備)

した人というべきである。・・・」(六九)と、述べている。

孔子は諸聖人の集大成人物であり、その理由は、孔子は時⇨状況の変化⇨の判断を的確にして、状況に応じた正しい行動に豹変できた時中の聖人だからである。他の諸聖人にはとても真似することできない「時の聖人」として、高く称揚している。

状況に動揺しない頑固な意思と、状況の変化に臨機応変に豹変する柔軟性という、中庸思想を実現する上での、相矛盾した二つの異なる精神構造性を持つ「対の思想」を持つことこそ、特殊中国人的な世界観である家族制度と国家制度という、二つの中心を持つ現世の世界観意識を実現して維持して行くことが可能であった。自己分裂した二つの相異なる中庸の行動をする孔子のような多重人格的行動を実践する所に、中国思想の最高の徳目である中庸思想の意義が存在する。

つまり中国の伝統的政治世界における、中和思想の調和精神の尊重と中権思想のバランス精神の尊重という中国人の精神構造世界に、宮崎氏が中国思想の特質として中庸思想を指摘して、金谷氏が個人と全体の統一的理解への問題の提起をした、中国思想の特質である中庸思想の構造論的特質が存在するのである。

七 結語と展望

本稿で述べたところを簡単に要約すると、凡そ以下の様になるであろう。

一 孟子の孔子を集大成人物として高く評価する理由は、孔子は常に臨機応変に多様な政治行動ができる多重人格者のためである。孟子が両面思考「対の思想」を主張するのは、中庸思想実現の必要条件だからである。この条件が崩壊すれば、孔子を中庸思想の最高の体現者と規定することも、不可能だからである。

二 「対の思想」は、中和の中庸思想の実現⇨天地の安定と万物の育成⇨への絶対的な必要条件であった。二程子は、万物の両面的存在が、天下の大本である中庸思想が成立する条件と認識していた。朱子は、中庸の実現には「対の思想」が必要条件であり、その上に中庸が成立すると認識していた。北宋初期の皇帝と名臣は、平和時には中和の中庸政治、非常事態には中権の中庸政治と、両者を使い分けて人民の生活を豊かにして社会を安定にと導いて、北宋全盛期の時代を出現させた。

れが、中庸思想を表現し維持することの難しさなのである。

二つ目の問題として、何故に中庸思想は中国思想の精髓であるのか、つまり中国思想の最高徳目であるのか、という問題である。

宮崎氏は、「人間の自然法則たる礼が中国思想の精髓である」と言い、金谷氏は、「自己を主張しながら対立する相手と全体の中で調和する事、状況の変化の中でそれに的中した安定した調和の中を求める所に真髓がある」と述べていた。しかし礼制度は自然法則でないし、また自己を主張しながら相手と調和する事もできない。

中和の中庸思想の目的は、周囲の人々との調和であり、中権の中庸の目的は、状況に的中した時中の行動であった。では、何故にこのような目的が必要なのか。

そうしないと、一方では治国・平天下の成功を収められないし、他方では自分の生命の危険に陥るのである。このどちらの場合においても人生に失敗しないで、人生を成功に導きたければ、中和と時中という両方の心理構造を持つ必要がある。

従って中庸思想が中国思想の精髓であるという意味は、この世の一度しかない大切な人生を、如何に上手に生きて人生を成功に導いていくことが最大の関心であり、古来より中国人は伝統的な確信的信念を持っていたということである。

率直な感想としては、日本人の私には、中国人の伝統的に大事にしてきた常識の崇拜や、真ん中を大事にするバランス思考—中庸思想がそれ程大切なものか、理解するのに苦しむ。これが日本と中国との近くて遠い民族性の相違だとしか言いようがない。しかしこんな思想が延々と続く限り、最先端を追求する近代科学技術の発展や論理性追求の学問の発展には役に立たず、他人の創造した成果の二枚煎じに陥るのが関の山である。北京オリンピックや上海万博が、盗作続きと批判されているニュースでも、調和の精神が重視されている中国の一端は理解できる。

世界のトヨタの創業者である豊田佐吉翁は、常に「研究と創造に心を致し常に時流に先んずべし」を称揚していたが、中国人のこのような独特な調和やバランス思考を重視する中庸思想を尊重し続けることは、世界に先駆けて最先端を歩む科学技術の進歩や、その発展に貢献するには、世界に遅れをとるのは必然である。

しかし常識や調和やバランスの精神を重視するのは、自分の地位を守り人間を支配する政治支配の世界には必須であり、中国人は優れて政治的民族であるという

いうことだけは確かである。そしてこの中庸思想の実現方法には、両端より中央への求心性と、中央から両端への遠心性という、互いに相異なる二つの政治力学的ベクトルが働いていることを心に銘記しておく必要がある、ということである。

中庸思想は、これを政治権力構造論に展開すると、楊朱の個人主義—家族制度—私権力と、墨翟の博愛主義—国家社会—公権力とが、両極端から中央への求心性—公私の融合性と、中央から両極端への遠心性—公と私の両極端への分裂的存在という、権力構造性の相違を持ちながら、公私の両権力を五分五分に存在させて均衡ある二重権力支配構造の実現と維持を目的としていたのである。

ところで既に拙稿で紹介したが島田氏は、「儒教の古くからの「父子天合」に対して、「君臣義合」というテーゼを引用して、儒教的世界（天下）は、国家と家族（個人）の二つの中心を有する楕円形の世界である。そして修身、齐家、治国、平天下の理想は、「この楕円を楕円たらしめる理想主義で、日本の「忠孝一致」の様に、いずれか一方の中心に収斂させて円にしようとするのではない」と述べていた。

つまり島田氏の主張する儒教の世界は、家族（個人）と国家の楕円形の世界—両極端を分離的に、つまり遠心的構造において保持しようとする「対的な世界」であるという。しかし島田氏の儒教的世界は楕円形の世界という学説は、以上に述べた事でも理解できるように、実は対の機能の半面なのであり、両極端を中央に求心化しようとする—方円形化の力学的ベクトルの機能を無視した主張であったのである。

つまり儒教的理想世界は、家族（個人）と国家という二つの中心を、楕円形と方円形という全く異なる凡そ逆方向の方向性において実現しようとする相異なる二つの機能—対の機能を持っていた、とすることができであろう。

この問題を、具体的に『大学』に述べている「修身—齐家—治国—平天下」の政治理想の上に展開すると、中和の場合には、公権力と私権力がほどよく混じり合っており、「修身—齐家」の家族秩序から「治国—平天下」の国家秩序まで、直線的に貫徹して行くことを意味している。逆に中権の場合には、「修身—齐家」の家族秩序には私権力を行使して、「治国—平天下」の国家秩序には公権力を行使する、相異なる二つの権力を臨機応変に使い分けることを意味している。表面上は同じ表現に見えても、中和と中権の中庸の場合には、実現方法の内部構造が全く異なる。

制度を算出する両極端への価値基準が変化してきたということを意味している。

何故ならば、夏の貢法に存在する豊年時と凶年時の両極端における税負担の不平を是正するために殷では助法を採用して、同じ井田制度でも殷の助法は力納税であるが、周では物納税へと租税徴収方法が変化してきているからである。

殷の助法と周の轍法の適用方法の相違について、孟子は続いて滕の文公に、

「文公は孟子のこの言葉をきいて、助法を行なおうと思ひ、その後、家臣の畢戦を使いとして詳しく質問させた。孟子はいわれた。「・・・だから、どうか滕の国でも、郊外の遠く広いところでは助法によって九分の一の税を〔役人が〕取り、郊内の近く狭いところでは〔井田を区切りにくいから、助法によらないで〕、轍法によって個人個人がめいめいに十分の一の税を納めるようにしたいものです。〔なぜなら、郊内と郊外とでは、土地の広い狭い、人口の多い少ない、交通の便・不便などいろいろ事情もちがうので、税率も異にしたいのです。〕・・・」

以上が井田法のあらましです。これを適当に「うるおいや色つやをつけ」手加減をして実施するのは、もちろん文公と貴方の責任であります。「どうか、ひとつ頑張ってみてください」(六四)と述べている。

孟子は、郊外の田舎では殷の助法による力納税を、郊内の都市化した所では轍法による物納税を導入する事を薦めている。この理由は、小林氏が「内の補説で述べているように、僻地の農村と都市化した所では、土地の広狭や人口の多少や便不便等の社会状況の差異や、更には貨幣経済の浸透度の浅深の差異など、様々な側面での両極端に相当な開きが存在したためであると思われる。

以上、社会経済状況の変化により、様々な側面における両極端に大きな差異が生じて、「不偏不倚」の中庸の位置が変化してきたために、現在の時代状況にマッチした中庸思想の再編成が必要になって来ることが理解されるであろう。

ところで孔子は、同時代においても地域差により礼制が異なることについて、「先生がいわれた、「夏の礼についてわたしははなすことができるが、〔その子孫である〕杞の国では証拠がたりない。殷の礼についてもわたしは話すことができるが、〔その子孫である〕宋の国でも証拠がたりない。古記録も賢人も十分ではないからである。もし十分ならわたしもそれを証拠にできるのだが。」(六五)と、孔子

は証拠不十分で夏と殷の礼制はよく分らないと言うが、杞の国と宋の国の礼制については、継承先の王朝が異なり、礼制の内容は違っているのである。

武内氏は、「礼器篇には、「礼は時を大なりと為す、順これに次ぎ、体これに次ぎ、宜これに次ぎ、称これに次ぎ」と言っているが、ここに礼の時というのは時勢を意味し、時代とともに礼の変化することを意味し、・・・」(六六)と、言っている。

また市川氏は、「礼とは何が大切か、時が大切だ、やはり時に従うべきであろう、従うべきときは随ひ、治むべきときに治めるといふように、時に応じて事を行えば、時に随うことができる・・・」と言う程伊川の議論について、「時に随うとは、時の流れを無視しないことである」(六七)と、述べている。

礼制の変化について、時勢の変化を重要視することを意味する、と言う両氏の主張は貴重な指摘であるが、何故に時代とともに礼制は変化するのか答えていない。

これは、礼制そのもの自身が時代の流れにより変化すると言うことではなくて、礼制の内容を規定している両極端が、時代の流れにより変化するために、中庸思想の真ん中を制度化した礼制が変化せざるを得ないことを意味している。

孔子は「両端を叩いて質問に答える」と言っていたが、両端を叩き尽くすー調査し尽くすのは、時代状況によって両端が変化していくために、両端が何処にあるのか、調査し尽くさないと、現在の正確な両端が出てこないからである。

従って中庸礼制が、このように時代によっても、同時代でも地域差により、異なるために、堯や舜でも中庸思想の実現や維持が大変難しかったわけである。

この問題については、孔子が指摘し、孟子も言っており、さらには金谷氏も「状況を見定めて中を選ぶというのは大変なことでしょう」と述べている。しかし金谷氏は、状況の変化とは一体何の状況なのか、という問題については指摘していない。

それは、中庸の真ん中を規定している両極端は、絶対的な価値観でない。大小、長短、軽重、濃淡、前後等は相対的な価値観である。このために歴史的年代を経過することにより、両極端の程度が動いて已まないからである。

人間社会の様々な状況の変化を的確に見定めて、政治・経済・社会の分野において行動できた人物は歴史上に何人いたであろうか。そう考えると、人類は、失敗ばかりの歴史を際限なく繰り返してきた、と言っても過言でないような気がする、こ

祭の礼儀の厚薄の程度も勿論異なってくるのであり、貧富が異なれば贈答品たる礼物の上下の程度も異なる。社会的な価値観が変化すれば、善悪の程度も清廉や汚濁の程度も異なり、更には愛憎や美醜の程度も異なってくるであろう。政治状況が変れば、左派と右派の規定やその程度も勿論違ってくることになるであろう。

従って政治状況の変化、社会経済発展の段階、社会的評価観—この世のあらゆる側面の価値観の変化に合わせて、両極端である前後、左右、上下、軽重、濃淡等が変化して動いてくれば、それに応じて中庸思想の中心が、常に変化してくる。

このような時代状況の変化によって中庸思想の「中」が変化してくるのは、両極端を混合した中和の中庸思想でも、また両極端を臨機応変に飛び移り両極端の重さの水平バランスを執る中庸思想でも同様である。

だから当然、今までは真ん中にいると思っても、時代状況の変化により、現在の真ん中である濃度や軽重等の中心の位置がずれてきて、左右、前後、上下の空間的世界において、どちらか一方に偏って来るのである。

時代状況の変化により三次元的世界の空間的世界が、デフォルメ—変形を受けざるを得ず、その結果として真ん中が、薄くなったり濃くなったりして、中和状態が変化してきたり、両極端の水平バランスの度合いが異なってくる、真ん中の位置がずれてどちらか一方に傾いていくのであり、本当の真ん中でなくなってくる。

従って常に時代状況を見据えて、現在の両極端の位置を勘案しながら、「不偏不倚」の中庸の「中」を再編成する必要が出てくるのである。

そこで時代状況の変化に応じて両極端の状況が変動して、中庸Ⅱ礼制度が変化して再編成される過程について、ここで二—三の事例を紹介して考えてみたい。

一つ目は、前引したが孔子は時代の変遷による各王朝の礼制の変化について、「子夏が「十代さきの王朝のことが分りましようか。」とおたずねした。先生はいわれた。「殷では〔その前の王朝〕夏の諸制度をうけついでいて廃止したり加えたりしたあとがよく分る。周でも殷の諸制度をうけついでいて、廃止したり加えたりしたあとがよく分る。〔だから〕もし周のあとを継ぐものがあれば、たとい百代さきでも分るわけだ。」（六二）と、述べている。

礼制度は夏—殷—周の各王朝において、異なっているものであり、中和の中庸Ⅱ礼

制度の再編方法は、先の王朝の礼制度を基礎にして、増やしたり削ったりして礼制度を作り直しており、夏、殷、周では増損されて異なる、と言う。

つまり夏↓殷↓周の礼制度が、夏の礼制を基準にした殷においては増損されて礼制が変わり、殷の礼制を基準にした周においては増損されて礼制が変化したという。このことは、礼制Ⅱ中庸を決定する両極端への価値基準が、時代の変遷により変化してきた結果、生じてきた礼制の変更であったということである。

二つ目は、孟子は、夏、殷、周の税制度の変遷した過程について、

「さてここで、三代の租税の制度について述べて見ますと」、夏の時代には一夫に田地五十畝ずつ与えて貢という税法を行い、殷の時代には七十畝ずつ与えて助という税法を行い、また周の時代になると百畝ずつ与えて徹という税法を行いました。このように夏、殷、周の三代には貢・助・徹とそれぞれ名まえはちがっておりますが、その内容はみな同じで十分の一を租税として取ったのです。今、徹と申しましたが、徹とは徹（撤）すなわち取ると言う意味で、その年の実際の収穫物に応じて取るから、かく名づけたのです。つぎに助とは籍つまり借りると言う意味で、八戸の人の労力を借りて公田を耕す〔そしてそれを税として納めさせる〕ところから、かく名づけたものです。むかしの賢人竜子は『土地を治めるには、助法より善いものはないし、貢法よりも悪いものはない』といいましたが、なるほど、貢法は数年間の収穫高を計りくらべて、「その平均をだして」毎年収入とときめ、その十分の一を貢租（租税）としますので、豊作の年には収穫が多くて穀物がちらかり捨てられるほどがから、もともとたくさん税をとつても決して虐政とはならぬのに、少なすぎる結果となり、また一方凶作の年には、いくら肥料をやつて努力しても収穫は少ないのに、容赦かんばなくきまらった税額だけは全部取りたてますから、人民は苦しみます。（これが貢法の欠点です）」（六三）と、述べている。

夏は三年間の平均を割り出して毎年の収入として、殷は八戸で公田を耕して、周は毎年の収穫量を基準にして、十分の一の租税Ⅱ軽税と重税の真ん中の租税Ⅱ中庸税を徴収したと言う。夏・殷・周の三代においても、十分の一の租税徴収の土地制度基準が変わって来ているのである。

このことは、夏↓殷↓周への王朝交代に伴い、経済社会情勢の変化により中庸税

え直しを』と、朝な夕なに自分はそれをねがいのぞんでおるのだ。・・・』と孟子は「自分の悲壮な心境を打ち明けて」いわれた。尹士は人づてにこの話をきいて、「ああ、士はほんとうに小人であった。「そうとも知らずに、とんだことを言ってしまった。まことに申しわけない。」と深く恥じたということである。」(五七)。

君主の能否を的確に見抜いて、テキパキと去就する臨機応変に豹変する政治的態度は、現実には例外的である。君主には長短の両面があり、極端な性格を持つ人ではない。それ故にその能否の有無を判断する事は難しく、曖昧な去就態度を取らざるを得ないことが、現実には多いと思われる。

孟子が、齊王には治国・平天下の理想実現は無理だと思い、斉を去りながら、また思い直して未練がましく踏みとどまり、また諦め直して去る。この事情が示しているように、煮え切らない態度により去就を繰り返すのは、君主の能否の水平バランスが少し崩れている曖昧の時には、至極、当り前の行為である。行ったり来たり彷徨して去就の水平バランスを執るのは、現実的なこの世における臨機応変に中を執る中庸の行動形式であったと思われる。

従って中和の中庸の政治力学は、両極端の欠点を批判して、両極端の濃度を無くして中央に引き寄せようとする求心性を志向しているのに反して、中庸の中庸政治力学は、両極端の長所を是認して、その長所を生かすために、中央から遠くに存在する両極端を相互に飛び移って両極端を移行しようとする遠心性を志向している。

孔子は中庸思想の持ち主であった事は累説したが、その前提の両極端について、「先生がいわれた。「わたしはもの知りだろうか。もの知りではない。つまらない男でも、まじめな態度でやってきてわたくしに質問するならば、わたくしはそのすみずみまでたたいて(原文は「我叩其両端而竭焉」)、十分に答えてやるまでだ」(五八)と、述べている。孔子ほどの博学な人物でも、自分は物知りでないといい、だから誰であろうと質問に来たら、徹底的に誠実を尽して物事の両端を叩き尽して返事をすると言う。両端を叩き尽くさないと、真実の中庸が生まれてこないからである。このような中庸思想を実現する方法論が、表裏、前後、上下のとの関係について、絶えず両面を同時に見る思考―「対の思想」を生んだ原因だったのである。

ところで宮崎氏が述べていた「欠点のない普通人―中庸人」などは、この世には

存在しようはなく、中庸思想は、中国知識人の最終到着点であり、儒教の最高の理想なのである。孟子は、以下の様に述べている。

「かの堯・舜ほどの知者でも、なおかつすべての物事をあまねく知ることができなかったのは、先務を急としてつとめたからであり、堯・舜ほどの仁者でも、なおかつ天下の人間をあまねく愛したわけではないのは、賢者を親しみ愛することを急務としたからである。・・・」(五九)と、堯や舜の様な聖人でも何処かに抜けている所があったと言う。だからそれ以下の人間には尚更に中庸思想の実現は困難な事であったに違いない。『中庸』には、以下の様な孔子の言葉の記述がある。

「先生はいわれた。「・・・人びとはみな「自分は知者だ」といつているが、中庸(がよいとわかってそれ)を選び出したとしても、それを守り続けることはただの一月でさえできないものである。『どうして、それで知者だといえようか。』(六〇)と、知者だと自画自賛する人でも、一月もたないというのである。また、

「先生はいわれた。「天下や国や家(をうまく治めるのは汝であるが、それ)でさえ公平に治めることはできる。高い爵位や厚い俸禄(を断るのも難事であるが、それ)でさえ辞退することはできる。白刃(をふみ破って敵陣を攻めるのも難事であるが、それ)でさえふみ破ることはできる。だが、中庸(を選びとって実際に守りつづけるの)は、なかなかできないことだ」(六一)と、この世の難事は解決することは可能であるが、中庸を守ることが一番難しい事だということである。

中庸思想は、中庸を体現したと、孟子に言われている程の堯や舜のような聖人であっても、その実現と維持が困難な最高のモラルであり、中国知識人の理想とする永遠のテーマであったのである。

ここで中庸思想が、身動きの取れない永久に固定したものでなくて、特殊歴史的规定を受けた、弾力性のある思想的産物であることを指摘して、中庸思想の実現が困難である理由について、締め括っておきたい。

何故に中庸思想が、歴史的规定を受けているかといえ、中庸は両極端の真ん中を採る思想だからである。両極端についての大小、長短、重量、濃度の程度の差異は、歴史的な時代状況の変化により動き、変遷するということである。

社会経済が発展すれば、両極端である貧富の程度も違ってくるのであり、冠婚葬

↓孟子（戦国）↓孔子思（戦国『中庸』作者）↓鄭玄（漢代『中庸』古注）↓戴顒（南北朝・宋『礼記中庸伝』）↓李翱（唐代『中庸説』）↓二程（北宋）↓朱子（南宋）↓毛沢東・華国鋒（現代）—李年古（現代）と、古代より現代に至るまで、中国の全歴史を貫いて長く生きてきた思想であり、中国民族において、最も伝統的で最も重要な中核思想なのであり、まさに中国思想の精髓といえるであろう（五四）。

六 中庸思想の政治構造的特質

「対の思想」が生まれてきた歴史的背景として、古代↓唐宋代↓現代の中庸思想の具体的事例を述べてきた。ここで対の思想と中庸思想の関係の結末として、中庸思想の持つ重要な政治構造的的特質について論及しておきたい。孔子は、「子の曰わく、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民鮮なきこと久し」（五五）と述べて、中庸の徳は最高の徳目であると絶賛した後に、民衆に中庸の徳が少なくなつてから久しい、と嘆いている。では、何故に中庸が中国思想の最高の徳目なのであるのか、また何故に庶民には実践が困難な思想なのであるのだろうか。

中国人の古代から現代に至るまで、延々と脳裏の中心である脳幹にしっかりと染みつけていたのは、無前提的ではあるけれども、常識の崇拜⇨極端に偏らない真ん中⇨中庸思想の堅持の精神であった。本稿の各節で述べてきたが、中庸思想には、一つには両極を混合する化学的思考方法⇨中和⇨調和の中庸思想と、もう一つは臨機応変に両極端を飛び移りて水平バランスを執る思考方法⇨中権⇨力学的均衡の中庸思想という、全く相異なる中庸思想の実現方法が存在した。

ところで問題なのは、中和のほど良い濃度や、中権の均衡状態が、経済社会状態の変動によって中庸の状態が崩れてきて、これを再編成する必要に迫られた時に、どのように立て直して真の中庸の状態に引き戻すかという、解決方法論である。

「過ぎたるは及ばざるが如し」に代表される両極端の否定の上に調和を実現する中和の中庸の場合においては、具体的には次のように解決する必要がある。

孔子は、時代の変遷による夏—殷—周の各王朝の礼制について、
「子夏が「十代さきの王朝のことが分りましようか。」とおたずねした。先生は

いわれた。「殷では「その前の王朝」夏の諸制度をうけついでいて廃止したり加えたりしたあとがよく分る。周でも殷の諸制度をうけついでいて、廃止したり加えたさきでも分るわけだ。」（五六）と、述べている。

礼制度は、夏—殷—周の各王朝において、各々異なっているのであるが、先朝の礼制を基礎にして、不足していれば増加して真の中和状態に引き戻したりしたり、逆に多すぎれば削り取って真の中和状態に引き戻している。中和⇨礼制の再編方法の具体的実態は、先朝の基本礼制を基礎にして、これに増加させたり減損させたりして、現実の時代状況に適応させるように、礼制を作り直したのである。

臨機応変に豹変して両極端を飛び移り真ん中を執る中庸の場合は、中和状態の解決方法論とは、凡そ逆方向である。孟子は齊の宣王の下を去る経緯について、門人の高子に以下のように述べている。

「孟子は遂に齊の国を去られた。「齊の家臣で」尹士というものが、ある人に向かって「孟子は賢人と聞いていたが、・・・千里もの遠方からわざわざやってきて、王と意見があわないから去るといふのに、昼に三日も泊つてからやっと出発するのは、なんとというぐずぐずした未練がましきなのだろう。士にはほとんど気に入らないことばかりだ。」と行って非難した。孟子の門人の高子がこの悪口を聞いて孟子に知らせると、「・・・齊王にお目にかかったのは、どうかして道を行いたいと願えばこそであった。意見があわずに去るのは、決して自分の希望ではない。万已むをえなかったからだ。だから、自分は昼に三日も滞在してからたち去つたが、自分としてはそれでもなお早すぎたかと思つているぐらいだ。『王様よ、どうかお考え直しのほどを。もしもそうなら、きつと自分を呼び戻すにちがいない』と心に念じていたからである。しかるに、王様は昼をでてからも、自分を呼び返そうとはされなかつた、そこで、自分はスツカリ諦めてさっぱりとした気持ちで国に帰る決心がついた。とはいいいものの、いまでもなお王様を見限りはしない。「今の諸侯のなかでは」、王様はやはり「善い立派なお方で」ともどもに仁政を行うことができるお方だ。王様がもしも自分を挙げ用いてくだされば、ただ齊一国の人民が安らかになるばかりではない。天下の人民があげて安らかなになるのだ。『王様よ、どうかお考

党の指導権をいずれの側にも譲るのを好まなかった。だからこそ、いずれの側にも属さない人物を首相に指名したのである。華国鋒について知る人はごく限られていた。……抗日戦争の勃発後、一九三八年の革命運動に参加したひとりである。汪東興はこの選択に満足した。経験豊かな指導者であり、ひかえめなうえに親しみが持てた。……(五一)と、述べている。華国鋒は、極端な思想を主張しないし、激しい気性の持ち主でもなく、そして控え目で誰でも親しめる、中和の中庸思想の精神を持つ人物であった。毛沢東は初期から華国鋒の中庸の人格を見抜いていた。

この地方幹部から一気に飛び級を重ねた党副主席への華国鋒の大抜擢の大報道には、日本にいた誰もが、ビックリする大ニュースであり、本当に意表を突く、毛沢東の人事政策であった。李氏は、毛沢東の華国鋒評価について、

「十四年後、毛から首相を指名される華国鋒は、……林彪にくらべるとより誠実であったし、目立つ追従者ではなかったとしても、毛沢東への批判を拒否して主席の評価を勝ちとった。……「華国鋒は正直な男だ」と会議のあとで毛は私に言った。「あの男はわが国家的な指導者の多くよりずっとよかったですよ。……(五二)と、華国鋒の誠実で正直な中庸的な性格を、以前より見抜いていたと述べている。

華国鋒は七千人大会で、毛沢東の大躍進の失敗による大飢饉を指摘しながら、「農地請負制」の導入を否定して、社会主義の道の堅持を主張して毛沢東を支持した。これについて毛沢東は、「正直な男だ」と批評したのである。また華国鋒も、一方では毛沢東の政策の失敗を批判しながら、他方では毛沢東を支持する、両面思考―「対の思想」ができる人物なのであった。

以上に述べたように、毛沢東は、江青らの極左派の専権にブレーキをかけるために、文革後期に右派の鄧小平を復活させた。そして左右両派の政治対立を利用して、両派の勢力バランスの上に、党主席の権力安定を企図する中庸思想の持ち主であった。毛沢東は、自己の後任に両派のいずれにも属さぬ中庸の人物である華国鋒を抜擢したのも、毛沢東が中庸思想の持ち主である有力な証拠である。

現代中国においては、敵と味方の両面を見る「対の思想」を前提に中庸思想を展開するのは、政治の世界だけではない。あらゆる中国人に当てはまる行動原理なのである。李年古氏は、「和気生財」の商売原理と「財は災にもなる」において、

「商売の現場は一種の「戦い」であり、「戦場」であるとはよく言われている。ただし、中国人の商人にとつて、商売の成敗を左右するのは何と云っても人間関係だ。……だから、商売の世界における最高の法則は「和気生財」である。……「和」を重んじれば、きつと双方が儲かることになる。人間関係の「調和」は、財を成す最速の道だと見なされている。

この熟語の中には、もう一つ隠された意味がある。……交渉が決裂したとしても、決して双方が築いた「関係」を壊してはいけないということだ。あるいは、決して相手の面子を潰してはいけないとも言える。……なぜ、中国人は商売上のライバルに対しても「和気」を前提として競争を展開しようとしているのだろうか。儒教の教えである「中庸」の思想に深く影響されていることは無視できない。儒教の中庸思想では、人間の行動準則を「不偏不倚」と標榜している。人間関係を保つための最も良い方法は、たとえ相手と別れても最後まで微笑みを見せることだとされている。商売の世界では、常に勝つことなど誰も保証できない。負かした相手もいつか自分を潰す王者になるかもしれない。その万一に備えて、たとえ自分が強い立場にある時でも、やはり「和気」で接した方が得だ。次のように中国人を忠告する熟語もある。「万事留一線、日後好相見」(後で会っても困らないように、何事も相手に一線の逃げ道を残しておこう)。(五三)と、述べている。

李氏は、商売相手―売買と言う両極端にいる人間が、双方が極端に偏らずに、お互いに寄り添い、和合して人間関係を最善にしておくこと―「和気」||「調和」の精神で人間関係を保持していくことが、金儲けに必須という。

李氏が指摘している「和気生財」の格言が、何時ごろから生まれてきたのか、不明であるが、「和気致祥」(『漢書』劉向伝)の事例が、『字源』(簡野道明編集 角川書店)に引用されている。また『詩経』には、中和の中庸について、「剛ならず柔ならず、政を敷いて優優たれば、百禄是に適あつまる」(二二)と、述べられているように、かなり古くからの格言であることには、間違いない。このように儒教の中庸の精神が商売の世界まで貫徹している、両面思考―「対の思考」精神の上部に、儒教の中庸思想が強く支配していると言える。

中庸思想は、堯・舜・禹(古代聖王) ↓ 『詩経』(西周・春秋) ↓ 孔子(春秋)

公正な立場にある、という人物がもっとも望ましいことはいまでもない。……」（四七）言うように、調停者は双方の面子を立てる公正な中庸の人である。交渉により双方の問題を解決することが一般的な中国では、調停役として公平中立的な中庸人の存在することが必要不可欠なのである。

次に文革中における毛沢東の「対の思想」と、彼の中庸の精神を検討してみたい。毛沢東は中立的な政治権力のバランスを維持する感覚の持ち主であった。江青らの過激化の全権力掌握の防止のために、党組織を再建できる力量ある走資派の右派・鄧小平を復活させて、左派と右派の両極端の政治的バランスの上に、毛沢東は政治的地位の安定を図ったのである。李氏は、この過程について詳細に記録している。

「主席と首相との間がこじれてきて、江青一派が全面的とっていいほどの支配権を確立したかに思われると、毛沢東は両派のバランス回復に乗り出した。一九七三年三月、毛は鄧小平を前任の副首相に復帰させるように勧告し、政治局もそれに同意する。鄧小平の影響力は増大していった。さらに毛沢東は文化大革命中、江青派が右派のレットテルをはって追放した多くの古参幹部を赦免し続ける……」（四八）と、右派復活への原因を述べる。

さらに「新たに選ばれた中央委員会には文化大革命中に活動した多くの造反派が入っていた。しかし驚いたことに、文革の初期に追放された多くの古参黨員も顔をそろえていたのだった。……大会の閉幕時になると、江青ら中央文革小組の左派はもはや開幕時ほどの勢いを持たなくなっていた。毛沢東はちゃんと妻の権力に歯止めをかけたのである。……」（四八）と言う。

鄧小平等の右派復活の理由は、江青らの極左派により党中央の共産党組織が壊滅状態になり、増大した極左派の江青らの権力抑制のためである。李氏は、毛沢東の鄧小平復活の意図について、

「鄧小平の復帰は毛沢東のかかる戦略の一環であった。鄧小平の行政能力なら、党中央にも権力をとりもどせるであろう。「私は有能な指導者を現場に呼び戻すことにする」と毛沢東は各司令員との会議でのべた。……」（四八）と、言うように、党中央主席である毛沢東の党中央の権力組織の回復にあった。

李氏は、鄧小平の復活の契機について、以下の様に毛沢東の発言を記録している。

「あの男には決断力がある。これまでに七十パーセントの良いことをし、三十パーセントの良くないことをした。しかし私が呼びかえした男は諸君の古い上司であり、政治局も彼を呼び返したのである。私だけがそうしたのではない」（四九）

毛沢東には、鄧小平に対する良い点と悪い点を見る両面思考——「対の思考」があり、追放においては悪い面を見て、復活においては鄧小平の良い点を強調したのである。この両面を見る視点が、同じ右派の劉少奇についてはなく、党籍剥奪による永久追放と言う処分とは、根本的に対応が異なっていた。

毛沢東の鄧小平の評価については、李氏は劉少奇のそれと比較して、

「毛沢東は鄧小平に対し劉少奇に比べていたほどの反感はもっていなかった。一九六八年十月の第八期十二期中全会で劉少奇が国家主席職を剥奪されたうえからも追放されたとき、林彪も江青も鄧小平の追放をつよく求めたのであった。だが、毛沢東は拒否した。鄧小平は有能な行政官、良い共産黨員であり、マルクス・レーニン主義の信奉者だとした。まだ矯正できる人材と思ったわけである。いつの日か鄧小平をつかえるようになるかもしれないのだ。」（五〇）と、述べている。

毛沢東は、鄧小平を国家の要職から追放しながら党籍を剥奪しなかったのは、鄧小平を劉少奇ほど毛嫌いしておらず、鄧小平の悪い面と良い面の両方を同時に見る、両面思考ができたからである。毛沢東は、林彪や江青と違い、一極端思想への偏向を嫌う、「対の思想」の持ち主であった。この故に自己権力が不安定化するや、鄧小平を復活させて、再び共産党内での自己権力の安定化を画策したのである。

この様な毛沢東の中庸思想は、彼の後継者を選ぶ後任人事においてもよく現れている。華国鋒の人格とその抜擢について李氏は、

「一方、周恩来の後任がだれになるか人々は不安がった。江青一派が優勢になり、鄧小平が攻撃にさらされている状況下で、多くの人々は江青派の王洪文が新首相に指名されるだろうと推測した。ところが驚いたことに、毛沢東は華国鋒を首相代理兼党第一副主席に推薦したのである。……多くの人々とおなじく、私も意表をつかれた。しかし私にはこの指名が賢明な選択だと思われた。汪東興も同感であった。主席の頭脳はいいまなお健在であった。党最高指導部は古参の長征組幹部（経歴主義者たちと主席が教条主義と批判した若い世代の過激派とに分裂していた。毛沢東は

国は、蘇軾が歐陽脩の行状の序文において、以下のように記している。

「宋興りて七十余年、民、兵を知らず。富ましてこれを教えること、天聖・景祐に至りてきわまれり。しこうして斯文、ついに古に愧ずることあり。士もまた固陋にして旧を守り、論卑しく気弱し。歐陽子出でてより、天下争いてみずから濯磨し、経に通じ古を学ぶを以て高しとなし、時を救いて道を行を以て賢となし、顔を犯し諫を納るるを以て忠となし、長育成就し、嘉祐の末に至り、号して多子と称す。欧陽子の功多しとなす」と。(四二)

真宗代から仁宗代にかけて、北宋は全盛期を向かうに至るのである。孔子は、「先生が衛の国に行かれたとき、冉有が御者であった。先生が「衛の人口は」多いね。」といわれたので、冉有は「多くなったら、さらに何をしましたものでしょう。」という、「富ませよう」といわれた。」(四三)と、述べている。

人民を豊かにしたら次は人民を善に教化すると、孔子は冉有に述べているが、古代の孔子が再生してきたような儒教思想による政治思想の実戦の結果、その面目躍如たる内外の平和と人民生活の安定の成果が、北宋代中期に出現したのである。

以上述べたように、北宋全盛期を出現させたのは、太祖以下の名皇帝や、それを補佐する名臣達の中庸政治の賜物である。全ての名臣達は、極端は不可と云うのであり、両極端への両面思考―対の思想の前提には中庸思想を重視する精神が存在するのである。従って対の思想が生まれてきた歴史的背景として、その前提には両極端に偏らない中庸思想が存在していた、と云うことが理解できるであろう。

四 対の思想と現代の中庸思想

最初に両極端の真ん中に立ち、喧嘩の仲裁の中を採る中庸思想を紹介したい。林語堂氏は中庸の道において、西洋と中国の対立物の判断方法の相違について、

「西洋では学問的に対立する場合、双方とも自己の博学な知識と偉大なる愚昧さをもって自分こそ正しいことを頑なに証明しようとするが、・・・典型的な中国型判断は、「甲は正確であるが、乙も間違っていない」というものである。」(四四)と述べており、中国では、どちらか一方に加担せずに、対立する両者の言い分を認

めて、その真ん中を執る臨機応変な中庸の思考とするという。

このことを例証するために、毛沢東の喧嘩の仲裁方法を紹介したい。江青と李氏と看護婦らの口論に毛沢東は、

「江青は理不尽だ」と毛はついに言った。「君は何もかも話してくれた。それでいい。この一件は口外するな。私が江青に話そう。しかしその間、二、三日はここから離れていてはどうか。絶対に姿を見せるな。あれの面子をたてるようなことをしなくちゃなるまい。看護婦たちには、江青を恐れるなど言いたまえ。ただの張り子の虎なのだから。」(四五)と、述べている。

毛沢東は、李氏と江青の不仲の仲裁をして、李氏の面前では江青の欠点を批判して李氏側の肩を持ち、他方で江青に対しては彼女の面子を立てたのである。両者の言い分を認めて、毛沢東はその中間―中庸の立場を取ったのである。

江青の入浴問題を解決するために、新たに寝室にシャワー設備を香港で購入して取り付ける必要が生じたが、この問題を看護婦に責任を転嫁した江青に腹を立てた李氏は、毛沢東に解決を頼みに行くと、江青も腹を立てて毛沢東の下に駆け込んだのである。この両者の口論について、問題の解決を迫られた毛沢東は、

「主席はわたしの前では江青を批判し、看護婦たちをほめたが、妻との話し合いでは看護婦の側を批判したのである。が、どうやら私と仲なおりするようにと妻にすすめたらしかった。」(四六)と、毛沢東は、李氏には江青を批判して、江青には看護婦達を批判したのである。喧嘩両成敗であり、どちらにも味方せずに、両者の言い分の面子を立てて、臨機応変にその中間―中庸を執ったのである。

喧嘩―両者の対立について毛沢東は、対立する両方の面子を考えて、両者を和解させるための解決策として両面思考―「対の思想」をしたのである。従って毛沢東は、部下の喧嘩の仲裁に対して、両者の言い分―面子を認める「対の思想」を採用して、両方が正しいと云う中庸の立場を執ったのである。現代中国においては、毛沢東のような政治家だけが、このような調停役を買って出たのではない。

李年古氏も、商売の交渉において、双方の論争が激化して収拾がつかなくなった時には、解決策として、「調停役」によって双方を立てる折衷案が、一般的な中国人の考えであるという。「調停役は権威的な上位の位置にあり、かつ双方にとって

った事を大いに喜び、その原因について楽正子の一番の長所は善いことが好きな善人なのだと言っていたが、王旦の人格は、孟子の弟子の楽正子そのものであった。

難地を称された四川の平定で、人民に愛され名声を博した、太宗・真宗朝の名臣である張詠は、転運使の黄震が才能ある人物を多く抜擢している人事に注意して、

「公、勸めて曰く、大凡、人を挙ぐるには、すべからず退を好むものを挙げべし。

退を好む者は廉謹にして恥を知る。もしこれを挙げれば、志節いよいよ堅くして、敗事あること少なからん。奔競の者を挙ぐることもなけれ。奔競するものは能く曲げて諂媚をこととし、人の己を知らんことを求む。もしこれを挙げれば、必ず能く才に矜り利を好み、累ひ挙官に及ぶこと、もとより少なからん。その人すでに奔競を解すれば、また何ぞ他を挙ぐるをもちひん」と。(三六)と、述べている。

張詠は、退静の人物―ゆったりとして物静かで礼讓のある人物、つまり周囲の人々と調和できる中和の中庸の人物を抜擢すれば、羞恥心ありて、事においてやり損なうことが少ないが、奇抜な才能を見せびらかす奔競の人物を抜擢すれば、自己の才能を誇り、推薦者にまで禍が及ぶと、忠告するのである。

このような張詠の主張は、まるで孔子が、『中庸』において、

「子曰く、隠れたることを索め怪しきお行は、後世に述ること有らんも、吾はなさず。君子は道に遵いて行は。半塗にして廢するも、吾れは已むこと能わず。君子は中庸に依る。・・・」(三七)と述べているように、奇抜なことを行わない中庸の道を行くのが私の信条である、と孔子が言っているのと、同様な事を言うのである。

しかし張詠は、また逆の性格を持つ中庸政治を、赴任地の四川で実施している。「蘇軾、公の帖の後に書いていなく、「寛を以て愛を得るは、愛、一時に止まる。

敵を以て畏を得るは、畏、力の及ぶところに止まる。故に寛にして畏れられ、敵にして愛せらるるは、皆聖賢の難事にして、及ぶところのもの遠し。張忠定公の蜀を治るや、法を用ひるの敵なること諸葛孔明に似たり。諸葛孔明と公と、遺愛、みな今に至る。けだし、尸してこれを祝し、社してこれを稷するなり。」と。(三八)。

張詠は、民衆に寛大さと厳格さという、凡そ逆な両極端の政策を、盗賊が跋扈して難地の非常事態の状況にあった北宋初期の四川に、臨機応変に実施して民に愛されたのである。民衆に寛と厳という。凡そ逆な両極端の政策を実施したこと

は、臨機応変＝権ある中庸政治を実施して四川を統治したことである。

仁宗朝の名宰相・杜衍の説く中庸政治の精神は、以下のような内容である。

「公かつて門生にいて曰く、「およそ士君子、ことを作し己を行は、まさに中道を履むべし。宜しく矯飾すべからず。矯飾して実にするときは、すなわち偽に近し」と。(三九)とあり、君子は中庸の道を歩むこと、うわべをつくり飾るなと、門生に教えているのであり、門下生に言い渡す治世の要点は、

「門生、県令となるあり。公、これを戒めて曰く、「子の才器は、一県令は施すに足らざるなり。しかれども切にまさに韜晦して、圭角を露すことなかるべし。方を毀り瓦合して、中に合せんことを求めて可なり。しからずんば、ことに益なくして、いたずらに禍を取らんのみ」と。」と、注意をしている。(四〇)

「韜晦して圭角を露すなけれ」―自己の才能を周囲の人々に見せびらかして批判を浴びるな、角を無くして円満な人格に努め、周囲の人々と協調・調和して、中和の精神を固く守りて、禍を自ら招くなど、過福は、中和の中庸を實踐するか否かに、係っている、と、忠告するのである。

この杜衍の忠告は、孟子がかつての弟子である盆成括が斉に仕えて、自己の小才を頼みにして政治において振りかざした故に、周囲の人々に憎まれて殺害された結果を弟子に伝えて注意したのと、同様な忠告であったのである。

以上述べてきたように、北宋初期の太祖・太宗・真宗、仁宗朝にわたる時代には、内外の平和と混乱の環境の中で、皇帝やそれを補佐する宰相や副宰相達は、中和の中庸思想と、これと逆な中権の中庸思想というような、対の思想を持つ中庸思想の持ち主であったから、その政治方針も二つの中庸の政治姿勢で臨んだのであった。

だから一方では、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中という。発して皆な節に中る。これを和と謂う。中なるものは天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地位し、万物育す。」(四一)とあるように、万物が育成して、経済社会の順調な発展と国民生活の一層の発展を実現するに至るのである。

そして他方では、逆に社会が混乱した難地の地方においては、張詠のように臨機応変な中権の中庸を実施して地域社会を安定に導いたのである、

このような両面的性格のある中庸政治を実施した結果については、北宋時代の中

説明しなければ物は物でない。事は終始ありて初めて完成する。同異・有無の相感が必要なければ完成しない。完成しなければ物は物でない。故に屈伸が感じあつて利が生じる」と、言う。張横渠の主張を市川氏は、「同異・屈伸・終始というそれぞれ相反的性格を持つ事象によって明らかにされなければ、物は物としての意義を持たず、同異・有無というそれぞれ感応しあう事象によらなければ、事は完成しないと言っているのである」(三二)と、解説している。

張横渠にあつては、孤立物は存在せず、相反する事象が相対相感して、物は実在して完成する。このことは、「対の思想」のみでは、万物の完成はあり得ないと言ふことである。万物が相互に感応しあつて水平バランスを実現して、中庸思想が成立する。従つて対的存在の感応が前提にあり、ここから必然的な結果として成立してくる中庸の実現により、万物が育成して、物が完成するのである。

中国人の認識にある、対立物の同時存在による相対相感により、「中庸思想が生まれて」物の完成があるという潜在意識が、漢魏に生まれ六朝時代に盛行した四六駢儷体、唐代の近体詩に見られる対句、五代に始まる対聯(三三)、書道や水墨画の虚と実(三三)など、対比的バランスの調和のとれた作品への美意識などを生み出す要因であると言えるのであろう。

対句、対聯などは、互いに対立する二聯があつて、初めて詩句の「不偏不倚」が成立するのであり、ここに詩句の完成美を見る。相対立する二聯が、お互いに対立に終始すれば物は完成しない。対立物がお互いに感応し合うことにより一対となり、初めて一つの完成物である「不偏不倚」の中庸の実現に繋がる。

相反する両極端を完全に生かして、つまり肯定した上で臨機応変に両極を飛び移り中を執る、臨機応変な中権の中庸思想の文学上の現れである。また実があつて虚があるのであり、虚があつて実があるのであるから、書や水墨画の虚と実の関係も、対句や対聯と同じ延長線上にある、相対相感の中庸思想の美学への現れである。

(四)北宋中期の政治と中庸思想

太宗・真宗の二代に仕えた名宰相・呂蒙正と北辺の夷狄に詳しい副宰相・樞密副使の趙昌言との対話の中には、

「淳化三年、太宗、宰相にいて曰く、「国を治るの道は、寛猛中を得るにあり。

寛なる時はすなわち政令成らず。猛るときはすなわち民手足を措くところなし。天下を有つものは、これを敬まざるべけんや」と。趙昌言曰く、「今、朝廷無事にして、辺境諱寧なり、まさに力めて好事を行ふの時にあたると。上喜んで曰く、「朕、終日卿とこのことを論ず。なんぞ天下の治まらざるを愁えん。いやしくも天下の民に親しむの官、みなかくの如く心を留めれば、すなわち刑清く訴息まん」と。」(三四)と、述べられている。

政治の要領は、寛大であつても上手くいかず、猛烈であつても民衆を上手く治めていけないのであり、その真ん中である中庸政治こそ、天下を有つ皇帝たる者には重要なのだ、と太宗は臣下に言う。これに趙昌言は、今は辺境も落ち着き天下太平になり、中庸政治を実施する絶好の機会であると答えている。太宗は、親民官が中庸の政治に心掛ければ、天下は太平になり、社会も安定する、と言っているのである。

両極端の中を採る中和の中庸思想に基づく政治が、天下太平の世において如何に大切な政治上の精神なのか、両者の会話の中においてよく物語られている。真宗代の名宰相・王旦の人格をよく物語るエピソードが資料に残されている。

「王大尉、寇萊公を薦めて相となす。萊公、しばしば大尉を上の前に短りて、大尉専らその長を称す。上、一日大尉にひて曰く、「卿はその美を称すといえども、彼は専ら卿の悪を談ず」と。大尉曰く、「理、もとよりまさにしかるべし。臣、相位にあること久しく、政事の闕失必ず多からん。準、陛下に対して隠すところなく、ますますその忠直を見る。これ臣が準を重んずるゆえなり」と。上、これによりて、ますます大尉を賢なりとす。」(三五)と、王旦は述べている。

自分の人格の欠点を批判されては、批判する人物を煙たがり、高官より左遷するような極端な行動に出るのが人の情であろう。しかし王旦ほどの人格者になると、その逆であつた。宰相の位に永くいれば、それだけ過失も多くなるのが普通であり、完全無欠という訳にはいかない。自分の政治的欠点を素直に認めて、自分の政治的欠点を批判ばかりする寇準を忠直として宰相に抜擢したのである。

極端に偏らない「不偏不倚」を中庸というが、王旦は極端に走らない礼節ある人物であり、他人の善行を素直に認めて、周囲の人々と調和できる中庸の人物であつた。これが真宗に賢人と称される所以なのである。孟子が弟子の樂正子が齊の宰相にな

不知手之舞之、足之踏之」(二二一)と、世の中の万物はすべて自然と対の形になっていることを発見して、大変喜んだという(二二二)。この理由は、何故であろうか。

宋代の儒者が、万物の独立的な存在を否定して、対立物の存在―対的なバランスを強調する(二二三)。これは、朱子学のテキストが『中庸』を重要視している事であるように、宋学を中心テーマが中庸思想であり、万物の中に見られる自然的な対的存在が、不偏不倚の中庸思想が成立する絶対的必要条件であるからである。

程伊川は、「天地や陰陽の場合、その形は相反的であるが、必ず持ちあつて作用をなす」(二二四)と、対立物は相互に感応作用をしよう。また「独陰は生ぜず、独陽は生ぜず」(二二五)と、単独物では万物が生育しないと、述べている。

中庸思想の説明において、「対の思想」の存在の強調する根本的背景には、「対の思想」と中庸思想は密接な相関関係にあるからである。宇野氏は、『宋朱熹章句』の『中庸』に、「二程の中庸の規定として、「子程子曰く、偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」(二二六)と述べていることを、指摘していた。

二程によれば、「不偏不倚」という極端に偏っていないのが中であり、中庸は天下の正道・定理なのである。天下の正道・定理という儒教の最高の徳目である中庸思想が成立するためには、「対の思想」が必要不可欠なのであり、どうしても存在しなければならぬ必要条件なのである。だから程明道が、対の存在を自然界に発見して、世も寝られないほど悦んだはずである。

ところで程明道が、中庸思想を天下の正道・定理とするのは、中和の説明には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中という。発して皆な節に中る。これを和と謂う。中なるものは天下の大本なり。和なる者は天下の達道なり。中和を致して、天地が正しく存在して運航するのであり、万物が育成するからである。

「対の思想」は、中庸思想の実現―天地の安定と万物の育成―の絶対的な必要条件であったのである。従って二程においても、この世における万物の両面存在―「対の思想」が、天下の大本である中庸思想が成立する不可欠な条件と認識していた。

(二) 朱子の対の思想と中庸思想

朱子は、程明道が対を発見して喜んだ話を引用して、「天地の間に、対なき形で独立しているものはない」(二二八)とまで、断言している。では朱子において何故に、天地の間に「対の思想」の存在が必須であったのであろうか。朱子の『中庸章句』序文の第二節には、朱子は、「対の思想」と中庸の関係について、

「思うに、上古のすぐれた聖人たちが「天子の位について」天の道を受けつぎ、人の守るべき法則を樹立してからこのかた、道の伝統の継承にははっきりした淵源があった。その經典にみえるものでは、『論語』堯曰篇の「まことにその中をしつかり守れ」というのが堯から舜に天下を授けたときに伝えられたことばであり、……堯の「その中を守れ」という一言は、もうそれだけで十分なものである。……」(二二九)とあり、堯から舜への人の道を守るべき法則として中庸を守ることが指示して、これが宋学の淵源になっているというのである。

また同序文の第三節では、中庸の実践のためには、

「そこで、『舜のことばで』「精密に考える」というのは、……必ず「道の心」がいつもわが身全体の主宰者となり、「人の心」がいつもその「道の心」の命令に従う、というようにならせると、危険なものも安泰になり、微妙なものもはっきりして、自然に起居動作や言葉のうえでも過ぎたり及ばなかったりするようなまぢがいがなく「つまりぴったりと中を守る」ことができるようになるのである」(二三〇)と述べるように、「道心」の養成の大切さを言う。

朱子は、「道の心」と「人の心」という体用の論理を持ち出して、過と不及の両極端を否定して、中庸の実現に至ると言うのである。

朱子の主張で重要なのは、古代聖王の法則―天下の大本である中庸思想が、宋学の淵源として延々と続いているという認識である。そして朱子の頭腦の中心には、中庸思想の実現が大きく占めていて、中庸思想を実現する過程において、両極端物への両面思考―「対の思想」が必要不可欠になっているのである。

従って朱子の発言から見て、過と不及という両面思考―「対の思想」の生まれた歴史的要因として、中庸思想を指摘できるであろう。

(三) 対句・対聯―中庸思想の成立する根拠

北宋の儒学者・張横渠は、「物には孤立ということはない。同異・屈伸・終始で

既に引用した事例であるが、孟子は殷の湯王の政治を称賛して、「孟子が言われた・殷の湯は中庸の道を固く守り、賢者を採用するには貴賤、親疎を問わず、決まった順序などなかった」とする、臨機応変に豹変して貴賤と親疎の両極端の真ん中を執り、中庸政治を実践したというのと、同一論法の展開である。

孟子は、楊子の個人主義と墨翟の博愛主義の両極端思想を、禽獣Ⅱ野蛮人と激しく非難して、孔子の道Ⅱ中庸の道の実現を主張する。

「今もし、楊朱・墨翟の説が鳴りをひそめなければ、孔子の正し道はどうてい世に顕われせぬ。かくして邪説が人々を欺き眩まして、仁義の心をさし塞いでしまうのである。仁義の心がさし塞がれてしまうと、獣ものどもを引き連れて人間を食らわすことにもなり、やがては人間同士お互いに食いあうようなあさましいことにもなりかねないのだ。・・・父を無視し主君を無視する禽獣にもひとしい野蛮人は、これこそ周公が打つ懲らしたもうたところなのだ。私もまた天下の人心を正し、間違った学説を排撃し、片寄った行いを防ぎとめ、でたらめな無責任きわまる言論を追放して、そして禹・周公・孔子の三聖人の志をうけ継ぎたいと思っている。・・・私にかぎらず、誰でも言論をもって、楊朱・墨翟の邪説を排撃するものは、すべて聖人の仲間なのである」(二七)と、楊朱と墨翟の両極端思想を激しく批判する。

柔軟性のない一極端思想への固執を嫌い批判するのは、一つの極端思想に拘っていては、両極端思想の両面を併せ持つ中庸思想が実現できないためである。孟子の楊朱と墨翟の両極端思想への批判は、この好例である。

従ってここでも、対の思想の生まれてきた歴史的背景として、儒教の中庸思想を指摘できるであろう。そもそも墨翟は、初めは中庸思想である儒家の門下生となり、その後儒家を離れて一家をなした思想家という経歴もあるからである(一八)。

ところで中庸思想を実現するには、両極端思想を中庸思想の内部に包込むことが必要である。このために一極端思想に固執せずに、臨機応変の思考と行動が必要であり、物事の両面思考―「対の思考」ができることが、必須条件なのである。

孔子は、「先生がいわれた、「君子は正しいけれども、馬鹿正直ではない」(一九)と言ひ、孟子は、「君子は(行いは正しいが)馬鹿正直ではない。それは一つのこ」とばかりに何処までも固執して融通の利かないのを悪みきらうからである」(二〇)

と、言っていた。

孔子や孟子が、「君子は馬鹿正直ではない、一つに拘るのを嫌う」と言うのは、馬鹿正直で一極端に固執しては、臨機応変に對の思考ができず、その結果、両極端の真ん中である中庸の実現は不可能になるからである。孔子や孟子は、中庸を実現するために、一極端に拘らないで両極端を臨機応変に行動せよ、と言うのである。

以上述べた事を要約すると、孟子は孔子を集大成人物として高く評価する理由は、時勢に応じて臨機応変に豹変できる両面思考のできる柔軟性のある人格者であったためだけではない。孔子は、自己の柔軟性ある人格を利用して、臨機応変に中庸を得た行動ができる百面相的な多重性人格を一身に備えた大聖人のためである。

孔子や孟子のように、時流に上手く適応して百面相的な人生を送れば、一度しかないこの人生がどれほど楽しくなるか、想像に難くない。しかし日本人のなかでも無骨であると思っている筆者としては、孔子や孟子のような百面相的な世渡り上手な人生をとて送れそうもない。世界中の大抵の人間は、孔子や孟子のような中国人の典型的人物とは異なり、筆者とそれ程は違わないのではないかと思う。

しかしこれが中国思想の特質なのであり、中庸思想の構造論なのであるが、百面相的な孔子は、伯夷や伊尹や柳下恵の諸聖人の単純な政治行動を遙かに凌駕して、上手な世渡りを説く、中庸の徳を最高度に体现できる大聖人であった。

孟子ほどの知識人は、伯夷や柳下恵の人物評価について、否定と肯定という自己分裂した発言をしていることに気がつかなかったとは絶対にいわれない。知っていてこのような自己分裂した両面思考を出してくるのは、「対の思想」が中国最高の徳目である中庸思想を実現する必要条件であったからである。この必要条件が崩壊すれば、孔子の多重的行動を最高の聖人と評価することができないだけでなく、孔子を中庸思想の最高の体现者と称揚することも不可能だからである。

三 対の思想と唐宋時代の中庸思想

(一) 二程の対の思想と中庸思想

程明道は、「天地万物之理、無独必有对、皆自然而然、非有安排也、每中夜以思、

次の中庸思想の大切さを主張するために、「両極端思考—「対の思考」を持ち出した例をもう一つ挙げる。孟子は、楊子の個人主義と墨子の博愛主義の一極端思想に固執するのを嫌い、自己の態度を豹変させて両者を包含して、臨機応変に両極端を飛び越える中庸の道を実践することの大切さを強調する。

「しかしあくまで中道ということだけにとらわれてしまつて、臨機応変の処置がなかったなら、これまた楊朱や墨翟のようにただ一つの立場に固執して、他を忘れてしまふのと全く同じだ（原文は「子莫執中、執中為近之、執中無權、猶執一也」）。わたしがただ一つの立場に固執して融通のきかないのをいみきらうのは、正しい中庸の道をそこねるからだ。それでは只一つの立場だけを主張して、他の多くの立場の長所を捨ててしまふことになるからだ。」（一五）。

中庸とは「執中有權」なのであり、「權」とは臨機応変の処置であるから、孟子は有權の中庸思想を前提において、両極端の思想を批判している。一極端思想に拘るのを嫌い批判するのは、楊朱と墨翟を両極端に置いて臨機応変に両極を飛び移り、真ん中を成立させようとする中権の中庸思想の実現が不可能になるからである。

孔子が舜を称賛した例に、「子の曰わく、「舜は其れ大知なるか。・・・悪を隠して善を揚げ、その両端を執つて、その中を民に用う。」（『中庸』）とあったが、中庸の実現が最も大切なのであり、そのために両端をしっかりと執り、善と悪の両極端を臨機応変に豹変して中庸を実現した政治姿勢と、同一論法の展開である。

そしてまた孟子が、孔子を人類史上の最高の聖人とする理由は、孔子が状況変化に臨機応変に対応できる聖人であっただけではない。孔子は、臨機応変に豹変する多様な行動により、伯夷、伊尹、柳下恵の両極端の人格を、一身で併せ持つ多重人格者—中庸の人格を演出できる大聖人であったからである。

孟子は、孔子の人格を「聖の時なる者なり」—時中の名人と言ひ、諸聖人の人格を総合した集大成人物である、と述べている。続いて孟子は、集大成の言葉を説明して、

「集めて大成するとは、「どんなことか」といふと、「音楽を奏するときに、まず鐘を鳴らしてはじめ「それを合図に笛や太鼓などの八音（衆音）が合奏され」、さいごに玉磬を打つてしめくくりをつけることである。はじめに鐘をならすのは、「この一

声で衆音を引き起こして」条理の一糸乱れぬ調和を合奏しはじめるものであり、磬を打つてしめくくりをつけるのは、「この一声で乱れずにきた衆音の」条理をまとめて合奏をおわるのである。このように一糸乱れぬ合奏をはじめるのは智の働きであり、見事に合奏をおわるのは聖徳の力である。すなわち集大成するには智と聖とを兼ね備えなければならぬ。またこれを弓術にたとえてみると、智とは弓を射る技であり、聖とは弓を射る力量である。たとえば百歩もはなれた所から弓をいるようなもので、矢が的にとどくのは射手の力量であるが、的にうまく命中するのは射手の力量ではなくて、全くその技巧によるものだ。「ところで、伯夷・伊尹・柳下恵の三聖人はその力量においては十分のにとどくことができたが、技巧すなわち智においては幾分足りない所があつて、いつでも的（道）に命中するとは限らなかった。孔子は力量も技巧も完全で、決定的すなわち道に外れるようなことはなかった。このように孔子は聖人の諸徳を集めて聖と智を完全に兼ね備えておられるので、これがつまり集大成といわれる所以なのである。」（二六）と、述べている。

音楽における衆音の和—調和を引き出す音として鐘があり、調和してきた衆音を締めくくる音として磬があるのである。つまり鐘を鳴らして樂—調和は始まり、磬を打つて樂—調和を締めくくる。鐘と磬は、樂—和—調和論を挟み込む、両極端の音色なのである。

鐘と磬の両極端の音色の肯定と、樂—和—調和論—両極端の音色の否定と—言う、相異なる二つの音色を基礎にして、音楽が初めて成立するのである。孟子は中庸思想を音楽に喩えているが、衆音が調和の中庸を、両極端の鐘と磬が両極端の均衡実現の中庸を意味していることは明白であろう。

そして伯夷・伊尹・柳下恵の三聖人は、臨機応変に両極端を豹変できる聖—力量をもっていたが、常には的的中する智—技法を持つておらず、時には的に外れることがあった。これに対して、鐘—智—技巧と磬—聖—力量の二つを完全に持ち、何時でも臨機応変に的—中庸の道—時中していたのが、諸聖人の諸徳を集大成した孔子だといふのである。孟子は中庸思想を弓射に喩えているが、聖—力量は臨機応変に行動する権道を、智—技巧は状況に的中する時中を意味していることは明白であろう。

「いったい、章さんにはこの中でどれか一つでも当てはまるものがあるか、どうか。(ないではないか)・・・あの章さんだって、どうして夫婦親子が仲よくいっしょに暮らすのを望まないことがあるのか・・・章さんとはすなわちこういう人物なのだ。[だからこそ、交際もするし、敬意も払っているのだ。]」(一一)と云う。

孟子は、章さんは親不孝の五つの条件に一つも入っていないではないか。だから付き合いもすれば尊敬もするという。世間の悪い噂に耳を貸さず、極端な事をしない匡章と付き合いして尊敬する理由であり、匡章の中庸を得た行動に敬意を払っている。では逆に中庸の徳を守らずに、極端な行動に走った場合、どういう結果が待っているのか。中庸を心得ていない人の末路には、生命の危機や悪い噂を招く。子貢は、

「子貢がいった、「殷の」紂王が善くないということも、それほどひどいわけではなかった。「その悪事によって下等に落ちこんだので、後から事実以上の大悪人にしあげられたのだ。」だからして君子は下等に在るのをいやがる。世界中の悪事はみなそこに集ってくるのだから。」(一二)と、言う。

桀・紂は、中国歴史上の大暴君であるが、実際は悪評判が先行しており、悪事をして最下等にランクされたが、真実はそれ程でもなかったという。だから中等の普通人Ⅱ中庸を守り生きるのを推奨して、悪い噂の怖さに警鐘を鳴らしている。

また孟子は、かつての弟子である盆成括が斉に仕え殺害された原因について、何故ですか、と言う問人の質問に、以下のように答えている。

「孟子は答えられた。「彼(盆成括)の人は柄は小才は利く(小才子だが)、まだ君子の大道である仁義を学んでいない。それで小才を恃んで無理をやらかすから、けっきょくわが身を亡ぼすことになるのが落ちなのだ。」(一三)と、行き過ぎて出しゃばり、小賢しい才能を振りかざしては、自己の生命の破滅を招くのである。樂正子のように中庸人が自己の生命と国家の安定をもたらすという。孟子は、行き過ぎた極端行動を慎めと、周囲との調和の重要性を弟子達に教えるのである。

以上に述べてきた様に、中庸思想が前提条件になって、両極端への両面思考―「対の思想」が、肯定されたり否定されたりして、展開されている。従って両面思考―「対の思想」が生まれてきた歴史的背景として、中国古代よりの中国思想の精髓である中庸思想Ⅱ常識や調和の尊重の精神を指摘できるであろう。

次に孟子が、中庸思想の大切さや正当性を強調するために、両極端思考―「対の思想」批判を持ち出した事例を幾つか紹介したい。孟子は、未開地の二十分の一税の軽税を批判して、周代以来の十分の一税の正当性を主張して、これが中庸の税率であることを強調する。

「[周の制度では十分の一の租税をとったが、春秋以来各国はそれぞれ違いがあるが、ほぼ十分の二の税率であった]。白圭がいった。「先生、今の税金はたいへん重すぎます。私はずっと軽くして、二十分の一の税率にしたらいと思えます。いかがでしょうか。」孟子は言われた。「君のそういうやり方は、北方の野蛮国などでするやり方だ。・・・ところが今、この文明の地、中国におりながら、人の道たる礼儀道徳を捨てたり、政治を執る役人を置かなくしてしまつたら、どうしてそれでよからうか。陶工が足りなくてさえ国がうまく治まらないというのに、まして役人がいなければ、なおさらのことではあるまいか。[野蛮国ならいざ知らず、国家を治めるにはそれ相当の経費がかかるものだ]。もし税率を堯や舜が定めた十分の一よりもさらに軽くしようとする者があれば、大なり小なりの差こそあれ、貉のような野蛮国であるし、また反対に堯や舜の定めた税率よりも重くしようとする者は、大なり小なりの差こそあれ、桀王のような暴君なのだ。」(一四)と、言う。

孟子は、十分の一の税率は中庸税であり、二十分の一の軽税は野蛮国の税率であり、十分の二の重税は桀や紂の暴君の税率と、両極端の重と軽の税率を批判する。ところで、二十分の一税を未開地の野蛮国の軽税として批判して、堯や舜の定めた十分の一税を正当税率と強調するだけならば、何もわざわざ十分の二の税率―桀紂の重税論を持ち出す必要性がない。

二十分の一の軽税批判↓十分の一税の正当税の強調↓十分の二の重税批判と、十分の一税を真ん中に置き、軽税と重税の両極端の税率を批判するのは、十分の一税が中庸の税率であることを強調する論法に他ならない。

従って十分の一税Ⅱ中庸の税率の正当性を強調するために、軽税と重税の両極端の税率を殊更に持ち出して、それを批判してきたのである。両極端の税率を議論の引合いに出した両面思考―「対の思想」は、両極端の真ん中である中庸の税率を正当化するために、創意工夫された論理的な思考方法なのである。

野に入れておくべき必要条件であるからであるが、この両極端思想の前提の上に、儒教の最高の道徳として、中庸思想が存在するのである。

次に中庸思想の目的であるが、結論を先に述べると、過不及を否定して中庸を重視する理由は、平凡の大切さを主張するものであり、中庸を守る未来には、自己と国家の安定があるということである。『論語』には、中庸を守る大切さと、君子と小人の中庸への対応の違いについて、言及している条文が多く存在する。

「子貢が、「師(子張)と商(子夏)とではどちらが優れていますか。」とたずねた。先生は「師はゆきすぎている。商はゆき足りない。」といわれた。「それでは師がまさっているのですか。」というとき、先生は「ゆきすぎているのもゆき足りないのと同じようなものだ。」といわれた。」(五)とある。

「過ぎたるは猶を及ばざるがごとし」の諺として有名であるが、孔子は、過と不及の両極端は不可であり、中庸を守ることの大切さを弟子に論じている。

そして孔子は、極端行動を批判して、中庸行動することの大切さを述べている。「先生がいわれた「君子はひろく親しんで一部の人におもねることがないが、小人は一部でおもねりあってひろく親しまない。」(六)とあり、君子は周囲の人々と調和するのであり、つまらない特殊な人間を相手にするな、と言う。

「先生がいわれた、「君子は調和(和)するが雷同(同)はしない。小人は雷同するが調和しない」と。(七)とあるが、孔子は、君子は中庸の徳を守り極端には走らないで、人に阿ることがないが、小人は極端に走り中庸の徳(中和)を守らなく、人と広く親しまないと、中庸を守る大切さの警句を発している。

それでは何故に、中庸を守ることが大切なのであろうか。魯の宰相になった弟子の楽正子について、嬉しそうに期待している孟子に、弟子の公孫丑は、楽正子は剛毅果断のためなのか、思慮分別があるためなのか、博文多識のためなのか、これらの何らかの飛び抜けた才能がある故に悦んでいるのか、と質問した。この質問に孟子は、そのどれでもないかと否定して、楽正子は本当に善いことが好きだからと答えて、

「一國の宰相が本当に善いことが好きな人物だったら、天下の人々がやって来て、悦んで善いことを勧めてくれるであろう。逆に善いことが嫌いで利口ぶった人間なら、賢者が遠ざかり、讒言や媚び諂いや口先上手の人間が集まり、国家は治まらず

乱れていくだろう」(八)と、言っている。

孟子は、公孫丑の極端な能力を持っているためか、という質問を否定して、楽正子は普通の良い善人(中庸)の人物だから、政治的将来を期待するのだと反論する。孟子が楽正子に期待する理由は、中庸の人は、自己の身の安全と国家の安定をもたらずと、中庸の人が如何に政治において大切なかを言っているのである。

では、何故に善行が、政治を行う上で、それ程までに重要な徳なのであろうか、この問題について、孟子は以下のように述べている。

「孟子がいわれた、「孔子の門人の子路は自分の気づかぬ過ちを忠告されるとたいへん悦んだ。また聖人といわれた夏の禹王は他人から善いことばをきくと、「尊い身分をも忘れて」思わず『ありがとう』と頭を下げられた」といふことだ。ところが帝舜になるとこの二人よりもいっそう偉大であった。善いことなら、自分だけではなく人々といっしょに行うので、もしも他人に善いことがあれば、ドンドン取り入れてすぐさま実行にうつした。こうして他人の善を学びとっては、人々といっしょに実行するのを楽しんだのである。歴山で農業をしたり、黄河のほとりて陶器をつくったり、雷沢で漁業をしていたときから、「後に帝堯の譲りをうけて」遂に天子になってからも、いつでもそうされたのである。かように他人の善を学びとってはすぐに実行にうつすは、つまりは人々といっしょに善を行うというもの。だから、君子の徳としてこれより偉大なことはないのである。」(九)と、述べている。

他人の忠告に素直に従った子路、他人の善言を嬉しく受け入れた禹、この二人以上他人の善行を聞いて、人々と調和して善行を即時に実行した舜は、最も偉大な君子だ、と言うのである。

潔癖主義者で有名な伯夷・叔斉も、実は中庸の人物であったと、孔子は言う。

「先生がいわれた、「伯夷と叔斉とは、「清廉で悪事をにくんだ人だが」古い悪事をいつまでも心にとめることはなかった。だから怨まれるということも少なかった。」(一〇)と、潔癖主義で知られる伯夷や叔斉は、実は悪事を吞込み、善悪併せ吞む広い度量がある人物である故に、他人に怨まれることが少なかったという。

また孟子の問人の公都子が、斉の国中の者が親不孝者だと非難する匡章と付き合っている孟子を不思議に思い、師匠に質問したが、孟子は尊敬する理由について、

対の思想と中庸思想の歴史的展開

—対の思想(両面思考)の生まれてきた

歴史的背景について(五)—

小倉正昭

中庸は、「不偏不倚で過不及のない状態」という意味であり、常識の尊重、調和を重視する思想であり、儒教思想の精髓である。中国人のバックボーンである中庸を実現して維持していくために、両極端を視野に入れた両面思考—「対の思想」が必要条件として生まれてきた。この事実も、古代、唐・宋代、現代中国においても具体的事実により検証される。中国歴代の中庸思想の政治構造的性質は、家族(自己)と国家(社会)という、公権力と私権力という相異なる両極端権力の政治的バランスの安定と維持を目的とする所に存在する。

キーワード： 対の思想 中庸思想 古代中国 唐・宋時代 現代中国

一 はじめに

前稿で既に述べたように、林語堂氏は、中国人の古代よりの常識の崇拜と中庸思想との相互関係に言及して、常識の尊重から極端な理論や行動への嫌悪感が生まれ、これが中庸思想の尊重する立場に繋がったと述べて、常識の尊重⇨極端思想の嫌悪⇨中庸思想の尊重と理解して、「対の思想」と中庸思想との密接な関係を指摘した。金谷治氏も、中国思想の特色として、对待の思想に続いて、中庸思想を挙げて、中庸思想は中国思想の基本的特色である「現実の尊重」、「対の思想」と関係した「調和の尊重」であり、古来より伝統的な中国思想の精髓と述べていた。

林氏や金谷氏の指摘するように、中国人には常識の尊重や調和の精神⇨中庸思想が中国思想の精髓であり、中庸の精神が古来よりの最も重要な徳目である以上、対の思想の生まれてきた背景には、中庸の精神が大きな精神的支柱となっていた。

従って対の思想が生まれてきた歴史的背景の最大の要因として、中国思想の精髓

である中庸思想を挙げることができよう(一)。以下にこの事実を具体的な歴史的資料に基づいて、中国の歴史発展段階の中において検証していきたい。

二 対の思想と古代の中庸思想

孔子の人格について、「先生はおだやかでいてしかもきびしく、おごそかであつてしかも烈しくなく、恭謙でいてしかも安らかであられる」(二)と、対立する両面⇨「対の人格」を持った人物であるという。そして孔子は、中庸思想を中心として、両極端人を肯定する。『論語』には孔子の言葉として、

「先生がいわれた。「中庸の人をみつめて交われないとすれば、せめては狂者か狷者だね。狂の人は「大志を抱いて」進んで求めるし、狷の人は「節議を守って」しないことを残しておくものだ。」(三)と、中庸の人が大事な交際相手であるが、見つかからない場合には、次に狂⇨積極的な人か、狷⇨消極的な人と交際したいと述べているように、両極端の人間を肯定する。

中庸人である孔子は、中庸人との交際が大前提であり、二次的交際相手として狂と狷の両極端の人間を肯定する。従ってこの事例においても分るように、対の思想が生まれてきた歴史的背景として、中庸思想が存在したとすることができる。

この事実も、孔子は、「先生がいわれた。「質朴さが装飾より強ければ野人であるし、装飾が質朴より強ければ文書係である。装飾と質朴がうまくとけあつてこそ、はじめて君子だ」と。(四)と、言うように、質朴さと装飾の両極端を批判して、質朴さと装飾の両面が融合している中庸の人が、立派な人間なのである、という主張からも理解できる。孔子の思想の中核に中庸の精神が存在することは間違いない。

「対の思想」が大切なのは、中国思想の精髓である中庸思想を実現するために視

(Original Article)

The thought of *Dui* and the Doctrine of the Mean**—Historical background from which the thought of *Dui* (dualist thought) arose (4) —****Masaaki OGURA***

The mean signifies “a balanced state, not being slanted toward a particular idea, not depending on anything, and not being too much or too little”. It is the thought that great importance is attached to respect for common sense and harmonization, which are essential aspects of Chinese thought. Chinese people, as an ethnic group, do not like extreme theories but value balance and respect the Doctrine of the Mean. Two-sided thinking—“the thought of *Dui*”—that invariably includes both ends of a spectrum, arose as a requirement to realize and maintain the mean, which is the backbone of Chinese popular thought. Therefore, the most important factor of the historical background from which dualist thought—the thought of *Dui*—arose is the need to realize and maintain the Doctrine of the Mean, which is the essence of Chinese thought and the highest virtue in Confucianism.

Key words: thought of *Dui*, the Doctrine of the Mean, spirit of harmonization, ancient China, modern China

* Department of General Education (Humanities and Social Sciences)

参照)

(三〇) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 二四〇

頁 参照)

(三一) 『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一五七頁 参照)

(三二) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 子路篇 一八三

頁 参照)

(三三) 『孟子(下)』(小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 四三八頁

参照)

(受付日二〇一一年 九月 二七日)

(受理日二〇一一年十二月 二二日)

（金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一六三頁 参照）と述べていたとが、誠に核心を突いた正解なのである。

二一そして以下の本稿の論旨の展開において、宮崎氏の中庸の解釈と異なり、平凡で普通人であることのモラルが、いかに大切なモラルであるのか、何故に人間が踏み行わなければならないべき大切な永遠の道なのか、論証を伴い次々に証明されていくことになるであろう。

（二二）『論語』（金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 堯曰篇 二七二頁 参照）

一—宮崎氏は、「允執其中」を、「お前は宇宙の原則をしかと手に握って離すな」と、哲学的に解釈する（『論語の新研究』 宮崎市定 岩波書店 一九九四年 第十九刷 三八一頁 参照。宮崎氏は、中—宇宙の原則と、言うのである。「執中」が、何故に宇宙の原則になるのか、詳細な説明がないので、直ちには首肯しかねる。

二—吉田氏は、「しかと一方にかたよらない中庸の道を守り守っていくがよろしい」（新釈漢文大系第一巻 『論語』 吉田賢抗 明治書院 昭和三八年 四二八頁 参照）と、述べている。そして「執中—過ぎたことや、及ばないことのない、中道をとる行い」と注釈していて、通常の「中」の解釈をしている。

三—しかしすぐの後文の注（二〇）に引用する、『中庸』記載の孔子の同じ発言には、舜の言葉として、「悪を隠して善を揚げ、その両端を執って、その中を民に用う。それ斯を以て舜と為すか」とある。善と悪の中を執り、これを民に用うる故に、舜が舜である所以であるから、宮崎氏の中の解釈は、完全に原文の意味を逸脱しており、誤訳である。

（二四）『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一五〇頁 参照）
一—金谷氏は、補注—注の三において、「その両端」の「その」を、上文の「善」の中でと限定するのはよくないという。しかし「その両端」とあるから、文脈からして、「その」は上文を受けていることは確かであり、「両端」とあるから、上文の「悪」と「善」の両端の中という意味であろう。

二—赤塚氏は、本文を通釈して、「悪いことは抑え、善いことは取り上げて広めた。（つまり人々の意見のうちから）、物事の両極をよく考え合わせて、そのうちのもっともよいことを択んで人民に用いるようにしたのである。・・・」と、している。そして「語釈」で「執其両端、用其中於民」の解説として、「一の物事に対する過と不及との両極端の考え方から最も適切な考えを選び出すことを、両端のある物を折半することに譬えていった。」（新釈漢文大系第二巻 『大学・中庸』 赤塚忠 明治書院 平成六年 三五版 二一〇頁—二二一頁 参照）と、述べている。

三—しかし「執其両端、用其中於民」の「執」は、金谷氏の言うように、「しっかりと握る」という意味であるから、「善と悪の両極端をしっかりと握り、その中—一方に偏らない中間—を人民に適用した」という意味である。四—従って赤塚氏の通釈する、「そのうちのもっともよいことを択んで人民に用いるようにしたのである。」とか、「両極端の考え方から最も適切な考えを選び出すこと」という意味には、絶対にならないであろう。

（二五）『武内義雄全集 第二巻 儒教篇一』（竹内義雄 角川書店 昭和五三年）「儒教の倫理」 第三章 究理 五三頁 参照）

（二六）『大学・中庸』（金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一五四頁 参照）

（二七）『詩経』（商頌・長發篇）『中国思想を考える』（金谷治 第四章 中庸 中公新書一—二〇 一九九三年 第八刷 一四三頁 参照）

『孔子家語』にも、「孔子はさらに言葉をついで、『競わず急がず、剛強ならず柔弱ならず、政治を施してなごやかに、かくて多くの福があつまる』と詩にあるが、これが和の最高の状態を言うものだ」と言った。（『孔子家語』宇野精一訳注 新釈漢文大系 第五三 明治書院 巻九 五〇九頁 参照）とあり、中庸Ⅱ和Ⅱ調和の精神が政治信条における最高形態だ、と述べている。

（二八）『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 七二頁 参照）

（二九）『孟子（下）』（小林勝人訳注 岩波文庫 一九九五年 第三六刷 八四頁

るが故に不易、不易なるが故に平常であって、その意は同じ。」「『中庸』(宇野哲人全訳 講談社学術文庫 一九八三年 四五頁)と、庸≡不易≡常≡平常と明瞭に述べている。

七―「庸」の辞書的な語義は、インターネットによると、「平凡なこと、すぐれたところがないこと」という意味であり、凡庸の熟語がある事でも理解できる。庸医とは治療のうまくない医者、平凡な医者の事であり、庸君とは凡庸の主君であり、庸愚とは平凡でおろかなことである(庸―辞書すべて―goo辞書)。

また「庸」は、市販されている一般的な漢和辞典によると、「つね(常)、なみ、おろか(愚)とか、かわらぬ、変動せず」の意味(『字源』簡野道明編集 角川書店)、「ア かわらない、かたよらない イ ふだん、平生、ウ なみ 平凡」の意味(『新字源』小川環樹 西田太一郎 赤塚忠編 角川書店)という、説明をしている。

これらの辞書の語義や熟語を見ても理解できるように、「庸」には、かわらない―常という意味と、なみや平凡という意味があるが、かわらないことと、なみ、平凡という意味は、すぐ隣に同居していて、全くかけ離れた意味ではない。総じて平凡という意味であり、朱子の言う「平常」の意味とは、何も変わらないのである。

また「常」の辞書的な意味は、「訓」は、つね、とこ、とわ、とこしえと読み、意味は、「いつも変わらない。いつも同じ状態が続くこと。」であり、「常時・常任・常備・常用・常緑樹・経常・恒常・通常」などの熟語があり、常衣とは、「平常に着る衣服。ふだん着」、常居とは、「家の中で、家族がいつもいる部屋、居間」の事である(常―辞書すべて―goo辞書)

このような辞書的な意味を考えると、「庸」は、平凡ということであり、「常」は何時もと変わらない日常性をいうのである。従って宮崎氏の解釈は、辞書的な意味からも言って、無理があると言える。

八―程子は、「庸」を、定理であり「経」という意味に理解していた。「経」とは、儒教の『経書』の「経」で、「つね、のり(定理・常法)、いつも変わらない道

理」(『字源』簡野道明編集 角川書店)という意味である。

市川氏が指摘するように、人倫の踏み行うべき永遠不変の道理―人間のモラルあり、これが定理なのである。従って宮崎氏のいうような、「時間的に永久に繰返しても行きつまらない」という意味にはならない。

九―宮崎氏の主張で理解に苦しむのは、何故に朱子の新注である「平常なり」という規定を無視したのか、また程子の規定に従うとしても、「庸」は「常」として、恒常的という意味であり、辞書的に考えても、「庸」には「永久」という意味はないのである。宮崎氏は、「永久の常で、時間的に永久に繰返しても行きつまることがない」というように理解したのか、考えられ得る一つの視点は、「中庸」を、中国思想の高遠な哲学的な―「中国思想の特質」として、格別に特筆したかったのではなからうか、と言うことである。

一〇―しかしどう考えても、宮崎氏のような中庸の解釈には資料的に無理があり、どうしてもそうはならないのである。金谷氏は、「礼とは中を形にあらわしたものであり」と紹介しているように、礼儀は人間社会の行動の規範である。また『中庸』の規定では、喜怒哀楽という両極端がない状態(未発を中と言い、それが表面に現れた状態(已発)を和と謂う。中≡和であり、金谷氏は、とは羹の意味と言い、「汁けの多いこった煮です」と紹介していたように、中和の中庸は、人間の喜怒哀楽という感情を述べたものであり、人間の感情を問題とした哲学的な問題である。つまり礼にしても中庸にしても人間社会を中心に扱う哲学的な問題なのである。人間社会を離れては、どんなに高遠な哲学的な問題もありえないというのが、中国哲学の特質であろう。

一一―従って中庸の徳とは、朱子が述べ金谷氏が指摘しているように、「どちらにも片寄らない平凡で、日常的なモラル」であり、それが、程子が規定して、市川氏が述べていたように、「人倫が踏み行うべき永遠の道」という意味であるという意味に直結して行くという事ができるのであろう。

まさに金谷氏は、「庸徳・庸言」を注釈して、「庸」は常の意。高遠でない平凡な日常性と永続的恒常的であることを兼ねる(『大学・中庸』

三—金谷氏は、「中庸」に注釈して、「一 中庸—鄭玄(古注)は、「庸」を作用と解し、「中和の働き」をいうとしたが、朱子(新注)は「中とは不偏不倚で過・不及のないこと、庸とは平常(新注)の意」と解した。朱子の解釈でよいが、「中」と「庸」との二字は疊韻であるから二字の意味を切りはなして考えるのはよくない。「中」の一字に意味がある。偏りのない平常で程よい中正の徳をいう。」(注一四)と、言う。

金谷氏は、朱子の新注を採用して、「庸」を平常の意味に解する。この点、宮崎氏の「永久の常」と言う意味とは、全くかけ離れた解釈である。

四—市川氏は、程伊川の中庸の解釈を、「中とは偏らないことである。偏れば中でなくなる。庸とは常である。これは、中とは大中であり、庸とは定理であると言うのと、同じである。定理とは天下不易の理、つまり経である。」と、述べている。

そして市川氏は、「・・・「庸」を一字の「常」に置きかえるのは、いわゆる訓詁の法である。庸は従って「平常」と言う意味にもなるうし、常あること則ち「不易」と言う意味にもなるであろう。伊川はこの二者のうちから後者を取っている。不易というところから、それは理に結合していくのである。・・・万人の頼るべきものであるならば、変易不定は許されない。常に安定した理であつてこそ、あらゆる現象の根源ともなり、人の行為の模範にもなりうるのである。」と、述べている。

また、「常とはまさに変化が一定の法則に従って行われることを指す。・・・常理は定理と同じく、不変不易の性格に焦点を合わせた表現で、その変易不易ということも、変易の即時的否定ではないことに注意しなければならぬ。・・・常は変に対立し、変なくしては、その成立は考えられない。」と、述べている(『程伊川哲学の研究』第六章 実戦過程に示された理の意義 第六節 義理・定理・常理等の語 第三項 定理・常理・中理・実理 市川

安司 東京大学出版会 一九六四年 二六五頁—二六七頁 参照)。

市川氏は、程伊川の中庸を解説して、「庸」とは、「平常」と「不易」の二通りがあるが、伊川の解釈は後者を取り、自然・人倫の踏み行ふべき不易の大

道を説くのであり、常とは変化を繰返して行われることを視野に入れた相対的な性質のものであるという。宮崎氏と同じく、常を不変不易とするが、常に変化を伴っており、恒久的に永遠の不変ではないというのである。この点、両者は根本的に異なる。

五—吉田氏は、「中」とは過ぎたこともなく及ばぬこともなく、どちらにもかたよらぬ中正を得たこと。「庸」は常で、常恒の意、いつまでも変わらぬこと。常識的にいえば、穩健中正で、永久に変わらない道徳のことを中庸という。程子は、「偏らざるこれを中と謂い、易らざるこれを庸と謂ふ。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」(中庸章句)といった」と述べている(新訳漢文大系 第一巻『論語』 吉田賢抗 明治書院 昭和三八年 五版 一四四頁 参照)。

吉田氏の説も、程子の説を引用している事は宮崎氏と同様であるが、「永久に変わらない道徳」と述べていて、宮崎氏の「時間的に永久に繰返しても変わらない」と、哲学的に解釈している点が、異なるのである。

六—従って宮崎氏の言う「庸」の意義は、先学の学説とは大いに異なり、また宋学者の「庸」の解釈とも異なる特異な解釈である。宮崎氏の言う中庸の意義—「庸は常なりと訓じ、この常は永久の常である。過不及のない行為は、時間的に永久に繰返しても行きつまることはない、というのが中国思想の特色である」と、述べているのは、中庸思想の研究史より考えて再考を要する。

程子の解釈に従った宇野氏や市川氏や吉田氏という解釈に従うとしても、中庸とは、人倫の永久に踏み行ふべき不変のモラルというべき性格のものである。従つてこの変わらぬモラルが、朱子や金谷氏という「平常」と言う意味に直接的に結合することは、容易に理解できるであろう。

宇野氏は、二程の規定した庸—不易に注釈して、「かわらぬこと。かわらぬこととはただ今日において易ゆべからずのみならず、永久に変易すべからざるの意である。朱子は庸は平常なりと解している。平常なるが故に常にこれを行ないて易ゆべからず、もし世を驚かすごとき非常の事ならば、一時は差し支えなくともこれをもって常となすことは不可能である。すなわち平常な

(八) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一三二頁 参照)

(九) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一五五頁―一五七頁 参照)

(一〇) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一六二頁 参照)

(一一) 『程ほどの大切さ』―中国思想の特質・中庸に就いて―(鈴鹿高専広報誌『鈴風』一〇五号 二〇〇五年 参照)

(一二) 『大学・中庸』(赤塚忠訳注 明治書院 昭和四二年初版 「中庸解説」 一六三頁 参照)

(一三) 「中」のシンボリズムに関する一考察・宇宙論からのアプローチ」(杜勤 『大阪大学言語文化学5』 一三五―一四八 一九九六年)

(一四) 『中庸』(宇野哲人全訳 講談社学術文庫 一九八三年 四三頁―四五頁 参照)

(一五) 『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一四四頁―一四五頁 一四七頁 注一 参照)

(一六) 『大学・中庸』(金谷治訳注 岩波文庫 一九九八年 一四七頁 注二 参照)

(一七) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一三五頁 参照)

(一八) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一四五頁―一四六頁 参照)

(一九) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 学而篇 二三頁―二四頁 参照)

(二〇) 『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一二二〇 一九九三年 第八刷 一五一頁 参照)

(二一) 拙稿「対の思想広大な国土(多様な国民性)―対の思想(両面思考)生まれてきた歴史的背景について(二)―」(鈴鹿工業高等専門学校紀要第四

四巻 二〇一一年 参照)

(二二) 『論語』(金谷治訳注 岩波文庫 一九八九年 第四〇刷 雍也篇 八八頁 参照)

―宮崎氏は、この文章の中庸の語句を解して、「永遠の道」であり、「中庸の中には過不及のないこと。庸は常なりと訓じ、この常は永久の常である。過不及のない行為は、時間的に永久に繰返しても行きつまることはないとい

い、これが中国思想の特色である」と、述べている(『論語の新研究』 宮崎市定 岩波書店 一九九四年 第十九刷 一三三頁 参照)。

宮崎氏の言うように、中庸の徳は中国思想の特色であることには、金谷氏も「中国思想の精髓」と述べており、また筆者も同感である。

しかし問題は、宮崎氏の言うように、「常」の解釈が、「永久の常で、時間的に永久に繰返しても行きつまることがない」と言えるか、どうかである。宮

崎氏の言うように解釈するのは、管見の限り宮崎氏のみであり、宮崎氏という「常」の解釈には、先学の研究成果によると、多くの疑問が存在する。

また宮崎氏は「中行||中庸」を「欠点のない常識的な人間」と訳している(『論語の新研究』 宮崎市定 岩波書店 一九九四年 第十九刷 三〇二頁 参

照)。このように宮崎氏は、中庸を、一方で「永久の道」と哲学的に解釈するが、他方では、「欠点のない常識的人間」と人間のモラルと考えているので

ある。どちらが宮崎氏の言いたい主張なのか、どちらが正しい解釈なのか、このままでは分らないのである。以下に先学の諸説を紹介して、中庸の意味

を規定して見たい。

二―宇野氏は、『宋朱熹章句』の『中庸』に二程の中庸の規定を紹介して、「子

程子曰く、偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」(二二)と言い、「朱子是不偏を「偏ら

ず倚らず、過不及無き名」と注釈して、「庸」を「平常なり」と解している」と、程子と朱子の説を並列して、断言を避けている。

宮崎氏の解釈は、宇野氏の引用による限りでは、程子の説を取り入れたものであり、朱子の解釈である「平常」と言う意味を無視したものである。

だから孔子や孟子の精神構造のバックボーンは、普通人たる中庸の人間なのである。ここからも中庸思想が中心となつて、これより外にはみ出た両極端の人間が、次の交際相手として問題にされていると云うことができるであろう。

このように中庸思想を守る事への強い信念は、中庸の実践は、剛強であり多くの幸福をもたらすという、政治の基本政策としての強い信念になっている。またバランス感覚のある常識ある人間が一番交際には重要なのであり、これが満たされない場合において、次に長所がある両極端の人間が交際相手になるのである。

中庸思想の尊重の精神には、人間の本性は同じ能力や感覚を持つて生まれてきているという、人間の本性への強い平等感に裏打ちされている。だから上手く周囲と調和して、両極端のバランスを執れる中庸を守る事が最も重要なのである。

以上に述べたように、中庸思想は、堯・舜・禹より孟子に至るまで、最も尊重すべき中国人の伝統的思想なのである。中庸思想は両極端の真ん中にしっかりと腰を降ろして中心に位置する中国思想の精髓なのである。

従つてどちらにも偏らない「不偏不倚」の中庸思想を実現して維持して行くためには、どうしても両極端を見据えなければ、本当の真ん中が実現できないのである。そのために中庸思想を実現するための二次策として、両極端への両面思考―「対の思想」が問題になって来るのである。つまり中庸の左右や前後の外部にある両極端への両面思考―「対の思想」は、中庸思想を実現する上で視野に入れるべき必要事件という事なのである。だから両面思考―「対の思想」の生まれて来た歴史的背景について、最も重要な問題として中庸思想を指摘できるであろう。

四 結論

〔要約〕

一―林氏は、中国人の基本思想として常識の尊重を挙げ、これから中庸思想が生まれ、極端思想への嫌悪が生まれてきたと述べる、金谷氏も、常識の尊重―調和の精神が、中国人の大きな精神的支柱となつていたと言ふ。

二―中庸とは、「偏りのない、過・不及のない、平常の状態」を意味する。両極

端に偏りのない状態を「中」というから、中庸思想の左右や前後には、両極端への両面思考―「対の思想」が存在する。

三―常識の尊重を内容とする中庸は、堯・舜・禹の聖王相伝より孟子に至るまで、最も尊重すべき中国古代よりの伝統的思想であり中国思想の精髓である。中庸の実践は、剛強であり調和であり、多くの幸福をもたらすという。それは人間の本性は、同じ能力や感覚を持つて生まれているという、人間の能力への平等意識があるために、周囲との調和やバランス感覚を持つことが重要なのである。

四―中庸思想を実現するためにはじめて両極端への両面思考―「対の思想」が問題になってくる。つまり中庸の左右や前後にある両極端への両面思考―「対の思想」は、中庸思想を実現する上で視野に入れるべき絶対的な必要条件なのである。

注

(二〇一一年八月二六日 稿了)

- (一)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 自序 一二頁 参照)
- (二)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 第三章 中国人の精神 四 論理 一五三頁 参照)
- (三)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 第四章 人生の理想 一 人文主義 一六六頁 参照)
- (四)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 第四章 人生の理想 三 中庸の道 一八〇頁 参照)
- (五)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 第四章 人生の理想 三 中庸の道 一八一頁 参照)
- (六)『中国Ⅱ文化と思想』林語堂 鋤柄次郎訳 講談社学術文庫 一九九九年 第四章 人生の理想 三 中庸の道 一八一頁 参照)
- (七)『中国思想を考える』(金谷治 第四章 中庸 中公新書一一二〇 一九九三年 第八刷 一三〇頁 参照)

孟子は、儒教の始祖・孔子の人格について、「孟子は言われた。「孔子は極端なことを決してなさらぬお方であった」(二八)と、決して極端なことをしない中庸の人物であった、と評言している。

また孟子は、殷の湯王の政治を、「孟子が言われた・・・殷の湯は中庸の道を固く守り、賢者を採用するには貴賤、親疎を問わず、決まった順序などなかった」(二九)と、貴賤と親疎の両極端の中間を執り、臨機応変に中庸を実践した、と言う。

これらの資料を見ても分るように、善と悪を同時に見る両面思考―「対の思想」は、善と悪の両端をしっかりと握り、その真ん中を実現する中庸思想と、剛と柔の両端を否定して、その真ん中を実現する中庸思想という、二つの両者を実現するための必要条件なのである。

それでは次に問題なのは、何故に決して一方に偏らない中庸思想―常識や調和の尊重とバランスの尊重の精神―が、これほどまでに中国人に重要な思想なのであるのか。孟子の発言を引用して検討してみたい。

「それ故、「大麦だけではない」すべて同類のものは、みな大体は似かよっているものである。どうしてただひとり人間だけが例外だと疑ってよいものだろうか。聖人としてみな我々と同類なのだ・・・だから私はいふのだ。『かように口で味わう場合、誰もがこれは旨いと思うものがあり、耳で音楽を聞く場合、誰もが素晴らしいと聞きほれるものがあり、目で美人を見る場合、誰の目にも美しいなあと等しく見とれるものがあるのに、ただ一人の心だけがみな一致して認めるものがないはずがあるだろうか。必ずあるはずだ。では、その万人が一致して認めるものとは何か、というと、それは「我々の心に固有する」道理であり、徳義である・・・」(三〇)と、孟子は、聖人を含めた人間は、ほぼ同じような人間性―道徳性を持って生まれてきている、と言う。

つまり孟子が中庸の徳目を重要視する理由は、人間は聖人も含めて、全て平等な本性―素質や能力を持ち生まれている。本性に差異が発生するのは、後天的な環境や努力の差でしかない。中庸―常識や調和の尊重の精神には、人間の感覚や本性は、聖人も普通人もみな同様だ、という共通観念が背後にあるのである。

従ってこの常識―調和と言う共通観念に背く常識外の行動、つまり一方に偏った

極端行動は常識尊重の思想からの特殊事例として、派生的に生まれてきたのである。『中庸』には、孔子の言葉として、次のような発言がある。

「先生はいわれた。「わかりにくいのはつきりしないことをむりにさぐり出したり、風変わりな奇怪なことを行ったりすると、「人の注意を集めて」後の世にそれを誉めて受け継ぐものも出るだろう。だが、わたしはそういうことをしない。君子は道を基準として行動するものだ。たとえ「力及ばず」途中で挫折することがあっても、わたしは「道を守るのを」やめることはできない。君子は中庸に依りそつてゆくのである・・・」(三一)と、孔子は言うのである。

中庸を守る人は、実戦の過程において途中挫折することはあっても、極端な行動をして人口に膾炙されるような、そういう常識外れの奇行人の行動はしないという常識―中庸思想が前提になり、常識外の極端行動が批判されている。少なくとも孔子の心理では、中庸の行動が中心にあり、その前提の外部に極端行動が存在した。中庸思想が行動原理のバックボーンであることは間違いないであろう。

また孔子は、以下の様に交際する相手について言っている。

「先生がいわれた、「中庸の人を見つけて交われないとすれば、せめては狂者か狷者だね。狂のひとは「大志を抱いて」進んで求めるし、狷の人は「節議を守って」しないことを残しているものだ。」(三二)と、述べている。孔子は、狂者―積極的人物と、狷者―消極的人物の両極端の人物が存在している、どちらにも長所があるという。また孟子も、孔子の発言を引用して、以下のように言う。

「孟子はこたえられた。「孔子は『中庸の人物を見つけて交際できないとすれば、せめてはせひとも狂物か狷者の中から選ぼう。狂者は積極的で進んで善を求める「気魄があるし」、狷者は消極的だが、断じて不正不義をしない「節操がある」からだ。』とおっしゃられた。孔子とてなんで最初から中庸の人を見つけないと望まないことがあるのか。ただ、そのような理想の人を望んでもきつと得られるとは限らないから、それでやむなくその次の人を望まれたまでだ。」(三三)と、言う。

孟子も孔子と同じく、狂者と狷者の両方の両極端人物の長所を指摘して、肯定的な評価をしている。しかしそれは、人間性における長所である両極端のバランス感覚の執れる中庸の人の存在が存在しないことが前提となつての発言なのである。

る。調和を尊重する中庸こそ、古代より中国思想の精髓であり、普遍的思想として認識されていたと言える。

以上述べたように、宇野氏、金谷氏、二程、朱子の中庸の規定では、中庸とは、「偏りのない、過不及のない状態」を意味するという。両極端に偏りのない状態を「中」というのであるから、中庸の左右や前後には、両極端思考—「対の思想」が存在していることは確実である。

また『中庸』の規定では、喜・怒・哀・楽という両極端がない状態（未発）を中と言ひ、両極端が表面に現れて、その両端が偏りなく調和している状態（已発）を和と謂う。だから極端のない中の状態が先に存在していて、そして極端感情が生まれてきて調和しているのが和なのであるから、中Ⅱ和であり、金谷氏は、和とは羹の意味と言ひ、「汁けの多いこと煮です」（二〇）と言う。

従って中和の中庸は、極端の感情が消えて存在していないのが中の状態で、和とは全ての極端感情が程よく調和している状態を意味する。従って中庸の語義より考えると、極端感情のない普通の状態Ⅱ中庸が先に存在して、ここから両極端の感情である「対の感情」が生まれてきたことができるであろう。

三 対の思想と中庸思想

中庸の徳目は、林氏や金谷氏が資料を引用して指摘したように、中国では古代より現代まで延々と続く中国思想の精髓であり、中国思想史の中心テーマである。

また儒教思想では、「対の思想」を重要な思考方法としていて、両面思考—「対の思考」のできない、一面的な極端思想を激しく批判してきた。このことは今までの拙稿で述べてきたが（二二）、この両面思考—「対の思考」が大切であることは、本稿で問題にする儒教思想の中心思想である中庸思想でも同様なのである。

孔子は中庸の徳について、「子の曰わく、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民鮮なきこと久し」と、絶賛している。金谷氏は、「先生が謂われた「中庸の徳としての価値は、いかにも最高だね。だが、人民のあいだにとぼしくなつてから久しいことだ。」（二二）と、現代語訳をする。そして金谷氏は中庸に注釈を付け、「中庸

—朱子は過不及ないこと、庸とは平常の意」と解説して、「極端に走らぬほどよい中ほどを守つていく処世の徳」と、述べている。

金谷氏は、中庸とは極端に走らぬほど良い中を守る処世の徳であると言う。中庸の徳は、金谷氏の指摘した、「現実の尊重」に通じる中国思想の伝統的思想であり、現世を生きる最も重要な徳徳なのである。以下に中庸思想が、中国人にとって如何に大切な伝統的思想であったのか、具体的に資料を挙げて例証してみたい。

『論語』には、堯—舜—禹への聖王相伝の言葉として、「堯がいった、「ああ、なんじ舜よ。天のめぐる運命はなんじが身にあり、「なんじ帝位につくべき時ぞ。」誠にほどよき中を守れ（「充執其中」—筆者注）。四海は苦しめり。天の恵みの永久につづかんことを。」舜もまたそのことばを「帝位を譲る時に」禹につげた。」（三三）とあり、中庸の徳を守り続ける重要性を伝えている。

孔子は舜を絶賛する理由として、『中庸』に「子曰わく、「舜は其れ大知なるか。…悪を隠して善を揚げ、その両端を執つて、その中を民に用う。それ斯を以つて舜と為すか」と。」（二四）と、述べている。孔子は、舜の舜たる所以は、両端の中を執り、中庸を政治原則にした事にあると言う。

堯—舜—禹の古代の聖王にとり、如何に中庸が最も重要な政治徳目であったのかが理解できるであろう。武内氏も「堯・舜の道は結局は「中」の一字に帰するものごとくである」（二五）と述べている。

また孔子は中庸に言及して、以下のように言う。

「故に君子は和して流れず、強なるかな矯たり、中立して倚らず、強なるかな矯たり」（二四）と、中和の中庸の意義—調和の精神を、「剛強」と絶賛している。古代の中国人にとり、周囲と調和することが強さなのである。調和することは、それ程までに大切であり、また難しいことなのであるが、現代の日本人にはとても理解できない発想であろう。

『詩経』には、両極端を否定する中和の中庸について、「剛ならず柔ならず、政を敷いて優優たれば、百禄是に適あつ（まる）」（二七）と、剛と柔の左右の両端を否定して、ゆつたりと中庸を実践すれば、多くの幸福が集まると言う。中庸政治は幸福を実現するという。調和の政治が多くの幸福の実現に繋がるのである。

二 対の思想と中庸の意味規定

最初の作業として、従来の中庸思想研究者の「中庸」の語句の説明を紹介して、中庸の語句の意味についての規定を行いたい。

宇野氏は、『宋朱熹章句』の『中庸』に二程の中庸の規定を紹介して、「子程子曰く、偏らざるをこれ中と謂い、易わらざるをこれ庸と謂う。中は天下の正道にして、庸は天下の定理なり」(一四)と言い、「朱子は不偏を「偏らず倚らず、過不及無き名」と注釈して、「庸」を「平常なり」と解している、と述べている(一四)。

つまり中庸とは、宇野氏・二程・朱子によれば、「どちらにも偏りのない状態で、それが永久に変わらない平常の状態」を意味している。だとすれば中庸とは、どちらにも偏らない普遍的現象―平常の状態のことであり、林語堂氏の言うように常識の意味と同じ意味と解釈できるであろう。

ところで常識＝コモンセンスとは、小学館の「日本大百科全書」によれば、「ある社会のある時期において、一般の人々がとくに反省することなく当然のこととして共通に認めている意見や判断のことであり、その社会の歴史のなかから自然に形成される物である」としている。常識とは人間の共通感覚や共通認識のことである。従って人間の共通感覚の外部に、両極端―「対の思想」が存在するのである。

つまり中庸は、天下の正道であり定理なのであり、人間の大道である以上、両極端への両面思考―「対の思想」は、中庸思想より発生してくる派生現象なのである。

金谷氏の訳注による『中庸』の「中庸」を説明した原文には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る。これを和と謂う。……」(一五)とある。金谷氏はこの本文を注釈して、

「喜・怒・哀・楽などの感情が動き出す前の平静な状態、それを中という。「それは偏りも過・不及もなく中正だからである。」感情は動き出したが、それらがみな然るべき節度びつたりとかなっている状態、それを和という。「感情の乱れがなく、正常な中和を得ているからである。」……」(一六)としている。

さらに金谷氏は、「中庸」に注釈して、「二 中庸―鄭玄(古注)は、「庸」を作用

と解し、「中和の働きの」というとしたが、朱子(新注)は「中とは不偏不倚で過・不及のないこと、庸とは平常(新注)の意」と解した。朱子の解釈でよいが、「中」と「庸」との二字は疊韻であるから二字の意味を切りはなして考えるのはよくない。「中」の一字に意味がある。偏りのない平常で程よい中正の徳をいう。」(一七)とする。

金谷氏は中庸を規定して、「偏りのない平常でほどよい中正の徳」という。『中庸』によれば、喜怒哀楽の極端な感情がない状態を、中と言うのであるから、両極端の喜怒や哀楽の感情より、先に「中」が存在するのである。

喜怒や哀楽は、人間の日常生活に常に存在するものではない。普段の日常生活には、喜・怒・哀・楽のない平凡な生活が存在して、この何の特別な感情のない日常生活に時として現れる異常な極端現象が、喜・怒・哀・楽の極端感情なのである。

「庸」とは、凡庸の熟語があることから分るように、平常の状態というの意味でもあるから、極端状態とは日常にない異常な状態と理解できる。従って両極端状態よりも先に、中庸の精神が存在したのといえることができる。

金谷氏が礼制を説明するのに挙げた実例を検討してみたい。金谷氏は、「……」礼とは中を制さ(だ)める所以なり」(『礼記』仲尼蒞燕居篇)とあり、礼とは中を形にあらわしたものであり、……そして礼は「過ぐる者は俯(伏)してこれに就き、至らざる者は跂(つま)ちてこれに及ぶ」べきものなのです(『礼記』檀弓篇)(一八)と、述べている。

つまり中庸を制度化したものが礼であり、礼は、過と不及という両極端を真ん中に引き込もうとする制度だという。だから常識や平常の状態―中の状態が先にあり、これに外れた両極端行動を抑制する未然の防止策として、中庸＝礼制が先行して制定されていた、と言えるであろう。

『論語』には、以下のように礼の働きの説明している。

「有子がいわれた、「礼のはたらきとしては調和が尊いのである。むかしの聖王の道もそれでこそ立派であった。「しかし」小事も大事もそれ(調和)に依りながらうまくいかないこともある。調和を知って調和しても、礼でそこに折りめをつけるのでなければ、やはりうまくいかないものだ。」(一九)とある。

古代より礼の作用として調和の精神が、最も貴重な精神と認識されていたのであ

関連している」（九）として、中庸思想は、「現実の尊重」、「对待の思想」と密接に関係あり、「調和の尊重」であるという。そして最後に、「現代にも有効性を持つ中国思想の精髓」（一〇）と、結論している。

金谷氏は、中庸思想は、中国思想の基本的な特色である「現実の尊重」、「対の思想」と関係した「調和の尊重」であり、古来よりの伝統的な中国思想の精髓であると述べている。

筆者も、対の思想と中庸思想との密接な相関関係については、『ほどほどの大切さ—中国思想の特質・中庸に就いて—』と題して、中庸思想の構造論と政治思想的意義の概要について、小論を発表したことがある（一一）。

以上に述べたように、林氏は、中国人の基本思想として、常識の尊重を挙げ、常識の崇拜から極端思想の嫌悪感が生まれて、中庸の道の誕生に繋がったという。

「対の思想」が先に生まれたのか、中庸思想が先に生まれたのか、歴史学的に証明することは難しい問題である。両極端が存在して真ん中が存在するのであり、逆に真ん中が存在して両端が存在するのであるから、両者は不即不離の関係にあり、「鶏が先か、卵が先か」と言われれば、返答するのに困惑するのと同じである。

しかし恐らく林氏や金谷氏の指摘するように、中国人には常識の尊重や調和の精神—中庸思想が中国思想の精髓であり、中庸の精神が古来よりの最も重要な徳目である以上、常識外の行動—両極端への両面思考—「対の思想」の生まれてきた歴史的背景には、常識—中庸の精神が大きな精神的支柱となっていた、と推測できる。鶏が存在しなければ、卵が存在しないのと同じである。

赤塚氏は、「中行の中とは、狂・狷の両端に対すれば、その中間であるが、それ自体は、その両端によって規定されるものではなくて、最も中正であり、かえって狂・狷がそれによって規定される基準であり、とりわけ、いかなる場合にも、だれにも普遍的に妥当するのである。中の一字は、中極・中正・適中の三字をかね備えているのである。『中庸』の中も、「発して皆節に中る」（第一章）といい、「中なるものは天下の大本なり」（第一章）というの、この意義であり、・・・」ことに「君子の道は端を夫婦に造し、その至れるに及びてや、天地に察かなり」（第十二章）というように、その道が普遍的に妥当するということは、その力説して止まない

ころである。（一二）と述べて、中庸の中が大本であり、その中に両極端の狂と狷とが規定される、と述べている。

杜勤氏も、「はじめに」に諸学説を要約して、「中国の伝統文化を特徴付けたり、重要な哲学的概念を担ったキーワードがたくさん挙げられますが、なかでも一番注目されるのは、なんとと言っても「中」ではないかと思われれます。したがって、「中」は中国四千年歴史の集大成で、中国文化の極致と言っても言い過ぎではないと思います。まず、中国の国名はつまり「中」です。これは中華思想を浸透させた国名でした。中国とは元来、国の政治的中心、即ち王城、周囲を統率する王権の所在地を指す概念でありました。上古の時代、華夏族は黄河流域の中流に国を作り、自らが天下の中央に居ると思っていたので、中国と自称するようになったそうです。それにもない、他の地域を四方と、他の部族を「四夷」（東夷・西戎・南蛮・北狄）と呼ぶようになりました。（一三）と、真ん中である「中」の概念が先にあり、ここから四端の概念が生まれてきたと述べている。

そして中庸思想の起原論について杜勤氏は、「旗の始まりはトーテム崇拜によるもので、トーテムの標識たる旗が文字的な意匠を施されて、「中」に変形されましたが、さて、「中」を構成する各文字素が具象的にそれぞれ何を象り、そして「中」はいかなる理由に基づき、「中間」、「中央」、「中正」といった派生的の概念が生まれたのでしょうか。・・・代表的なものとしては目印説、日影説と標的・容器説の三つが挙げられます。・・・」と、中国人の原始社会におけるトーテム信仰から旗の文字化から生まれてきたとの三学説を紹介して、三学説を統合する「中」の意味として、「神話世界では、聖俗・天上界地上界を連結する宇宙軸」あり、「論理的思惟のなかでは、「中」は相対立する両極の統合を支える抽象的方法論原理となっています。」と述べている（一四）。従って同氏の説明に依れば、古代中国においては中の思想の方が、物事の両面思考—「対の思想」より早く生まれてきたと思われる。

以上述べてきた事例でも理解されるように、「対の思想」が生まれてきた歴史的背景の最大の要因として、中国思想の精髓である中庸思想を挙げることができであろう。そこで以下において、この事実を具体的資料に基づいて検証していきたい。

対の思想と中庸思想

―対の思想(両面思考)の生まれてきた

歴史的背景について(四)―

小倉正昭

中庸とは、「不偏不倚で過不及のない状態」という意味であり、常識の尊重、調和を重視する思想であり、中国思想の精髓である。中国人は、極端な理論を嫌い、バランス重んじて、中庸思想を尊重する民族である。この中国人のバックボーンである中庸を実現して維持していくために、常に両極端を視野に入れた両面思考―「対の思想」が必要条件として生まれてきた。従って「対の思想」の生まれてきた歴史的背景の最大の要因は、中国思想の精髓であり、儒教の最高徳目である中庸思想の実現と維持する必要性のためである。

キーワード： 対の思想 中庸思想 調和の精神 古代中国 現代中国

一 はじめに―中庸思想の学説整理

林語堂氏は、「私は素朴な常識を持つ人々のために本書を書いた。なぜなら常識こそ古代中国の一大特徴だったからだ。もつともこの常識も次第に見られなくなりつつあるが、・・・」(一)と、常識が中国古代よりの一大特徴であったと指摘している。林氏は、中国人の精神や人生の理想について、

「中国人は理に逆らって行動したが、人情に適合していないものは一切受け付けようとはしない。こうした情理の精神や常識の崇拜は中国人の生活理想に最も重要な意義を持っている。この結果、次章に述べる「中庸の道」が生まれたのである」(二)と述べている。また林氏は、

「中国人の人生理想の第一は、人文主義であるが、それには明確な定義がある。・・・第三に目的の達成は情理の精神または「中庸の道」によるべきこと、というものである。この「中庸の道」はまた常識の信仰とも呼ぶべきものである」(三)

と述べて、中国人の尊重する常識の崇拜から中庸思想が生まれてきたと述べている。さらに林氏は、

「常識に対する崇拜は、思想上の過激な理論に対する嫌悪となり、道徳上の過激な行動に対する嫌悪となった。この結果、自然な勢いとして「中庸の道」が誕生したのである」(四)と述べて、常識の崇拜の尊重は、過激な理論や行動に走ることへの嫌悪感となり、この結果、中庸思想が生まれたという。

以上、林語堂氏は、中国人の古代よりの常識の崇拜と中庸思想との相互関係に言及して、常識の尊重から極端な理論や行動への嫌悪感が生まれ、これが中庸思想の尊重する立場につながった、と言う。林氏は常識の尊重⇨極端思想の嫌悪⇨中庸思想の尊重と理解していて、両極端への両面思考―「対の思想」と、中庸思想との密接な関係を指摘している。

そして中庸思想を説明して、「中庸は本質的に人情の「常軌」に符合するものである」、「中庸とは「極端に走らず調和を守る」という意味である」(五)と述べて、中国人における「中庸の道」の大切さの例示として、「中国人の人生の規範であり、「中国」という国名は地理的意味だけでなく中国人の人生の規範をも指している」(六)と、中国とは「中庸の国」という意味であるとも言っている。

金谷治氏も、中国思想の特色として、「对待」の思想に続いて、「中庸」思想を挙げている。中庸思想の意義について、「孔子が高く評価し、聖王相伝ともされる中庸」(七)として、朱子の規定に従い、「中庸の中とは偏らないで過不及の無いことだ」(八)と、注釈している。中庸の現代的意義に言及して、中庸が尊重されてきた理由として、「第一に、最初に述べた現実の尊重の立場と一致する。第二には对待の思想との関係があり、対立する両端両面をしっかりと視野に入れて中庸の立場が得られるのであり、中庸の調和が尊重されたのは、中国人のこのような思想傾向と

教職員の研究活動記録（平成 23 年 1 月～平成 23 年 12 月）

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
教養教育科 小倉 正昭	「対の思想」研究史の現状と課題 —対の思想の(両面思考)の生まれ てきた歴史的背景について(序章)	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 44 巻 pp. 1-12	
小倉 正昭	対の思想と現実の尊重—対の思想 (両面思考)の生まれてきた歴史的 背景について(一)	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 44 巻 pp. 13-27	
小倉 正昭	対の思想と状況の変化—対の思想 (両面思考)の生まれてきた歴史的 背景について(二)	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 44 巻 pp. 29-49	
小倉 正昭	対の思想と広大な国土(多様な国民 性)—対の思想(両面思考)の生まれ てきた歴史的背景について(三)	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第 44 巻 pp. 51-71	
奥 貞二	アウグスティヌス「告白」の呼格形	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀 要, 第 44 巻, pp.1-7 (2011).	
西岡 将美	文章表現能力の開花を目指して —学外コンテストに挑戦して—	単著	平成 23 年度全国高専教育フ ォーラム教育研究活動発表会 概要集, 鹿児島	
西岡 将美	豊かな人間性の涵養—鈴鹿高専国 語科の挑戦—	単著	日本高専学会第 17 回年会講 演会講演論文集, 鈴鹿	
西岡 将美	鈴鹿高専における自動車無許可通 学指導	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀 要, 第 44 巻, pp.57-62	下古谷博司, 川口雅司, 西岡 将美
西岡 将美	鈴鹿高専における自転車安全運転 指導の一例	共著	日本高専学会第 17 回年会講 演会講演論文集, pp.95-96, 鈴鹿	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡 将美
西岡 将美	商店が隣接する鈴鹿高専における 四輪無許可通学指導の一例	共著	日本高専学会第 17 回年会講 演会講演論文集, pp.95-96, 鈴鹿	下古谷博司, 川口雅司, 西岡 将美, 白井達也, 柴垣寛治
西岡 将美	鈴鹿高専における自転車立哨指導	共著	平成 23 年度全国高専教育フ ォーラム教育研究活動発表会 概要集, pp.155-156 鹿児島	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡 将美
西岡 将美	鈴鹿高専における四輪無許可通学 指導の成果	共著	平成 23 年度全国高専教育フ ォーラム教育研究活動発表会 概要集, pp.251-252 鹿児島	下古谷博司, 川口雅司, 西岡 将美
久留原 昌宏	体感覚の温かさ	単著	短歌現代, 第 35 巻第 5 号, pp. 119 (2011,5) (小議会 特集・石本隆一の歌)	
久留原 昌宏	前田夕暮 —(青春)のオピニオン・ リーダー	単著	短歌現代, 第 35 巻第 6 号, pp. 40-41 (2011,6) (特集・二十世紀短歌の新人)	
安富 真一	Continued fractions for quadratic elements in formal power series	共著	Ramanujan J (2011), Vol26, pp.399-405	J. Tamura, S. Yasutomi

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
安富 真一	PDF 上の採点について	共著	第92回日本数学教育学会総会特別号	安富真一, 川本正治
安富 真一	pdf 上の採点について(採点の効率化と高度化に向けて)	共著	第17回日本高専学会	安富真一, 篠原雅史, 川本正治
安富 真一	On multidimensional continued fraction algorithm	単著	Workshop on Fractal geometry and Ergodic Theory, 北京	
安富 真一	基礎数学	共著	森北出版	上野健爾監修、高専の数学教材研究会(安富はその一員)
安富 真一	Multidimensional Farey type algorithm	単著	Workshop「数論とエルゴード理論」、金沢	
伊藤 清	正八面体より丸い八面体 2 種の正確な形について	単著	日本数学教育学会誌 93 回総会特集号 pp. 538-538 (2011)	
堀江 太郎	A simple proof of the automorphy of the classical modular functions	単著	Ueda Memorial Conference on Automorphic Forms (奈良女子大学, 2011年1月)	
川本 正治	数学が使えるようにするための小テストについて	単著	平成 23 年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表概要集, p.319-320(2011.8, 鹿児島)	
大貫 洋介	線形代数学における既習学力の定着度について	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第 44 巻, pp.19-24(2011.2)	
大貫 洋介	Repetitive algebras of finite selfinjective algebras	単著	第3回代数学若手セミナー, (2011.3), 筑波大学	
大貫 洋介	大学3年次編入学を目的とした進路支援の取り組み	共著	平成 23 年度全国高専教育フォーラム, (2011.8), 鹿児島.	大貫洋介, 安富真一, 伊藤清川本正治, 堀江太郎, 篠原雅史
大貫 洋介	大人数対象の数学授業における工夫とその実践	共著	日本高専学会第 17 回講演論文集, pp37-38, (2011.8), 鈴鹿高専	大貫洋介, 安富真一, 伊藤清川本正治, 堀江太郎, 篠原雅史
篠原 雅史	A characterization of strongly regular graphs from Euclidean representations of graphs	共著	第28回代数的組み合わせ論研究集会	篠原雅史・野崎寛
篠原 雅史	非連結グラフから得られる 2-距離集合について	単著	離散数学とその応用研究集会 2011	
篠原 雅史	PDF 上の採点について～採点の効率化と高度化に向けて～	共著	第27回日本高専学会, pp.65-66	安富真一・篠原雅史・川本正治
山崎 賢二	酸化亜鉛共存下におけるポリ塩化ビニル-ポリ塩化ビニリデンコポリマーの低温脱塩化水素特性	共著	日本化学会第 91 春季年会, 横浜, (2011.3)	岡田友彦, 須藤悟, 山崎賢二, 松沢行丘, 小須田崇, 三島彰司

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
仲本 朝基	大学編入学試験対策としての物理学講義の実践	単著	全国高専教育フォーラム, 鹿児島、教育研究活動発表概要集, pp.329-330 (2011).	
仲本 朝基	物理における大学編入学試験対策の事例報告	単著	日本高専学会, 講演論文集, 鈴鹿, pp.43-44 (2011).	
仲本 朝基	クォーク模型によるHダイバリオンの再検証	単著	日本物理学会 2011 年秋季大会, 弘前, 講演概要集, p.88 (2011).	
丹波 之宏	A Membrane Filtering Method for the Purification of Giant Unilamellar Vesicles	共著	Chem. Phys. Lipids, 164, 351-358 (2011)	Yukihiro Tamba, Hiroaki Terashima, Masahito Yamazaki
丹波 之宏	Ca ²⁺ Ion Transport through Channels Formed by α -Hemolysin Analyzed Using a Microwell Array on a Si Substrate	共著	Biosens. Bioelectron., accepted (2011)	Koji Sumitomo, Arianna McAllister, Yukihiro Tamba, Yoshiaki Kashimura, Aya Tanaka, Youichi Shinozaki, and Keiichi Torimitsu
丹波 之宏	The single GUV method reveals the antimicrobial peptide-induced pore formation in lipid membranes	共著	The 17th International Biophysics Congress (Beijing)	Yukihiro Tamba, Hiroataka Ariyama, Victor Levadny, Masahito Yamazaki
丹波 之宏	Analysis of ion channel activities in the lipid bilayer suspended over microwells on the Si substrate	共著	The 55th Annual Meeting of Biophysical Society (Baltimore)	Koji Sumitomo, Arianna McAllister, Yukihiro Tamba, Youichi Shinozaki, Keiichi Torimitsu
丹波 之宏	A Membrane Filtering Method for the Purification and concentrations of Giant Unilamellar Vesicles	共著	The 49th Annual Meeting of Biophysical Society of Japan (Himeji)	Yukihiro Tamba, Hiroaki Terashima, Masahito Yamazaki
丹波 之宏	Ca ²⁺ ion transport through alpha-hemolysin channels monitored by microwell array on Si substrate	共著	The 49th Annual Meeting of Biophysical Society of Japan (Himeji)	Koji Sumitomo, Arianna McAllister, Yukihiro Tamba, Yoshiaki Kashimura, Aya Tanaka, Youichi Shinozaki, Keiichi Torimitsu
丹波 之宏	巨大脂質膜ベシクル融合の制御	共著	2011 年 日本応用物理学会 春季	住友弘二, 河西奈保子, 田中あや, 丹波之宏, 鳥光 慶一
丹波 之宏	シリコン基板をシールする脂質二分子膜へのベシクル融合	共著	2011 年 日本応用物理学会 秋季	住友弘二, 櫻村吉晃, 田中あや, 河西奈保子, 丹波之宏, 鳥光慶一
丹波 之宏	単一 GUV 法を用いた抗菌性ペプチドのポア形成の研究と今後の展望	単著	2011 年 春 ベシクル・脂質膜勉強会 (三重大学)	
丹波 之宏	単一 GUV 法を用いた脂質膜中のポアの動的構造の研究と実験の効率化の試み	単著	NTT 物性科学基礎研究所 機能物質科学研究部 分子生体機能研究グループ セミナー (2011 年 12 月 厚木)	

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
三浦陽子	Effects of Geometrical Spin Frustration on Triangular Spin Tubes Formed in CsCrF ₄ and α -KCrF ₄	共著	Journal of the Physical Society of Japan, Vol. 80, No. 8 (2011).	Hiroataka Manaka, Toshiya Etoh, Yuta Honda, Naoki Iwashita, Kenichi Ogata, Norio Terada, Toru Hisamatsu, Masakazu Ito, Yasuo Narumi, Akihiro Kondo, Koichi Kindo, Yoko Miura
三浦陽子	Nonmagnetic impurity effect on equilateral triangle spin tube CsCrF ₄	共著	Journal of Physics: Conference Series, Vol.320, pp.012044 (1)-012044 (6) (2011).	Yoko Miura, Hiroataka Manaka
三浦陽子	Exotic ground state in triangle spin tubes	共著	Journal of Physics: Conference Series, Vol.320, pp.012043 (1)-012043 (6) (2011).	Hiroataka Manaka, Yoko Miura
三浦陽子	Nonmagnetic impurity effect on equilateral triangle spin tube CsCrF ₄	共著	International Conference on Frustration in Condensed Matter (ICFCM), P-37 (2011).	Yoko Miura, Hiroataka Manaka
三浦陽子	Exotic ground state in triangle spin tubes	共著	International Conference on Frustration in Condensed Matter (ICFCM), P-33 (2011).	Hiroataka Manaka, Yoko Miura
三浦陽子	Studies of Crystal Structure and Spin State in Diluted Triangular Spin Tube KCr _{1-x} Al _x F ₄	共著	26th International Conference on Low Temperature Physics (LT26), 11P-C017 (2011).	Yoko Miura, Hiroataka Manaka
三浦陽子	Electron Spin Resonance in Triangular Spin Tubes	共著	26th International Conference on Low Temperature Physics (LT26), 11P-C004 (2011).	Hiroataka Manaka, Yoko Miura
三浦陽子	正三角スピントューブ CsCrF ₄ の非磁性イオン置換による構造と磁性の変化	共著	日本物理学会講演概要集 第 66 巻 第 1 号 (年次大会) 第3分冊 P. 468 (2011).	三浦陽子, 岩下直樹, 尾形謙一, 真中浩貴
三浦陽子	三角スピントューブの非磁性不純物効果	共著	日本物理学会講演概要集 第 66 巻 第 1 号 (年次大会) 第3分冊 P. 507 (2011).	真中浩貴, 尾形謙一, 岩下直樹, 三浦陽子
三浦陽子	三角スピントューブ KCrF ₄ における ¹⁹ F-NMR	共著	日本物理学会講演概要集 第 66 巻 第 1 号 (年次大会) 第3分冊 P. 507 (2011).	橋本貴裕, 後藤貴行, 真中浩貴, 三浦陽子
三浦陽子	希釈三角スピントューブ KCr _{1-x} Al _x F ₄ の結晶構造とスピン状態	共著	日本物理学会講演概要集 第 66 巻 第 2 号 (2011 年秋季大会) 第3分冊 P. 400 (2011)	三浦陽子, 真中浩貴

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
三浦陽子	非磁性不純物の導入による三角スピントラップの磁気状態の変化	共著	日本物理学会講演概要集 第66巻 第2号(2011年秋季大会) 第3分冊 P. 423 (2011)	真中浩貴, 三浦陽子
三浦陽子	三角スピントラップにおける新奇な磁気状態	共著	2011年応用物理学会九州支部学術講演会(2011).	末吉 亮太, 森田 英揮, 新村 晃平, 真中 浩貴, 寺田 教男, 三浦 陽子
三浦陽子	三角スピントラップの不純物置換効果	共著	2011年応用物理学会九州支部学術講演会(2011).	森田 英揮, 末吉 亮太, 新村 晃平, 真中 浩貴, 寺田 教男, 三浦 陽子
森 誠護	CFDを用いた泳パワー測定システムの開発	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 鈴鹿高専, 講演論文集, pp.185-186, (2011.8)	森誠護, 山口航平, 近藤邦和, 下野晃
森 誠護	簡易型泳パワー測定装置の開発	共著	日本水泳・水中運動学会, 日本大学文理学部, 2011年次大会抄録論文集, pp.136-141, (2011.10).	森誠護, 下野晃, 田口正公, 田場昭一郎
森 誠護	トライアスロンにおけるレース中の血中乳酸濃度測定を試み	単著	日本コーチング学会第22回大会特別論文集, pp.50-51, (2011.11).	
Lawson, Michael E.	PRACTICE OF PRESENTATION ORIENTED CLASS IN THE ADVANCED ENGINEERING COURSE,		Kosen Kyoiku: Journal of Education in the Colleges of Technology. (Forthcoming) Institute of National Colleges of Technology. 2011	Michael E. Lawson, Kusaka, Takashi
日下 隆司	鈴鹿高専における TOEIC 対策授業の現状	単著	～私の授業～事例集 東海工学教育協会高専部会報告 pp. 26-27	
日下 隆司	TOEIC 対策授業の方法と課題	単著	第17回日本高専学会年会	

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
機械工学科 埜 克己	高専間及び地域との連携による技術者人材育成組織と方法論の構築	共著	平成23年度 全国高専教育フォーラム 教育研究活動発表概要集, pp.407-408, (2011.8)	江崎尚和, 埜克己, 森邦彦, 齊藤正美
埜 克己	産学官連携による技術者育成の教科書「事例に学ぶエンジニアリングデザイン」の作成	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.83-84, (2011.8)	埜克己, 江崎尚和, 森邦彦, 齊藤正美
末次 正寛	応力勾配による超音波の偏向に関する研究	共著	応力・ひずみ測定と強度評価シンポジウム講演論文集(第42回)、pp.81-84, (2011)	末次正寛, 辻本晃大
末次 正寛	鈴鹿8耐用ロードレースバイクの改良型スイングアーム性能評価	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.165-166, (2011.8)	谷川義之, 末次正寛, 埜克己, 大西敬紀
末次 正寛	超高速度カメラを用いた単発超音波の可視化について	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.167-168, (2011.8)	末次正寛, 庭木善正
末次 正寛	ポリカーボネート板の破壊形態へ影響を及ぼす種々の要因について	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.169-170, (2011.8)	末次正寛, 大西悠揮, 森雅史
末次 正寛	超音波の偏向を利用した音弾性定数測定を試み	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.171-172, (2011.8)	末次正寛, 辻本晃大
末次 正寛	Debye 環によるショットピーニング処理材の応力勾配測定	共著	X線材料強度に関するシンポジウム講演論文集、45巻、pp.88-93 (2011)	佐々木敏彦, 嘉村直哉, 末次正寛, 福田和人
近藤 邦和	鈴鹿高専専攻科1年工学実験におけるデザイン教育	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.19-20, (2011.8)	下古谷博司, 近藤邦和, 花井孝明, 伊東真由美, 板谷年也
近藤 邦和	CFDを用いた泳パワー測定システムの開発	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.185-186, (2011.8)	森誠護, 山口航平, 近藤邦和, 下野晃
民秋 実	制振性を有するGFRPの開発とその性能評価	共著	日本機械学会 東海支部 第60期総会・講演会, (2011.3)	渥美 亮一, 民秋 実
民秋 実	使用済みデニム生地を強化材とした複合材料の強度特性	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.141-142, (2011.8)	川邊 利紀, 民秋 実
民秋 実	ガラス繊維強化複合材料平板の円孔周りの繊維状態が強度特性に及ぼす影響	共著	日本機械学会 九州支部 宮崎講演会講演論文集, No.118-3, pp71-72 (2011.9).	民秋 実, 高野 典子

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
藤松 孝裕	学生と技術者のための水力学問題演習	共著	パワー社 (2011.4) .	中村克孝, 檀和秀, 増淵寿, 佐藤紳二, 坪根弘明, 上代良文, 近藤邦和, 菊川裕規, 野沢正和, 早水康隆, 江頭竜, DAVAA GANBAT, 見藤歩, 小谷明, 高尾学, 小杉淳, 本村真治, 藤松孝裕, 加藤学, 矢口久雄, 大北裕司, 柴田裕一, 白野啓一, 岡田敬夫
藤松 孝裕	学修効果向上のための授業改善の試み	単著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.63-64 (2011.8).	藤松孝裕
藤松 孝裕	二流体ノズルを用いた噴霧冷却	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.157-158 (2011.8).	川越やか, 藤松孝裕
藤松 孝裕	教育用スターリングサイクル性能試	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.159-160 (2011.8).	清原万菜, 藤松孝裕
藤松 孝裕	液浸法について	単著	第 7 回微粒化セミナー (手軽にできる微粒化計測), 日本エネルギー学会・日本液体微粒化学会, pp. 19-36 (2011.12).	藤松孝裕
白井 達也	Moodle のブログを有効活用するための四つの改良	単著	Moodle Moot Japan 2011 in Kochi	白井達也
白井 達也	落下物を受動的にキャッチング可能な三リンク柔軟関節ロボットアームの開発/コンプライアンスリミッターの提案	共著	日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会 (ROBOMECH2011)	松岡達彦, 白井達也, 打田正樹
白井 達也	全方向移動可能なダイレクトモーターカーの動作原理の解析	共著	日本機械学会 ロボティクス・メカトロニクス講演会 (ROBOMECH2011)	一圓健太郎, 白井達也, 打田正樹
白井 達也	デジタルネイティブ世代の能力を开花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築の提案と事例紹介	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.11-12, (2011.8)	白井達也, 渥美清隆, 石原茂宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤明
白井 達也	デジタルネイティブ世代の能力を开花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築とネットワーク化による高専力強化の提案	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.117-118, (2011.8)	白井達也, 渥美清隆, 石原茂宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤明, 原島秀人
白井 達也	商店が隣接する鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の一例	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.95-96, (2011.8)	下古谷博司, 川口雅司, 西岡将美, 白井達也, 柴垣寛治

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
白木原 香織	EBSD 法による圧電セラミックスのドメインスイッチング挙動の評価	共著	日本機械学会東海学生会第42回卒業研究発表講演会講演論文集, (2011, 3)	左高直輝, 若園零二, 野々山晃彰, 白木原香織, 田中啓介, 木村雅彦, 榊千春, 奥山幸治, 中村玄徳, 來海博央
白木原 香織	PLD 法による機能性薄膜の創製および材料特性評価	単著	第9回全国高専テクノフォーラム p. 71 (2011, 8) .	白木原 香織
白木原 香織	PLD 法による形状記憶合金薄膜の創生および材料特性評価	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp. 191-192 (2011, 8) .	浅井晟也, 白木原香織, 柴垣寛治
白木原 香織	Fatigue Failure Behavior of Piezoelectric Ceramics	共著	15th US-Japan Seminar on Dielectric and Piezoelectric Ceramics, pp. 273-276 (2011, 10)	Chiharu Sakaki, Motonori Nakamura, Masahiko Kimura, Takehiro Konoike, Hiroshi Takagi, Kaori Shirakihara, Hirohisa Kimachi, Keisuke Tanaka
白木原 香織	PZT セラミックスにおけるクラック進展挙動に及ぼすドメインの影響	共著	第31回エレクトロセラミックス研究討論会 英文プロシーディングス集, pp. 4-7 (2011, 10)	中村玄徳, 榊千春, 木村雅彦, 鴻池健弘, 鷹木洋, 田中啓介, 來海博央, 白木原香織
打田 正樹	Development of rehabilitation training support system of upper limb motor function for personalized rehabilitation	共著	International Journal of Applied Electromagnetics and Mechanics, Volume 36, Number 1-2, pp.109-119, (2011.6)	Masaki Uchida, Yoshifumi Morita, Masaya Magasaki, Hiroyuki Ukai, Nobuyuki Matsui
打田 正樹	人間機械協調型システムのためのインピーダンスモデルを用いた切換え制御	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第44巻, pp.31-36, (2011).	打田正樹
打田 正樹	パワーアシスト搬送装置のためのフィードフォワード入力を用いた振動低減制御	共著	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'11講演論文集, 2A1-B03(1)-(4), (2011.6)	山本優一, 小倉佑太, 武重道大, 打田正樹, 森田良文, 原進
打田 正樹	インホイールモータシステムを用いた移動車両に関する研究, -スプリングレート及びダンピングレートの設計とピッチ角の評価 -	共著	日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会'11講演論文集, 1P1-J07(1)-(3), (2011.6)	打田正樹, 森田良文
打田 正樹	自動車エンジン用電磁駆動バルブのための加振器の製作とバルブ制御系のロバスト性の検証	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.161-162, (2011.8)	伊丹翔一, 打田正樹
打田 正樹	人間機械協調型搬送システムにおける切換え制御	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.231-232, (2011.8)	寺田祐基, 打田正樹

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
電気電子工学科				
北村 登	電気電子工学科 1 年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.25-26 (2011.8).	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和, 板谷年也
北村 登	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.49-50 (2011.8).	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
近藤 一之	学生により分かりやすい電子回路教育を目指した取り組みの報告	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要第44巻, pp.37-43 (2011).	近藤一之, 鈴木昌一, 山田太, 板谷 年也, 奥野 正明
大津孝佳	電源ケーブルの静電気対策による電圧変動の低減	共著	電子情報通信学会 2011 年総合大会(2011.3) A-10-5	大津孝佳, 松本 頼興
大津孝佳	電子デバイスの静電気対策技術と電磁気学教育--サイエンスカフェ(電荷・電流・電磁波)の試み	単著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第 44 巻, pp.45-49 (2011)	
大津孝佳	Complexity of Damage Induced by ESD of GMR Head	共著	IMCIC 2011 (The 2nd International Multi-Conference on Complexity, Informatics and Cybernetics, (2011.3), Orlando, Florida USA APEMC 2011 Asia-Pacific EMC	Takayoshi Ohtsu, Koji Kataoka, Shoji Natori
大津孝佳	Characteristic of Radiated Electromagnetic wave by ON/OFF discharge on Sub-micron gap.	共著	Symposium, (2011.5) Jeju, Korea	Takayoshi Ohtsu, Shunsuke Okada, Shota Ito, Shogo Imai, Ryota Oka, Kazuyuki Tanitsuji, Taro Takai, Hiromichi Fujikawa
大津孝佳	電子デバイス/HDD の ESD 現象と対策	単著	ESD NEXT 2011 次世代電子デバイスの静電気対策技術シンポジウム (2011.8) 名古屋	
大津孝佳	知的財産教育による問題発見・解決能力の向上	単著	第 17 回日本高専学会年会 B1-5(2011.8) 鈴鹿高専	
大津孝佳	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の要請を目指したカリキュラム改定	共著	第 17 回日本高専学会年会 B2-3 (2011.8) 鈴鹿高専	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
大津孝佳	各種イオン発生源の減衰特性	共著	第 17 回日本高専学会年会 P60 (2011.8) 鈴鹿高専	今井省吾, 大津孝佳

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
大津孝佳	サブミクロンギャップにおける放電特性と放射電磁波に関する研究	共著	第 17 回日本高専学会年会 P62 (2011.8) 鈴鹿高専	藤川啓道,大津孝佳
大津孝佳	電源ケーブルの静電気対策による電圧変動の低減	共著	平成 23 年度電気関係学会東海支部連合大会 Po1-26(2011.9)	"今井省吾, 岡田俊祐, 林田健太郎, 見並憲, 安井大貴, 中谷祥平, 池宮俊貴, 藤川啓道, 大津孝佳, 松本頼興
大津孝佳	静電気放電によるハードディスク内の電磁波	共著	平成 23 年度電気関係学会東海支部連合大会 K4-9 (2011.9)	大津 孝佳, 高井太郎, 谷辻和幸, 見並憲, 今井 省吾, 藤川 啓道
大津孝佳	Characteristic of Radiated Electromagnetic wave by ON/OFF discharge on Sub-micron gap.	共著	33th Annual EOS/ESD Symposium, 6A.1, ESD Association (2011.9) Anaheim, CA,USA	Takayoshi Ohtsu, Shunsuke Okada, Shota Ito, Shogo Imai,Ryota Oka, Kazuyuki Tanitsuji, Taro Takai, Hiromichi Fujikawa
大津孝佳	電源ケーブルの静電気対策による電圧変動の低減	共著	第21回 EOS/ESD/EMCシンポジウム, 21E-22,日本電子部品信頼性センタ (2011.11)	"大津 孝佳,岡田 俊祐,伊藤 翔太,今井 省吾,岡亮太,谷辻 和幸,高井 太郎,藤川 啓道, 中谷祥平, 池宮俊貴, 今井省吾, 藤川啓道, 松本頼興
大津孝佳	サブミクロンギャップでのオン/オフ放電による電磁波特性	共著	第21回 EOS/ESD/EMCシンポジウム、日本電子部品信頼性センタ(2011.11)	大津 孝佳,岡田 俊祐,伊藤 翔太,今井 省吾,岡亮太,谷辻 和幸、高井 太郎、藤川 啓道
大津孝佳	Study on ESD Phenomena of Magnetic Head by Ins Pulse ESD	共著	IEEJ Transactions on Fundamentals and Materials, Vol.131 No.11, p938-942 (2011)	Takayoshi Ohtsu, Koji Kataoka
川口雅司	鈴鹿高専における自動車無許可通学指導	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第 44 巻, pp.57-62	下古谷博司, 川口雅司, 西岡將美, 白井達也, 柴垣寛治
川口雅司	商店が隣接する鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の一例	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.95-96, 鈴鹿	下古谷博司, 川口雅司, 西岡將美, 白井達也, 柴垣寛治
川口雅司	鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の成果	共著	平成 23 年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表会概要集, pp.251-252 鹿児島	下古谷博司, 川口雅司, 西岡將美
川口雅司	Collaborative Activities of Layered Neural Network	共著	International Conference on Computers, Networks, Systems, and Industrial Engineering (CNSI 2011), pp.417-422	Naohiro Ishii, Toshinori Deguchi, Masashi Kawaguchi, and Hiroshi Sasaki

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
川口雅司	Dynamic Learning of Neural Network by Analog Electronic Circuits	共著	KES 2011, Part IV, LNAI 6884, pp. 73--79. Springer, Heidelberg (2011)	Masashi Kawaguchi, Takashi Jimbo, and Naohiro Ishii
川口雅司	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.49-50 (2011)	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田 一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
川口雅司	誤差逆伝搬法を用いた掌紋による個人認証の研究	共著	平成 23 年度電気関係学会東海支部連合大会, Po2-40	三崎大輔, 川口雅司
辻 琢人	Sol-Gelを用いたシリコン pn 接合作製プロセスの簡略化	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, C1-4	長岡史郎, 辻琢人, 中村篤博, 平岡直也, 若原昭浩
辻 琢人	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 B2-3	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
辻 琢人	シリコン pn 接合ダイオード作製実験の構築	共著	第 150 回教育工学研究会	蜂谷海, 辻琢人, 服部大輔, 長岡史郎, 中村篤博, 若原昭浩
辻 琢人	シリコン pn 接合ダイオード作製実験の構築	共著	計測自動制御学会中部支部, 教育工学論文集, Vol.34, pp. (2011). (現時点で掲載ページ未定)	辻琢人, 蜂谷海, 服部大輔, 長岡史郎, 中村篤博, 若原昭浩
西村 一寛	Vibrational circuit breaker using ferromagnets and repulsive magnets	共著	IEEE Trans. Magn., Vol. 47 (10), pp.2808-2810 (Oct. 2011).	K. Nishimura, M. Inoue
西村 一寛	「断電」のアンケート結果紹介	単著	第 12 回九州・山口・沖縄磁気セミナー, pp.29-30 (2011).	西村一寛
西村 一寛	環境メータのためのフェライトナノ粒子凝集体の合成	共著	東京工業大学 応用セラミックス研究所 共同利用研究報告書 No.15, pp.159-160 (2011).	西村一寛, 松下伸広
西村 一寛	特集 環境発電技術の現状・企画の意図	共著	まぐね Vol. 6 (3), p.131 (Jun. 2011).	稲葉信幸, 田島克文, 谷山智康, 西村一寛
西村 一寛	Synthesis of ferrite nanoparticle aggregate and their characteristics	共著	Moscow International Symposium on Magnetism MISM 2011 (23 Aug. 2011), Moscow, Russia 23PO-I-32, p.411.	K. Nishimura, R. Mori, N. Matsushita, M. Inoue
西村 一寛	Vibrational circuit breaker using ferromagnets and repulsive magnets	共著	International Magnetism Conference Intermag 2011(26 Apr. 2011), Taipei, Taiwan, BT-05.	K. Nishimura, M. Inoue

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
西村 一寛	振動エネルギーを収穫して駆動・発電するエネルギー・ハーベスターの開発	共著	電気学会マグネティックス研究会 (2011年9月19,20日), 三重 KKR 鳥羽 いそぶえ荘, MAG-11-52, pp.1-4.	西村一寛, 山脇昂, 井上光輝
西村 一寛	フェライトナノ粒子の室温合成とその凝集体の特性	共著	第35回日本磁気学会学術講演会 (2011年9月27-30日), 朱鷺メッセ:新潟コンベンションセンター, 27pE-15, p.92.	西村一寛, 森竜馬, 松下伸広, 井上光輝
西村 一寛	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第17回年会 (2011年8月27, 28日), 鈴鹿工業高等専門学校.	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
西村 一寛	エネルギー・エレクトロニクス・エコロジーが掛け合わせられた E-cube システム・発電機の開発	共著	平成22年度分高専連携教育研究プロジェクト成果報告会 (2011年8月10日), 豊橋技術科学大学, 2-22.	山脇昂, 西村一寛, 井上光輝, 橋本良介
西村 一寛	フェライトナノ粒子凝集体の合成とその特性	共著	平成23年電気学会全国大会 (2010年3月18日), 大阪大学 豊中キャンパス, 2-154, Vol.2, p.176.	森竜馬, 西村一寛
奥野正明	学生によりわかりやすい電子回路教育を目指した取り組みの報告	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要 第44巻, pp.37-43	近藤一之, 鈴木昌一, 山田太, 板谷年也
奥野正明	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の育成を目指したカリキュラム改訂	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.49-50	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
柴垣 寛治	液体窒素中レーザーアブレーションプラズマによる表面改質	共著	第16回高専シンポジウム講演要旨集, p350 (2011, 1).	森厚人, 石田真之, 柴垣寛治
柴垣 寛治	鈴鹿高専における自転車立哨指導	共著	平成23年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表会概要集, pp.155-156 (2011,8).	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡将美
柴垣 寛治	商店が隣接する鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の一例	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.95-96 (2011,8).	下古谷博司, 川口雅司, 西岡将美, 白井達也, 柴垣寛治
柴垣 寛治	鈴鹿高専における自転車安全運転指導の一例	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.97-98 (2011,8).	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡将美

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
柴垣 寛治	電気電子工学科 1 年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.25-26 (2011,8).	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和
柴垣 寛治	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.49-50 (2011,8).	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
柴垣 寛治	PLD 法による形状記憶合金薄膜の創生および材料特性評価	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.191-192 (2011,8).	浅井晟也, 白木原香織, 柴垣寛治
柴垣 寛治	Synthesis and characterization of Ti-Ni shape memory alloy thin films by pulsed laser deposition	共著	The 11th Conference on Laser Ablation, p-275 (2011,11).	Kanji Shibagaki, Kota Kawano, Atsuto Mori
山田伊智子	Fundamental Study on Organic Solar Cells based on Soluble ZnPc	共著	2011 International Conference on Solid State Devices and Materials (2011.9)	Ichiko Yamada, Masashi Umeda, Yasuhiko Hayashi, Tetsuo Soga and Norio Shibata

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
電子情報工学科 桑原裕史	漏えい電波を活用した制御に関する研究	共著	創造性を育む「卒業研究」集 平成22年度版 国立高等専門学校機構	桑原裕史 野田美春
井瀬 潔	Arduino, XBee を用いたワイヤレス温度計測システムの構築	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第44巻, pp.51-56 (2011).	伊藤明, 箕浦弘人, 井瀬潔
伊藤明	Arduino, XBee を用いたワイヤレス温度計測システムの構築	共著	鈴鹿工業高等専門学校 紀要, 第44巻, pp.51-56 (2011).	伊藤明, 箕浦弘人, 井瀬潔
伊藤明	デジタルネイティブ世代の能力を 開花させる Moodle を利用した 学校ポータルサイト構築の提案 と事例紹介	共著	日本高専学会 第17回年会 予稿集 (口頭発表)	白井達也, 渥美清隆, 石原茂 宏, 青山俊弘, 浦尾 彰, 伊藤 明
伊藤明	デジタルネイティブ世代の能力を 開花させる Moodle を利用した 学校ポータルサイト構築とネット ワーク化による高専力強化の 提案	共著	日本高専学会 第17回年会 予稿集 (ポスターセッション)	白井達也, 渥美清隆, 石原茂 宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤 明, 原島秀人
伊藤明	Arduino マイコンを用いたリニア アクチュエータコントローラ の開発	共著	計測自動制御学科 第148 回教育工学研究会 (口頭発表)	伊藤雄馬, 伊藤明, 梅澤良介, 浦尾彰
田添 丈博	比喩表現に属性が明示された場 合の比喩性に与える影響とコン ピュータモデルの検討	共著	言語処理学会第17回年次大 会 F4-4 (2011, 3)	田添丈博, 椎野努
田添 丈博	プログラミングを中心とした課 外活動の改革	共著	日本高専学会第17回年回講 演会講演論文集, pp.69-70 (2011)	田添丈博, 箕浦弘人, 青山俊 弘, 浦尾彰, 西村吉弘
田添 丈博	機械翻訳文言い換えシステムに おける曖昧一致文節の導入	共著	平成23年度 電気関係学会 東海支部連合大会 G5-6 (2011, 9)	鈴木良生, 田添丈博, 椎野努
田添 丈博	資産最適化のための株式自動売 買プログラムの開発と評価	共著	計測自動制御学会中部支部 第150回教育工学研究会 (2011, 11)	川瀬明日香, 田添丈博
箕浦 弘人	鈴鹿高専における電子系実験室 のクライアント PC の更新	共著	高等専門学校情報処理教育 研究発表会論文集, 第31号, pp. 282-285 (2011).	箕浦弘人, 青山俊弘, 西村吉 弘, 森岡晶子
箕浦 弘人	Arduino, XBee を用いたワイヤレ ス温度計測システムの構築	共著	鈴鹿工業高等専門学校 紀 要, 第44巻, pp.51-56 (2011).	伊藤明, 箕浦弘人, 井瀬潔
青山俊弘	Growth defects resulting from inhibiting ERG20 and RAM2 in Candida glabrata.	共著	FEMS Microbiol Lett. 317:1, 27-33. (2011).	Hironobu Nakayama, Keigo Ueno, Jun Uno, Minoru Nagi, Koichi Tanabe, Toshihiro Aoayam, HirojiChibana, Martin Bard.

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
青山俊弘	Transcription factors CgUPC2A and CgUPC2B regulate ergosterol biosynthetic genes in <i>Candida glabrata</i>	共著	Gene To Cells, 16, 80-89. (2011)	Minoru Nagi, Hironobu Nakayama, Koichi Tanabe, Martin Bard, Toshihiro Aoyama, Makoto Okano, Satoru Higashi, Keigo Ueno, Hiroji Chibana, Masakazu Niimi, Satoshi Yamagoe, Takashi Umeyama, Susumu Kajiwara, Hideki Ohno, Yoshitsugu Miyazaki,
青山俊弘	Feedback/Comment system for WEKO Repository	共著	The 6th Annual Conference on Open Repositories, Austion, USA (2011/6)	Toshihiro Aoyama, Kazutsuna Yayaji
青山俊弘	New Function of the Institutional Repository as Departmental Show Cases	共著	The 6th Annual Conference on Open Repositories, Austion, USA (2011/6)	Kazutsuna Yamaji, Toshihiro Aoyama, Daisuke Ikeda, Takao Namiki
青山俊弘	リポジトリシステム WEKO のコンテンツ再利用環境 (SarabiWEKO)の開発,	共著	情報処理学会 第104回情報基礎とアクセス技術研究会 (第41回デジタル図書館ワークショップ), (2011/11)	青山俊弘, 山地一禎, 池田大輔, 行木孝夫
青山俊弘	病原因子のデータベース構築をめざした <i>Candida glabrata</i> の体系的遺伝子組み換え体ライブラリの作成	共著	第55回日本医真菌学会総会, (2011/11)	知花博治, 上野圭吾, 青山俊弘, 中山浩伸, 宇野潤
青山俊弘	クラウド・ストレージサービスにおける暗号化手法の提案	共著	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会講演論文集	山野泰章, 青山俊弘
青山俊弘	ソフトウェア部品自動推薦システムの改良	共著	平成23年度電気関係学会東海支部連合大会講演論文集	前田達憲, 青山俊弘
青山俊弘	デジタルネイティブ世代の能力を開花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築の提案と事例紹介	共著	日本高専学会第17回年会, A1-3, (2011/8)	白井達也, 渥美清隆, 石原茂宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤明
青山俊弘	プログラミングを中心とした課外活動の改革	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.69-70, (2011/8).	田添文博, 箕浦弘人, 青山俊弘, 浦尾彰, 西村吉弘
浦尾彰	熟達度の違いが例題学習の効果に及ぼす影響	共著	工学教育, Vol.59, No.6, pp.86-90 (2011).	浦尾彰・伊藤慎太郎・青木駿介・林勇吾
浦尾彰	デジタルネイティブ世代の能力を開花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築の提案と事例紹介	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, 2011, pp. 11-12.	白井達也, 渥美清隆, 石原茂宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤明
浦尾彰	プログラミングを中心とした課外活動の改革	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, 2011, pp. 69-70.	田添文博・箕浦弘人・青山俊弘・浦尾彰・西村吉弘

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
浦尾 彰	デジタルネイティブ世代の能力を 開花させる Moodle を利用した 学校ポータルサイト構築とネット ワーク化による高専力強化の 提案	共著	日本高専学会第 17 回年会講 演会講演論文集, 2011, pp. 117-118.	白井達也, 渥美清隆, 石原茂 宏, 青山俊弘, 浦尾彰, 伊藤 明, 原島秀人
浦尾 彰	Source Orientation in Communication with a Conversational Agent	共著	International Conference on Intelligent Virtual Agents 2011	Hayashi, Y., Kryssanov, V, Miwa, K., Huang, H., Urao, A., and Ogawa, H.
和田 孝之	アクティブマスダンパに対する 故障検出フィルタ	共著	システム制御情報学会論文 誌, Vol. 25, No. 3 (2012,03), 掲載予定	和田孝之, 藤崎泰正, Cesar Diez Pachas Antonio
和田 孝之	線形確率近似法に対する停止則	共著	システム制御情報学会論文 誌, Vol. 25, No. 2 (2012,02), 掲載予定	和田孝之, 井溪崇充, 藤崎泰 正
和田 孝之	ロバスト凸最適化のためのラン ダマイズドアルゴリズム	共著	計測と制御, Vol. 50, No. 11, pp. 950-955 (2011.11)	藤崎泰正, 和田孝之
和田 孝之	ランダマイズドアルゴリズムに よるロバスト制御系解析・設計	共著	システム/制御/情報, Vol. 55, No. 5, pp. 181-188 (2011.05)	和田孝之, 藤崎泰正
和田 孝之	Expected Squared Estimation Error of Stochastic Approximation in Finite Samples	共著	Proceedings of the 42th ISCIE International Symposium on Stochastic Systems Theory and Its Applications, pp. 283-286, Okayama, Japan (2011.05)	Takayuki Wada and Yasumasa Fujisaki
和田 孝之	線形方程式に対する確率近似法 と停止則	共著	第 54 回 自動制御連合講演 会講演論文集, pp. 648-649, 豊橋 (2011.11)	藤崎泰正, 和田孝之
和田 孝之	確率凸最適化に対する停止則	共著	第 40 回 制御理論シンポジ ウム資料, pp. 297-300, 大阪 (2011.09)	和田孝之, 藤崎泰正
和田 孝之	多次元確率近似法の二乗平均誤 差解析	共著	第 55 回 システム制御情報 学会研究発表講演会講演論 文集, pp. 221-222, 大阪 (2011.05)	和田孝之, 藤崎泰正
和田 孝之	確率最適化に対する非漸近的な 収束率解析	共著	第 11 回 計測自動制御学会 制御部門大会資料, SY0004/11/0000-18811, 沖縄 (2011.03)	和田孝之, 藤崎泰正

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
生物応用化学科 生貝 初	金属材料表面への微生物付着とそれが引き起こす工学的諸問題について	共著	高温学会誌, 第 37 巻, pp. 17-24, 2011	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
生貝 初	金属材料による細菌の増殖抑制	共著	軽金属, 第 61 巻, pp. 160-166, 2011	生貝 初, 兼松秀行, 黒田大介
生貝 初	バイオフィルムと金属材料	共著	防錆管理, 第 55 巻, pp. 369-377, 2011	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
生貝 初	材料が発現する抗菌性のメカニズムと抗感染性	共著	バイオマテリアル-生体材料-, 第 29 巻, pp.232-239, 2011	生貝 初, 兼松秀行
生貝 初	海洋環境に浸漬した種々の金属材料表面への生物付着	共著	第 16 回高専シンポジウム, 講演要旨集, p. 142, 2011(米子)	小松真也, 鎌倉 渚, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
生貝 初	表面改質による微生物付着の抑制	共著	第 16 回高専シンポジウム, 講演要旨集, p. 141, 2011 (米子)	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝初, 兼松秀行
生貝 初	コレラ菌溶血毒が持つ 2 つのレクチンドメインの糖結合性	共著	第 16 回高専シンポジウム, 講演要旨集, p. 143, 2011 (米子)	山本大貴, 奥山 歩, 生貝初, 大石祐司, 飯村兼一, 菅波晃子, 田村 裕
生貝 初	標的細胞膜上でコレラ菌溶血毒の孔状集合体形成を高める膜成分や膜の状態	共著	第 16 回高専シンポジウム, 講演要旨集, p. 144, 2011 (米子)	奥山 歩, 山本大貴, 生貝初, 大石祐司, 飯村兼一, 菅波晃子, 田村 裕
生貝 初	海洋環境中における金属材料と付着微生物の関係	共著	材料と環境 2011, 講演集, pp. 223-224, 2011	黒田大介, 間世田英明, 生貝初, 鎌倉 渚, 兼松秀行
生貝 初	金属材料の微生物付着におよぼすひずみの影響	共著	日本高専学会第 17 回年会, 講演論文集, pp. 291-292, 2011	横川さおり, 鎌倉 渚, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
生貝 初	鉄イオンによるバイオフィルムの成長制御	共著	日本高専学会第 17 回年会, 講演論文集, pp. 315-316, 2011	神崎拓也, 黒田大介, 兼松秀行, 生貝 初
生貝 初	細菌由来孔形成毒素の膜侵入モデル	共著	日本高専学会第 17 回年会, 講演論文集, pp. 317-318, 2011	清水頌平, 生貝 初
生貝 初	各種金属材料への汚損生物の付着	共著	日本高専学会第 17 回年会, 講演論文集, pp. 239-240, 2011	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝初, 兼松秀行
生貝 初	金属元素による生物汚損制御の可能性	共著	2011 電気化学会秋季大会, 招待講演, 講演要旨集, p. 297, 2011	生貝 初, 黒田大介, 兼松秀行
生貝 初	伊勢湾岸海洋環境中への各種金属材料の浸漬試験と生物付着	共著	2011 電気化学会秋季大会, 講演要旨集, p. 299, 2011	黒田大介, 鎌倉 渚, 兼松秀行, 生貝 初

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
生貝 初	いくつかの溶射材についての海水環境における生物付着性の検討	共著	2011 電気化学会秋季大会, 講演要旨集, p. 298, 2011 (新潟)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝初, 岡留寛人
生貝 初	いくつかの複合酸化物の海水環境におけるマイクロ付着性評価について	共著	2011 電気化学会秋季大会, 講演要旨集, p. 298, 2011 (新潟)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝初, 横山誠二
生貝 初	A seesaw model for membrane insertion of Vibrio cholerae hemolysin	共著	International Union of Microbiological Societies 2011 Congress, P-BA07-99, 2011 (Sapporo)	Hajime Ikegai, Ken-ichi Iimura, Yushi Oishi, Akiko Suganami, Yutaka Tamura and Tadakatsu Shimamura
生貝 初	いくつかの溶射皮膜の海水中における微生物付着について	共著	第 58 回材料と環境討論会, 講演集, pp. 127-128, 2011	黒田大介, 岡留寛人, 兼松秀行, 生貝初, 桐原聡秀
生貝 初	伊勢湾岸の海洋環境中での付着微生物と金属材料の関係	共著	第 58 回材料と環境討論会, 講演集, pp. 125-126, 2011	黒田大介, 鎌倉 渚, 横川さおり, 生貝初, 兼松秀行
生貝 初	金属酸化物に対する海洋浸漬中での生物付着の影響	共著	第 55 回日本学術会議材料工学連合講演会講演論文集 p.216, 2011	幸後 健, 神崎拓也, 黒田大介, 和田憲幸, 兼松秀行, 生貝初
生貝 初	金属材料表面に形成される緑膿菌のバイオフィルムとその形成機構のモデル化	単著	第 162 回日本鉄鋼協会秋季講演大会 シンポジウム「バイオフィルムおよび微生物が材料に及ぼす影響」、材料とプロセス (第 161 回大会春季講演大会において開催予定だったため抄録未掲載), 2011	生貝 初
生貝 初	Action of Vibrio cholerae hemolysin on lipid monolayers on phosphate buffer solution	共著	2011 Pusan-Gyeongnam/Kyushu-Seibu Joint Symposium On High Polymers (15th) and Fibers(13th), PA-47, 2011(Busan)	Hiroshige Seto, Hajime Ikegai, Takayuki Narita, Yushi Oishi
生貝 初	Biofouling of various metal oxides in marine environment	共著	Abstracts of the Asia-Pacific Interdisciplinary Research Conference, p.48 Nov 2011	T. Kohgo, D.Kuroda, N.Wada, H.Ikegai and H.Kanematsu
下野 晃	Adsorption of Amido black on Okara	共著	MEDICINE AND BIOLOGY, Vol.155,No.12,pp.871-874	Hiroshi SHIMOFURUYA, Nagisa HASEGAWA, Akira SHIMONO and Yoshihiko KUNIEDA
下野 晃	マイクロ波加熱法によるオカラ液状化条件の検討	共著	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.1-4, 2011	下古谷博司, 内田享佑, 国枝義彦, 高木康之, 林征雄, 鈴木郁功
下野 晃	オカラによるメチルオレンジの吸着	共著	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.5-8, 2011	下古谷博司, 下野晃, 国枝義彦

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
下野 晃	廃棄系バイオマスの液状化率による比較	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.253-254, 鈴鹿	下古谷博司, 衛藤昂, 下野晃, 国枝義彦
下野 晃	固体酸による廃棄系バイオマスの液状化	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.251-252, 鈴鹿	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦
下野 晃	オカラによる Amido Black 10B 色素の吸着除去	共著	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p385 米子	下古谷博司, 長谷川渚, 正木裕士, 下野晃, 国枝義彦
下野 晃	オカラによる泥水の凝集沈殿	共著	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p386 米子	下古谷博司, 山本康輝, 下野晃, 国枝義彦
下野 晃	固体酸によるオカラの液状化	共著	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p387 米子	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦
下野 晃	オカラによるメチルオレンジの吸着	共著	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p388 米子	下古谷博司, 正木裕士, 長谷川渚, 下野晃, 国枝義彦
高倉 克人	生体膜モデルから増殖型人工細胞へ	共著	実験医学増刊, 29 巻 7 号, pp. 26-34	豊田太郎・菅原正・鈴木健太郎・高倉克人・栗原顕輔
高倉 克人	両親媒性トリスマレイミド誘導体の形成する会合構造	共著	日本化学会第 9 1 回春季年会 3F5-08	高倉克人・稲垣直哉
高倉 克人	鈴鹿高専における半経験的分子軌道計算ソフトウェア「Scigress MO Compact」の座学・実習への適用	共著	日本高専学会第 17 回年会予稿集, pp. 29	高倉克人・長原滋
高倉 克人	反応活性膜分子間の長鎖移動にともなうジャイアントベシクルの動的挙動	共著	第 22 回基礎有機化学討論会 2P090	高倉克人・山本隆浩
小川 亜希子	電気炉酸化スラグ溶出成分の植物プランクトンを用いた影響評価	共著	第 161 回鉄鋼協会春季大会、材料とプロセス、CAMP-ISIJ Vol.24(2011) p 101	高橋利幸, 横山誠二, 兼松秀行, 小川亜希子
小川 亜希子	哺乳類動物細胞の培養系を利用した鉄鋼・めっき加工材料の物性評価	共著	第 161 回鉄鋼協会春季大会、材料とプロセス、CAMP-ISIJ Vol.24(2011) p 9 1 - 9 2	小川亜希子, 兼松秀行, 樋尾勝也
小川 亜希子	植物プランクトンを用いた水域使用時における電気炉スラグの安全性評価	共著	日本水環境学会年会 (2011.3.18-20)、北海道大学 (北海道)	高橋利幸、小倉優加、横山由佳、高橋嘉夫、横山誠二、兼松秀行、小川亜希子
小川 亜希子	チタン-ニッケル合金のチタン含有率の変動と細胞および生体応答との関係	共著	JAACT2011 (2011. 7. 22-23)、東京大学 (東京)	小川亜希子、赤塚涼太、玉内秀一、樋尾勝也、兼松秀行
小川 亜希子	植物由来の多糖フルクタンを用いた、無血清かつ DMSO 不含の細胞凍結液の開発	共著	JAACT2011 (2011. 7. 22-23)、東京大学 (東京) 0	清水雅史、水井慎也、柳原佳奈、小川亜希子、小林恭一、大浦剛、森山展行、安川沙織、寺田聡

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
小川 亜希子	細胞の凍結保存液および凍結保存方法	共著	特願 20 11 - 106530 (2011.7)	寺田聡, 柳原佳奈, 水井慎也, 小川亜希子, 小林恭一, 大浦 剛, 福田忠義, 森山展行, 安 川沙織, 久留宮元
小川 亜希子	バイオ医薬品の生産過程で生じる精製後廃液の有効利用技術の構築	単著	第9回 全国高専テクノフォーラム (2011.8. 4)、学術総合センター (東京)	
小川 亜希子	電気炉特殊鋼スラグと普通鋼スラグの溶出物の構成成分がヒト由来細胞 U937 の増殖能に与える影響について	共著	平成 22 年度分高専連携教育研究プロジェクト成果報告会(2011.8.10) 1-8, 豊橋技術科学大学 (愛知)	小川亜希子、片岡瞳、横山誠二
小川 亜希子	廃液を利用した抗体医薬の生産効率向上への取り組み	単著	独立行政法人 国立高等専門学校機構、平成 23 年度国立高等専門学校機構技術シーズ集, p16	
小川 亜希子	ラッキョウフルクタンを利用した動物細胞の凍結保存	共著	第 63 回日本生物工学会大会 (2011. 9. 26-28) 講演要旨集 p 175	小川亜希子, 山岡陽, 水井慎也, 柳原佳奈, 清水雅史, 寺田聡, 大浦剛, 小林恭一, 安川沙織, 森山展行
小川 亜希子	幹細胞に対する、ラッキョウフルクタンを用いた無血清凍結液の開発	共著	第 63 回日本生物工学会大会 (2011. 9. 26-28) 講演要旨集 p 191	柳原佳奈, 水井慎也, 清水雅史, 小川亜希子, 大浦剛, 小林恭一, 安川沙織, 森山展行, 寺田聡
船越 邦夫	アンモニウムイオン添加による水酸化ニッケル結晶の析出現象の変化	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 302, 2011	船越邦夫, 松岡正邦
船越 邦夫	cocrystal 形成による物性の改善	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 201, 2011	新井美葉, 船越邦夫, 松岡正邦
船越 邦夫	噴霧晶析における結晶多形の制御	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 202, 2011	橋本紗永子, 船越邦夫, 松岡正邦
船越 邦夫	メカノケミカル法による多形転移現象に対する添加物の影響	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 203, 2011	山岸貴匡, 船越邦夫, 松岡正邦
船越 邦夫	核化現象に及ぼすマイクロ波の影響	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 301, 2011	大江健人, 松岡正邦, 船越邦夫
船越 邦夫	メカノケミカル法によるラセミ化合物の分解	共著	化学工学会第 76 年会講演要旨集, N 303, 2011	宮田佳織, 船越邦夫, 松岡正邦
山口 雅裕	Dual roles of Notch in regulation of apically restricted mitosis and apicobasal polarity of neuroepithelial cells.	共著	Neuron, 69 (2), 215-30	S. Ohata, R. Aoki, S. Kinoshita, M. Yamaguchi, S. Tsuruoka-Kinoshita, H. Tanaka, H. Wada, S. Watabe, T. Tsuboi, I. Masai and H. Okamoto

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
山口 雅裕	The analysis of the expression of a novel gene, <i>Xenopus</i> polka dots, which was expressed in the embryonic and larval epidermis during early development.	共著	Zoological Science, 28 (11), 809-816	S. Yoshii, M. Yamaguchi, Y. Oogata, A. Tazaki, M. Mochii, S. Suzuki and T. Kinoshita
山口 雅裕	アフリカツメガエル変態期における赤血球転換機構の解析	単著	第 16 回高専シンポジウム in 米子 講演要旨集 p. 310	山口雅裕
山口 雅裕	水棲動物を用いた in vivo での鉄鋼材料の生体毒性評価	共著	鉄鋼協会第 161 回春季講演大会 CAMP-ISIJ, 24, 103-104	山口雅裕, 兼松秀行
山口 雅裕	アフリカツメガエル変態期における赤血球転換と細胞増殖の関係	共著	日本動物学会第 82 回大会	山口雅裕, 川口唯, 木下勉
甲斐 穂高	メタン発酵における可溶化プロセスの物質変化調査	共著	第 20 回環境化学討論会, 熊本(2011.7)	中道隆広, 甲斐穂高, 中島琢自, 大西正人, 高橋洋子, 石橋康弘
甲斐 穂高	メタン発酵における可溶化技術の効果	共著	環境科学会 2011 年会, 兵庫(2011.9)	中道隆広, 甲斐穂高, 中島琢自, 大西正人, 高橋洋子, 大場和彦, 石橋康弘
甲斐 穂高	Research on The Generation Control of Dioxines from The Small Incinerator.	共著	Organohalogen Compounds, DIOXINE 2011, Belgium. (2011.8)	Yasuhiro ISHIBASHI1, Koji ARIZONO1, Takahiro NAKAMICHI, Naomichi TAKEMOTO, Hotaka KAI, Hisatoshi SHIMASE and Takehiro TAKEMASA.

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
材料工学科 井上 哲雄	Engineering Education と高専教育	単著	日本高専学会第 17 回講演論文集, pp89-90,(2011.8),鈴鹿	
井上 哲雄	東日本大震災支援・復興のための高専連携プログラム	共著	日本高専学会第 17 回講演論文集, pp85-86,(2011.8),鈴鹿	大成博文, 秦隆司, 井上哲雄
井上 哲雄	東海工学教育協会高専部会の活動とその成果	共著	工学・工業教育研究講演会講演論文集, pp244-245, (2011.9) 札幌 日本工学教育協会	稲葉盛基, 井上哲雄, 伊東孝, 勝山智男, 大石哲男
宗内 篤夫	バリアー放電における非鉛ガラス電極材料の研究	共著	第 19 回日本オゾン協会年次研究講演会 2011	宗内篤夫、前田光彦
宗内 篤夫	中温形燃料電池カソード分極改善のためのフッ素イオノマー研究	共著	電気化学第 78 回大会	宗内篤夫 堀美知朗
宗内 篤夫	燃料電池の最新の動向と鈴鹿高専での研究	単著	三重県工業試験所創エネ・蓄熱セミナー	宗内篤夫
江崎尚和	SUZUKA 産学官交流会とともに歩んだ連携活動の成果	単著	産学官連携ジャーナル Vol.7 No.3 pp.1-2 (2011)	
江崎尚和	Eco-car Project in Suzuka National College of Technology	共著	2nd. Asian Conference on Engineering Education(ACEE2011), Tokushima, Japan, TS8-4 (2011)	Kunihiko MORI, Hidetoshi SAKAMOTO, Yoshifumi OHBUCHI, Hisakazu EZAKI, Katsumi TAO, Kanji SHIBAGAKI
江崎尚和	産学官・地域連携によるものづくり技術者教育	共著	日本工学教育教育協会講演論文集 11-102 (2011)	森 邦彦, 坂本 英俊, 大淵 慶史, 埜 克己, 江崎 尚和, 齊藤 正美
兼松秀行	工業化学入門	共著	オーム社 2011 年 3 月 20 日 ISBN 978-4-274-20997-0	齋藤勝裕(編著者), 兼松秀行, 鶴沼英郎, 野村英作, 奥山恵美, 飯島道弘
兼松秀行	化学洗浄の理論と実際	共著	米田出版 2011 年 5 月 11 日 ISBN978-4-946553-48-6	福崎智司, 兼松秀行, 伊藤日出生
兼松秀行	A Multilingual Problem-Based Learning Environment for Awareness Promotion	共著	The Proceedings of The Sixteenth International Symposium on Artificial Life and robotics 2011 (AROB 16th '11). 150-153.	R. Taguchi, Katsuko T. Nakahira, H. Kanematsu and Y.Fukumura
兼松秀行	異なる母語を持つ者の交流を意識したメタバース内 PBL 学習環境の構築	共著	信学技報-人工知能と知識処理 AI2010-44 - AI2010-57, February 28, 2011 81-86 (2011)	中平勝子, 田口亮輔, N.r. Rodrigo, 兼松秀行, Sahar Farjami, 福村好美
兼松秀行	生体指標の鉄鋼材料プロセスへの応用とその方向性	単著	材料とプロセス第 24 巻, p.89-90(2011)	兼松秀行
兼松秀行	哺乳類動物細胞の培養系を利用した鉄鋼・めっき加工材料の物性評価	共著	材料とプロセス第 24 巻, p.91-92(2011)	小川亜希子, 兼松秀行, 樋尾勝也

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	富山湾海中における汎用鋼およびステンレス鋼の腐食挙動	共著	材料とプロセス第 24 巻, p.95-97(2011)	砂田聡, 後藤拓人, 兼松秀行
兼松秀行	電気炉酸化スラグ溶出成分の植物プランクトンを用いた影響評価	共著	材料とプロセス第 24 巻, p.101-102(2011)	高橋利幸, 横山誠二, 兼松秀行, 小川亜希子
兼松秀行	水棲動物を用いた in vivo での鉄鋼材料の生体毒性評価	共著	材料とプロセス第 24 巻, p.103-104(2011)	山口雅裕, 兼松秀行
兼松秀行	電気炉ステンレス鋼酸化スラグの溶出に及ぼすガス種の影響	共著	材料とプロセス第 24 巻, p.149(2011)	下村徹也, 横山誠二, Nik Hisyamudin Muhd Nor, 笹野順司, 伊崎昌伸, 兼松秀行, 小川亜紀子, 高橋利幸
兼松秀行	実用金属材料の抗菌化技術	共著	日本鉄鋼協会材料の組織と特性部会報告書, 佐藤嘉洋(大阪市立大学), eds. 東京: 2011, p. 77-82	鈴木聡, 兼松秀行
兼松秀行	Analyze the Student Behavior in Virtual Classroom with Problem Based Learning Environment	共著	IPSI SIG Technical Report, 2011-CLE-4, 1-5 (2011)	Asanaka D. Dharmawansa, Ryosuke Taguchi, Katsuko T. Nakahira, Hideyuki Kanematsu, Yoshimi Fukumura
兼松秀行	Problem Based Learning for Materials Science education in Metaverse.	共著	Proceedings of 2011 JSEE Annual conference 20-23 (2011).	Farjami, S., Taguchi, R., Nakahira, K.T., Fukumura, Y. & Kanematsu, H.
兼松秀行	Multilingual Problem Based Learning in Metaverse	共著	KES 2011, Part III, LNAI 6883 (Springer-Verlag, Berlin Heidelberg 2011, 2011), pp. 499-509.	Sahar Farjami, Ryosuke Taguchi, Katsuko T Nakahira, Rodrigo Nunez Rattia, Yoshimi Fukumura, and Hideyuki Kanematsu
兼松秀行	溶融亜鉛めっき鉄筋の半自動アーク溶接時におけるシールドガスおよび電極ワイヤの影響	共著	溶接学会論文集, vol. 29, No. 3, pp. 139-145(2011).	村上和美, 兼松秀行, 田中学, 中田一博
兼松秀行	伊勢湾岸における汚損生物付着と金属材料の関係	共著	第 55 回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 212-213, (2011, 10)	黒田大介, 鎌倉 渚, 生貝 初, 兼松秀行
兼松秀行	海洋環境を模擬した実験室規模の微生物付着評価システムの構築	共著	第 55 回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 214-215, (2011, 10)	黒田大介, 島田翔平, 小屋駿, 兼松秀行, 生貝 初
兼松秀行	金属酸化物に対する海洋浸漬中での生物付着の影響	共著	第 55 回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 218-219, (2011, 10)	幸後 健, 神崎拓也, 黒田大介, 和田憲幸, 兼松秀行, 生貝 初
兼松秀行	伊勢湾岸の海洋環境中での付着微生物と金属材料の関係	共著	第 58 回材料と環境討論会, 第 58 回材料と環境討論会講演集, (2011), pp. 125-126, (2011, 9)	黒田大介, 鎌倉 渚, 横川さおり, 生貝 初, 兼松秀行

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	いくつかの溶射皮膜の海水中における微生物付着について	共著	第 58 回材料と環境討論会, 第 58 回材料と環境討論会講演集, (2011), pp. 127-128, (2011, 9)	黒田大介, 岡留寛人, 兼松秀行, 生貝 初, 桐原聡秀
兼松秀行	いくつかの複合酸化物の海水環境中におけるマイクロ付着性評価について	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 298, (2011, 9)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝初, 横山誠二
兼松秀行	いくつかの溶射材についての海水環境中における生物付着性の検討	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 298, (2011, 9)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝初, 岡留寛人
兼松秀行	伊勢湾岸海洋環境中への各種金属材料の浸漬試験と生物付着	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 299, (2011, 9)	黒田大介, 鎌倉 渚, 兼松秀行, 生貝 初
兼松秀行	製鉄をテーマとした創造教育とその教育効果	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 23-24, (2011, 8)	黒田大介, 兼松秀行
兼松秀行	各種金属材料への汚損生物の付着	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 239-240, (2011, 8)	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝 初, 兼松秀行
兼松秀行	金属材料の微生物付着におよぼすひずみの影響	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 291-292, (2011, 8)	横川さおり, 鎌倉 渚, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
兼松秀行	海洋環境中における金属材料と付着微生物の関係	共著	材料と環境 2011, 材料と環境 2011 講演集, (2011), pp. 223-224, (2011, 5)	黒田大介, 間世田英明, 生貝初, 鎌倉 渚, 兼松秀行
兼松秀行	表面改質による微生物付着の抑制	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 141, (2011, 1)	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝 初, 兼松秀行
兼松秀行	海洋環境に浸漬した種々の金属材料表面への生物付着	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 142, (2011, 1)	小松真也, 鎌倉 渚, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
兼松秀行	STEM 教育と創造エンジニアリングデザイン	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集(2011) pp.17-18	兼松秀行, Dana M. Barry
兼松秀行	クロムニッケル系クラスター膜と生物付着	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集(2011) pp.281-282	石原智行、井村強基、日原岳彦、兼松秀行

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
兼松秀行	溶射を用いたクロムニッケル多層膜と熱処理	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集(2011) pp.283-284	吉田健人、兼松秀行
兼松秀行	コンクリート系資材の海洋環境における生物付着性の検討	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集(2011) pp.299—300	大原千佳、兼松秀行
兼松秀行	海水循環ポンプを用いた生物付着試験の検討	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集(2011) pp.301—302	小屋駿、兼松秀行
兼松秀行	濾過プロセスによる新しい海洋微生物付着性評価試験の検討	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集(2011) pp.303—304	島田翔平、兼松秀行
兼松秀行	クロムめっきの表面パターンニングと生物付着性	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集(2011) pp.305—306	濱田哲史、兼松秀行
兼松秀行	バイオフィルムと金属材料	共著	防錆管理, 55, (2011), pp. 369-377, (2011, 10)	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
兼松秀行	金属材料による細菌の増殖抑制	共著	軽金属, 61, (2011), pp. 160-166, (2011, 4)	生貝 初, 兼松秀行, 黒田大介
兼松秀行	金属材料表面への微生物付着とそれが引き起こす工学的諸問題について	共著	高温学会誌, 37, (2011), pp. 17-24, (2011, 1)	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
兼松秀行	An Effective and Economic Strategy to Restore Acidified Freshwater Ecosystems with Steel Industrial Byproducts.	共著	The 4th IWA-ASPIRE Conference and Exhibition Toward Sustainable Water Supply and Recycling System, 2011, p. 351.	T. Takahashi, Y. Ogura, A. Ogawa, H. Kanematsu, and S. Yokoyama
兼松秀行	Measurement of Residual Stress in BN Films Prepared by Dual Ion Beam Sputtering Method	共著	Proceedings of ATEM'11, 2011, pp. 1-10.	T. Kobayashi, R. Valizadeh, J. S. Colligon, H. Kanematsu, Y. Hiraoka, and T. Fukui,
兼松秀行	Nuclear reaction analysis for composition measurement of BN thin films	共著	Proceedings of 19th International Conference on Nuclear Engineering, October 24-25, 2011, Osaka University, Japan	T. Kobayashi, S. Takamiya, H. Kanematsu, T.Fukui
兼松秀行	材料が発現する抗菌性のメカニズムと抗感染性	共著	バイオマテリアル—生体材料— 第29巻第4号 p.232-239(2011)	生貝初、兼松秀行
小林 達正	イオンスパッタリング法による Mg 合金上への Mg-Al 合金皮膜の作製	共著	日本高専学会第17回講演論文集, pp 319-320,(2011.8), 鈴鹿	矢倉彩加, 小林達正
小林 達正	無機系封孔処理剤のコンクリートおよび木材中における分布の SEM-EDX による観察	共著	日本高専学会第17回講演論文集, pp321-322,(2011.8), 鈴鹿	樋口真理菜, 中尾静香, 水越重和, 小林達正

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
下古谷 博司	Adsorption of Amido black on Okara	共	MEDICINE AND BIOLOGY, Vol.155, No.12, pp.871-874	Hiroshi SHIMOFURUYA, Nagisa HASEGAWA, Akira SHIMONO and Yoshihiko KUNIEDA
下古谷 博司	Adsorption of Coomassie Brilliant Blue R-250 on the Rice Bran	共	MEDICINE AND BIOLOGY, Vol.155, No.2, pp.60-64	Hiroshi SHIMOFURUYA and Yoshihiko KUNIEDA
下古谷 博司	マイクロ波加熱法によるオカラ液状化条件の検討	共	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.1-4, 2011	下古谷博司, 内田享佑, 国枝義彦, 高木康之, 林征雄, 鈴木郁功
下古谷 博司	オカラによるメチルオレンジの吸着	共	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.5-8, 2011	下古谷博司, 下野晃, 国枝義彦
下古谷 博司	鈴鹿高専における自動車無許可通学指導	共	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第44巻, pp.57-62	下古谷博司, 川口雅司, 西岡将美
下古谷 博司	廃棄系バイオマスの液状化率による比較	共	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.253-254, 鈴鹿	下古谷博司, 衛藤昂, 下野晃, 国枝義彦
下古谷 博司	固体酸による廃棄系バイオマスの液状化	共	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.251-252, 鈴鹿	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦
下古谷 博司	鈴鹿高専における自転車安全運転指導の一例	共	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.95-96, 鈴鹿	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡将美
下古谷 博司	商店が隣接する鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の一例	共	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.95-96, 鈴鹿	下古谷博司, 川口雅司, 西岡将美, 白井達也, 柴垣寛治
下古谷 博司	鈴鹿高専専攻科1年工学実験におけるデザイン教育	共	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.19-20, 鈴鹿	下古谷博司, 近藤邦一, 花井孝明, 伊東真由美, 板谷年也
下古谷 博司	教育GPによる環境志向・価値創造型エンジニア育成プログラムの構築	共	平成23年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表会概要集, pp.15-16 鹿児島	江崎尚和, 桑原裕史, 澤田善秋, 宗内篤夫, 下古谷博司, 森邦彦, 高橋誠記
下古谷 博司	鈴鹿高専における自転車立哨指導	共	平成23年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表会概要集, pp.155-156 鹿児島	柴垣寛治, 下古谷博司, 西岡将美
下古谷 博司	鈴鹿高専における四輪無許可通学指導の成果	共	平成23年度全国高専教育フォーラム教育研究活動発表会概要集, pp.251-252 鹿児島	下古谷博司, 川口雅司, 西岡将美
下古谷 博司	バイオ系廃棄物の有効利用	単	第9回高専テクノフォーラム概要集, p45, 東京	下古谷博司
下古谷 博司	オカラによる Amido Black 10B 色素の吸着除去	共	第16回高専シンポジウム講演要旨集, p385 米子	下古谷博司, 長谷川渚, 正木裕士, 下野晃, 国枝義彦

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
下古谷 博司	オカラによる泥水の凝集沈殿	共	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p386 米子	下古谷博司, 山本康輝, 下野晃, 国枝義彦
下古谷 博司	固体酸によるオカラの液化化	共	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p387 米子	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦
下古谷 博司	オカラによるメチルオレンジの吸着	共	第 16 回高専シンポジウム講演要旨集, p388 米子	下古谷博司, 正木裕士, 長谷川渚, 下野晃, 国枝義彦
南部 智憲	Hydrogen solubility and permeability of Nb-W-Mo alloy membrane	共著	Journal of Alloys and Compounds, Volume 509, Supplement 2 (2011) pp. S877-S880.	Y.Awakura, T.Nambu, Y.Matsumoto and H.Yukawa
南部 智憲	V-W Alloy Membranes for Hydrogen Purification	共著	Journal of Alloys and Compounds, Volume 509, Supplement 2 (2011) pp. S881-S884.	H.Yukawa, T.Nambu and Y.Matsumoto
南部 智憲	In-situ analysis of hydrogen mobility during hydrogen permeation through Nb-based hydrogen permeable membranes	共著	Defect and Diffusion Forum, 312-315 (2011), 506-512.	H.Yukawa, T.Nambu, Y.Matsumoto
南部 智憲	Ta-W Alloy for Hydrogen Permeable Membranes	共著	Materials Transactions, 52 (2011) pp. 610-613.	H.Yukawa, T.Nambu and Y.Matsumoto
南部 智憲	Nb 系水素透過合金の高強度化と耐熱性の評価	共著	日本金属学会講演概要(第 148 回・東京)	湯川宏, 栗倉康孝, 南部智憲, 松本佳久
南部 智憲	Nb-5 mol%W-5 mol%Mo 合金の高周波電磁浮遊溶解	共著	日本金属学会講演概要(第 148 回・東京)	南部智憲, 松本佳久, 湯川宏
南部 智憲	Pd-Cu 系水素透過合金膜における Fe ₂ O ₃ 粒子の付着による表面形態の変化	共著	日本金属学会講演概要(第 148 回・東京)	木村彩香, 南部智憲, 松本佳久, 湯川宏
南部 智憲	高周波電磁浮遊溶解した Nb-W-Mo 系合金の加工性および水素透過能	共著	日本金属学会講演概要(第 149 回・沖縄)	南部智憲, 伊藤友樹, 小林直貴, 奥村翔吾
南部 智憲	5 族系水素透過合金の延性—脆性遷移水素濃度解析と合金設計への展開	共著	日本金属学会講演概要(第 149 回・沖縄)	松本佳久, 湯川宏, 南部智憲
南部 智憲	パラジウム系水素透過合金と鉄粒子との相互拡散反応に及ぼす周期表第 5・6 族元素の添加効果	共著	日本金属学会講演概要(第 149 回・沖縄)	木村彩香, 有馬義貴, 竹中司, 南部智憲
南部 智憲	Pd-Cu 系水素透過合金膜における外因飛来微粒子付着による表面欠陥	共著	日本金属学会講演概要(第 149 回・沖縄)	有馬義貴, 木村彩香, 竹中司, 南部智憲
南部 智憲	ニオブ系水素透過合金膜におけるパラジウム電解めっき触媒層の構造変化	共著	日本金属学会講演概要(第 149 回・沖縄)	伊藤友樹, 小林直貴, 奥村翔吾, 南部智憲

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
南部 智憲	B2 構造を有する PdCu 水素透過合金の構造安定性と外因飛来微粒子による表面形態の変化	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.265-266	有馬義貴, 南部智憲
南部 智憲	周期表5族金属系水素透過合金への Pd 電解めっき	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.259-260	伊藤友樹, 南部智憲
南部 智憲	Nb-W-Mo 系水素透過合金の高周波電磁浮遊溶解と圧延加工性評価	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.261-262	小林直貴, 南部智憲
南部 智憲	金属系水素透過合金膜の水素透過能および機械的性質の定量評価に有効な試験装置の設計開発	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.267-268	竹中司, 南部智憲
南部 智憲	水素透過能と耐水素脆性とを両立するニオブ系固溶体型水素透過合金の機能設計	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.257-258	奥村翔吾, 南部智憲
南部 智憲	パラジウム系水素透過合金膜の耐久性に及ぼす外因飛来微粒子の影響とその対策	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.269-270	木村彩香, 南部智憲
南部 智憲	水素分離膜及び水素分離装置	共著	特願 2011-48582 出願日:平成 23 年 3 月 7 日	発明者:南部智憲, 湯川 宏, 松本佳久 出願人:東京瓦斯株式会社, 独立行政法人高等専門学校機構, 国立大学法人名古屋大学
南部 智憲	水素分離膜、その製造方法および水素製造装置	共著	特願 2011-84665 出願日:平成 23 年 4 月 6 日	発明者:黒川英人, 森永正彦, 湯川 宏, 南部智憲, 松本佳久 出願人:東京瓦斯株式会社, 国立大学法人名古屋大学, 独立行政法人高等専門学校機構
南部 智憲	水素透過速度の推定方法、水素製造装置及びその運転方法	共著	特願 2011-140679 出願日:平成 23 年 6 月 24 日	発明者:黒川英人, 森永正彦, 湯川 宏, 南部智憲, 松本佳久 出願人:東京瓦斯株式会社, 国立大学法人名古屋大学, 独立行政法人高等専門学校機構
和田憲幸	Preparation of Mn ²⁺ Doped ZnO-Ta ₂ O ₅ Phosphor by a Sol-Gel Method	共著	Journal of Ceramic Processing Research, 12(Special. 1) pp. s5-s8 (2011).	Tomoe Sanada, Satoshi Kato, Yusuke Morimoto, Shingo Ikeda, Kazuo Kojima, Noriyuki Wada
和田憲幸	Size Effect of Au Nanoparticles on TiO ₂ Crystalline Phase of Nanocomposite Thin Films and Their Photocatalytic Properties	共著	The Journal of Physical Chemistry, Journal of Physics and Chemistry C, 115(14), pp. 6554-6560, (2011).	Chihiro Yogi, Kazuo Kojima, Takeshi Hashishin, Noriyuki Wada, Yasuhiro Inada, Enrico Della Gaspera, Marco Bersani, Alessandro Martucci, Lijia Liu, Tsun-Kong Sham

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
和田憲幸	Wavelength Dependence of Polyne Preparation by Liquid-Phase Laser Ablation Using Pellet Targets	共著	Chemical Communications, (The Royal Society of Chemistry), 47, pp. 5840-5842 (2011).	Ryutaro Matsutani, Kohei Inoue, Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	Effect of Various Additives on Luminescence Properties of Mn ²⁺ -Doped Ga ₂ O ₃ -ZnO Powders	共著	Journal of The American Ceramic Society, 94(12), pp. 4376-4381 (2011).	Noriyuki Wada, Teruhisa Okuno, Yusuke Nishimura, Kao Kojima
和田憲幸	Effect of Pre-Heat Treatment on Phase Structure and Photocatalytic Activity of Au Nanoparticles- Embedded TiO ₂ Film	共著	7th International Symposium on Transparent Oxide Thin Films for Electronics and Optics, 14p-P022, March 14-16, 2011, Tokyo, Japan	Yuji Yokomizo, Chihiro Yogi, Noriyuki Wada, Kazuo Kojima
和田憲幸	In Situ XANES Study during Heat Treatment of Au-TiO ₂ Nanocomposite Photocatalytic Film Prepared by Sol-Gel Method	共著	7th International Symposium on Transparent Oxide Thin Films for Electronics and Optics, 15p-P103, March 14-16, 2011, Tokyo, Japan	Chihiro Yogi, Kazuo Kojima, Noriyuki Wada, Yasuhiro Inada, Alessandro Martucci, Tsun-Kong Sham
和田憲幸	Mn ²⁺ 含有 GeO ₂ -Li ₂ O-ZnO ガラスの残光特性	共著	日本セラミックス協会 2011 年年会, 講演予稿集 2P069, p. 170, 3 月 17 日, 2011, 静岡大学浜松キャンパス.	近藤慎也, 和田憲幸, 眞田智衛, 小島一男
和田憲幸	Au 微粒子含有 TiO ₂ 膜の光触媒活性および相構造に及ぼす予備熱処理の影響	共著	日本セラミックス協会 2011 年年会, 講演予稿集 2P123, p. 197, 3 月 17 日, 2011, 静岡大学浜松キャンパス.	横溝裕司, 与儀千尋, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	ペレットターゲットを用いた液相レーザーアブレーション法によるポリイン合成のレーザー波長依存性	共著	日本化学会第 91 春季年会 (2011), 講演予稿集, 1D1-44, p. 373, 3 月 26 日, 2011, 神奈川大学横浜キャンパス.	松谷龍太郎, 井上康平, 青山健志, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	Mn ²⁺ 含有 P ₂ O ₅ 系ガラスの発光特性	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 講演論文集, pp. 235-236, 8 月 27 日, 鈴鹿高専	田畑直輝, 和田憲幸
和田憲幸	ソーダ石灰シリケートガラス粉末による多孔質ガラスの作製と気孔制御		日本高専学会第 17 回年会講演会, 講演論文集, pp. 237-238, 8 月 27 日, 鈴鹿高専	園田絵里, 和田憲幸
和田憲幸	液相レーザーアブレーション法による C ₂₈ H ₂ および C ₃₀ H ₂ の生成	共著	2011 年日本化学会西日本大会, 講演要旨集, p. 48, 11 月 12 日, 2011, 徳島大学	松谷龍太郎, 井上康平, 眞田智衛, 和田憲幸, 小島一男
和田憲幸	ゾルーゲル法により作製した Au 微粒子含有 TiO ₂ 光触媒膜の XANES 解析	共著	2011 年日本化学会西日本大会, 講演要旨集, p. 64, 11 月 12 日, 2011, 徳島大学	横溝裕司, 与儀千尋, 片山真祥, 和田憲幸, 稲田康宏, 小島一男

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
和田憲幸	Synthesis of Spherical Phosphor Particles of Ta ₂ O ₅ :Tb ³⁺ by Sol-Gel Method	共著	International Symposium for Phosphor Materials 2011 November 21-23, Niigata	Tomoe Sanada, Hiroshi Nakahita, Kazuo Kojima, Kazuhiro Yamamoto, Noriyuki Wada
黒田大介	Ni基耐熱合金の引張特性におよぼす熱処理の影響	共著	日本金属学会 2011 秋期(第149回)大会, 日本金属学会講演概要2011年秋期(第149回)大会, 165, (2011, 11)	黒田大介, 岡井正名, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 藤井 剛, 後藤大亮
黒田大介	伊勢湾岸における汚損生物付着と金属材料の関係	共著	第55回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 212-213, (2011, 10)	黒田大介, 鎌倉 渚, 生貝 初, 兼松秀行
黒田大介	海洋環境を模擬した実験室規模の微生物付着評価システムの構築	共著	第55回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 214-215, (2011, 10)	黒田大介, 島田翔平, 小屋駿, 兼松秀行, 生貝 初
黒田大介	Nを含む環境中で熱処理した人工衛星用耐熱合金の特性変化	共著	第55回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 218-219, (2011, 10)	黒田大介, 岡井正名, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 藤井 剛, 後藤大亮
黒田大介	金属酸化物に対する海洋浸漬中での生物付着の影響	共著	第55回材料工学連合講演会, 材料工学連合講演会講演論文集, (2011), pp. 218-219, (2011, 10)	幸後 健, 神崎拓也, 黒田大介, 和田憲幸, 兼松秀行, 生貝 初
黒田大介	伊勢湾岸の海洋環境中での付着微生物と金属材料の関係	共著	第58回材料と環境討論会, 第58回材料と環境討論会講演集, (2011), pp. 125-126, (2011, 9)	黒田大介, 鎌倉 渚, 横川さおり, 生貝 初, 兼松秀行
黒田大介	いくつかの溶射皮膜の海水中における微生物付着について	共著	第58回材料と環境討論会, 第58回材料と環境討論会講演集, (2011), pp. 127-128, (2011, 9)	黒田大介, 岡留寛人, 兼松秀行, 生貝 初, 桐原聡秀
黒田大介	いくつかの複合酸化物の海水環境中におけるマイクロ付着性評価について	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 298, (2011, 9)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝 初, 横山誠二
黒田大介	いくつかの溶射材についての海水環境中における生物付着性の検討	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 298, (2011, 9)	黒田大介, 兼松秀行, 生貝 初, 岡留寛人
黒田大介	伊勢湾岸海洋環境中への各種金属材料の浸漬試験と生物付着	共著	2011 電気化学会秋季大会, 2011 電気化学会秋季大会講演要旨集, (2011), p. 299, (2011, 9)	黒田大介, 鎌倉 渚, 兼松秀行, 生貝 初

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
黒田大介	製鉄をテーマとした創造教育とその教育効果	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 23-24, (2011, 8)	黒田大介, 兼松秀行
黒田大介	各種金属材料への汚損生物の付着	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 239-240, (2011, 8)	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝 初, 兼松秀行
黒田大介	熱処理による人工衛星用耐熱合金の特性変化	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 本高専学会第17回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 289-290 (2011, 8)	岡井正名, 道端健吾, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 後藤大亮, 黒田大介
黒田大介	金属材料の微生物付着におよぼすひずみの影響	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, (2011), pp. 291-292, (2011, 8)	横川さおり, 鎌倉 渚, 生貝初, 兼松秀行, 黒田大介
黒田大介	国立高専機構における技術者教育の質保証 その1-高専教育としての質保証のあり方-	共著	平成23年度工学教育研究講演会, 平成23年度工学教育研究講演会講演論文集, (2011), pp. 528-529, (2011, 9)	市坪 誠, 小林淳哉, 藤田直幸, 堀内 匡, 黒田大介, 角野晴彦
黒田大介	国立高専機構における技術者教育の質保証 その2-高専教育課程の調査と分析-	共著	平成23年度工学教育研究講演会, 平成23年度工学教育研究講演会講演論文集, (2011), pp. 530-531, (2011, 9)	黒田大介, 市坪 誠, 小林淳哉, 堀内 匡, 角野晴彦, 藤田直幸
黒田大介	国立高専機構における技術者教育の質保証 その3-モデルコアカリキュラムのあり方-	共著	平成23年度工学教育研究講演会, 平成23年度工学教育研究講演会講演論文集, (2011), pp. 532-533, (2011, 9)	小林淳哉, 黒田大介, 市坪誠, 角野晴彦, 藤田直幸, 堀内 匡
黒田大介	高密度格子欠陥を有するサブミクロン結晶粒純Feの窒素固溶による高機能化	共著	豊橋技術科学大学平成22年度高専連携教育研究プロジェクト成果発表会, (2011, 8)	岡井正名, 黒田大介, 鈴木拓也, 戸高義一
黒田大介	金属材料に関する大学-高専の共同研究と学生の研究指導-鈴鹿高専材料工学科における一例-	単著	平成23年度高専-長岡技科大(物質・材料系)教員交流研究集会(2011, 8)	黒田大介
黒田大介	海洋環境中における金属材料と付着微生物の関係	共著	材料と環境 2011, 材料と環境 2011 講演集, (2011), pp. 223-224, (2011, 5)	黒田大介, 間世田英明, 生貝初, 鎌倉 渚, 兼松秀行
黒田大介	Ni基耐熱合金の機械的特性におよぼす熱処理の影響	共著	日本機械学会東海支部第60期総会・講演会, 日本機械学会東海支部第60期総会・講演会講演論文集, (2011), No. 113-1, CD-ROM, 701, (2011, 3)	黒田大介, 菊永 巧, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 後藤大亮
黒田大介	L-605合金の劣化におよぼす熱処理の影響	共著	第16回高専シンポジウム in 米子, 第16回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 4, (2011, 1)	西島一志, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 後藤大亮, 黒田大介

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
黒田大介	Ni 基耐熱合金のマイクロ組織と力学的特性	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 5, (2011, 1)	菊永 巧, 小野嘉則, 御手洗容子, 香河英史, 後藤大亮, 黒田大介
黒田大介	表面改質による微生物付着の抑制	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 141, (2011, 1)	鎌倉 渚, 黒田大介, 生貝 初, 兼松秀行
黒田大介	海洋環境に浸漬した種々の金属材料表面への生物付着	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 142, (2011, 1)	小松真也, 鎌倉 渚, 生貝 初, 兼松秀行, 黒田大介
黒田大介	金属イオンを利用した蚊の羽化抑制に関する基礎的研究	共著	第 16 回高専シンポジウム in 米子, 第 16 回高専シンポジウム in 米子講演要旨集, (2011), p. 151, (2011, 1)	山本千苗, 黒田大介, 荒川正樹, 奥田貢司
黒田大介	バイオフィルムと金属材料	共著	防錆管理, 55, (2011), pp. 369- 377, (2011, 10)	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
黒田大介	金属材料による細菌の増殖抑制	共著	軽金属, 61, (2011), pp. 160-166, (2011, 4)	生貝 初, 兼松秀行, 黒田大介
黒田大介	金属材料表面への微生物付着とそれが引き起こす工学的諸問題について	共著	高温学会誌, 37, (2011), pp. 17- 24, (2011, 1)	兼松秀行, 生貝 初, 黒田大介
黒田大介	ステンレス鋼製製品の製造方法とそのステンレス鋼製製品	共著	米国特許:登録番号 7875128 登録日:平成 23 年 1 月 25 日 (2011, 1)	発明者:黒田大介, 三浦一真, 梁取新一, 渡辺光雄 出願人:独立行政法人物質・材料研究機構, 明道メタル株式会社
黒田大介	Biofouling of various metal oxides in marine environment	共著	Abstracts of the Asia-Pacific Interdisciplinary Research Conference, p.48 Nov 2011 (2011, 11)	H. Kogo, D.Kuroda, N.Wada, H.Ikegai and H.Kanematsu
万谷義和	マルテンサイト組織を有する Ti-Nb 合金の変形組織形成と弾性限界	共著	日本金属学会講演概要, (第 148 回, 東京), p. 419.	万谷義和, 工藤邦男
万谷義和	Damping Capacity and Surface Hardness of Plasma Nitrided Ti-15Nb Alloy	共著	The 12th World Conference on Titanium, Ti-2011, June, Beijing, China, Abstract p.183.	Y. Mantani, S. Nagata, K. Nakata
万谷義和	Ti-6Al-4V 合金の溶体化処理条件に伴う材料特性の変化	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 講演論文集, pp.147-148.	アラファ, 岩塚 大典, 万谷 義和
万谷義和	Ti-22V-4Al 合金の引張特性と打抜き加工性の評価	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会, 講演論文集, pp.149-150.	日下 和泉, 湯田 功稀, 万谷 義和

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
万谷義和	材料試験と有限要素法を組み合わせた卒業研究	共著	日本高専学会第17回年会講演会, 講演論文集, pp.77-78.	万谷 義和, 井戸 雅彦
万谷義和	Effect of Plastic Deformation on Material Properties in Martensite Structures of Ti-Nb Alloys	共著	International Conference on Martensitic Transformations, ICOMAT-2011, September, Osaka, Japan, Abstracts p.188.	Y. Mantani, K. Kudou
万谷義和	マルテンサイト組織を有する Ti-Nb 合金の弾塑性変形挙動	共著	日本金属学会講演概要, (第148回, 東京), p. 369.	万谷義和, 工藤邦男
万谷義和	チタン合金の制振性向上とプラズマ窒化による表面硬化層の形成	共著	平成23年度阪大接合科学研共同研究成果発表会概要集, pp.15-16.	万谷義和, 中田一博
幸後 健	金属酸化物に対する海水浸漬中での生物付着の影響	共著	第55回日本学術会議材料工学連合講演会講演論文集 p.216 (2010年10月)	神崎拓也, 黒田大介, 和田憲幸, 兼松秀行, 生貝初
幸後 健	Biofouling of various metal oxides in marine environment	共著	Abstracts of the Asia-Pacific Interdisciplinary Research Conference, p.48 Nov 2011	D.Kuroda, N.Wada, H.Ikegai and H.Kanematsu
国枝義彦	Adsorption of Amido black on Okara	共著	MEDICINE AND BIOLOGY, Vol.155, No.12, pp.871-874	Hiroshi SHIMOFURUYA, Nagisa HASEGAWA, Akira SHIMONO and Yoshihiko KUNIEDA
国枝義彦	Adsorption of Coomassi Brilliant Blue R-250 on the Rice Bran	共著	MEDICINE AND BIOLOGY, Vol.155, No.2, pp.60-64	Hiroshi SHIMOFURUYA and Yoshihiko KUNIEDA
国枝義彦	マイクロ波加熱法によるオカラ液状化条件の検討	共著	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.1-4, 2011	下古谷博司, 内田享佑, 国枝義彦, 高木康之, 林征雄, 鈴木郁功
国枝義彦	オカラによるメチルオレンジの吸着	共著	電気化学会 技術・教育研究論文誌, Vol.18, No.1, pp.5-8, 2011	下古谷博司, 下野晃, 国枝義彦
国枝義彦	廃棄系バイオマスの液状化率による比較	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.253-254, 鈴鹿	下古谷博司, 衛藤昂, 下野晃, 国枝義彦
国枝義彦	固体酸による廃棄系バイオマスの液状化	共著	日本高専学会第17回年会講演会講演論文集, pp.251-252, 鈴鹿	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦
国枝義彦	オカラによる Amido Black 10B 色素の吸着除去	共著	第16回高専シンポジウム講演要旨集, p385 米子	下古谷博司, 長谷川渚, 正木裕士, 下野晃, 国枝義彦
国枝義彦	オカラによる泥水の凝集沈殿	共著	第16回高専シンポジウム講演要旨集, p386 米子	下古谷博司, 山本康輝, 下野晃, 国枝義彦
国枝義彦	固体酸によるオカラの液状化	共著	第16回高専シンポジウム講演要旨集, p387 米子	下古谷博司, 松岡巧弥, 下野晃, 国枝義彦

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
国枝義彦	オカラによるメチルオレンジの吸着	共著	第16回高専シンポジウム講演 要旨集, p388 米子	下古谷博司, 正木裕士, 長谷 川渚, 下野晃, 国枝義彦

所属 氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著 の別	発行所, 発表雑誌等又は 発表学会等の名称	著者名
教育研究支援室 森 邦彦	事例に学ぶエンジニアリングデザイン(下巻) ものづくりの基本と、感性、勘所 - FQCDSE 評価を中心に-	共著	鈴鹿工業高等専門学校・鳥羽商船高等専門学校 エンジニアリングデザイン教科書編纂委員会 編, (2011, 3)	江崎尚和, 伊藤政光, 埜克己, 花井孝明, 澤田善秋, 森邦彦, 鈴木治, 齊藤正美, 大原勝, 妹尾允史, 水谷一樹, 大森久男, 黒崎稔雄, 石原三津男, 川田吉昭, 門平宏, 野呂一美, 須内孝行, 富岡巧, 藤松孝裕, 白井達也, 白木原香織
森 邦彦	教育G Pによる環境志向・価値創造型エンジニア育成プログラムの構築	共著	第8回全国高専テクノフォーラム予稿, (2011, 8)	江崎尚和, 桑原裕史, 澤田善秋, 宗内篤夫, 下古谷博司, 森邦彦, 高橋誠記
森 邦彦	高専間及び地域との連携による技術者人材育成組織と方法論の構築	共著	第8回全国高専テクノフォーラム予稿, (2011, 8)	埜克己, 江崎尚和, 森邦彦, 齊藤正美
森 邦彦	産学官連携による技術者育成の教科書「事例に学ぶエンジニアリングデザイン」の作成	共著	日本高専学会第17回年会講演会 講演論文集, pp.83-84, (2011, 8)	埜克己, 江崎尚和, 森邦彦, 齊藤正美
森 邦彦	Engineering Education Support System on QCD with FSE	共著	17th International Conference on Engineering Education (ICEE 2011), Belfast, UK, Serial 90, (2011, 8)	Kunihiko MORI, Hidetoshi SAKAMOTO, Yoshifumi OHBUCHI, Katsumi TAO
森 邦彦	産学官・地域連携によるものづくり技術者教育	共著	日本工学教育協会, 平成23年度工学教育研究講演会後援論文集, 北海道, pp.220-221, (2011, 9)	森邦彦, 坂本英俊, 大淵慶史, 埜克己, 江崎尚和, 齊藤正美
森 邦彦	Eco-car Project in Suzuka National College of Technology	共著	2nd Asian Conference on Engineering Education (ACEE 2011), Tokushima, JP, TS8 - 4 :1-6, (2011, 10)	Kunihiko MORI, Hidetoshi SAKAMOTO, Yoshifumi OHBUCHI, Hisakazu EZAKI, Katsumi TAO, Kanji SHIBAGAKI
澤辺昭廣	電気電子工学科1年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第17回年会講演会 講演論文集, pp.25-26, 2011	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和, 板谷年也
伊東 真由美	消臭性組成物、消臭性組成物を含有する消臭剤および消臭組成物を担持した繊維構造物を備えた消臭具	共著	特許第4868323号 登録日:平成23年1月25日	発明者:生貝初, 伊東真由美 特許権者:独立行政法人国立高等学校機構
伊東 真由美	鈴鹿高専専攻科1年工学実験におけるデザイン教育	共著	日本高専学会第17回年会講演会 講演論文集, pp.19-20, 2011	下古谷博司, 近藤邦和, 花井孝明, 伊藤真由美, 板谷年也
鈴木 昌一	電気電子工学科1年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第17回年会講演会 講演論文集, pp.25-26, 2011	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和, 板谷年也

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
鈴木 昌一	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.49-50, 2011	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一, 山田太
鈴木 昌一	オリンピッククラスソーラーカーの設計	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.119-120, 2011	金谷竜次, 中森隆成, 岩佐翔斗, 門脇昌紀, 紋田浩気, 重松昌樹, 佐野成太, 鈴木昌一
鈴木 昌一	学生により分かりやすい電子回路教育を目指した取り組みの報告	共著	鈴鹿工業高等専門学校紀要, 第 44 巻, pp.37-44, 2011	近藤一之, 鈴木昌一, 山田太, 板谷年也, 奥野正明
西村 吉弘	プログラミングを中心とした課外活動の改革	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会講演論文集, pp.69-70, (2011).	田添文博, 箕浦弘人, 青山俊弘, 浦尾彰, 西村吉弘
石原 茂宏	デジタルネイティブ世代の能力を开花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築の提案と事例紹介	共著	日本高専学会年会 第 17 回年回講演会 講演論文集 pp.11-12(2011,8)	白井達也(鈴鹿高専)、渥美清隆、石原茂宏、青山俊弘、浦尾彰、伊藤明
石原 茂宏	デジタルネイティブ世代の能力を开花させる Moodle を利用した学校ポータルサイト構築とネットワーク化による高専力強化の提案	共著	日本高専学会年会 第 17 回年回講演会 講演論文集 pp.117-118(2011,8)	白井達也(鈴鹿高専)、渥美清隆、石原茂宏、青山俊弘、浦尾彰、伊藤明、原島秀人(前橋工科大学)
石原 茂宏	ネットワークブート方式の Windows7 PC の演習室への導	共著	第 31 回高等専門学校情報処理教育研究発表会論文集 第 31 号 pp232-235(2011, 8)	渥美清隆、石原茂宏
谷川 義之	鈴鹿 8 耐ロードレース用バイクの改良型スイングアーム性能評価	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.165-166, 2011	谷川義之, 末次正寛, 埜克己, 大西敬紀
山田 太	電気電子工学科 1 年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.25-26, 2011	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 西森睦和, 板谷年也
山田 太	鈴鹿高専電気電子工学科におけるより実践的・創造的な技術者の養成を目指したカリキュラム改定	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.49-50, 2011	近藤一之, 北村登, 花井孝明, 奥田一雄, 大津孝佳, 川口雅司, 辻琢人, 西村一寛, 奥野正明, 柴垣寛治, 山田伊智子, 鈴木昌一
西森睦和	電気電子工学科 1 年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会第 17 回年会講演会 講演論文集, pp.25-26, 2011	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和, 板谷年也
板谷 年也	インピーダンス変化による移動非磁性金属箔の厚さ測定	共著	電学論 A, Vol. 131, No. 5, pp.377-383 (2011)	石田浩一, 板谷年也, 田中章雄, 武平信夫, 三木俊克

所属氏名	著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名
板谷 年也	Analysis of a Fork-Shaped Rectangular Coil Oriented Perpendicular to Conductor Slabs	共著	NDT and E International 44, pp.413-420 (2011)	Toshiya Itaya, Koichi Ishida, Akio Tanaka, Nobuo Takehira, Toshikatsu Miki
板谷 年也	ビオ・サバールの法則による多層だ円形コイルの磁界解析	共著	電気学会計測研究会 IM-11-026(2011, 7)	板谷年也, 石田浩一, 田中章雄, 武平信夫, 三木俊克
板谷 年也	鈴鹿高専専攻科 1 年工学実験におけるデザイン教育	共著	日本高専学会論文集(2011)	下古谷博司, 近藤邦和, 花井孝明, 伊東真由美, 板谷年也
板谷 年也	電気電子工学科 1 年「ものづくり実習」	共著	日本高専学会論文集(2011)	北村登, 柴垣寛治, 山田伊智子, 澤辺昭廣, 鈴木昌一, 山田太, 西森睦和, 板谷年也
板谷 年也	互いに垂直な任意形状コイル間の相互インダクタンス	共著	電気学会計測研究会 IM-11-045(2011,11)	板谷年也, 石田浩一, 田中章雄, 武平信夫, 三木俊克
板谷 年也	A New Analytical Method for Calculation of Eddy Current Distribution and Its Application to a System of Conductor-Slab and Rectangular Coil	共著	Progress In Electromagnetics Research Symposium Proceeding, (2011)	Toshiya Itaya, Koichi Ishida, Akio Tanaka, Nobuo Takehira, Toshikatsu Miki

編 集

図 書 館 主 事	近藤 一之 (電氣電子工学科)
紀要発行部会長	小倉 正昭 (教養教育科)
紀要発行部会員	出口 芳孝 (教養教育科)
〃	打田 正樹 (機械工学科)
〃	奥野 正明 (電氣電子工学科)
〃	長嶋 孝好 (電子情報工学科)
〃	山口 雅裕 (生物応用化学科)
〃	小林 達正 (材料工学科)

Chief Editor

Kazuyuki KONDO Dept. of Electrical and Electronic Engineering

Editors

Masaaki OGURA	Dept. of General Education
YoshiTaka DeGUCHI	Dept. of General Education
Masaki UCHIDA	Dept. of Mechanical Engineering
Masaaki OKUNO	Dept. of Electrical and Electronic Engineering
Takayoshi NAGASHIMA	Dept. of Electronic and Information Engineering
Masahiro YAMAGUCHI	Dept. of Chemistry and Biochemistry
Tatsumasa KOBAYASHI	Dept. of Materials Science and Engineering

査 読 者 所 属 機 関

釧路工業高等専門学校	津山工業高等専門学校
富山高等専門学校	八戸工業高等専門学校
岐阜大学	鶴見大学短期大学部
名古屋大学	明治大学
名城大学	

鈴鹿工業高等専門学校紀要 第45巻

MEMOIRS of Suzuka National College of Technology
Vol. 45

発 行 平成24年2月29日
発行者 鈴鹿工業高等専門学校
三重県鈴鹿市白子町
〒510-0294
TEL 059-386-1031
FAX 059-387-0338

Published February 29, 2012
by Suzuka National College of Technology
Shiroko, Suzuka, Mie 510-0294, Japan

印 刷 西濃印刷株式会社
ISSN-0286-5483